

奇譚クラブ

1957年 1月号

未来幻想小説「家畜人ヤプー」
海洋怪奇小説「魔海の業火」

沼正三
弓鬼崇



新年号

奇譚クラブ

昭和三十三年新年号

昭和三十三年十二月三十日印刷 一月号(第十一卷第一号)
昭和三十三年一月一日発行(毎月一回一日発行)
昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年十二月三十日印刷 一月号(第十一卷第一号)
昭和三十三年一月一日発行(毎月一回一日発行)
昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

アブノーマル雑談	辻村 隆
「話の屑籠」	編 集 部
玉穂落穂集	松井 籟子
赤い花は泣いている	城 秀人
失恋の告白	
〇五月号 (復刊第四号)	定価二百円 (〒8円)
口絵	孝・画
素描の表情 (緊縛写真集)	四馬 孝・画
モデル嬢の表情 (緊縛写真集)	須川 孝子
加賀美智子	萩 千恵子
アメリカ雑誌「ビザ」より	
赤い花は泣いている	宮崎昭平・画
赤い花は泣いている	松井 籟子
幽霊十ヶ月	高木 伸一郎
魔の味	坂田 信治
完全なる隷属	岸本 信治
戦慄怪談屋敷	岸本 信治
体臭日記	岸本 信治
禁王やしき (異常体験記)	相沢 松作
おそい目覚め	足立 夏夫
(ある洗腸マニアの日記から)	
灰色のノート	矢崎 竜一
箱 硯	多山 美歌
女サデイズトより奴隷に	森山 美歌
与える手紙	北川 美歌
撫子の手紙	北川 美歌
奇妙な花散りぬ	北川 美歌
責めとエチシズム	加野 太一
魔の白鳥	加野 太一
お腹の研究 (二)	須藤 敏一
生埋め願望	須藤 敏一
紅い魔殿	佐藤 俊一
姉と弟	佐藤 俊一
陰花の憧憬	青木 伸野
去るの美女	吉井 伸野
女散華	吉井 伸野
悲風上原	編 集 部
玉穂落穂集	編 集 部

アブノーマル・モノローグ・竹谷 十三	
(あるアクロバット・ダンサーの記録)	
拷問に笑う女	辻村 隆
〇六月号 (復刊第五号)	定価二百円 (〒8円)
口絵	孝・画
美貌の屈辱	四馬 孝・画
孤島の捕われ人	アメリカ雑誌
佐賀美智子ボーズ集	曼陀羅華の萌芽
私室でのプレイ	須川 孝子
深夜のホール	四馬 孝・画
修道院の神室	宮崎昭平・画
大衆文学に現れた責めの描写	藤見 郁子
赤い花は泣いている (第三回)	松井 籟子
明治と昭和の絵くらべ談義	緒台 あふみ
幽霊十ヶ月	春田 一郎
世相断片、ローカル・レポート	
奈子の自己愛について	門田 奈子
洗腸問答	青山 三枝吉
鞍馬の孕み女	緑 猛比古
一代理部便りの夢	並原 新一
女散華	
悲風上原	瀬川 泰子
女サデイズトより	森山 美歌
奴隷に与える手紙	菅原 春夫
私のアイディアと回想	
サデイズム小説	
いっせいで湯	泉 義明
コルセツトの魔力	林 靖彦
変つた切腹の掟	山中 同人
私のマゾ・スクラ	春木 俊野
ツプ帳より	
甘美なる被虐の幻想	沢 清克
脱腸に対する私見	伊藤 十三
小説マゾヒズム芸術時評	原 忠正
現代マゾヒズム	桜井 智子
お仕置遊戯	S・T 生
マゾヒズムの文学ノート	
マゾヒズム体験記	黒井 邦
猪狩り	

緊縛女体雑考	浮家 鷹三
「縛」先生	青葉 慎一
最近の縛り時代映画から	嵯峨 美也子
お腹の研究	須藤 敏一
結髪の種類々	伊藤 清雨
玉穂落穂集	編 集 部
映画に現れたムツキ	赤井 茂郎
虐げられる娘	嵯峨 紀世
ナチスの暴虐	藤木 仙治
娘島探検	東 坊 丸
或る告白 春と女の素足	由木 仙治
サデイズティックな漫画	藤木 仙治
〇七月号 (復刊第六号)	定価二百円 (〒8円)
口絵	孝・画
拘束服の装束	四馬 孝・画
道化者の集まり (アメリカ雑誌より)	
ネルソン提督	二丁拳銃の姐御
女士官	木製の兵士
新人モデル嬢紹介	花坂 道子
パイプの馬	北原 純子
凝 視	北原 純子
馬を御す令嬢	北原 純子
現代大衆文学に現れた責めの描写	藤見 郁子
若衆歌舞伎復興	小竹 紀夫
奈子の自己愛について (二)	門田 奈子
幽霊十ヶ月	春田 一郎
お灸を据えた女の魅力	菅原 春夫
赤い花は泣いている (第四回)	松井 籟子
ボデイビルマシンに依る少	
私のコレクシヨンより	熊谷 俊一
「責め」の芝居雑考	角田 由吉
梶井君の恋	本田 二夫
少年雑誌の恋	山口 幸一
奇妙な倒錯の恋	(新聞雑誌通信)
女火傷	青葉 慎一
活稿集	編 集 部
被縛症	高村 民子

女性の切腹幻想	鳴竹 成太郎
或る下着マニアの告白	古井 真哉
潰滅の前夜	土路 草一
或る従軍婦人の死	佐藤 茂治
マゾヒズム断想	天谷 盛英
H氏の奇妙な告白	北谷 義二
サデイズム小説 いで湯	泉 義明
私はおしめマニア	多磨 宏
スーダン	川野 京輔
乙女の腹切抄	鳴竹 成太郎
〇八月号 (復刊第七号)	定価二百円 (〒8円)
口絵	孝・画
美しい床の間	四馬 孝・画
米誌にみた緊縛面欧米式新スタイル	北原 純子
華々しき私刑	藤見 郁子
大衆文学に現れた責めの描写	藤見 郁子
二等兵時代の思い出	高木 伸一郎
縛り絵マニアの回想	渡辺 規矩
光りある中を	近東 規矩
おきなのひとりごと	浪花 規矩
一読者としての公開状	川中 規矩
元禄女腹切り	川中 規矩
「太陽の季節」を斬る	鬼山 規矩
歴史に現れた三人の美少年	西村 規矩
「鼻」と「変型しほり」	真鍋 四郎
幽霊十ヶ月	春田 一郎
自決する従軍看護婦たち	東田 一郎
奈子のA感覚について	門田 奈子
賭けられた洗腸	矢崎 竜一
最近の縛り映画から	嵯峨 美也子
赤い花は泣いている	松井 籟子
奇譚クラブに寄せて	真木 不
私のコレクシヨンより	角田 由吉
統一少年雑誌	山口 幸一
K誌編集方針に就いて	佐藤 茂治
潰滅の前夜	土路 草一
緊縛映画速報欄	千草 市



奇譚クラブ 復刊第十一号 月 号 目次	
新着フォト紹介(アメリカ)(2)	北原純子・画
花嫁受難二題	
「ボワニー分岐点」の一場面	
鳴門の妖鬼 (水戸黄門漫遊記第十話)	(須川令子嬢)
ADESUGATA	北原純子・画
お灸ぜめ	
欧米式新スタイル(5)	
文学に現れた責めの描写	藤見 郁 18
花と朔風	北原純子 26
フエチに関する切抜きから(1)	阿川 準 32
小説的事実 天は知っている	宝塚三三夫 34
黄色オラミ誕生(第二部)	真木不二夫 46
無惨絵 大奥裸女血斗	京 洛 生 44
電気責に関するノート	甲斐仁参 46
ある夢想家の手帖から	沼 正三 52
女性切腹例抄記(上)	田谷 敬生 56
ある女給の体験	日下絹子 68
東京租界	旭 森 薫 64
私のイメージ 麻酔切腹	青葉 楓 一 68
遊女八重路の責め	本田由郎 70



女性の輝について	長門 睦 74
特異な角度から(折檻と拷問)	九雅 節夫 76
続々・乗馬ズボンの女腹切	藤山 秀緒 78
女性の素足礼讃	高原 正夫 84
未来幻想マゾ小説	
家畜人ヤプー(第二回)	沼 正三 92
舞踊女師匠の責めの実験	岸本 青柳 110
最近の「縛り映画」から	嵯峨美也子 114
少年期(母と子の手紙)(2)	山口 幸一 116
戦地での同性愛	東 一郎 118
映画シナリオ	
赤いネオンのきえる頃	丘与志夫 120
読者提供のアイデア	高井 安晴 128
サジスチンの半生記	鷹野めぐみ 129
『魔海の業火』	弓 鬼 崇 132
児童雑誌にみた惨虐性	東 一郎 144
玉稿落穂集	編 集 部 146
映画速報欄	藤木 仙治 153
ヴェールを脱いだ肢体美	畑 晃一 154
また国電でモモ切り	間島 真一 157
ムチ打ちと緊縛	千葉 栄市 158
緊縛映画と雑誌の挿絵	
読者通信	
編集後記	

最近の映画から
春田ルミ様集……白石中友三郎
私の蒐集帖……緒台あふみ
玉稿落穂集……編集あふみ
新聞紙上に出た切腹実話……藤森一夫
探偵小説新考……東一助
蜂の巣を吸う……脇坂洋子
倒錯の英雄、織田信長……笠置俊郎
とりこの白人娘……藤木仙治

○九月号(復刊第八号)

定価二百円(〒8円)

口絵
美しい飼育物の調教……四馬孝・画
吊りを加味した飛田良二のアイデア……北原純子・画
緊縛フット二題……須川令子嬢、花坂道子嬢
ナイフ投げの的……BIZARRより
女学生……北原純子・画
欧米式新スタイル二題(2)……LA・BONDA・画
寄生虫……壬生すみ子
浣腸とおむつ……月岡映子
恋の脱殻……松井籟子
へんしゅう余滴……本誌記者
飯場往來なぐりこみ……沼正三
家畜化小説の登場を喜ぶ……青葉三枝
はつかねずみ……青葉三枝
紅蓮(ぐれん)……青葉三枝
光りある中を……近東規矩也
文学に現れた同性愛……藤見郁
懸賞応募作品短評……編集あふみ
私の「ふんどし」……松原三千代
「レポート」……島直樹
「被虐哀歌」其の後……真金鍛十郎
渾マニアの女生徒の手記……池田ふみ子
奈子の恋愛について……門田奈子

沼正三の手帖
お灸を据える女性雑誌……沼正三
映画に現れた拷問場面……左巻健一
現代マゾヒズム芸術時評……東一助
探偵小説新考……本田由一郎
芝居の責め、紅血欠皿……菅原春夫
最近の映画から……白石稔
悦びに關する一考察……松原一夫
「切腹の歴史」……角間莊吉
私のコレクシヨンより……大谷念子
五種の責……嵯峨美也子
なめくじ……編集あふみ
玉稿落穂集……嵯峨美也子
最近の縛り映画から……嵯峨美也子

○十月号(復刊第九号)

定価二百円(〒8円)

口絵
北原純子十月集、壞れ易き獲物
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎……北原純子・画
現代マゾヒズム芸術時評参考資料……原忠正・提供
引廻し……春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢
米誌に見た緊縛写真BIZARRより……LA・BONDA・画
欧米式新スタイル(3)……藤木仙治
サディズム・シオン詳察……岩瀬祥一
お灸の女王コンクール……宝塚三夫
天は知つて……近東規矩也
光りある中を……青葉三枝
大衆雑誌と責め……青葉三枝
捨犬……ラブマン
私の浣腸ブレイ……福村光治
受刑生活の思い出……原忠正
現代マゾヒズム芸術時評……壬生すみ子
寄生虫……本田由一郎
俺は知らない……本田由一郎
「家畜化小説を喜ぶ」に共鳴して……本田由一郎

変態「ますらお派出夫」の犯罪……麻生和夫
(新聞・雑誌)通信……青葉三枝
泥棒に縛られた話二件……池田正一
エスキモー娘の切腹……本間正宏
ある夢想家の手帖から……沼正三
「浣腸」に關するレポート……古賀信司
締めつけられた女優達……古賀信司
泥棒に入られた南田洋子……伊藤晴雨
責め絵の今昔……東一助
レポート……矢野重八
「一男色者の手記」……大谷念子
なめくじ……柳沢京子
私のアイデア「晒し台」……羽村保子
ローカル・レポート……千代田市
緊縛映画速報欄……東一助
探偵小説新考……藤野めぐみ
サジスチンの半生記……柳沢京子
(新聞・雑誌)通信……柳沢京子
「同好和服マニア会」遂に設立さる……柳沢京子

○十二月号(復刊第十号)

定価二百円(〒8円)

口絵
新着フット紹介(一)……北原純子・画
「いでゆ」より……北原純子・画
拘束服とマスク、欧米式新スタイル(4)……北原純子・画
或るポーズ……(雲井久子)
現代マゾヒズム芸術時評……滝見子・画
滝見子素描集……滝見子・画
文学に現れた責めの描写……矢野重八
新橋で米兵同性心中……矢野重八

私のふんどし(二)……松原三千代
異性より同性に興味……小畑一彦
沈黙の館……林一平
スカーレット・マンボ……東一助
「少年期(母と子の手紙)」……山口幸平
牢獄の花嫁……真木通隆
黄色オラミ誕生……萩原不隆
「無医村の診療班」……萩原不隆
和装女の縛り責め展覧会開催を提唱……岸本青柳
美女決闘場面のアイデア……小西規矩也
光りある中を(完結篇)……近東規矩也
腋毛礼讃……藤正三
女武者自刃……藤正三
黒女皇……藤正三
ある夢想家の手帖から……沼正三
醜態への幻想……沼正三
玉稿落穂集……沼正三
魂を病む人……沼正三
私のイメージ「F4」の独り言……沼正三

私の告白二題……沼正三
家畜人ヤプー……沼正三
女性化願望と女性ホルモンの使用実験……沼正三
糸姫の体験……沼正三
最近の映画から……沼正三
美とワイセツの限界……沼正三
女義太夫の花……沼正三
緊縛映画速報欄……沼正三
防具使用による窒息死……沼正三
マゾヒスト・クラブの結成を……沼正三
バスガールに硫酸……沼正三
めした手拭七百本……沼正三
告白「責めとフェチの自画像」……沼正三
現代マゾヒズム芸術時評……沼正三

新着フォト紹介 (アメリカ)
(2)



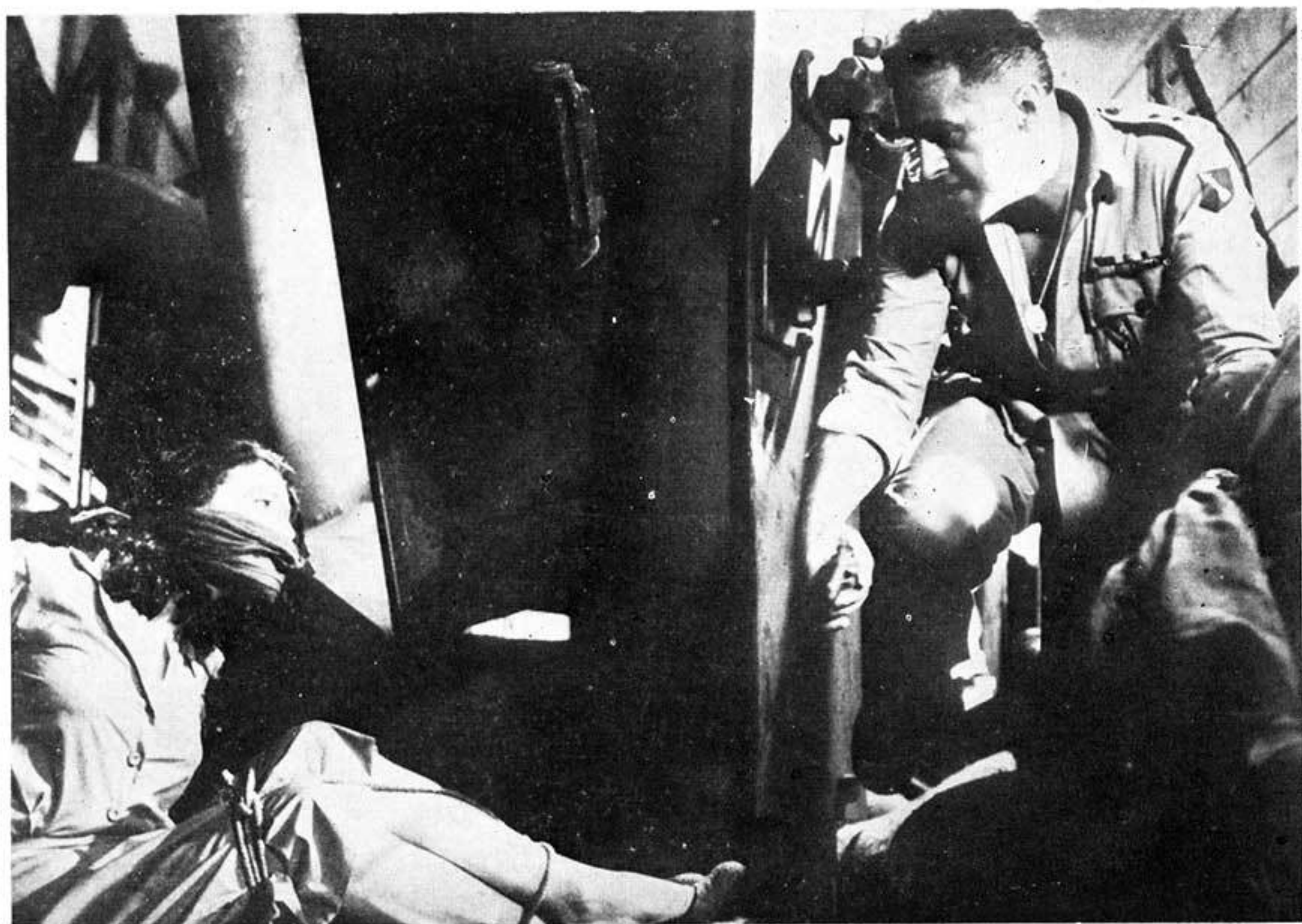
＜題名、並にストーリーは皆さまの手でお考え下さい。＞



花嫁受難二題

(北原純子・画)





「ボワニー分岐点」の一場面 (本文153頁参照)

東映京都作品

水戸黄門漫遊記 第十話

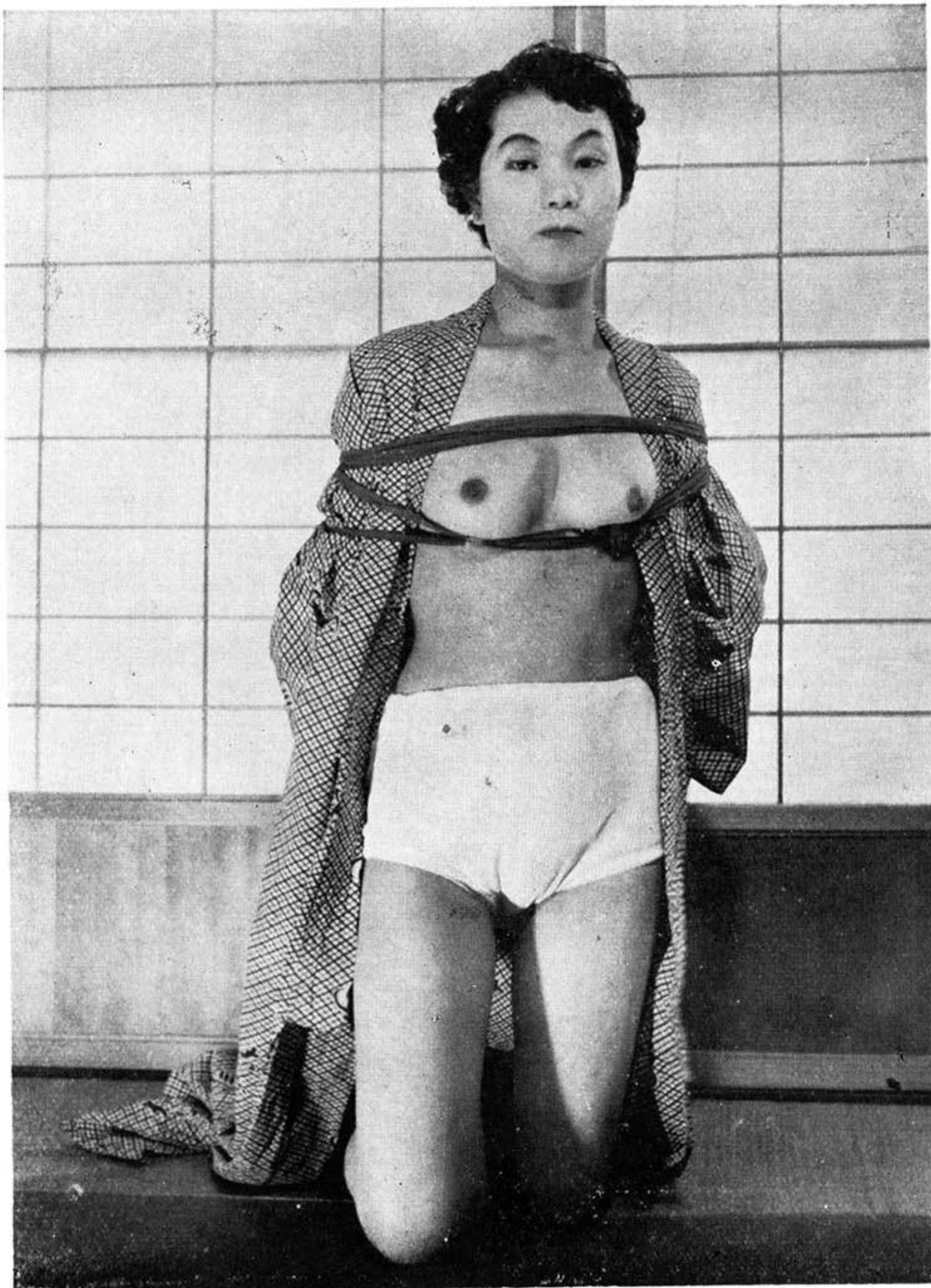
鳴門の妖鬼

(監督 伊賀山正光)



大邦一公

八汐路佳子



ADESUGATA

……モデル……(須川令子嬢)……

お灸ぜめ 北原純子・画



欧米式新スタイル (5)

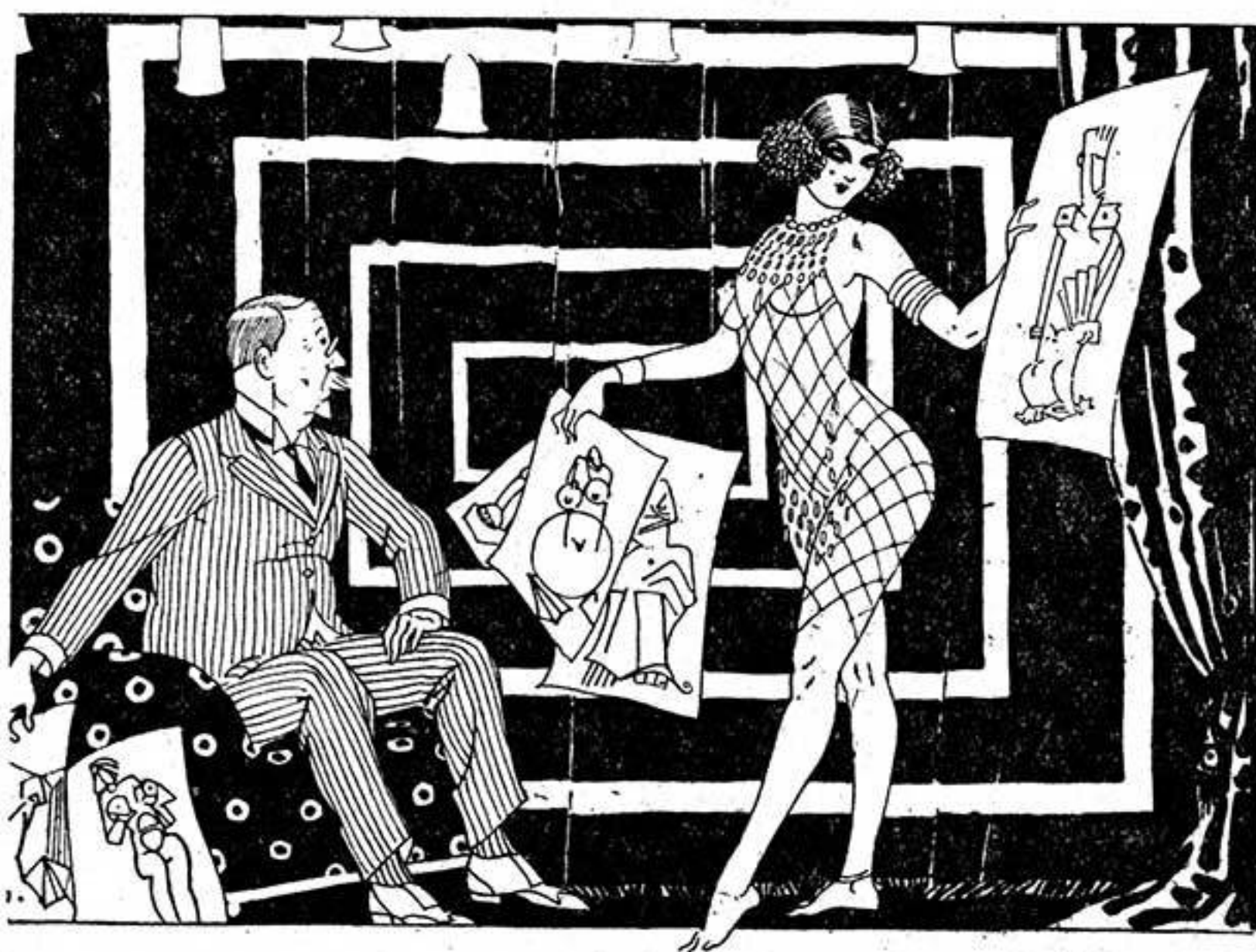


新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1957年 1月号

(第十一卷 第一号 通刊第九十一号)



文学に現れた責めの描写

藤

見

郁

この「文学に現れた責め」も早いもので五回目を迎え、既に十五、六人の作家が登場して、作品の数も二十三、四篇、枚数にして百五十枚にものぼる。さいわい読者の反響もよいようなので、もう少し続けてみたいと思う。

今回は趣きをかえて、はじめに講談から一つ取りあげてみよう。東京タイムズ紙上に連載されている桃川如燕師の「雷電と谷風」(第百二十六回)に現われた女の責め場。ものがお古い講談だけに、日本独得にして典型的なサディズム・シーンである。これが如燕師の口演になると、まことに立体的?実感的になってよきものなのである。文学になるとたいしたことはないが、時代物責め場の標本という意味からも一応載せてみる。

『松五郎の父親の家に救いを求める隙はおろか、身体を隠す隙もなかった。』

「この野郎、太え阿魔だ。兇状持ちの松五郎を逃がしやがって!」

と、夜も明け切らぬうちに暴れこんで来た鬼源の子分数名。

「待って下さい!お願いでございます!」

と、病床からよろめき出て、子分の足にすがりつくお美代の父親勘右衛門を、

「うるせえ、このくたばりそこないめが!」

と、胸板を足蹴りに、泣き叫ぶお美代にどつと襲いかかり

「てめえの身体は、松の野郎が、借金のカタに置いて行つたのだ。これからひっかついで行くから覚悟しやがれ!」

と、猿ぐつわをかませた上、手足をふんじばり、そのまま表にかつぎだした。

……えっさえっさと、まるで神輿(みこ

し)のように源蔵の家にお美代をかつぎこんだ子分たちに

「おう御苦労だった。奥の部屋に叩きこんでおけ!」

そのまま荷物のように奥の一間にかんきんされたお美代は、来る日も来る日も地獄の責苦。

「どうしても白状しねえのか。何処へ松の畜生を逃がしやがったんだ!」

後手に縛り上げたお美代を、ピシリピシリ弓の折れで打ちすえる源蔵。ヒイヒイ悲鳴を上げてのたうちまわるお美代の苦悶の姿に、悪魔のような瞳を光らせ

「白状しねえならしねえでいい。その代りてめえの身体は松の野郎の借金のカタになっているんだから、これから俺が思う存分料理してやるから、その覚悟でいるかい!」

と舌なめずりまわすのも万事が源蔵の思
う壺にはまったからだ。

ニコニコ顔で松五郎に十両の金を貸して
やったのもこのお美代の身体がほしかった
ばかり、その上イカサマ賽で松五郎をたぶ
らかしまんまと手に入れたお美代だから、
餌物を眼の前に毒牙をとぐケタモノになる
のも当然だった。

だが人一倍勝気で性根のしっかりしたお
美代は、如何に生地獄の責苦にあおうとも
源蔵のいうなりにはならず、じつと唇を噛
んだまま源蔵のなすがままにまかせてい
た。そして心の中で祈るのは松五郎と父親
の無事、ただそれだけだった。

成人の面影を胸に、鬼源の鞭をたえしの
ぶお美代の哀れにも痛ましいその姿……」

といった調子であるが、この原稿を書き
ながら、ふと耳を澄ますと、隣室のラジオ
が偶然にも、桃川如燕師の講談をやってい
る。まことに偶然の一致でこしらえ事のよ
うだが、場面はどうも女が襲われていると
ころらしい。新聞のラジオ・プログラムを
みると「大菩薩峠」——中里介山原作の文
芸講談——とある。女軽業師の一座へ無法
な折助どもが乱入して、女親方をさらうと
ころらしい。乱暴な男どもの手にかかって

着物がはだけ、軽業師だから、下に赤い半
モモヒキをはいている。それがムキだしに
なっているの、と色っぽい所であ
る。一生懸命抵抗したが力及ばず、軽業に
使う太綱でついにグルグル巻きに縛られ……
折助どもに手取り足取りかつがれると……
一座の女たちも悪折助どものために皆後
ろ手に縛られ……ジュズつなぎにされて土
堤のかげに運びこまれた……これからクジ
を引いて一人ずつ自由にしようじやねえか
……などと如燕師熱演のうちに、あとは来週
のおたのしみとなった。連続講談である。

話が横道に外れて申し訳けがない。が聴
覚によるイメージというものは各人飛躍し
た想像ができるので、なかなか面白いもの
だと思った。昔からある講談のなかで、毒
婦女賊ものなどは、責め場も豊富なのでそ
のうちに調べてみたいと思う。

次に、岩堀光氏の「足利義満」という作
品から。岩堀氏はよく落城ものの歴史小説
を書かれるので奇ク読者の中でも名前を御
存知の方もあるかも知れない。落城小説ば
かり書かれるのは変っているし、サディズ
ム作家の一人にあげるべきかも知れない。

この「足利義満」は「りべらる」誌の昭
和二十七年八月号所載のものである。足利

に時代をとった責め場面は珍らしいといえ
よう。

『……館には、他にも女たちが数人いた。
みんな蒼い顔をしてすっかり疲れきってい
た。

「わたしたちもさらわれてきましたのじ
や」

と、女のひとりがいった。

「なぜ逃げませぬ」

利音はいった。彼女だけが柱にしばりつ
けられていた。

「そのようなお方もございました。でも館
ののまわりは深い壕、表門には遠見があつ
て、日夜監視しています。逃げられるもの
ではないのです。万一に逃げ損えばそれは
むごいことを」

と、女はそれだけでおびえきった顔にな
って「素裸にされた上、髪の毛を、天井か
ら垂れ下った縄に結びつけ日中立たせた
上、わらわたちにみせしめじやと、弓の折
れで打擲、転げようにもつり下げられてい
るのと同様のつま先立ち、それはひどい苦
しみようじや。その上、焼いた鉄を肌に……」

「ああ、恐ろしい」

利音が助けた宮仕え風の女が、袖で顔を

蔽った。

「いいえ、あたしのみたはもつとむごい。両足を開いて逆に足首を釣り下げ、酒をのますのじやとて、開いたつけねに花立てのようになしこんだ竹筒へ、芥子をといだ水をそそぎ入れましたわい」

乱波たちは昨夜の成功を祝って酒宴を開いた。真赤な顔をして、くさい息を荒々しくはいた男たちが、おびえている女たちを呼びにきた。中にはいきなりおそいかかって衿首をつかみ唇をあわすのもいた。

ふんどし一つ恰好でいやがってはねる女を抱えあげると踊りながらでていくものもいた。すでにその場で女を押し倒すもの、ひとりの女を面白がって数人で追いつながら、連れさるものもいた。これだけでもすでに阿鼻叫喚とも酒池肉林ともいえる有様なのに、酒宴の場では、どんな残酷なことが行なわれているか想像すらできなかった。

部屋に利音と上藹風の美しい端正な顔の女だけが残ると、女はすぐに利音の結び目をとこうとした。しかし、荒縄はその女の力でゆるみもしなかった。』

文中、乱波（らっぱ）というのは、簡単にいえば山賊、野武士のようなものである

う。その発生に歴史的因縁があるが、茲で詳しく書く必要はない。逆吊りにして足をひらき、芥子（からし）を注ぎこむというのは、この「責めの描写」に於て、初登場の責めである。竹筒を花立てのようにさして、というのは方法として変っていて面白い。作者岩堀氏の創作であろう。想像としては面面白いが、実際には惨鼻この上もないだろう。

「……彼女は思わずきゅつとまたを合した。「はははは」と、笑うと、急に情慾をかりたてられたように、慶子をひきずりよせた。

「ああ、苦しい。離してたも」

「わめくな女」

南条は慶子の胸にぐいと手をさし入れた。

「ああ、何をなされます」

慶子は身悶えた。いきも絶えるような思いだった。大きな掌の間から、掴みだされた乳房の先が、可愛い果実のように、また必死のあえぎをあえいでいるようにつんと空を向いていた。

「ああ、く、くるしい！ ああ痛や！」

慶子は必死に、頑丈な男の腕にかみついた。南条はその慶子の頭髮をぐいと、ひき

あげた。慶子の顔はあおむいて、眉がつりあがった。

「ひい！」

と、尾をひく悲鳴をあげた。

南条は慶子の下衣のえりに手をかけると、びりと肩が破れて、胸まであらわになった。

慶子はしかし、そのままたたつと床に四ツ這いに這った。

「うぬ！ こいつ！」

南条はいらだって下衣のすそに、ぐっと手をかけた。当時の下衣は襦袢と蹴出して二つを一つにしたようなものである。ぴりつと腰のぬいめが破れると、もう慶子はわずかに胴の紐だけを残して、何もまとわぬ姿になってしまった。

「あれ、お許し下さりませ」

「なに、お、たわけめが！」

南条は片腕で慶子の首を抱くと、片腕を、はねる内またにさし入れて、ぐいと立ち上った。ちようど慶子の真白なやわらかくのびたからだは首と片足をひつつけでもしたような恰好に釣り下げられ、離れた片足だけがぴんぴんはねていた。

「めんどろな！」

南条は叫ぶと、ぱつと慶子のからだを離れた。

「ううッ！」

と、慶子は板床に裸体を叩きつけられて腹をのけぞらせて反りかえると悶絶した。急に一瞬動かなかった。

「女！思い知ったか、素直にせいよ！」

南条は叫んで慶子を、まないたの上に魚をのせるように、床へ長々と横たえた。

利音は不思議な現象をみた。いままであれほどのちがいで拒んでいた慶子が、もう反抗をしなくなったことである。

……(四行、編集部にて削除)……

『突然、慶子が泣き出した。利音はどんなにか屈辱を覚えるやしいのであろうと慶子をみた。』

慶子はけろりとした顔で利音をみた。彼女ははじめて恥しそうに利音から顔を背けた。

南条はいつかぐうぐう部屋中にひびくいきを聞いて寝てしまった。彼ははじめて疲労と酔いを感じたらしかった。その寝顔は、起きて肩をはっている時と違い、ひどくおさな染みていた。

彼は非常に一本気で、たいした悪の意識ももてない単純な男なのだろう。

「さあ、早く！」

慶子は、はだかのまま利音の側に這いつて縄をかんだ。

「駄目でございます。それあそこに」

利音が教えた。彼女はさっき南条がはいってきた時、部屋の隅に、慶子を手籠めにする前に置いた脇差しのあるのを知っていた。

慶子はすぐに利音の縄目を斬った。そして急に自由になった利音に、自分の裸像がはずかしく思われているように感じた……

柱に縛りつけた女の前で、初の女を責める、というサディズム・シーンである。なかなかのエロチック描写で、現在の奇クの編集方針にこのような描写はそぐわないかも知れないが、これは公刊誌に堂々と連載された文章なのだから、大目にみて頂こう。この程度の描写なら、現在店頭に並んでいるどの雑誌をめくっても掲載されているから。

次に、雑誌「妖奇」昭和二十七年十月号に載った「私刑(リンチ)」という短篇小説を紹介してみよう。この小説は徹底的に責めに終始しているところが珍らしい。

「奇譚クラブ」や、以前よくあった底の浅い類似誌には雑誌の性質上、はじめから終

りまで責め描写の連続という小説もあるがそれにしても多少のストーリーはある。ところがこの「私刑」という作品は、やくざの親分に背いた妾を責める描写だけが執拗に書き綴られている。過去の奇クにも、相当にねばっこい描写があったが、執拗さ、ねばっこさ、細密さに於てはこの「私刑」にとってもかなわない。御本家の奇クがお株をうばわれた形である。

作者は、坂久三という人であるが、よほどの異常性をもった作家とみえる。現代小説ではあるが、感覚は大時代で、近代性のないのが残念だが、とに角、エネルギッシュによく書いたものだ。尚、挿絵は加藤敏郎氏が描いているが、つまらなく、特に記すべきことはない。

『……「どうだね、客人、こんな土地だから何も変わった事は無くて気の毒だが、今夜よかったら一寸面白いものを見せてあげるよ」』

東京でもそうざらにはお目に掛れない事だそう。もしその気があるなら、子分を迎えによこすから、鉄火場の方に来いというのである。話はその親分の二号とか三号だかの若い妾が、子分と馳落して捕ったと云うのだ』

『案内されて行った先は、普段は鉄火場にして居るとかで、田舎造りの荒れては居たが、それでも年台を経て来た陣屋風の古びた家屋の中二階だった。床は板敷き、天井は一抱えもある様な梁の見える妙な所であった。既に五、六人の男達が車座になって茶碗酒をおおっていて、その真中に、見るからに顔色をなくして女が、憔悴と身動きもしないで座っている。どうやら、これが馳落の片割れの妾であるらしい。』

一と目みたゞけで仲々どうして美しい女である。それに、こんな草深い所には凝つとしていられそうもない小粋さがある。背の辺りにはこの数日の激しい緊張の毎に、憔悴が深く影をみせていたが、肉付きもよく、事に襟脚がばかに色気を含んでいる。これ女はに取っても、この場合は罪であった。……』

というのが書き出しのシーンで、つまり田舎の親分を訪ねて来た客人が、その私刑の場に居合せての客観描写というわけ。

『……先刻から酒ばかり飲んで居て、さっぱり関心もなさそうなのが、茶碗を片手ににやにやしなから、そんな事より縛れ、と云った。』

「いい女の縛られたのって、一寸色気があって仲々乙なもんだぞ、まだ見たこともないだろう」

と、云うかと思うと、そうして置いて操ってやると、女は死にそうに喜ぶものだと知った顔をする。

「どうだ、やって見ねえか、まったく変な気持になるぜ」

相変らず手から酒茶碗を離さず、にやにや薄気味の悪い笑を浮べ乍ら、一座を見廻す。「面白そうだなア」と云った奴があった。

面白いに違い無かった。生きた女を一人思う儘に玩具にしたり、酒の肴にする遊びは、そうさらに有るものではない。こうした事には話が弾むとみえて、興がつきない。何時しか話が変態の事に移って一しきり眠った。何でも芸者でそんなのが居て、床に廻ってから腕を後に廻して、縛ってくれと客にせがむ。それが赤い長襦袢かなんか一枚で肌を縄が喰い込む程、縛らしておいて、眼を細くしてうつとりする辺りなど凄いい位だ、と云うのである。どうも話をしている者の方が、如何にもうつとりとしそうなの口振りであったが、これは体験であつたらしかつた。然し、これを聞かされていゝる女には、容易なものではなかつた。神経

がよくもつていゝと思われた。辛辣なそれが厭がらせであり、そう云つて聞かせる事が男達の半分は弄びものと判つて居ても、救いには成らなかつた。あえて、その言葉通りにされた所で、しどく、役得だと心得ている連中であつては事更であつた。

「まったく、色っぽい肩をしているぜ、見るからに抱きつきたくなる、と云う奴よ」女は、男達の手が触れる毎に小娘の様にびくびくと肌をふるわせた。手を動かしてゐる間も無駄口を忘れない連中だし、又それ以上に小まめに彷彿指先だから、早い所女の懷に手など滑り込ませぬとも限らない。

時ならぬ女の黄色い声があがつたりした「そう騒ぎなさんな。今に氣の遠くなる程可愛がつてやるからよウ、うは、」そうなると余計に勢づくものとみえ、調子づいた奴等が寄つてたかつての騒ぎに、女の軀は恥も外聞もなく、荒くれ共の手に文字通り翻弄された。然もこれが彼等にとつてはほんの前座と云うのであるから、女にとつては哀しさも又一しおであつた。

そんな馬鹿騒ぎが、ようやく一とおさまりしかけた頃、やつと、そこへ親分が二三の若い者を連れて帰つてきた。すると子分達は急に隅の方へ引退つて窮屈に膝をかた

めて座り直した。

「少し世話を焼かしますので、縛りました
が」と、兄貴株の男が、少々かしこまって
空々しくそう云った。

「うん」と、うなずいてみせたが、流石に
親分としても、この後手に縛られた、つい
先日迄自分の妾であった女を、目の前にし
て複雑な感情を覚えずには居られぬ様子
だ。……」

『……待ち構えて居た様に、二人ばかり立
ち上ると、それ迄のふざけた気分もどこへ
やら、恐ろしく殺伐とした手捌が否も応も
ない、忽ちの間に女の着ている着物を一枚
剥取った。薄着にして鞭打つ効果を深め様
と云うのである。もう子分達も無駄口一つ
きかない。一人が女の腕を捻じ上げる。そ
れを今一人が縄をからませるのだ。女も必
死の力でそうされまいとする。身も乗り出
して逃げ出そうとするので引戻されて、ご
つんと膝頭が板間を鳴らす。如何にも痛そ
うな音である。どこやら着物の裂ける音も
した。

夢中である。夜目には気がつかないが、
それでも良く見ると、電球の廻りにひどい
埃がもうもうと舞い上っていた。剥取った
着物やら帯やら、女の囲りのものが、そこ

いらに飛散り、男共の足元に揃まり、所な
らずの艶めいた色模様が共に鉄火場の床の
上に乱れ舞った。然も、着物にはまだ女の
ぬくみが残っているように云う生々しさだ。

後手に縛られた姿よりも、争いの為に激
しく肩先に筋を浮べて呼吸する様の方が哀
れに見えた。女は乱れ毛のふり掛る面を突
き出す様にして、せわしい息使いで、親分
である男を凝っとみつめた。この身、この
姿に全身にものを云わせて訴える眼差しで
あり、其れ迄の二人だけに判る表情であ
る。

然し、女が最後に秘かに望みをかけてい
たそうした期待も、見事に裏切られた様で
あった。既に女を慰さみものにしていた時
の様な空気は薬にしたくもなかった。厳し
い、みじんも人情など挟む余地のなさそう
な陰惨な仕置場の雰囲気だと云って良かつ
た。固くなった子分達の影が重なって、一
方の壁に写って動かない。息を呑んだ様に
誰も口をきかない。物音一つさせない不気
味さを思わせる吸い込まれる様な静寂の一
瞬の間であった。と、コトンと音を立て、
何やら女の前に投げ出された。

「誰でもいい、こいつでやれ！ それから
使う前によく見せてやれよ」と、顎でしや
くって子分の方にそう言った所で、無論、

女に取って有難いしろものではない。

一尺程の木の柄に藤が巻いてあって、そ
の先に皮革の紐の様なものが長く付いてい
る。もとより見るからに乗馬や動物に用い
るものとも違う、始めからそうした事に使
う為に特別に作らせたものである。それを
本人にとくと見せてやれ、と云うのであ
る。

こうした神経は、単に厭がらせや恐怖を
あおる為ばかりでは無い様だ。昔、罪人を
打首にする時、その寸前に首斬役人は一度
刀を罪人の目前に差出し、それから振り構
えたと云う。恐らくそんな芝居染み一つ
の型が、その儘彼等のしきたりとして残っ
て居たのかも知れない。

突き出された鞭の姿は、実際にそれで打
たれる時の瞬間の苦痛よりも、柔軟でそれ
でいて恐ろしく強靱そうなこの種の道具の
持つ特有な陰気な佇みを皮膚の上に想像し
た方が、遙かに耐え難きものであったに違
いない。顔を背ける女の目の前で、不意に
鞭がひゅんと空を切る。座っている膝すれ
ずれの所である。それにしても、想像に絶
した、思わず身のすくむ様な、四分板が裂
けはせぬかと気ずかう程の激しさであっ
た。

一つの威嚇だ。女の顔から、すうッと血

液の流れが引いた様な気がした、息をしておれない自分に気付いた様な恐怖が全身にみなぎってくる。今にもそれで打たれると云った緊張が、刻々と心臓の負担のぎりぎりの限度迄迫ってくる不安を覚える。すると、

「おいッ！ 誰か念の為に、何か噛ましておけッ！」

と、云う。……何か噛ませておけとは、猿轡をさせて、苦しみや痛みの声をあげさせまいとする為である。何やらで息苦しく口を塞がれる。もだえて軀を動かすと、今更の如く縛られた身が、縄目の苦痛を伝える。女は、漸くこの身の自由を奪い、あまつさえ下着一枚の薄着にして、その苦痛の声も洩らすまいとする、物々しさに、これから迎え様とする事柄が凡そ生易しいものでない、並々ならぬ惨酷なものであると思ひ至らせられるものであった。声にならぬ声が、猿轡の下で叫んだ様であった。女は始めて逃げたいと思った。縄尻は誰も持つては居なかった。とても不可能とは知り乍らも、じっとしてはいられなかった。然しそれも、たゞ訳もなく立上って、二足も踏み出さぬ内に、一人が引ずる縄尻を足で押えると、浮き上った腰を蹴られて、豊満な女の肉体が、その儘圧力となって鈍重な音

を立て、思いざま横倒しになると、反動が緊縛した上半身に火の様な熱い線となって女の肌の上を走った。

「瀬戸際になりやがって、往生際の悪い女だッ！ かまわねえ、始めろッ！」

そんな声を、身動きもならぬ女は、頭の何処かで聞いていた。縄の当たった乳の上と二つの腕が、ちぎれる様に痛かった。

「へいッ」と子分が答えて、引きずり起きた女の片肌は、長襦袢の襟も滑り落ち、抜ける程白い胸に乳房も露わであった。だが、一座は女の肌を見たから、乳がのぞいたからといって、既に何の感興も示そうともしなかった。今はそんな好色な見方や眼をした者の方が、戸迷いするに違いない程の緊張と固唾を呑んだ重苦しい空気は、まるで、何万もの大金が賭けられた博奕場の丁半の瞬間の雰囲気にも似ていた」

「……空を切る鞭は、鋭い唸りをあげたが、女の肉を打った時は案外と鈍い低い音であった。だが引きずり起された女の軀は電気にも触れた様な衝撃をみせて、胸を張り身を反り返すと、猿轡の下から絞り出す様なうめき声を洩らした。むき出しの肩から乳房にかけての隆起が天井を仰ぐばかりに見事な曲線を画く。豊かな肉ずきであ

る。

続いて、鞭は、縛られた事を忘れた様に反り返り苦しむ胸へ容赦なく打ちおろす。

女は海老の如く身をちじめる。すると今度はそれへと打続けられた。胸を反らせば胸に、背をすくめればその背中へと、交互に小面憎い程的確な手捌きだ。塞がれた口からは、派手な悲鳴も聞えない。縛った軀は逃げ廻る様な騒ぎも起らない。たゞ女の豊満な肉体を打鳴すびり／＼と痺れふるえる様に、妙に余韻を持った鞭の響きは、陰気な、如何にも耐え難いものであった。

女にどれ程の苦痛があったかは知らない。恐らく打たれる毎に女の肌は焼火箸でも当てられた如く、熱い感覚だけが激しく女を苦しめて居ると思われた。そうして、その都度繰返される苦悶の姿は、既に女の精神や意志の限界を離れたものであったに違いなかった。遂に支え切れなくなった女が、床を舐めんばかりに軀をのめらす。肩が胸が忙しく上下して波を打つ。襟脚にしみ出た汗が後髪をべっとり肌につけて、そこだけが馬鹿に艶っぽい。そう云えば男の額にも脂が浮いて光っている。流石に息遣いも速かった。閉めきった部屋はおびただしい煙草の煙りと、埃が充満して、濁った空気を更に汗と人いきれがそれを攪乱す

る。

もとより女を責めるに夢中な連中には苦にはならない。何かこうした事には異状な陶醉があるのではないかと疑われる程に魅惑された様な眼をしていた。まるで吸い着いた様な男達の瞳は、次第に異様な光りを増してくるのだ。

「野郎ッ！ 誰が手を休めると云った！

勝手に手加減をしてはならねえ！」

親分の怒気を含んだ声が飛ぶ。女に少しの間も与えようとしなない仮借なきであるが、何故かその響きはいらだった、何処かヒステリックな調子であった。

「いゝから、止めると云う迄続けるんだ」

「へい」男は手の平で額を一撫ですると袷の片肌を抜く。お定まりの腹に巻いた晒がこの場合、馬鹿に派手に目に沁む。つんのめって動かぬ女の縄目に、男が手をかけて引き起したが、気を失った様に女はがっくりと顎を落して眼を閉じた儘、開こうとしなかった。口に当てた布を取って、髪を掴むと、ぐっと顔を電灯の光りに向ける。蒼白な面に苦痛を物語る影が、びっくりする程に深く刻まれていた。水を飲ませるというので、今一人が薬罐の儘、乱暴に女の口につき込む。女は意外に咽喉を鳴らして呑み下していた。男達はそれと知るや、故意

に水が無くなるまで、薬罐を傾ける。思わず水にむせび激しく咳き込む女。それが又それなりに意地の悪い私刑なのであるが、口からあふれる水は、女の顎を伝わり胸を流れて、裾前を踏み割った、むっちりとした太股に音をたてゝこぼれ落ちた。しいたげてみて始めて若い女の肌の盛んな抵抗を知らされた様なものであった。肢体の凡てが旱天の滋雨に会った様にこの一時に甦えり、跳返る程の弾力に富んだ皮膚は聊も痛め損じられた様子も見せなかった。

男が再び鞭を手にする。一振り、ひゅんと空振りを加える。と、堰を切った様に、「もう……かんにんしてッ！」と、泣き叫ぶばかりに絶叫して、女は軀を前にすくめた。あわてた男が、髪に手をかけ引き戻す。女は水びたしにぐっしよりと濡れた長襦袢が胸から腹にかけ、そして股にべったりと肌に張りついていった。

……もう許して、堪忍して呉れと、必死になつて叫び訴え続けるのを、耳にもかけず、再び鞭がうなりを上げて女の軀を打つ。「あ、あッ！ ひイツ！」と、助けを求め声か、その儘尾を引いて悲鳴に変わる。呼吸も止まりそうな苦痛が、髪を毛を掴まれた儘の上半身を、恐ろしい力でねじ曲げる。吊り上げた眉、歪める口、後手に縛ら

れた手がまるで肩中で断末魔の様に空を掴む。脂の乗った艶々とした膝頭が、見る見る赤味をさして来る程力が加わって床を突っ張る女の四肢がこの堪え難い責めに、その一つ一つが深刻な表情をしていると云つてよかつた。とても正面では見ては居られなかつた。腹の底からしぼり上げる様な女の悲鳴。そして苦しむ呻き声、思わず見ている者をして眼を覆わせる程の、無慈悲な鞭の打ち方であり、少しも人情の無げなあつかいであつた。髪振り乱し、もう意地も張りもなくした女の、

「あッ！ ちくしようにッ、あッ！」と、あえぎあえぎの、然も絶望的な、なんとも云えぬ声を聞かれると、それ迄になく女が哀れに見えて、彼等のしている事が、非常に残酷なものに思えてくる。何にしても、もうこれ以上無法なことは許されたいと思う積りのこみあげてくるのを、どうするすべもなかつた。」

大体以上である。とりわけすぐれた描写も新しい感覚もないが、奇巧の他に責めに終始した小説は珍らしいと思つて、一応紹介してみた。こうして各方面の雑誌、単行本からは責めの描写を探し出して、感ずるのには、サディズム小説のメツカは、やはり奇クであり、ほめるわけではないが、奇クは貴重な雑誌である、というものである。たとえどんなに誌面が縮小されても、長年の伝説による実績が感じられるのである。

花 と 朔 風

北 原 純 子

☆

道子は女学生の頃、何時も電車の中で逢う大学生に片想いをした。青年は『土屋』とネームの入った本をブックバンドで締って持っていた。以来道子も、道子の片想いに同情する友人二、三人も、青年を『ムッシュユウ土屋』と呼んだ。青年はまことに女性に愛されるような華奢な美貌であった。その青年とは遂に片恋に終り、其の後道子は土屋に似た青年に行き合つて、恋に落ち、唯一度の過失から純潔を失ってしまった。熱が覚めてから考えると、その青年は土屋とは似ても似つかぬ男でしかなかった。片恋の青年は、理想の男性となつて、今も脳裡を去らないでいる。そして、道子は結婚した。芳紀まさに二十才。小柄で可憐な容貌よりも、先ず何よりも寄方ない身である事と、性格の温順な事だけ

を見込まれて、T大大学院に籍を置く、宮下健の妻になった。

道子はハネムーンの第一夜に於て、忽ち夫に失望した。失望というよりも嫌悪と云つた方が当たっている。夫宮下健は道子の理想とは余りにも違つた身体をしていた。まるで黒のように密生した胸毛と、下腹に続く毛叢。それは四肢にまで及んでいた。瞳は猛禽のよう鋭く、笑う時にさえ凄味があつた。骨格は逞しく、学生柔道で三段の腕前だという事であつた。而も新枕の花嫁に向つて、

「ボクは手早い性ですから、その積りで居て下さい。口で相手を納得させる事は面倒臭いんです」と、うそぶいて云つたものだ。外見ばかりか心までも、野暮な男だと、ゾツとした。健には両親はなかつたが経済的には恵まれ

ていた。亡父の残した貿易商社からの収益に依つて、総ては満されていた。

上目黒の高台にある堅牢なモルタル建築の屋敷には、終日明るい陽が射していた。此の屋敷には健夫婦の他に、健が生れる前から居る女中のキヨと、キヨの下仆く若い女中と、雑用をする木村という男と、かつて亡父の書生であつた桂という現社長代理と、健の異母妹で高校生のチャコという娘がいた。道子は程なく此の人達とも馴れた。が併し、此の家にもう一人、どうも気になる人物が居た。彼ヒロミと云つて、少女のように含羞を湛えた唇を持つ、白晢の少年であつた。その面影の何処かに、初恋の青年を彷彿させるものが宿つていたのである。彼は三度の食事も皆とは別で、大抵皆より遅れて食事をする事が多かった。食物はスコブルる贅沢で、栄養だの

カロリーだのと、我儘を云っていた。ヒロミは朝食が終ると、丹念に髪をブラッシングして、学生服に更め、匂やかなペパメントを口に含んで、キュッキュッと鳴る靴を履いて、学校へ出かけるのである。H高校の秀才なのだという話であった。

健は本箱にも洋服ダンスにも机の引出しにも、総て自分の持物には鍵をかけていて無断で書斎に入る事は妻にも許さず、書斎の掃除は必ず自分で行うという気難しい人間なのに、此のヒロミにだけは例外で、偶々健の留守中に書斎に入り込んで、書棚から本を抜き出して読んでいたりするところへ帰って来ても、健は、

「また入ってる、ダメだよ」

と睨み付けるだけでお終いであった。

チャコはヒロミの事を道子にこう説明した。

「彼は将来お兄さまの片腕となって尽してくれる人なの。詰り第二の桂さんになる人ね。だからお兄さま、彼にはとっても寛大よ。此の家ではチャコなんかよりもヒロミ君の方が権力がある。彼一寸可愛い顔をしてるでしょ。だから利害は抜きにしても、事実お兄さまに愛されてるワ。勿論師弟愛よ。でもいくらエバっていても、チャコ心ではヒロミ君の事、一桁下げて考えてる。だって書生ですもの。そう、一寸ばかり世

間並のそれよりは、優遇されている書生ね。：どうして此の家に来るようになったか、それはチャコも知らないア。親戚でも何でもない。赤の他人よ。彼、仏文科志望なの。だ

からやたらとフランス語なんか使って、いやにパリ通ぶるでしょ。気障ったないわあ。キライよ！」

そのチャコは「大人になったら、チャコ芸



者になりたいのよ」と云いながら、女子大を受ける準備に余念がなかった。

その様な健であったから、日常生活も極めて整頓されていた。どんなに親しい友人の訪問を受けても、一時間と限った面接時間を超過するまで、尻を上げない奴に向つては、

「これから調べ物をするから、帰ってくれよ」

とツケツケ断つた。

朝は誰よりも早く起きて聖書を読んだ。彼を信仰に導いた人は、他ならぬ社長代理の桂であった。幼時生母に死別して、直ぐさま継母の手にかゝり、散々しいたげられて育った健の性格は、とうの昔にゆがめられてしまっていた。傲慢で残忍であつた。坊ちゃん思ひの桂は、信仰に依つて、健の性格を矯めようと慮つたのである。健は云われるままに十四才のクリスマスに洗礼を受けて、熱心なクリスチャンとなつた。健は信仰を嘲笑う連中に向つては、

「バイブルを持たない奴は、信念を持たないと同じだよ」

とやり返した。

その健が、気に喰わない事でもあると、忽ち新妻の道子に八ツ当りをしてハリ飛ばした

「あなたは何のために信仰をなさるの？」

道子が口惜しさに、つい詰問すると、

「そんなきめつけた顔をするなよ。聖書は俺

にとつて、アクセサリーに過ぎんのだ」

と涼しい顔をする。

「そんな信仰は神を冒瀆する事ですわ」

「ホウ！ボウトク。お前仲々いい事を知ってるじゃないか。瀆神は美である」

と白っぽくれた。道子は健の気まぐれに腹を立てながら、此の不敵な男にあらわれないうちに、焦燥は何時か、云い知れぬ快樂にすり変つて行くのを感じていた。

☆

健の従兄に、シユールの絵を描く木谷隼夫という男がいた。彼は時々二、三人で連れ立って、ぶらりとやって来た。夏はワイシャツにノーネクタイ、冬はルパシカのような上着を着ていて、とりとめのない事を際限もなく喋る。ボヘミアンの様な風貌の男であつた。其の日も、隼夫は須田という連れの絵描きと二人でやって来ると。

「よオ！居るかい。相変わらず机に嚙りついて、君子面をしていやがる」

と遠慮のない事を云つた。気難しい健も隼夫には長上への礼を持って接していた。

隼夫達は早速坐り込んで、毒にも薬にもならない世間話を始めた。健は其の頃、恰度、助教になるための論文の草稿を書き始めていたので、幾らか迷惑を感じてはいたが、一日の殆んどを机に向つて暮す今日此の頃でもあつたので、気の合う隼夫の偶の来訪を息抜

きの積りで、気嫌よく筆を捨て、話の相手になつた。ところが隼夫の話の途中から、ふと思ひ出した様に須田が口を出した。

「健ちゃん、しっかりしろよ。君、してやられてるよ。彼女隅に置けないよ」

「彼女って？」

「のんきだなア。奥さんにきまつてるじゃないか」

「道子がどうかしの？」

「見たんだよ、昨日……なあ」

須田は隼夫に相槌を求めた。

「云うな、云うな。つまらん事を」

隼夫は興味なさそうに、打ち消そうとしたが、須田は云い出した手前、恰好のつかない顔をして、

「併し、黙っているのも悪いじゃないか」

と取繕うように云い足した。

「聞く必要がありそうだ。隼夫さん話して下さい」

健は命令的に云つた。

「いや、大した事ではないのさ。昨日ね、新宿を走っていると、道子さんを見付けたんだよ」

「うん、それがさ」

と、またしても口を出す須田を押えて、

「多分だよ。多分連れではないかと思う男と二人で、喫茶店に入るところをね」

「どうしてそう肩を持つんだ。木谷。あれは

どう見たって完全に連れだよ。而も唯の仲ではないと見たね俺は」

須田は声を高くして云った。

「シッ、声が高いよ。そりや道子さんにだって、知り合いの男だつてあるだろうさ。だからなんだ、此れは俺が健ちゃんのために云うんだ」

須田はみなまで云わせず、きめつけた。

「判った。お前道子さんに惚れてるんだろ」

隼夫は苦笑して、

「悩みたくはないからね。誰しもね」

とポツリと云った。

健は愛用のスリーキヤッスルを一本抜いて火をつけた。凄じ程熱情的な目は、人事のように笑っていた。

「孤島の住人ではないんだから、道子にだって男友達の二、三はあるかも知れないですよ併し、そいつはミスだなあ。見られている処を知らないでいるなんて……」

「そんな落着いていて、いいのかい？」

須田はまだ云っていた。健はそんな話題を避けるように、明るい声で、

「今夜は御馳走しましょう。いいんでしょ？ ゆっくりして。とっときのコニヤックがあるんです。バイヤーが届けてくれましからね」

隼夫は手を振って、

「いやもう沢山。またにしようよ」

「そうだよ。肝心の健ちゃんが飲めないのに仕様がないう」

「だからこそあんなものは来客用です。それに今日は、情報を提供して頂いたから。ハハハハ」

「いや、健ちゃん。君、気にしてるのか？ 今の事」

隼夫は心配そうに云った。

「とんでもない。いささかもボクは気にしていませんが、妻の行動を知らないで居るなんて、亭主の威信にかかわりますからね。何にしても有難いです」

「奥さんを叱ったりするなよ」

「まさかあ！ ボクは信仰を持っていますから、大丈夫です」

「ウン。君がヒューマニストだって事は判るがね」

健は笑って道子呼びつけた。

恰度風呂から上ったばかりの道子は、性急な夫の呼び声にすっかり周章て、素肌に浴衣を着ると、髪をなでつけながら書齋に顔を出した。

「あ、君ね。酒の仕度をしてくれないか」

健は優しい声で云った。

「何時見てもキレイですね。胸のふくらみが実にスバラしい」

須田がすかさず、無礼な冗談を云った。道子は返辞に窮して真赤になった。

彼等は大分遅くまで、飲んだり話したりして帰って行った。

☆

食べ散らされた皿小鉢が片附せてあるテーブルに、健は頬杖をついてタバコを吹かしていた。潔癖そうな濃い眉を憂うつ気にひそめて、考え込んでいるのである。道子が入って来て、テーブルの上を片附けようとすると、

「そんな事は女中がする。それよりも一寸来給え」

と道子をうながして寝室へ連れて入ると、自分の前に坐らせた。

「お話って何？」

オゾオゾと切り出す道子の肩を抱き寄せて手にしたタバコの火を、その白い首筋に押しつけた。

「あッ」

と思わず口の中で叫んで、身を引こうとした。健は道子の胸に廻した手をグッと締めつけて、造作もなく道子を組み敷くと、膝で押え、耳朶を掴んで首が動けない様にして置いて、更に深い衿の奥にもタバコの火を押つけた。火が消えそうになると吸って火を大きくした。白い首筋に火ぶくれが点々とついた此の熱さは全身を焼かれるよりも神経に伝わる。

健は愛を囁くような優しい声で訊いた。

「どうして、此んな事をされるか解るかい？」

胸に浸み入るようなバリトーンであった。
「ゆるして、冗談はやめて……」
「冗談ではない。ボクは怒ったら、暴力で埒を開ける性分だって云ってある筈だよ」
「ひどい。あたくしは何も、熱い、離して、苦しい」健は手をゆるめた。

「怒られる様な事はしていないって云うの？」
「はだけた胸もとから覗く、温かそうな乳房を、健は嫌わしいものの様に見た。」
「下着もつけないで人前に出るような、ふしだらな女は、妻にして置けない」
「だって、余り急な御用で、ついあわててし



まってる……」
「昨日、お前、外出したんだって？」
「ええ、でもそれは、伊セ丹に買い物をしに」
「それで、その時何をしたの？」
「何もあたくし」
して居りません……とは云えなかった。

道子の心臓は音を立てて真さかさまに奈落へ落ち込んで行ったのである。健に掴まれている小さな手は、どうしようもない程震えた。健はその手をニヤリとしながら見ていた。

道子は必死になって、昨日の事をうまく云い抜ける道を考えてた。

唯の一度身を許した男の事を。女の純潔だけを詐取して、後は省みようともしない男の事を。どういう筋合の知り合いだと弁解しようかと……。

今道子が心から愛している男は、実を云えば此の夫を除いて誰もありはしなかったのである。

道子は結婚後、瞬くうちに健のとりこになった。少女の日に描いた理想像なんて他愛のないものだと言った。でも健のとりこになった、という事は妻として肉体的に、夫に屈伏したという事ではなかったのである。健は寢室に於ても絶対にエゴイストであった。まるで鳥の毛をむしり取るような無慈

悲な愛撫であつた。健には不思議なくせがあつた。それは陶醉の頂天に達すると、まるで不潔なものを払いのける様に道子から離れて冷たい畳に仰向けになつたまま、何時までも目を閉じている事であつた。そんな時、道子が氣遣つて言葉をかけようものなら、

「うるさいッ！」

と怒鳴つた。道子には夫婦生活は苦痛となつた。だから道子は自分でも、どうして健が好きなのか解らなかつた。男性というものはつまり、筋骨隆々として、頬ひげの剃り跡の美しい、健のような男性でなければ、女を魅惑する事は出来ないのだらうと思つた。見馴れて始めて知る健の男性的な美貌も、道子にとって嬉しい事であつた。夜の床に於てまで横暴で怖い健は、怖い事が一層の魅力となつた。グッサリと、女の胸につき刺さる様な云い方で、健は極めて、カーテン・レクチュアのうまい男でもあつた。道子は女の喜びを身体で感じる事は出来なかつたが、雰囲気だけで陶醉した。——此の様な氣持をどうやって説明したら判つて貰えるものであらうか……と、道子は考える。

健は何時までも黙っていた。黙られてしまふ事は、打たれるよりも胸に答えた。

「信じて頂きたいのです」

云つてしまつて、拙い、と我れながら思つた。「何を云つてる」

健は失笑をこらえる様に唇を噛んで、障子を細目に開けると、庭の闇へ火の消えたタバコを投げ捨てた。

「信じるにも疑うにも、ボクは、まだ何も云つてないじゃないの」

「ええ、でも、何を仰言ろうとするのか、あたくし判ります。だから信じて頂きたいって云うのですわ」

「大袈裟な奴。ボクはお前が何をしようかと、別に氣になる程の事なんてありやしないんだよ。強いて云えば、黙つて蔭でコソコソされたんじや、亭主の見栄が型なしだつて云うまでの話さ」

「それは、どういう事でしようか？愛してはいないって仰言る事と同じですわね」

前々から、その不安は絶えず持つていたのだ。急に怒りが込上げて来た。

「御自分こそ、あたくしに偽つていらつしやる事があるんじやありませんか」

云つてしまつてハツとした。

「偽っている事なんて何もないね。云いたくない事を強いて云う必要はないからな、判る時が来るまで放つてあるだけだ」

「それなら何も、あたくしの事にしても……」

「生意氣云うな！お前は一体俺の何だ。断つて置くが、俺は女房に人権を与えてやる程甘い男とは違ふぞ。女房なんでもものは生活必需品に過ぎんのだからな。よく覚えて置け」

健は公然として宣言すると、声を落して——「昨日、その男に逢つて、先ずお前、何と挨拶をしたのか？」

と訊いた。

「暫らくでした、つて申しました」

道子の声は震えた。

「それで一つ！」

健は手をあげて、道子の頬をバシツと撲つた。

「それから何と云つた」

「そんな……余りです」

「次を云え。相手の男は何と云つたのか」

「結婚したそうだね、つて……」

「聞えない。ハッキリと云え」

柔道三段の拳は右の頬に鳴つた。

「あなたはそれでも、信仰を……」

「信仰がどうしたつて？人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも是に向けよ……と、キリストは仰言つたそうさ」

道子は耐えられなくなつて泣き伏した。なだらかな肩から腰にかけて、微妙なセンチツが艶やかに流れた。秋雨のようにリリシカルなすすり泣きであつた。

併し健にとって、そんな女の崩折れた姿なんぞは、壊われて捨てられたドロ人形に等しかった。残忍な遊びに熱中した子供が、人形の手足をもぎ取つて痛めつけるように、唯その行為だけが楽しかつたのである。

健は立ち上って、シエパードを繋ぐ皮バンドを柱の釘から外すと、ビュウビュウと器用にしごいて、命令した。

「顔を上げる！縛ってやる」

道子は腫れ上って色の変った顔を上げて、男のキラメク瞳をジッと見た。

「その顔はまるで喜劇だね。而も色彩的だよ気に入った」

と健は冷やかした。

「卑怯です。何のために縛らなければならぬのでしょうか？」

「理由なんてない。そうしたいからだ」

健は胸を張って、流し目にシロリと道子を見下した。笑っている様な目であった。

若々しい、まるで男性美の花盛りのような健の腕で、縛られたら一層楽しいだろうと道子は思った。たった今、力一杯締めつけた男の腕のぬくもりが、まだ道子の官能を燃やした。

つづけている。道子は目を閉じた。

「いやに神妙だな。身に覚えのある証拠だ」

道子は答えなかった。夫を偽って貞女を装っている自分のような大外れた女は、此れ位いの事をされるのが当然だと観念していた。

健は、乱暴に道子の胸にバンドを巻きつけた。思わず薄目を開けて見ると、道子の背に腕を廻した健は、白いカスリの衿もとに微かに汗をかいて、子供の様な真剣な顔で、不埒な作業に熱中していた。

道子はふと飛躍を思い付いた。急に身をよじると、思い切り膝を崩して、逃れようと身をもがいた。乱れた裾から、はたちの血が透いて見える白い肌がこぼれ散った。必死になつて反抗する道子の姿態は、むしろ取られた哀しい草花であった。

健の頬に見る間に血がのぼって、熱を帯びた目は快心の笑を湛えた。

「此の小鳥、逃げる事を知ってやがる」

道子の首根っこを取り押えて、グイッと畳に押しつけた。鼻から火を吹いたかと思つた息が詰る。

「ク、苦しい。カンニンして……」

「死にそんな声を出すな、バカ！」

健は耳もとで叱咤した。

長いバンドは二巻きされて、道子の背で、パチンと止った。更に道子の腰ひもを抜き取って、髪をしばらく、床柱の根っこへくくりつけた。道子は無ざまな恰好で畳につつ伏していなければならなかった。

健は軽く手を打って立ち上った。

「これでよし。今に段々苦しくなる。誰かに声をかけられたら、眠ったと云え、此奴は消して置いてやる」

パチンと電燈を消して、出て行ってしまった。真から哀しい涙が、道子の胸に込み上げて来た。

(続く)

こゝ数年の新聞、雑誌のなかなかから、フ

エチに関する興味ある写真や記事の載つた

ものを拾って御紹介してみよう。

① “暮しの手帖” 第二十四号

「コルセツトの話」

グラビヤ四頁に亘って、いろいろのコルセツトの写真と、説明が詳細に書かれている。モデルの装着した写真は無いが、コル

セツトの内部などが詳細にみられるのが興味深い。

② “装苑” 昭和三十年十月号付録別冊

「下着の知識」

コルセツトのほか、女性の下着についての解説と絵が、八頁に収められている。絵が各種の下着を多数とり入れてあり、写真はないが一読をおすすめしたいもの。

③ “スタイル” 昭和二十九年十二月号

「下着スタイルブック」

これは本誌復刊第一号で、水上流太郎氏により既に紹介されているが、写真や絵が少いのが不満。

⑤ “雄鶏社スタイルブック” 第二十七集

「下着のおしゃれ」

グラビヤ八頁と記事九頁に、下着類の写

真と絵が多種多様に及び広く紹介されており、モデル装着の写真の豊富なことはまず第一。

⑤「あまとりあ」昭和三十年一月号付録別冊

「ヌードアルバム」

あえて御紹介するのは、ナイロンストッキングにガ

ードルの女性が、一枚一枚

脱いでゆくのがあってなかなか秀逸。モデルは外人女性

⑨「毎日グラフ」一九五六年、五月二十七日号

「下着のみだしなみ」

コルセットやスリッパを装着したモデルのグラビヤ写真数葉。

⑦「毎日グラフ」一九五六年、八月十二日号

「すどおしスタイル」

流行のナイロンブラウスやドレスを扱ったグラビヤ二頁

⑧「アサヒグラフ」一九六五年、七月一日号

「足から脚へ」

これは下着ではないが、女性のナイロン靴下の脚線美が美しい。

⑨「東京新聞」昭和二十九年四月一日

フエチに関する切抜きから (1)

阿部 準

「下着の選び方」

標題どおりの記事と、コルセット、ウエストニッパをつけた写真が二枚。

⑩「毎日新聞」(大阪) 昭和三十年十一月二十一日

「ウエストニッパにこんな弊害」

これはニッパのよくないところばかり拾い上げた記事で、愛好者には嬉しくない

が、ボディのつけた写真が三葉

⑪「婦人倶楽部」昭和三十年六月号

「下着のいろいろ」

美しいモデルが、コルセット、ニッパをつけたグラビヤで興味深い。

⑫「東京新聞」夕刊、昭和三十一年十月十四日

「女性質問室」

これは短かいので全文を御紹介する。

「問」肩からウエストの下まで、チャック

をつけた背あきのワンピース

スを作り直した。チャックを上げるのになかなかうまくできません。スツと上げる方法はないでしょうか？

「答」流行なのでワンピースの八割までが、この背あきになっていきます。簡単に上げ下げするためには、ウ

エストにインサイド・ベル

トをつけ、外からみえないように、カギホックをつける。また首のところにもホック

をつけ、この二つを先に止めてからチャックを下から上げ、手が回らなくなったら、

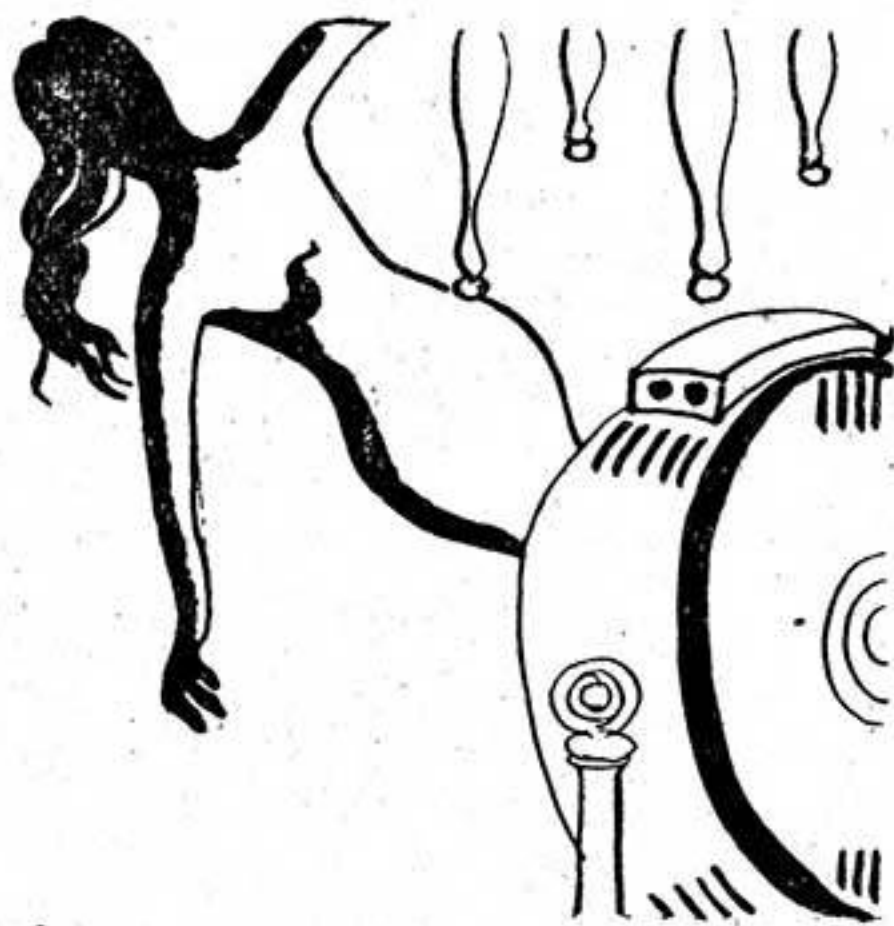
今度は上から手を回して上げます。なお太った方は手がなかなか回らないから、あま

りすゝめられぬデザインです。

これなどフエチシストにはなかなかもって興味深々たる問答といえましょう。

以上は主として写真や絵を中心としたもので、単に題号と月号の羅列に止めましたが、古本屋の店頭で安価に容易に入手出来るものばかりですから、同好の方々はお実物によってごらん下されば幸甚です。

此の外、読物的なもので、二、三眼についたものもありますが、作り話的なものなので今回は割愛しておきました。



小説的事実

天は知っている

宝塚 二 三 夫

孝子が入社して一ヶ月足らぬ或る朝、さて今日、朝一番のマニア余徳はどんな調子か、と例により一足早く事務室に入ると珍らしく文子が既に来ている事務服に袖を通して「お早ようございます」

その調子が例日よりいさゝか物佗びしい調子である。いつもなら、それとなく可憐に甘えて来て、時には肩先に頬摺って来る文子であるのに、と

「どうした？」

「あのネ、山上さんネ一寸変ですのヨ、こゝ二三度切手出納が合わないの」

終る口調と瞬間的にボクの心は「アッ！わかった」と感付いたのである。さては、楽し

い例になった後手ねじ、の時、頑として抵抗して五指をシッカ、と握り締める、あの指の中に、いくらかの百円札が握りつぶされていたのか？と。気紛れではなかったのだ、然し困った事であり、折角のマニア珠玉を残念な事とも思い、又それなら又それを利用してマニア極道へ——とも一瞬心にひらめいたものゝ、さて次に来る問題は、と考えると、やはり断乎キヤンセルと決心せざるを得なかった。

休日前の土曜日の夕刻、やはり心残りの内にもそれとなくさし障りのない文面で離職勧告の速達を送ったのである。ビジネスも第一であるが、ボクは全く気抜きの気分で不愉快

快な一夜であった。（その間のウサ晴らしで文子相手のマニア極道話は割愛して）

さて、翌日曜日。朝九時頃起きて、事務所隣の自宅書室で朝刊に目を通して、と女中の前ぶれもなく、スーッと音なく入って来る人の気配、ハッと目を上げると孝子である。全く平凡の一語に尽きる。総て、お化粧に、服装に、物腰に、……そして肉付よい四肢が一層引立っている様に思える。

物静か、と云うより其日は佗びしい姿に思えた。キマリ悪くて胸を突かれたのはボクの方である。気を取り直して

「お早よう、どうした？サ、掛けなさい」スーッと音なくボクの机の横に来た孝子。

「お手紙頂きました。すみません」

初めて悲しそうな表情になると同時にペコンと俯向いておじぎをする、と言葉をついで「わたし、やめさせられると困るのです。悪いところは改めますから、お願いします」

女の子の真剣な時の心臓には、こちらの方で困るものだ。ボクの脳裏には全くあらゆる善悪理否曲直の感情がラッシュアワーになった。全く即答不能の状態が続いた。然し、そうした黙っている時間が少々長くても別に異状でない孝子の日頃である。やはりボクはマニア感情に負けた。

「あんたは何も打明けてくれなかった、何故もっとくわしい事情を早く云ってくれなかった？」

そのボクの言葉に対して、彼女の説明はこうである。

父の亡いあと、母は家政婦として働いている。その間彼女は学校は漸く出た。そして愈々就職出来た日も浅く、母が肝臓を悪くして働けぬ上入院必要となる。それでも入社の御礼にも行けぬのが悪いと氣を使っていた。入費は先ず何とか月給でカバー出来たが、彼女自身は無一文状態が続いた。そして、ボクよりの文書、……母は知らぬ。

先ず平凡な筋道の話。マニア極道よりも人情優先にボクは参って終った。無口の彼女と

しては精一杯の話しぶりと思えた。

「わかりました。やめなくてもいいヨ」

先ずボクの良心は善意で解決した。そして彼女の明るい顔はその場の空気をやわらげてくれた。と、とたん、縛れる、反射的に脳にひらめいた。然しボクは更にマニア本性のズルサが湧き出して来た。今すぐ手を出しては平凡でありきたりだ。と、又新しいズルサが、……常々の私なら小遣金のいくらでも渡して帰すのだが、それも渡さず、又マニアの手一つも出さずに帰したのである。

さて翌朝の事務所、孝子の姿を見た文子はやはり不審、不満そうであった。先ず旬日位の間であつたか、例により朝一番、文子が茶目気なパチ眼を一層パチクリさして、ボクの顔を見るが早いか

「ヤッパリよ」

一種の手柄顔をほこらしげな表情で計二千五百余円の使途不明を報告したのである。

「ウムーッ」と一息つくと同時に予期通り――と脳中にマニア魔のさゝやきが第一歩を踏み出したわけである。ボクは文子をそばへ引寄せると、まるで日常茶飯事の様に文子の両手首をうしろにねじ廻して高手小手型にして掴むと

「証拠をハッキリ掴むまでは」とたしなめる様に云って、掴んでいる手首をグイッと首筋

へ持ち上げる、と

「イイイッ……縛る相手が違う」

と、それでも少しも嫌がらず文子が首ツ玉を振り向けてボクをにらむ。

そして次の日曜、ボクも決心し、孝子にも決心さす対決の日になった。俗に云う呼出状を出したのが土曜の夕刻、日曜は朝から雨であつた。そして書室での対決。

十月下旬、秋も既に深いうすら寒いような日曜日の朝である。私宅に姿を現した孝子、相変らず平凡の一語に尽きる身つくり、然しピツタリ線を出したタイト、紺のスカートの同くあらゆる肉体線をそのまゝ表現した七分袖の水色スエーター、私のホープ、ふくら脛に喰ついたストッキング、真白いパンプス。完全孤立の計画通り、隣接のオフィスへ。

「御苦労さん、事務所へ行って出納のバランスシートをあわせて下さい」と、ポイと合錠の一つをほり渡す。

「ハイ」と例の低い調子の返事と共に、一瞬青白い顔を浮かばせてスーッと音なく出て行く孝子。ボクの胸は計画通り、とは云え、胸騒ぎを納めるため約二十分間を要した。

さて愈々事務所へ廻ろうとすると、その後に来る、あらゆる事態を予感して腰のあたりがキューッと痛む。さて事務所へ、合錠持った右手が震えて、自分乍ら辱かしく、マニア極道のボクには珍らしい事である。(未完)

黄色オラミ誕生

(第二部)

真木不二夫

(1)

ぼくは通訳のウーナと、メリール国のメイ・ストリートを歩いてきた。この国の高貴な女性、つまりメリール人の肩にうっかり手をかけた罪によって「特殊種繁殖工場」に監禁された坂井に面会に行くのである。坂井があの事件を起してから一カ月経った。一カ月にやっと面会を許されたのである。

ぼくは坂井に逢いたかった。ぼくの現在の周囲で唯一の「同性」である坂井に逢って、一言でもいいから話がしたかった、母国の言葉、日本語で。

不思議なことに、このメリール国の男性たちを、何時の間にかぼくは男性とみることを忘れてしまったのである。ウーナ達が呼ぶように、ぼくも又、「オラミ」と呼ぶようになってしまったのだ。なんとという悲しい事実で

あろうか。同性である彼らに対して、なんという思いやりであろうか。そうなのだ、この国で彼らが「オラミ」ならば、ぼくも又「オラミ」に他ならないのだ。現にウーナをはじめこのメリール人たちは、ぼくを一個の人間とはみてくれないではないか。ぼくは皮膚が黄色いために特異オラミとして珍重され、だから鎖につながれないだけなのだ。オラミの分際を少しでも忘れて人間の真似をしたら、たちまち坂井と同じ運命におちいるだけなのだ。そう思うと、ぼくは始終オドオドして卑屈になった。クサリのついたオラミには落ちたくない。そのためには何時も彼女らの顔をうかがって御機嫌をとらねばならぬ。皮肉にも、ぼくはオラミになりたくないくせに、自ら必死になって彼女らに追従し、心は既にオラミに転落しているのだ。しかもメリールの男たちははじめから人間の心はないが、ぼ

くは人間としての教育、意識をもちながら、オラミの地位に落ちこんでいるのである。ぼくはユーウツになった。しかし、これより他にこの国で生きてゆく手段はない……。ふと、気がつく、街中が何時になく騒がしくなっていた。

「なんでしよう？」
と、ウーナが云った。二頭立て、三頭だてのオラミの車が（ああ遂にぼくまでが彼らを二頭、三頭などと呼ぶようになってしまったのだ）勇ましい姿のメリール人に鞭を受けながら、街の中央広場に向かって走って行く。

「ウーナ……」

と、背後で声がして一台の乗用車が寄ってきた。車上の貴婦人に見覚えがある。ウーナの友人のポリームだ。

「こんにちは、ポリーム。あの騒ぎは、いったいなにが始まるというの？」

と、ウーナが訊いた。ぼくももうメリール語の片言はわかるようになっていた。

「脱走したオラミの仕置があるんですって。私もこれから見に行くのよ」

と、ポリームが息をはずませて云った。眼が輝いている。

「そうお。面白そうね、私も見物して行こうかしら？」

「私、ひと足先に行ってるわね」

ポリームは一鞭あてると、離れていった。

「イシヤマ、この国のオラミに対する仕置きを見せてあげるわ」

と、ウーナが云った。ぼくは黙ってうなづくより仕方がない。

メリール宮殿から三町程離れた地点に、広い十字路があり、そこがこの小国の中心にあたる。十字路の一角に広場があって、政策の公示だとか、祭礼などの催事場に使われるのをぼくは知っていた。しかし、オラミの仕置きというのは、はじめてだった。

ウーナとぼくが広場に近づいた時、既に多数のオラミ乗用車がひしめいて、車上にはもう興奮の態のメリール人が、刑台を指して何かわめいていた。

「早く、はじめろ！」

などと云っているらしかった。中央広場の一段高い台の上には、鉄製の檻が押しあげられていた。中には一人の、いや一頭のオラミ

が入れられていた。檻が小さいので、中のオラミは四ツに這っていた。既に頬や肩のあたりから、血が流れていた。ぼくはこれからはじまる、おそらく残酷に達しない刑罰を想像して、早くこの場から去りたかった。然し、ウーナが期待に満ちた表情で、刑台を眺めているのを見ると、一緒に見るより他はなかった。

集ったメリール人たちは既に皆それぞれ熱狂していた。この仕置をみるのが、なにか楽しい芝居でもみるような気になっているらしかった。

やがて一人の官服を着たメリール人が、重々しげに規則正しい歩調で、台の上に登っていった。軍服のようないかめしい上着を着て、下にはぴっちりとした腰と脚に合ったズボンをつけ、膝までの革靴を履いていた。背がすらりと高く、手にはアクセサリのように長い皮鞭を持ち、それで檻の中のオラミをびしりつと一打ち打つと、得意気なポーズで、大声でしやべりはじめた。逮捕の経過や処罰理由を説明しているらしかった。ぼくは一生けんめいになって、それを聞きとろうとした。

「……乗用車オラミ第三百三十五号は、三日前に飼主のネリリの鎖を断ち切って逃走、その後、当局の探索の眼を逃れて逃亡を続けていたが、今晚、北四番街公衆便所内に於て発見、捕獲した。よってメリール国刑法第五十

三条、オラミに関する処罰法に依り、大衆死刑に処す」

メリール刑事がこのように説明した時、観衆はいっせいに拍手し、ワアワア声をあげて足を踏み鳴らした。この国には、オラミに対する裁判のような「人間的」なものはなく、罪に対する処刑だけがあるらしかった。

「公衆便所の中とは、ずい分妙なところにかかれていたのね」

と、ぼくの隣の貴婦人が、彼女の連れにささやいていた。ぼくは聞くとともにしにその会話を聞いていた。

「そうなのよ、それでね、食物が無くて私たちの〇〇や××を食べていたんですって」

「まあいやだ、汚らしい。うっかり公衆便所にも這入れないわね」

「ネリリの家では、オラミに飼料をやるのが惜しくて、便所の××ばかり食べさせていたという評判よ。だからあのオラミもそれに馴らされていたのよ」

「お互いにオラミの鎖はきちんと調べて逃げられないようにして置くことね」

「そうね、いくらけだものといっても、身体は私たちと同じ様な形をしているんですものね、どこにどんなチエがあるか、わかりませんですわ」

刑場の台の上では、檻の中から曳き出されたオラミが、中央に立った太い柱に鎖で縛り

つけられていた。後手に縛られ、気を失って
もずり落ちないように首にも鎖がまきつけら
れていた。哀れなメリール国の男性は、もう
生きてゐる気力もないような力のない姿で、
時々、ウオーウオーと悲し気な声をたててい

た。もう自分に下された怖しい運命を察知し
て、半ばあきらめた悲しい表情だった。

刑事は縛り終えたオラミに、いきなり又、
ピシリ！と一鞭をくらわせた。

「では、これから、大衆刑を執行致します。

参加希望者は順番に並んで下さい。ただし、
御一人五鞭ずつと致します。全部の方が打ち
終らないうちに死ぬと困りますから、始めの
方は、手加減をして打って下さい」

刑事のその言葉の終らないうちに、手に手



に鞭を握った貴婦人たちは我れ
勝に台の上に登ると列をつくつ
た。たのしげに鞭をしごき、び
ゆうびゆうと空に鳴らす人も居
た。当然のこととは云いながら、
メリール人達は鞭を使うのが皆
非常に巧みだった。のみならず
それぞれ愛用の鞭には、その柄に
いろいろ細工をしたり飾りをつ
けたり、色を塗ったりして、一
種のアクセサリーにしていた。

最初の貴婦人が刑事の許しを
受けて、柱に縛られたオラミの
そばに寄った。期せずして観衆
から拍手が起った。

「デナ、サンバッチ！（このけ
だものめ！）」

黄色い声で罵ると、ピシ！と
裂しい音をたてて鞭はオラミの
身体に巻きついて鳴った。苦悶
する蛇のように身体をくねらせ
ると、オラミはウオーウオーと
泣いた。

びしりッ！　びしりッ！　びしり！　びしりッ！　と、連続五回の鞭打ちが終ると、最初の女性は残り惜しげに台を下りた。

次に、みるからに豊かに肥った背の高い女性に台に登った。その手に持つ鞭も一際頑丈につくられているようであった。肥えた身体にこと更大げさな弾みをつけてその婦人は、少しの思いやりもなく、力まかせに脱走オラミをなぐりつけた。

「ウオーッ！」

と、すさまじい悲鳴をあげて、オラミは飛び上った。鎖が、ガチャガチャと、むなしい音を立てて、オラミの肉体を引き留めた。この二人目の女性の五回の鞭打ちで、オラミの皮膚からは血がだらだらと流れはじめた。いくらクダモノとして育てられたオラミでも、このように力まかせになぐられてはたまらない。血も肉も、肉をおおう皮膚もすべては鞭打つ女性たちと同じ人間のものののだ。ただ女と男の違いだけではないか。男ゆえのこの虐待！　そして、この脱走オラミに刑罰を与えんとするメリール人の行列は、その後凡そ三十人余り、楽しげに口笛さえ吹き鳴らしながら待っているのである。

はじめに刑吏が手加減して打てと忠告したにもかかわらず、その忠告は少しも守られては居なかった。自分の所有するオラミには、同じ鞭打つにも殺してはならないから手加減

がある。しかし、この脱走オラミは殺すことが目的なのである。

非情な観衆は、鞭が高い音をあげる度に、わあッわあッと声をあげ、手をたたいて喜ぶのである。

（キチガイの、ヒステリー女どもめ！）と、ぼくは心の中で叫んだ。この刑の執行は明らかに、彼女らの一大リクリエーションなのだ。通訳のウーナはと見ると、彼女も端正な美しい顔に微笑を浮かべ、眼をやや細めて、この残酷な風景を觀賞するかのようであった。

この処刑を黙して見つめ、悲しげな瞳を向けている例外の一群に、ふとぼくは気がついた。それは貴婦人たちをこの広場までのせてきた乗車オラミ達だった。けだもの、と卑しめられている彼らたちにも、同性に加えられているこの悲劇はわかるらしく、静かな悲しみの眼で台上を見上げていた。

台の上では早くも悶絶したオラミに、刑吏がホースで水をかけていた。水が激しい勢いで、気を失ったオラミの眼や耳や鼻に注ぎ込まれると、哀れな罪人は、ウーンとかすかに息をとり戻す。すると又、待ち構えた新しい鞭が、顔といわず胸といわず、雨のように降り下されるのである。

（どうせ殺すのなら、思いきり一突きに息の根を止めたほうが、どれ程慈悲かわからない）ぼくはもう正視に耐えきれなかった。こ

のなぶり殺しは、これから何時間続くのか。

ぼくは思いきってウーナに云った。

「ウーナ、もう行きましょう。ぼくはもう沢山です。この国の怖い刑罰の方法はよくわかりました」

するとウーナは、ぼくを見返えると、冷ややかに云った。

「そうですね、イシヤマ、あなたも逃走などして捕えられれば、あのオラミと同様の運命になるということ、よくわかりましたね」

ぼくはぞっとして背筋に悪感が走った。今更のように底知れぬ恐怖が、全身を襲うのだった。

(2)

ウーナとぼくが「特殊オラミ繁殖工場」の門をくぐったのは、それから三十分後のことであつた。

三カ月程前に、ぼくと坂井がはじめて「食肉製造工場」を訪ねた時の、あの異様な肌寒い雰囲気、ぼくは又、この「特殊オラミ繁殖工場」にも感じた。白塗りのスマートな建物で、内部も清潔で整頓が行き届いている。せに、やはり無気味な、うそ寒い空気が冷ややかに流れていた。それは外国人であるぼくだけが感じるものであったかも知れなかったけれど。

案内人を先にして、ウーナとぼくは長い廊

下を幾つも曲った。ぼくの眼に触れない幾つかの秘密の部屋には、あの不気味にも哀れなおス達が、うめきながら檻の中にひしめいているのかも知れない。時折、廊下に面したドアの向うで、奇妙な鳴き声が聞えた。それは鳴き声というより、泣き声と書くべきかも知れなかったが。

ああ、坂井、きみも今は、この密閉された部屋のどこかに呻吟しているのか。

ウーナとぼくは、やがて面会室らしき一室に通された。

「さあ、あなたの親友サカイに逢えますよ。久しぶりですね」

と、ウーナが云った。

「ありがとう、ウーナ、みんなあなたのおかげです」

と、ぼくは卑屈に頭をさげた。

ドアが開いて、坂井が姿を現した。ぼくは坂井の顔をみて一瞬ギョツとした。わずか一カ月の間に、坂井の眼の光りが、丁度このメリアル国のオラミのような鈍い獣的な瞳の色に変わっていたからだ。おまけに素裸で、わずかに腰に白い布を巻いているだけであった。

「坂井！」

と、ぼくは思わず叫んだ。坂井は自分の名を呼ばれてハツとしたらしく、その時わずかに「人間」らしい眼の光りに戻った。

「どうした？ 元気か？ 達者か？」

と、ぼくは続けざまに聞いた。
「ああ、石山か。よく来てくれた。逢いたかった」

坂井はやつとなつかしげな笑みを浮べて、ぼくの前に両手をさしのべた。坂井の顔は少し肥ったようだが、あの陽やけした健康的な色艶はすっかり失せて、身体中が青ぶくれの生気のない皮膚になっていた。ぼくはあの「食肉工場」の檻の中にうごめく食肉オラミを想像してゾツとした。坂井の両足首にはむごたらしく鎖がからんでいた。やつと歩ける程の長さであった。そのみじめな姿にぼくは、この一カ月間の坂井の苦勞がすべてわかるような気がした。

「で、どんな具合だ。君の仕事というのは、どんな仕事なのだ？」

ぼくは訊いた。

「どうもこうもない、ひどいものだ。早い話が種付馬だ」

坂井の話は、なるほどひどかった。ぼくはここでそれを詳しく述べる勇氣を持たない。とに角、坂井の役目は、彼の体内で製造される精液をすべて放出することにあるという。そのために各種の栄養物を無理矢理に詰めこまされ、丁度牛が体内に溜った乳を牛乳しぼりの手でしぼり取られるように、強引にこちらの意志は全く無視されて、しぼり取られるという。それが又、おそろしく機械的に非情

な工程のもとに行われ、彼の人間性はひとかけらも認められないらしいかった。

「人間性どころか、奴らは、おれをとうとう一頭の種付オラミにしてしまいやがった」

と、坂井は青ざめた顔で自嘲した。

「あと半年の後には、東洋人の血の混った、黄色い子供が沢山生れるだろう。女兒はすぐ殺し、男児だけを例の完全配合飼料で飼育するのだ。そして七・八年の後には屈強な黄色オラミに成長させるのだ。力のある、忍耐強い、勤勉な日本人の血を受けた、優秀な黄色オラミが誕生するのだ。このメリアルの貴婦人たちにとって、それはなんと便利で、使い易い、重宝な家畜だろう」

坂井の眼は血走って、異様な光りさえ帯びてきた。

「……指先が器用で、まずい食い物でも不平をいわずによく付き、権威に対しては従順で卑屈、少しの恩を受ければ、その恩を一生大切に着て主人に忠義を尽くす日本人、その血をひいた子供をオラミに教育して酷使する。さぞ理想的な家畜に仕上げることだろう。メリアルたちの考えそうなことだ」

それはみんな坂井の子種からつくられた人間なのだ。坂井は髪の毛をかきむしって悶えた。ぼくは何と云って彼を慰さめてよいのか判らなかつた。

「おれは必ず、何時かこの国を脱出して日本

へ帰り、世界に知らせてやるのだ。この怖ろしい国がわれわれのこの地球上に実存し、男性を虐使することによって繁栄している事実を。そして、国連の軍隊を動かして、この国をぶつつぶしてやるんだ！」

坂井の大声に、制服を着たメリール人が二人飛んできた。わめく坂井の両腕を左右からムズとつかむと、ずるずるとひきずって部屋の外へ連れだした。坂井が抵抗し、パタパタ騒ぐ物音が聞えたが、やがて、ピシリッ！という、すさまじい鞭の音がした。ひえッ！と悲鳴が上がり、物音はおさまった。

「坂井！」

と、ぼくは心の中で呼んだ。ひき裂かれるような気持だった。(元気でがんばれよ！)と、ぼくも悲痛な気持で呼びかけるのだった。(生きてさえいれば、何時かは、何時かは……)

むなしい望みかは知れぬが、ぼくはその望みにいのちを支えていた。

「ウーナ……」

と、ぼくは英語で語りかけた。

「坂井がゆるされるのは何時ですか？ なるべく早く、放免してやって下さい」

ウーナは指を鳴らしながら、冷たい口調で答えた。

「あと二カ月ほどでゆるされますよ。黄色オラミ製造の第一次予定数は百頭ということで

すから……」

(3)

或る日、ぼくの部屋へウーナが来て、その後の坂井の様子などを話していた。この頃ウーナはどういう風の吹きまわしか、時々ふつとやさしくなり、ぼくに人間らしい情のこもった口をきくことがある。その日も丁度そんな時で、ぼくはそんなウーナに女性を感じ、恋情、というよりは人情を覚えたりするのだが、うっかり気易くしようものなら、坂井の二ノ舞になるので、用心はしていた。

そこへウーナの友人であるポリームが訪ねてきた。

「こんにちは、ウーナ……」

「こんにちは、ポリーム。今日は何の御用？」

と、ウーナは愛想よく答えた。

「私の使っている八五号のオラミを誰かに売りたいんだけど、心当たりないかしら？」

「あら、ポリーム。あなたの使っている八五号は、力も強いし、よく働くじゃないの。あれを手放すのは惜しいわ。どうして売る気になんかあったの？」

「よく働くことは働くんだけど、あんまりチエがありすぎて、一寸気にくわない所があるの。それに私、あのオラミはもう飽きちゃったの。今度はもっと若い、筋肉の隆々としたオラミを買おうと思うの」

「ポリームは飽き易いからね。いいわ、ネリリが一頭欲しがっていたから、あのひとに売るといいわ。あなたも御存知のように、ネリリのオラミはこの間、脱走して死刑になったでしょう。あの子のオラミを欲しがっているのよ」

「ああそうね。私も思い出した。ネリリなら私も売り易いわ」

「私も一緒に行ってあげるわ。さあ出掛けましょう」

ぼくは聞いていてやれやれと思った。これでは犬や猫よりひどいではないか。犬や猫でさえ長い間飼ってれば情が移って手放したくなくなるというのに、この国の男は女に飽きられれば、いとも簡単に売買されてしまうのか。

「イシヤマ」

と、ウーナはぼくの名を呼んだ。

「あなたも一緒にいらっしやい」

「ハイ」

と、ぼくは従順に答えた。そんな人間売買に行く所へお供なんかいやだったのだけれど従順だけがこの国で男性が永らえる唯一の技術であった。

「まあ、この黄色いオラミを連れて行くの」と、ポリームがあきれた表情で、ウーナに訊いた。

「ええ、だってこれは私の、プーチ・オラミ

ですもの」

と、ウーナはわらって答えた。プーチ・オラミというのはメリール語で、愛玩用オラミということである。

(愛玩用でもなんでもいいさ。ぼくは生きぬく為には、この女主人に愛想よく尻尾も振ろう、吠えろといえ、ワンと鳴いてもみせるさ)

「お供します、ウーナ」

と、ぼくははいねいに頭を下げた。

ウーナとぼくは四頭立てのオラミ車に乗った。この豪華な飾りのついた四頭立ては、ウーナ専用の美しい車で、オラミも選り抜きの肉体を持つ四頭がひいていた。

ポリームは二頭立てを走らせた。その二頭のうちの二頭は、ポリームが売りたいという八五号オラミだった。首の鑑札に八五という数字が押してあった。

二台の車は仲良く並んで、メリール国の街路を進んだ。もうぼくはオラミのひく車に乗ることになんの抵抗も感じなくなっていた。この国の常識に次第に馴れてきたのだった。又、馴れなければ、とても生きていくことはできなかった。

十五分程行くと街並の一角に小綺麗な石垣をめぐらせた家があって、バラのアーチが美しく咲いていた。車はそのアーチの前で止った。これがネリリの家らしかった。ぼくはふ

と、このネリリの家では、オラミに主人の○を食べさせるという話を思いだした。

玄関の呼び鈴を鳴らすと、中から色の白い美貌の女性が現れた。

「ネリリ、こんにちわ」

と、ウーナが云った。

「あら、ウーナ、お珍しいのね。高官のウーナが私の家へおいでになるなんて、光栄ですわ」

「ポリームも一緒なのよ。今日はポリームの用事で貴女のところへ来たの」

「ネリリ、きようはおねがいがあって貴女のお家へ来たの」

と、ポリームがそばから云った。女三人が一頭の男を売り買いする相談が始った。

ぼくは少し離れたところで、この取引きの模様を眺めていた。ぼくのそばにはポリームの乗用車があった。首と胴に鎖をつけたオラミ八五号が、無表情に立っていた。自分がいま売られる運命にあり、その取引きがすぐ眼の前で行われていることも知らずに。

ぼくは、この何にも知らない八五号が哀れに思え、ふっとメリール語で小声につぶやいた。

「可哀想になあ。いま自分が売られるのも知らずに、のんきそうな顔をしているよ」

すると、驚いたことには、まったく驚いたことには、そのオラミ八五号の口が、かすか

に動いて、

「知っているさ。でも仕方がないじゃないか」

と、云ったのである。ぼくはぎよっとして四囲をみまわした。が、今の声はやはり八五号の口から出たのである。ぼくはオラミが口をきいたのをみたのは、この時が始めてであった。オラミは口がきけない筈なのだ。主人の命令の片言ぐらいはわかるが、自分で発言することなど出来ない筈なのだ。ぼくは思いがけなくも、此処で口をきく一頭のオラミを発見したのだ。

「きみは口がきけるのか？」

と、ぼくは思わず訊いた。すると八五号のオラミは相変らずの無表情のまま、しわがれた小声でかすかに口を動かした。

「きけるさ。でもきけないふりをしているのだ。おれが物言うことを御主人に知られたら、おれの舌はすぐひき抜かれてしまうからな」

家畜が口をきくなんて大それた話だからな。八五号はそう云うと、ふっと眼をつぶった。

ぼくは向うで話している三人の女性に気づかれないように注意しながら、

「きみ、ぼくの友達になってくれないか。ぼくはさびしくて仕方がないのだ。現在のぼくには一人の同性の友達に居ないのだ。本当に孤独なのだ」

と、八五号にささやいた。

「いいとも。おれはおまえのことを大分前か

ら知っていた。が、今まで口をきく機会がなかった。お前だって油断がならないからな」「ぼくはきみ達の味方だ。ぼくだってこの国では一頭のオラミに過ぎないんだ。きみだって知っている筈だ。鎖こそついていないが、ぼくが毎日どんな虐待を受けているかを」「よし、わかった。もう黙ってくれ。御主人がくるぞ」

ポリームを先頭にして、ウーナ、ネリリが近づいてきた。そして八五号の身体をためつすかしつ眺めた。筋肉のしまり工合、腕のふとさ、肌の色艶などを吟味するためだった。「買ってすぐ病気をされては大変ですもの」と、ネリリが云った。

「丈夫なことは受け合いよ。どう？ 百五十ギラでは安いでしょう？」

と、ポリームが答えた。

「そうね。でも若さの峠を越えているから、百三十ギラに負けて頂戴よ。市場へ行けば、もっと若いのが百三十ギラで買えるわ」

「でも、その代り、この八五号はよく調教してあるからとても利巧なのよ。車ひきばかりでなく、人間の代りに少し位の用事は足せるわよ」

「オラミのあんまり利巧なのも困るからね。でもいいわ。折角ウーナも来てくれたのだから、百五十ギラで買うわ」

「ありがとう、やっときまったわね」

ポリームは喜んで早速ポケットから鍵をとり出すと、ガチャガチャ云わせながら自分の車から八五号のオラミを解き放した。

鎖から解放されたオラミは、オリムピアの裸像のような美しい姿体をもった立派な一人の男性であった。

が、新しい飼主ネリリは、ようしやなく八五号に鎖をつけた。腕を垂直にのばさせて、胴と一緒に縛りつけると、八五号の腕はひじから上が胴に密着し、わずかにひじから先しか動かせない。首にも鉄の輪と鎖が巻かれた。八五号は自分の運命に絶対さからわなかった。黙々と鎖に縛られていた。もし彼に人間の抵抗の心があったのなら、鎖を解かれた瞬間に暴れだし、三人の女性を一撃のもとに打ち倒すこともできるだろうに。

ネリリは鞭をびゅつと振って、八五号の背中を打った。ピシリッ！と音がした。

「いいハジキ具合だわ」

と、ネリリは満足気につぶやいた。

「可愛がって頂戴ね。あなたの〇〇なんか食べさせちゃ、いやよ」

と、ポリームが皮肉を云った。

「大丈夫よ。うんと御馳走してあげるわ」

「やれやれ、これでやっ取引きも終わったわけね。あとは管理庁に、飼主変更届をだすだけね。オラミ一頭売り買いするのに、大変な騒ぎね」

と、ウーナがわらった。

「ねえ、ウーナ。ついでに何時もあなたのお供をしている、その可愛らしい黄色いオラミも、私に売らないこと？」

と、ネリリが云った。ぼくはぎよつとした。が、勿論それは冗談だった。

ウーナは笑いながら答えた。

「だめ、だめ。これは珍種オラミだから、たかいわよ。それにこのオラミは私の私有物でなく、今は国で放ち飼いにしている。私は単なる管理人よ。そのうちに黄色いオラミも沢山市場に売り出されるから、その時にどうぞ」

「そうお。残念ね」

と、ネリリもわらった。

「ではネリリ、どうもありがとう」

と、ポリームが別れのあいさつをした。三人の女性がそれぞれ別れの言葉をのべているすきをみて、ぼくはオラミ八五号にそっと近づいて、ささやいた。

「さようなら。八五号君。そのうち、夜をみはからって、此処へ訪ねてくるよ。では、元気でしっかりやり給え」

八五号は相変らずの無表情な顔で、

「ああ、待っているよ」

と、云った。

「イシヤマ……」

と、ぼくの御主人が甲高い声で、ぼくを呼

んだ。
「はい」

と、ぼくは返事をする、ウーナのそばへ
飛んでいった。

(第二部終)

無惨絵マニア

大奥裸女血斗

京 洛 生

大奥での女相撲の勝負のもつれは、平常いがみ合っていた、お局の間の暗闘を爆発させ、遂に血で血を呼ぶに至った。女達は相撲仕度のふんどし一本の姿のまま、各々の得物を持って打掛り、凄艶な立廻りとなった。忽ち気合もろとも双方の数人の裸女が悲鳴をあげて斬り倒され、屋内や庭前にふんどし一つのあられもない若い女の屍を横えた。もう、こうなれば止める手段も時機も見失い、武士共はこの凄艶な修羅場をただ拱手して見るより仕様がなかった。

女達はつややかに結い上げた、奥女中特有のかたはずしの髷もくずれるにまかせ、ふんどし一つの肌に戻り血を浴びて狂い廻っている。

る。

「ギヤーツ、たずけてーッ」と魂消えるような悲鳴をあげて赤ふんどしをしめた年の頃、二十位の乙女が無惨にも肩よりざっくり割られ、朱に染って倒れ、そのまま仰向けに豊満な、まだ処女らしく固くしまった乳房、ふんどしに蔽われた練絹のような肌もあらわに大の字になって息を絶え、右手から拔身の脇差がころりと床の上へ投げ出された。

庭では、これも年の頃二十位の女が二人、ここを先途と斬り結んで、一方は遂に泉水の縁へ追いつめられ、かなわぬと見るや、身を躍らせて泉水の中へ飛び込むと、相手も逃がさじと後を追って泉水へとび込み、泉水中で

水しぶきを上げてのふんどし一つの女の組打は、人魚のそれも斯くあらんと思わせる程の凄艶さである。やがて先に泉水へ飛び込んだ女は乳房を鎧通の一突きでえぐられ、泉水の水を紅に染めて息たえた。勝った女も、泉水より上がりかける所を相手方の二十五、六位の年増の女に肩を薙刀で割られ、悲鳴と共に泉水へ紅の水しぶきを上げて落ち、しばし水中でもがいていたが、やがてこと切れて動かなくなった。

一方では築山のかげで二十八、九の脂の乗り切った、身体に黒襦子のふんどしをきゆうーッとしめた女が、二十二、三位の水色ふんどしをしめた女と組打になり、血の海の中でくずくず、ほぐれつともみ合う中に、黒ふんどしの年増の女は水色ふんどしの若い女を組み敷き「あれーッたずけてー、かんにんしてちょうだいー」と叫ぶのも構わず、そのぷり／＼した乳房の下へ「えいッーこれでもかア」と掛声と共に七首をぐさりと突刺した。噴水の如く、血潮を吹き出して「キヤーツ」と最後の悲鳴と共に水色ふんどしの若い女は息絶えた。又一人の紫ふんどしの乙女が槍で乳房を



つかれ、声も揚げ得ずに崩れ倒れたところ、更にその上、鳩尾をぐさりと突刺され、ぐりと数回えぐり廻されて止めを刺れた。

先に水色ふんどしの女を仕止めた黒ふんどしの年増も、今度は同じ年頃の白い晒のふんどしをしめた体格のよい女に組敷かれ、すさまじい悲鳴を挙げて必死に抵抗するうちに胸や首筋に数個所の浅傷を負い、弱ったところを、切腹のように真一文字に下腹を切りさか

れ、真白な皮下脂肪の間から灰色の大腸を露出したまま首もかき落された。白いふんどしの前襟を返り血で真赤に染めた女が血のしたたる首級の髪を引摺んで勝ち誇ったように差上げて、血のしたたり落ちる切り口へ朱唇を押しあててぬぐうさまは、あたかもサロメの狂態の如くであった。くずれかけた御守殿髷、うれ切

った果実のような乳房、返り血を浴びた玉の肌、その肌へ腰から臀部へと固くしめ込んだ晒のふんどしも朱に染り、左手に血のしたたる女の生首、右手に匕首を持った姿は凄じいまでの色気を発散した、ポーズであった。

しかし、この女もやがて緑色のふんどしをしめた、二十位の女に打って掛って、逆に小太刀で乳房をえぐられてこと切れ、松の木を抱きかかえたような恰好であられもない姿を白日の下に晒した。この女を仕止めた緑色ふ

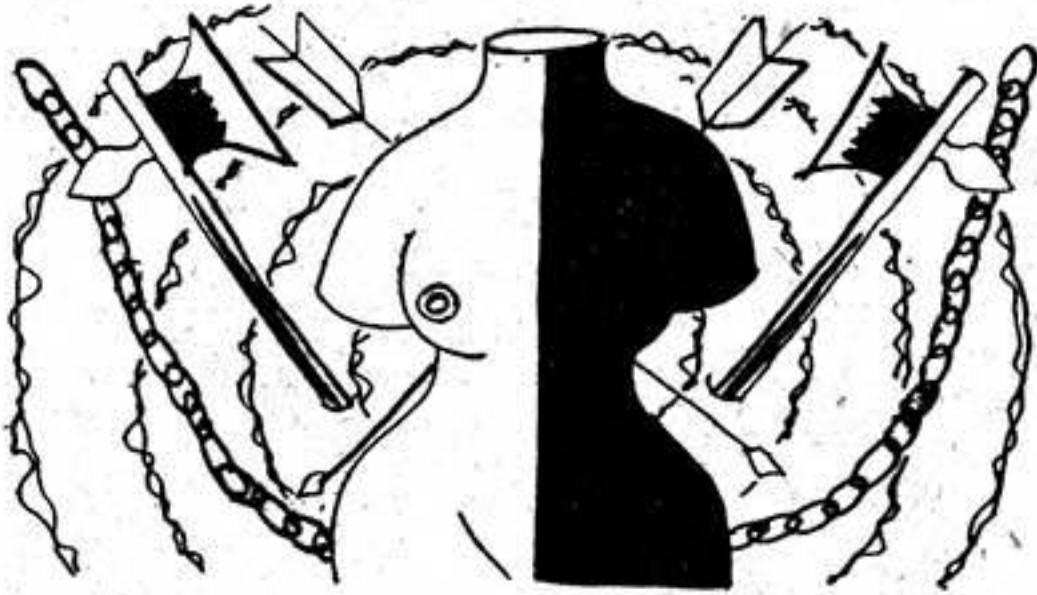
んどしの乙女も間もなく薙刀で胴をばっさり切られて倒れ、刀を杖に立ち上ろうとするとところを同じ年頃の海老茶のふんどしをしめた女にむんずと馬乗りになられて咽喉を掻き切られて相果てた。

女達は血をみると異常に残忍で、相手に止めを刺すまで手をゆるめず、平常、大奥できびしく行儀作法を仕込まれたもの静かな起居動作もものは、二十前後のうら若い乙女も一度び太刀を引き抜いて斬り結ぶや、吾を忘れて白刃を振り、相手を斬り倒すや、馬乗りになって、咽喉や乳房をえぐって止めを刺す者、或はその上、まだピクピクと息のある女の腹部に止めの刃を突き刺すという残忍性を示す者もあった。

数刻後、血の海の中にはふんどし一つ、女の屍が屋敷の中、庭のあちこちに横わり、庭の泉水の水も女のいけにえの血を呑んで唐紅に染り、その中に数体のふんどし一つ、女の屍を浮べ、最後に残った緋縮緬のふんどしの二十四五位の女は、相手の同じく緋縮緬のふんどしをしめた、未だ十八九の娘盛りの女と切り結んで、腰車を斬って落して殺すや、自分も脇腹に重傷を負って吾が刃で自らの乳房をえぐって、玉の緒を絶ち、相手の女の屍の胸へ顔を埋めて息たえた。

斯くて、さしもの大奥での裸女血斗も終りを告げ、武士共はこのなまめかしい、凄艶な修羅場の血の海の中に、白蠟の如き体を横える数々の屍を放心したように眺めていた。

電氣責に関するノート



甲斐仁参

電氣を使用した責は火、縄、鞭、その他の道具を使用するのと異り小説その他でありお目に掛らないが「電氣ショック療法」「毛根焼却」等医学には随分活用されて居る様子である。こゝで少し文献の一部を発表させて頂く事にする。

一、許居平著「暗い夜の記録」(岩波新書二一五号)に著者が日本軍憲兵隊につかまり一ヶ月あまり拘禁されその間拷問にかけられたがその一部に電氣拷問の話がある。

『八日目の朝、いつもの時間に、また奥谷がきて、事務室につれていかれた。こんどは、かれの右側でなく、左側にすわるように命じられた。そこは日光がよくあたっていた。なにがなんだかわからずに腰をおろしたが、いったいどんな意外な苦難がまちかまえているのか想像もつかない。想像がついたところで、どうしようもないので、しずかにまっているほかはない。

事務机の上に黄色い本の箱がおいてある。高さ六、七寸、菊版の書物で四方をとりかこんだほどの大きさである。なかからゴムで被覆した二本のコードをとりだし、その一方のはしを二本とも、木箱にとりつけてあるソケットにつないだ。二本の他のはしには馬蹄型の鉄の環が一つずつ附いている。なにか、自転車のるひとがズボンのすそをくくりつけるのに使うものに似た形をしている。この馬蹄

蹄形の鉄の環を、奥谷は、わたしの両方の腕にはめた。人間をこのうえなく苦しめる装置が、こんな簡単なものだとはおもいもおよばなかった。囚人たちが、ときたま「電氣拷問」という言葉を口にすると、異常な恐怖心をしめすことは知っていた。しかし、言葉を聞いただけで、くわしい内容をしることはできなかった。だから、奥谷が準備しているあいだ、はじめは悠々としていた。もっとも、悠々とする以外にどうしようもないが。虎が人間を食おうとしたら、虎にむかっておじぎをすれば放してくれる、という言い分たえがある。けれども、だれも見えない人は、要するに言いつたえにすぎない。そうとあれば、なにも人間を食おうとするものにはたいして、こちらから先に許しを乞う必要はあるまい。「せいぜいわるくいつて死ぬだけだ」といういつもの考えでいこう。なんとかなる。

奥谷は腰をおろし、スイッチをまわして電氣をいれた。ジー／＼と音がして、電氣がコードをつたわり馬蹄形の鉄の環にくる。それが、びったりとくっついた腕の肉につたわり、脳の神経をとおして全身にはしる。細胞のひとつひとつが電氣であぶられる。大きい神経小さい神経がビリ／＼ふるえる。血管をとおり骨の髄にくい入る。全身に劇的な変化がおこる。電流の強弱につれて、ひとりでに痙攣する。船酔いよりも、もっとものすごい苦し

みだ。全身が沸騰する。自分ではどうにもな

らない。内臓から手足から骨から、みんなバラバラだ。この苦しみを一言でいえば——どうにも形容のしようがない。一回電気をいれるごとに、苦しみが襲う。それが休みになると、眼の前には白い紙がひらいてあって、その上に筆が一本、毒蛇のようにおいてある。

知りあいの友人たちや刊行物の発行責任者の名前などを、こっそりその舌で紙をなめずって書きたいと、毒蛇はわたしをせめたてる。

最初、電気がそれほど強くなかったので、なんとか我慢ができた。奥谷のほうでも、わたしが耐えられる程度に、たえず調節していたし、さいわい、わたしの体は弱いほうではないから、いちばんひどいときでも、じつところえて、心もおちついていられた。だん／＼電流が強くなって、我慢しにくくなると、心は怒りで沸騰した。「おやりなさい。わたしひとりを殺しても、なんにも得るところはありませんよ。」

こうして朝の九時から午後にかゝるまで、つゞけざまに、電気をとおしたり、とめたりしては自白を強要された。——十数回もやられただろう。電気と体の強度試験では、もちろんわたしの体の負けである。だが、かれらとしてみれば、殺したり生かしたりと同じような活劇を何度も見せられたわけだ。しまいに厭きてきたらしく、まわりに見ていた軍曹

どものひとりが、スイッチをうばいにとって、腹をたてたように、

「白状しないんだな！」

と、さげんだ。そして、目盛をまわして、いちばん強いところまでもっていき、スイッチをいれたまゝにした。強い電流だ。長い時間だ。しずかな気持ちになって来た。体の機能が反撥しなくなった。これが瀕死の状態というのだろうか。——そんなに長い時間がたったとはおもえない。とつぜん猛烈な叫び声に眼をさました。眼をあげてみると、やっぱり椅子の上に腰かけていた。

死んで生きかえるとは、このことをいうのだ！ 衝撃をうけて、ちようど長い旅路に疲れて死にかかった牛か馬のように、あえぎながら、ぐったり椅子にもたれかゝった。

またしても苦しい一日であった。奥谷は、もうこのほかに手つとりばやい方法を考えだせなくなったらしい。もう一度電気をかければ死んでしまうだけだ。そうになったら、かれらにとって元も子もなくなってしまう。

太陽も、人間のおこなう残酷な演劇を、これ以上見物するのがはずかしくなったのか、西に沈んでしまったのをみると、時刻は、すでにおそくなったようである。よろめく体を追いたてられて、また留置場へもどった。重傷を負った猛獣が、おもい足どり、ころびながら、自分の巢へかえる姿にも似ていよう

か。』

× × ×
 一、Frances Lengel : "The Carnal Days of Helen Seferis" (啓明社発行) の Epilogue by Helen Seferis に拷問とはいえないが例の補助手段に電気を通す事が載って居り、かなり刻明にその刺激される状態が書いてある。

× × ×
 三、りべらる (たしか二十九年末頃のもの) に「私が拷問した五人の女」という記事があり、次のような話が載せてある。

——「いゝか、バカな拷問をやったら承知しないぞ。あとで、妙な拷問を、女だと思つてやっていたら処罰する。」

特に、このとき嚴重にいゝわたしたためか平手打ち位はやつたらしいが、格別のことはやらなかったようだ。

二日たち、三日たつうちに、それでも次第に業を煮やしてきたのか、とう／＼、共同租界の工部局警察から、新式の拷問具を借りてきてしまった。

電蓄のような形をした電気器具が電燈から電流をとるようになっていた。その器具から二本の線が出ていた。

調べる人物の両手をさし出させて、その手に線を縛りつける。そうした上で、電流のスイッチをひねると、ピク／＼と電流が通じて……という仕掛け。つまり、電気拷問器であ

る。

周の態度は、拷問が平手打ち位のものだったせいか、悠然としたものだった。冷たく冴えかえった顔に、冷たいさげすみの微笑をうかべて、何をきいても、知らない、というだけ……。

その彼女が、この電氣拷問器にかけられると一度で参ってしまったのだから、如何に凄じい効力を發揮するものが判ろう。

二、三十ボルトから百ボルト位までの電流を通じると、ブル／＼、ブル／＼とはげしいふるえが全身に走る。余程心臓が弱くない限り死ぬというようなことはないから、時間をおいては、それをくりかえしていればいいわけだ。

周は六十ボルトまで上ったところで、ぐんなりとなった。

唇はかさかさにかわき、眼はつりあがって据ってしまっていた。声を出そうにも出ないのか、それとも意志の力でたえていたのか、悲鳴もあげなかった彼女が、電流をきって解放したとたん、両手で顔をおおってしまった。嗚咽しはじめたのだ。――

四、古雑誌の間から出て来た書き抜きの紙片数枚に小さな字で次のような文章が書いてあった。所々発表出来ぬ箇所もあるので適当に削除した。

「おい、云うのか、云わないのか。」

ビルの地下室、うすぐらい裸電球の下でひじ掛け椅子に縛りつけられた若い女はたうらめしように男を見上げるだけだった。国際麻薬密輸団の一味として偽いて居た彼女は裏切者へのリンチがどんなにむごいものかはよく知って居た。

「俺たちを売ろうとしやがったんだろ。この紙切が何よりの証拠じゃないか、一体誰に渡そうとしやがったんだ。」

男はうなだれた女の額をぐいと突ついた。

「知りません、そんな事。」

女は吐き出すように答えた。

「知らねえ？よし、もう聞かねえ、すぐ『許して、云う／＼。』と泣き声を上げさせてやらあ。」

男は室の片隅からゴソ／＼と電氣拷問の器械をもち出すとテーブルにのせ、コンセントにコードの先をさし込んだ。そのおそろしさをよく知って居る女は、はっと目を見開いて男を見上げるのだった。男はガチャ／＼と大きな丸いクリップのような二個の金具を取り上げそのコードの先のプラグを器械にさし込み女の右手に赤、左足に黒いコードのついた方を取りつけた。

「さあ、云うなら今のうちだぞ。」

答はなかった。男はスイッチを入れた。パ

ツと赤い豆ランプが点ぜられる。つまみが廻されメーターは三〇ボルトまで上った。

「う、うっ」

女は歯をガチ／＼云わせてのけぞった。すんなりした手と足の筋肉がビリ／＼とふるえる。一〇秒、二〇秒、男はつまみを廻した。六〇ボルト。

「ヒーツ」

声にならぬ悲鳴を上げた女はギリ／＼と奥歯を噛みならし、縛られた身体をはげしくのたうった。きつく閉じた目から涙があふれ、全身に汗がういて来た。男はつまみをもどしながらスイッチを切った。ガックリとこわばった体をゆるめた女ははげしく肩で息をした。汗は額からも、頸すじからも、こんもりもり上った乳房の間からも、むっちり肉づいた太も／＼からもたら／＼と流れた。

「どうだい、まだ云いたくないかね。」

冷やかな男の声に女は涙のたまった目を開いて睨みつけた。

「し、知らないものは云えないわ……。」

「フン」

男は鼻の先で笑うと又器械を仿かせ女は悲しいうめき声を上げ、椅子をきしませて身をもむのだった。三度、四度、五度、女の意識が遠くなりそうになると男は電氣を切り、又すぐ入れるのだった。赤い豆ランプの点滅につれて女の悲鳴が高く低く汚れた壁にはねか

えった。

何度目かに電気がとめられた時、女はガツクリと頭をうしろにおとして気絶した。脂汗が全身から流れ、椅子をぬらし、ほこりの溜ったコンクリートの床にも点々と黒いしみを作って居た。男は横のバケツからひしやくで水をザッとその顔にあびせかけた。女はぼんやりと目を開く、裸電球が光り、しみだらけの壁が見え、自分を見下ろす男の顔が見えた。すぐ今までの恐ろしい責苦の記憶がよみがえり、女はヒーツと声を上げて泣き出した。男はパチンとスイッチを入れてつまみを廻そうとする。

「云います〜」。

「あの紙切れは何んだ。」

「あ、あれは、あれはもらったんです。」

「誰から。」

ハッと女は口をつぐむ。「ジョージ」胸の中で恋しい男の名を呼んだ。自分が云わなければあの人だけは無事に逃げられる。

「誰なんだよ、それは……」

男はシレッタそうに繰り返す。

「……」

女は血がにじむ唇を噛みしめる。

「そうかいまだ苦しい思いがしたいのかい。」
右手の金具がはずされ、かわりに赤いコードの先に太い針がついたものが持ち出され

た。男は両手にゴムの手袋をつけた。スイッチは入れられボルトメーターの針は五〇ボルトをさした。男は片手で汗に光った頸すじを押えて肩先に針をズブリと差し込んだ。

「ギヤーツ」

女はすさまじい悲鳴を上げて飛び上り、椅子は今にもバラ〜になるかのようにガタガタ鳴った。負の電極は正の電極は針にあった。肩先に打ち込まれた針はあたかもその肉をむしり取るような激痛を与えるのだった。女はカッと目を見開き、唇をワナ〜とふるわせる。男はツイと針を抜く、時間にして五秒も経って居ないだろうに、女は息も絶え絶えにあえぎ、ヒイ〜と喉をならせ、又しても切ない涙と脂汗を流すのだった。

「あの紙切の数字は何んだよ。」

「……」

今度は太ももに針をさされ、女は腰をよじらせ椅子に縛ばりつけられた足を引抜こうとするかのようにバタ〜させた。ふくらはぎにも、二の腕にも、胸にも、尻にも、深く浅く次ぎ〜に針は刺し込まれ、そのたびに汗にぬれた女はビク〜とはね上り、美しい顔を流れる汗と涙でグッシヨリぬらし、鼻水とよだれをたらしながら歯をかみならし、恐ろしい悲鳴を上げるだけだった。

ガランとした地下室は器械から出る熱と女から汗と一緒に立ちのぼる体臭にムツとする

程暑くなってきた。

男は針の跡に血をにじませてもがく女を見下ろしていたが今度は尻にズブリと深く針を入れてそのまま針から手をはなし、つまみを廻して電圧を二〇ボルトまで下げた。肉をむしり取られるような痛みは、真赤に焼けた錐でももみ込まれるような苦しみに変わり、腰からも〜までビリ〜としびれた。女はヒイヒイと泣き声を上げた。

「云います。云いますから針をとって……」

「云えば取ってやる。あの数字は何だ？」

「あ、明日の、三時。……は、早く取って。」

「何処だ」

「……」

男は又四〇ボルトにつまみを廻す。

「アッ、アッ、き、喫茶店、レボ、ヒーツ。」

「相手は誰だ。」

「ヒーツ……」

「云わないか。」

「アッ、云うから、云うから早く取って、早く……」

男は一〇ボルトに下げる。女は喉をぜいぜい云わせながら悲しい声を上げる。

「私は何も知らない。ほ、ほんとに、知らない。たゞ、たゞ逃げようとしただけ。」

「誰だと云っているんだ。」

「許して〜、ねえ、もう勘忍して、私は……早く針を取って……」

男はいきなり八〇ボルト迄上げてすぐもとの所までもどす。女は死にそうな悲鳴を上げ、はね上り、それから、たゞきつけられたように身体をおとすとブル／＼ふるえながら大声で泣き出した。

◇

男は煙草に火を点けると、尻に針を刺されたまゝ泣いている女の顔にけむりをふき掛けた。と、その時室の戸が開いて黒いサテンのイグニングを着た三十位の女が入って来た。

「おいサブ、リエは泥を吐いたかい？」

男はかしこまって答える。

「へエ、マダム、明日三時にレポで落合ってどこかへずらからうって云う腹だったらしいんで……。」

「フーン、誰と？」

「それをまだ云わねえんで」

「手ぬるい／＼、私に借してごらん。」

マダムと呼ばれた女は椅子に近づくとし、と云う娘の尻から針を抜いてスイッチを切ると髪の毛を握んで顔を仰向けた。

「おい、リエ、誰とずらからうってんだい。」

明日は三、四人売上を持って来るのが居るんだ。どうせその中の誰かだろう。」

「ヒーッ」

「誰だ、云わないとひどいぞ。」

「し、知りません。」

「フン、知らぬお方と待合せかい。」

「……」

マダムは鼻の先で笑うと、ゴムの手袋をつけ、金属製の器具に赤いコードがついた責道具を取り上げプラグを器械に挿し込みスイッチを入れて八〇ボルトにつまみを合せた。

「早く云わないか」

汗にぬれた胸にヒヤリと冷たい丸い道具の先が押しつけられ、女はピクリと身体をふるわせた。

「か、勘忍して、ヒエーッ。」

終りの方は言葉にならなかつた。その奇妙な形の道具に押ボタンが押され、焼けてでえぐられるようなすさまじい痛みが胸から全身に拡がり、心臓も止まりそうな恐ろしい衝撃が脳天を貫く。一秒、二秒、マダムは目をギラ／＼させ、息をつめて身をもむ女を見、道具をはなすと云った。

「おい、サブ、三〇位に下げてごらん。」

マダムは息をきらして喘いでいる女のかみを又ぐい／＼つかんで目の前にその責道具をつきつけた。

「これはどうして可愛がるものか知って居るんだらうね、生娘でもあるまいし、さあ可愛がってもらう前にこれにキッスをするんだ。」娘はその意味が解ったのか、恐怖の色を顔中に浮べて喉をふるわせ泣き声を上げた。

「イヤ／＼マダム、ゆ、許して」

マダムはよだれをこぼしてぬれた女の唇に

そツト道具をくつつけた。

「ウツ、ウツ……」

つかまれた髪が抜けそうになる程、頭を振り、必死に逃がれようとする女、マダムは押ししていたボタンをはなし、道具を口の中に乱暴に押し込もうとする。

「さあ、口を開くんだ。」

女はそうさせまいと歯をくいしばってもがく、マダムは髪をつかんで居た左手をはなすと女の涙と鼻水にぬれて光って居る鼻をギユウとつまんでねじ上げた。

一秒、二秒、遂に我慢出来ず、フツと息を吸うため開いた口にグイと器具の頭が捻じ込まれ、すかさずカチリとボタンが押される。

「アウツ、アウツ、ウツ、ウーッ」

女はうめき、頭を振り、口や頬をガク／＼とふるわせる。やわらかい粘膜に通される電気は何百本の針の束を突刺さ／＼れるよりもっと恐ろしい苦しい責苦だった。女は頭をぐつと後にのけぞらせて悶絶した。マダムはボタンをはなすと道具を抜き出した。つばきが長く糸を引いて光った。

「そっちの方へ縛りつけてね。」

マダムは壁に立てかけてあった梯子に二本の脚がついたような台を指さした。サブは電球の下にそれを持ち出し脚を上にして床に置き、ぐん／＼失神している女の縄を解き、足から金具をはずすと、引ずるように抱きかゝ

えて台の上に寝かせ、両腕を差し上げるようにして頭上の横木に縛り、くびれた胴もすっかり縛りつけ、足を折りまげて、片方ずつひざを持ち上げ台から突き出て居る脚に引かけてしぼりつけた。それから台の頭の方を少しもち上げて大きな木の箱を床との間に押し込んだ。身体が床に触れ電気が逃げるのを防ぐ為なのである。女はまだ気を失っていた。

男は女の片足に又例のクリップ状の金具を取りつけるとひしやくで水を顔にあびせた。ハッと娘は目を開き、二人の顔を見上げ、これから行われる恐ろしい拷問に気がつき、悲しい声をふりしぼった。

「許して、許して、勘忍して、し、知っている事は何でも云います。」

「さっきから何へん云わせるんだ、相手の名前を云えば許してやるよ。」

マダムはニヤリと笑って、ハイヒールの先で娘の腰の当りをちよいとつゝいた。

「そ、それは……」

最後の理性が恋しい男の名前を口に出すのを押えた。「私はこゝで責め殺されてもいい、ジョージ、あなたは幸福に暮して……」胸の中で叫んで女は目を閉じた。涙がドツとあふれた。マダムは先刻の器具を取り上げると、電圧を一〇ボルトに下げながら云った。

「やっぱり云えないのかい。」

「アッ、アッ、許して……。」

……(以下省略せざるを得ないが、いろ／＼な責道具を使用して、何度も悶絶するまで責められる様子が書かれてある。)……
「とにかく明日三時にレポを張らせとくよ、それまでにシワ／＼責めて泥を吐かせるんだね。又後で来て見るよ。」
マダムは顔に汗を浮べてサブに云うと手袋をぬぎ捨て、出て行った。

男はひたいの汗をぬぐいながらバケツに水を汲んでもどって来ると、女の開いた口に水をザツとひしやくでつき込んだ。ウフツとむせて口と鼻から水を吐き出し女は気がついた。

「ヒーツ」

先刻から何時間も責め虐まれ。叫びうめき、泣声を立てたので、かすれた音が、喉のあたりでするだけだった。

「目が覚めたかい、可愛そうに、もういゝかげんで白状したらどうだい。」

男は猫なで声を出す。

「明日の三時までにはまだ／＼時間があるぜマダムは泥を吐くまで責め続けると云ってたぜ、おまけにレポは明日張らせるんだ。誰だかしらないけど、そいつは間違なく捕まるよ、その前にそいつの名を云って許してもらえよ。」

「殺して……一思いに殺して……」

女は喘ぐ、しまった。つい喫茶店の名前を云って仕舞った。後悔したが後の祭りだった。どうか神様、彼を無事に逃がして下さい。……女は泣きながら目をとじた。ジョージの心配そうな顔がまぶたに浮ぶ。男は器械に手を触れ、それが暑くなつて居るのに気がつき、スイッチを切ると隅の方を指さした。

「まあ、少し休ませてやる。その間によく考えるんだな、今までのお仕置はまだ／＼序の口だぜ、あんなもので責め殺される前に許してもらった方が得だぞ。」

そう云い捨てて室から出ていった。

女は奇妙な台に縛られたまゝ顔をよじつてその指さした方を見た。ほの暗いそこにはフエンシングの剣をもっと細くしたような鞭、鎖、千枚通しのような針がそれ／＼尻に赤いコードを引いて乱雑に置かれてあった。娘は、以前売上げの金をゴマかした女がこの室につれ込まれ三日三晩恐ろしい悲鳴を階段の所まで響かせたのを思い出した。目がかすみ、唇はかさかさに乾いて身体中しびれて痛かった。それでも女は疲れ果て、引き込まれるように寝り込んだ。

(未完)

〔編集部より〕

続稿をお送り下さい。

ある夢想家の手帖から

沼

正

三

第二百二 黄色い便器と宝石筐

白人に精神的強姦され、彼に愛情を捧げた妻が、捨てられて私の所に戻ったとしよう。妻を愛していた私は妻の過失を咎めない。すべてを元通りにしようと約束する。白人によって娼婦並に引下された彼女、白人からは低く見られた彼女ではあるが、私には大切な妻なのだ。三者関係第二形式がそこに成立しているわけである。

然し元通りには行かないのだ。かつて私の技巧が喜ばすことのできた彼女の肉体は、もう私の努力に応えようとしなくなる。白人と交わったことによって、妻はより高い性の歓楽を解するようになり私の及ばぬ所まで引上げられてしまったのだ。白人の与え得た恍惚感を私が与え得ぬと悟った時、彼女の不満は私への軽蔑と変る。私の肉体は白人の肉体に劣るのみでなく、彼女の肉体にも劣っている。……こうして妻と私との関係は対等でなくなり隷属関係が生じて来る。妻は私に君臨し、日本人の妻であるよりも白人の娼婦であることを、より高く評価するに至る。——丁度「痴人の愛」のナオミのように——これはもはや第二形式ではない。第三形式の心理である。

同じような心理は、日本女性中の貴婦人といえるひとが進駐軍の米国極東軍司令官R高官に身を任せた話を聞く時にも感じられる。大將は三人の情婦を持っていた。一人は白系露人を父に持つデイトリッヒのような美貌の金髪の混血女性、一人は華族Kの未亡人、一人は京都美人のダンサーであった。赤坂の彼の別宅はMP十二人に護られ、スペシヤル・メイド七人が待機していたが、ここでR大將は三人の情婦を一日交替で夜伽に待らせた。メイド七人は、みんな彼に処女を捧げさせられたが、情婦に昇格した者は一人もなく、二三度彼と寝ただけですぐ新しいメイドと入れ代えられた。……三人の情婦の中、K未亡人は後にある日本人弁護士と再婚した。(アメリカ兵の性生活)——この話の中で、私の興味を感じるのは、金髪の混血女性と華族の未亡人とだ。前者は白人崇拜から、後者は貴婦人崇拜から、私は彼女等に奴隷として奉仕したいと感じるが、その隷属心理は、彼女等が優位結合の中にあって情婦として扱われたことで影響を受けない。第三形式で受けとめてしまうからである。情婦でなく本当に娼婦であったとしても、なお然りである。

三年程前だが、日活国際会館地下食堂で友人と会談中、目をみはるような服装と容貌の美人が一人で入って来た。ファッション・ブツから抜け出したような、然しファッション・モデルのような人気商売の女につきものの愛想の良さが見られぬ、冷い驕慢な雰囲気と備えた女性だった。貴婦人と呼びたいほど高貴ではなかったが、その女性に私は「女主人」として奉仕したい衝動を感じた。私のそんな気持は知らぬまま、世情に通じた友人は彼女はコール・ガールの尤物であろうと教えてくれた。そう聞いても私の彼女に対する奴隷的衝動は少しも減じなかった。むしろマゾ的昂奮の増加するのを私は感じた。

不思議な経験であった。その時まで私は洋娼というものを経蔑していた。米兵と手を組んで歩くドギツイ化粧の女性達に何の魅力も感じなかった。そして私はその理由を彼女等が「娼婦」であることに求めていた。他の男の玩具に過ぎぬ女、売春婦、それは「女主人」の觀念には、凡そ遠いものである。今でも私は売春婦と知ったら、どんな美人でも崇拜する気持にはなれない。(そういう気持を殺して奉仕させられるとしたらマゾ的だとは空想しうるけれども。)——ところが、この美しいコール・ガールを見て、私は考え違いをしていたことが分った。今迄洋娼を軽蔑していたのは、単に彼女等が「不美人」だったからであって、決して「娼婦」だったからではなかったのだ。同じく売春行為であっても相手が日本男性か白人男性かにより、私には意味が違うのだ。後者ならその女に対する評価を低める理由には少しもならないばかりか、むしろマゾ的昂奮はこの方が高いのである。少くとも白人の玩具であることは私の女主人たる資格を失わしめないものである。

その後「東京の七ツのバラ」という噂話をよく聞いた。進駐軍高官や来日の米国政府高官の接待専門という最高級のコール・ガールが七人いるというのだ。ある男がある宴席で素晴らしい美人と親し

くなった。色々手を尽して高級ホテルの一室にさそい込むことに成功した。さてベッドに寝かせ、色ズロースを脱がせようとした彼はズロースの正面に刺繍された英文を見た。「これは東京の七ツのバラの第一のバラである。触るな。M、バラにはトゲがある。男は戦慄して無礼を陳謝したという。——こういう話を聞く度私は日活ビルで見た美人のことを思い出した。そして、どうせ最後には正体を知って平伏するに違いない男を知らぬ顔で玩弄^{からか}っている女の茶目気のあるサディズムをあ顔に結び付けて、ひとり昂奮した。私達には高嶺の花の女、触れることを許されぬ禁断の実、それが実は白人の玩具だという意識は、限りなく私のマゾヒズムを刺戟した。これこそ正に典型的なM第三形式の三者関係と云えよう。

妻の肉体は私にはいとしい。華族未亡人の肉体は私には貴い。驕慢なコール・ガールの肉体は私には触れるさえ空恐ろしい。女主人の肉体、それは容器に譬えれば「寶石筐」だ。中の「お宝」は、それにくちづけすることさえ、私には過ぎたものであろう。ところがその「寶石筐」が白人には「便器」なのである。便器などと私が勝手に名付けたのではない。神崎清氏によれば、事実米兵は洋娼を「黄色い便器」yellow stoolと呼んでいるのだ。人格を認める必要のない、性慾処理の道具に対して便器とは巧妙な表現だ、たしかに使う前にズボンのボタンを外す点は同じなのだから。そして彼等が便器として使用していることは、それを私が寶石筐として愛重する気持を少しも傷けぬとするところに、白人崇拜と結びついた私の三者関係心理の特徴があるのである。

第百三 日本人に最もふさわしいテクニク

前項までに私達の側からの心理について説明した。然し実はその裏がある。私達の白人崇拜感と表裏をなす白人の有色人に対する人種的偏見、日本人の人格の徹底的無視、これによって、私達の三者

関係のマゾヒズム心理は裏打ちされ、効果は倍加するに至るのである。日本人にも白人崇拜意識のない人がいるように、米国人にもこの偏見のない人があることは勿論だ。然し多くの場合それは思想を以て感情を抑えているのである。米国の黒人処遇を年来非難して来た英国で、戦後ジャマイカ黒人の英本国移住が盛になるとKWB運動が起った。Keep White of Britain (英国の白さを守れ) 白人と有色人とを同格に扱うなどというのだ。人種平等の良識は白色の皮膚感情を否定し得ない。それがアングロサクソン族の伝統だ。日本駐留中教養のない米兵はじかにこの皮膚感情で行動した。教養ある将校も、事性欲に関しては虚飾を捨て、殊に権力意識から仮面を不要として、本来の偏見を露出した。

前々項に述べた強姦が既にそれを語るといえる。女性狩猟を文字通りに実施することは、相手の人格を対等のものと考える限り不可能の筈である。殊にその愛情までも玩具にし、しかもそれが大した女性虐待の意識なしに行われるということは、人間の愛情にも価値の高下ありとの差別的な人格観(第八十項参照)なしには考えられない。前記の実態調査によれば、強姦経験ある米兵の八四%が、日本女性を強姦したことに良心の疚しさを感じるかとの問に対し、感じないと答えているが、日本女性に對等の人格を認めていたら、こんな数字は出る筈がない。

この人格蔑視は、そのまま各人の性享樂の場面に現われる。テクニクに即しつつ説明しよう。

日本女性との性交渉において米人は殆ど必ずF技巧を要求するらしい。本誌二十七年九月号の「洋パンを囲む座談会」で諸嬢が皆「シヤクハチ」を英語と信じて疑わず、司会の辻村氏と争っているのは、彼女等への米兵の仕込みの徹底していることを語るものだ。いわゆるのFとしてではない。一方的なF技巧が、自発的でなく為される場合、奴隸的奉仕の色合が濃くなる。する方はされる方に性的

快感を生じさせるための単なる道具に墮している。米人青年男女間のペッティングとしてはサービスは相互的なものに対し、ここでは一方的にF技巧が要求されているのは、日本女性より低いものに見えているからである。

この日本人性具観がもっと露骨になるのは、F技巧からC oralsにまで進む場合である。(高橋鉄氏「紅閨秘匣」など、この両者を明確に区別せぬものが多いが、誤りである。前者は前戯に過ぎぬが、後者は一種のCである。ヒルシュフェルトも前者は良いが後者は病的だと云い区別して論ずる。古代印度で盛だったのは後者である) Vが使用されずMで代用される。これを支えるのはどういう心理か? 男は高貴であり女は卑賤であり、そのため男の肉体中で最も汚ないPであるが、女の肉体中で最も清いMをもって来て初めて対等のものとして結合しうる。Vでは汚な過ぎて問題にならない。——こういう心理の下では、それは前戯でなくなり、この結合で終局までゆくことになる。そして米兵がこれを要求する時の右の心理は、勿論白人は高貴で日本人は卑賤という論理から生じているのであるが、私のひとりよがりでないことを例であげて示そう。

小説公園誌三一年六月号藤原審爾氏「酔いどれ」と娼婦に出て来る洋娼は、GIからCreedを呑めと迫られる。野蛮だといって嫌がると、GIは露骨な侮蔑を顔いっぱい漲らせて「お前は日本人でしかないじゃないか。これは日本人に最も相応しいテクニクなんだぜ。なぜ理解できないんだらう。」と三度も繰返している。

前項であげたV少佐は、私宅に五人いるメイドに対し、正常のCを求めず、Creedを呑むことを要求し、拒絶されるとひどく怒って彼女等の一人によれば「私を身動きも……」

……(編集部にて四十三字削除)……
……らいて、とうとう目的を遂げた。』ほかのメイド達はそれ以上逆らわず彼の云う通りしたらしい。彼もやはり、「日本人にふさわしいテ

クニックだから」とこれを理由づけ、「アメリカにいる奥さんにもこんな風か？」との間に「お前達が日本人だからで、アメリカ人の女にはこんなことはしないよ。」と答えている。彼のPを媒介として日本女性のMが米国女性のVと価値等しいものにされているのである。

このV少佐は、右の強制的C onditionsを大きな鏡のある部屋で、ほかのスペシャル・メイドたちに見せながらやったのだそうである。こういう露出狂的性的行為の嗜好が米兵の二七%に達することが、前項の実態調査における洋娼達の回答から分るが、この羞恥心の缺如は彼等が日本人に對等の人格を認めないことから来る。進んでは彼等は別の相手としCにおける性感を増進するための道具として、つまり生きた性具として日本女性を用いるに至る。変型的三者関係（優位の男女と劣位の女）とも云えよう。この例も数多い。

「酔いどれと娼婦」から――その日のGIは、いつもと違っていた。豪華なドレスをきた三十あまりの、見るからに金持の奥さん風の日本人の女と一緒にやって来た。パーティの帰りらしく、相当に酔っぱらったその女を抱えて、絹子の部屋へやって来た。その女をGIはベッドに寝かせてから絹子を裸にし、ベッドの横の窓際へ後手にしぼりつけた。そしてその目の前で、女と抱き合った。目をそむけると、すぐベルトで、ベッドの上から撲りつけられた。……「アメリカ兵の性生活」から――E中尉は更に悪質である。彼はキヤンプの私室で毎日酒をのみながら、腹心の部下達が街でとらえてくる獲物を待ちうけているが、その獲物は人妻や成熟した娘ばかりでなく、時には十二、三才の少女や少年だったことさえある。部下達は獲物を裸にし、E中尉の前の椅子に縛りつけて鞭でなぐるのだ。この変態的な拷問を受けた一人須山ヤエは語る。「……私が拷問にたえかねて泣き叫びはじめると、私の前にいた将校はおもむろに裸になり、横の部屋から入って来たパンパンを抱いて、私をしつ

こく睨みながら、ベッドの上にくるがった。彼がパンパンと交渉している間、私は鞭や濡れタオルで打たれつづけたので、とうとう氣を失ってしまった。意識が回復したあと、私をつかまえたアメリカ兵は、お前の嫌疑は晴れたからもう帰ってもよいといって、煙草を一箱くれた。……結局あの将校の刺戟のために拷問したのだらう。……」（なお、十三才の少年からも同様な報告があるが省略する。）

一斑以て全豹を知る。これらの事例は、米国兵の性的対象としての日本女性が、米国女性同様の對等人格者としてでなく、性具として見られ、扱われていることを示すものだ。

然し人格蔑視は、男女の二者関係における性享樂の場面にのみ見られるのではない。変型的準三者関係（男達の間の女奴隷の取引）ともいうべきものが成立するに至って、その極に達する。

精神的強姦（前々項）を受けた素人娘の場合を考えよう。身も心も捧げた相手から彼女は「生きた性具」としこの娼婦的テクニクを教育される。彼が彼女に飽いた頃「日本人にふさわしいテクニク」を覚え込んだ彼女には娼婦としての商品価値が生じて来ている。勿論彼女の氣持は娼婦というに遠いものだ、彼女は男を一筋に愛している。然しこの純粋な日本娘の愛情に對する彼等の態度は「移り氣な飼主が犬を可愛がったり、棒で叩いたりするのと同じだ」（続日本の貞操）。犬の方でいくら飼主を慕っていたとて、他の犬を欲しくなった飼主は、犬の氣持には無頓着に手放してしまう。男が男へ女を売る準三者関係なのである。

小説公園誌三十一年八月号藤原審爾「めくらと娼婦」は、千弗賣ってメイドを止めたある日本娘がMPのイチチーからどんな風に取り扱われたかを詳しく述べている。イチチーに言葉巧みに言い寄られついジープに乗せられたのが運の尽きだった。彼女はホテルに連れ込まれる。然し、イチチーは単に強姦して能事終れりとするような

生優しい男ではないのだ。彼のやさしい態度、親切な口裏、彼女は本気で恋をする。彼女の情愛が刻々高まるのを彼が冷静な科学者の目で観察して、別な秘かな悦楽に耽っているのを知らない。真の愛情の表現が只一つの方法F技巧でしかなくない、ということの不自然さに氣附かない。二ヶ月後千弗の金がなくなった頃、彼女はパーティに連れ出される。イチチーは仲間に彼女を見せて結局三〇弗で売り、彼女に酒を飲ませて酔わせておいて独りで去る。三人組に一室に連れ込まれた彼女は、こんなことが分ったらイチチーはもう帰って来ないと思い、だきすくめた一人に「あたしにこんなことをしたらイチチーが只じや置かないぞ」というと、三人は顔見合せて大笑い。「これがお前にイチチーが書いたラブレターだ」と一枚の

紙片を取り出して彼女の鼻先をこすり廻す。見ると、たった三〇弗の売渡し証文で「この馬鹿女を軍事上の目的により君等に使用させる」と書いてある。それを知って、彼女は死んだように、虚ろになっってしまう。……人格の誇りを失った女のおきまりの道を通って、彼女は洋娼に転落して行った。……

これらはすべて「男による女の虐待」に属する。本来はこの手帖に属すべきでない内容であるが、私の白人崇拜が、これを「白人による日本人の虐待」という形で評価するを得しめたこと、及び私が白人男性に対するCoralisなどMによる技巧に非常な憧憬をもっていること、この二つが、本項を書かしめるに至ったのである。

女性切腹例抄記 (上)

田 谷 敬 生

本誌の中絶前私は愛読者諸氏からきわめて貴重な女性切腹例を多数報告していただき、その概括はすでに続女性切腹断想の中にふれてあります。しかし復刊以後は読者相互の連絡が断たれたのでこれ以上例が集まるとは思

われませんし、切腹記事も低調ですので、以上の例の中特に凄絶なものを少しずつ紹介してみたいと思います。但しお知らせ下さった方の希望もあり、切腹に至る事情、場所などはできるだけ省略し

切腹の経過をなるべく目撃者の記述そのまゝにお知らせしましょう。

(第一、二例) 二十二歳及び二〇歳の姉妹、終戦時、満洲にて、

姉妹そろって半てんを脱ぎ腰巻のみとなり姉は鎌にて臍の直下を横に五寸程切裂き腸をつかんで苦悶中、目撃者の手を借り股から臍まで縦に切上げ左咽喉より右後頸部と鎌を突通して絶命。

姉は独力で出刃で臍の直下を四―五寸深く切り更に鳩尾から臍の右側へ切裂き咽喉を突いて絶命、腰巻の紐を切裂いたため、全裸となり十文字の交叉口から三―四寸腸がたれ下っていた。

(第三、四例) 四〇歳前後の婦人、二〇歳前後の娘、終戦時、満洲。

満人に襲われ、母は和服姿のまま壁にもたれて襟をグツとくつろげ立ったまゝ七首を鳩尾にブツッリ深く突立て「ウーム!」とうめきつゝ二―三寸引廻し、あふれ出す血を押えつゝ前に倒れた。

娘も立ったまゝワンピースの前を引裂き、短刀を臍のやゝ上に突立て四寸位引切り、前に倒れて二人抱合つて呻きつゝ苦悶し、射殺さる。娘もかなり深く切つたようだったが、腸は出ていなかった。

(第五、六例) 二〇歳前後と十五歳位の姉妹終戦時、満洲。

林の中を通行中満人に襲われてきわめて激しく抵抗したが力尽きモンペも下衣もズタズタに引裂かれ二人ともほとんど半裸になってしまった、姉は息もせわしく「もうだめ!!、早く」

と叫びながら、立木にもたれ脚を踏張ると短刀を左下腹へ、ウームと気合もろとも一気に突立て前のめりになりながら歯をかみならしつゝキリキリと右脇壺へ引廻し、ふるえる手をもって咽喉をさぐりつゝグサツと突立てると後ろへドツと倒れてしばらく転々苦悶して絶命した。

妹もほとんど同時に左下腹へ突立て姉よりも見事にウームとうめきつゝ右へ引廻した。

刀を抜くと臍の下あたりからムクムクと腸がたれ下るのを押えもせず鳩尾へブツッリ突込んだが力つき突立てたまゝ倒れて苦悶、満人に突殺された、姉に比べて妹は身体も細く、腋毛もなくまだ子供ようだった。

(第七例) 一八才位、未婚、外地、暴徒に連行、脅迫され自決。

全裸に近い姿で正座、貸しあたえられた軍刀を手拭で巻き、真青で恐怖の表情を現わしながら健気にも左下腹に声も立てずグサツと

四寸近く突立て、一度がつくり前にのめったが再び立直るとギリギリと右へ引廻した、刀を右脇壺に刺したまゝ両手で左右の横腹をぐつと押すと臍の下に傷口がクワツと開いて腸がモク／＼とあふれ出した、女は苦しげに口を大きく開けてあえぎつゝ両手で更に腸をズル／＼と引ばると握んだ手をそのまゝに暴徒をにらんでパツタリ前に打伏し二時間後に完全に絶命した。

(未完)

〔レポート〕

男性の下着調査

窪 鉄士 提供

(サンデー毎日、七月廿九日号、「銀ブラ男を裸にする」より)

調査した場所 銀座T温泉の大衆プロ

調査した人数 百名の男性

調査の方法 脱衣室にミコシをすえてロツカーの番号の一から百までの男性の脱衣現場をとくと拝見

調査の結果

パンツ	51名
さらまた	27名
ブリーフ	19名
フンドシ	3名

計 100名

その詳細

(パンツ) 大半をしめるパンツは年齢層はなく、しいていえば若い人たちに、色ものやシマ模様が見かけられる。

(さらまた) これは中年以上に圧倒的人気あり、メリヤスのさらまたの上に必ずといっていいほどステテコをつけている
(ブリーフ) パンティの男性版で、これが若い男性に非常に多くなっている。もつともスタイルがよく見えるからだろうが、モノの出入口が、どれもこれももうす汚れとった。

(フンドシ) 三人のうち二人は越中で御老体。一人がサラシの六尺でマンボ・スタイルのハンサム・ボーイ。(要点抜書)



ある女給の体験

日 下 絹 子

私はいまサロンに勤めている二十七才の女でございます。この十年、世の中の移り変りと共に浮草の様にまかれて来たわが身をふり返って、女って弱いものなのだとつくづく悟りました。昔若い時考えていたようなロマンチックな情熱はすっかり消えて現実的な女になってしまいました。これも生きて行くために仕方がなかったと思います。最近御誌の存在を知ってふと自分の事を書いて見たくなりそれによって喜びと希望を感じる様な気が致します。でも文才のない私はただ思い出します断片的にしか書けないのが残念です。

私の家は東京の山手にありました。父は丸

ノ内に事務所のある貿易会社につとめていましたが、私が小学五年の時、上海支店に転勤になったため父母と小学一年の妹との一家四人で上海に渡りました。占領下の上海は日本人が多く渡航していて外地へ来たという感じはあまりしませんでした。私が高女に入学した年、いまでもよく憶えています。寒夜がまだすっかりあけきらぬ頃、揚子江の方でインと砲声がきこえました。海軍が揚子江にいた米英の軍艦を砲撃していたのです。だん／＼に戦局がひっ迫して来ても当時の上海には軍がうんと物資を貯蔵していたのが、在留邦人には何でも特別配給があつて少しも不自由な感じはなく、ただスカートがズボンに変

つた程度でした。ところが昭和二十年の春、父が肺炎であつと云う間になくなりました。父は大学時代サッカーの選手をしていたほど丈夫で大平洋戦争が始まるまではよく外人との試合に出ていました。貿易の方は開店休業状態で軍の物資調達や通釈などをしていましたから、きつと疲労が重なったのでしよう。後にのこされたものはただ呆然とするばかり内地へ帰るにも、もう交通杜絶の状態では仕方がなく会社の厚意でしばらく社宅にいました。私はまもなく卒業して海軍の被服廠に勤めました。女学校時代からたび／＼動員で来た所なので学生生活の延長といった気分でした。そして間もなく終戦をむかえました、外へ出

るのは危険だと云うので鍵をかけて一日中家にとじこもっているばかり、時々支那人が二階へ石を投げたり、玄関の戸をたたいて大声でわめいた事もありました。その年の十月に米軍が上陸して来てやっと街の秩序が保たれホッとなりました。そして私達非戦闘員から内地へ引揚げが始まりました。私達一家は約四百名と共に第二陣に加わりました。荷物は一人あたり二十キロまでとの事で結局フトンとわずかの衣類と身の廻り品を三つの行李につめ籠球部できたえた大柄な私は、セーラー服に紺サージのズボンをはきオカッパ頭にスキー帽といった恰好で行李の一つを背負い一つを手にもち、もう一つを母が背負い、妹も大きなリュックとフロシキ包をもちました。ウーソンの波止場には米軍の上陸用舟艇が私達をまわっていました。舟艇といっても五千トンから七千トンもある大きな船です。波止場では一旦荷物の中味を全部出してアメリカのMP立会で支那人の税関から一人づつ身体検査を受けました。男女二人の検査官の前に行ったとき、だまって万年筆を二本差出すと男の方が受取って一本を女の方に渡し自分もポケットに入れました。それから女の人に大きな建物の中につれて行かれました。ふと気がつくと同じバスケット部にいた一年上の前田さんが素裸にされ壁に向って立っていました。その後で女の検査官が衣類をしらべています。

私もせかされて裸になりました。両手を上にあげ両足を開いて上体を前に傾けると後に廻った検査官は私の片方の尻の肉を掴むようにひねり上げた後、私のぬいだ運動靴のゴム底でピシヤと尻をぶって検査はすみました。何かかくしてはいないか調べていたのだそうで、私は万年筆を出したので何ともなかったのですが、用意のなかった人はいやがらせをされたと船の中で話を聞きました。なつかしい上海にも別れを告げ約一昼夜で長崎に上陸しました。ここでもMPの立会で検査がありました。が、上海で通してもらった腕時計を日本人の検査官に取上げられました。ほかの人も万年筆や時計を全部取上げられましたが、それ等は皆彼等のポケットにはいったらしいのです。日本人同志だのにヒドイ事をする皆泣いて怒ったものです。

こうして一家三人は母方の叔父をたよって大阪の郊外にたどりつき、離れ座敷をかりて落ちつきました。しかし売食いする物もない私達は殆んどその日から食べる物もない有様でした。一人千円しか持って帰れなかったお金はすぐなくなり、役所ずとめの叔父には援助してもらえず母が近所の仕立物を引受け、私が買出しに行ったりして辛うじて生きていくだけでした。わずかのフトンに空腹をかかえて三人でガタガタふるえながらだき合っ

寝た事もありました。その間の辛かった事や悲しかった事は数え上げればきりがなく今思い出しても胸が痛くなります。裾を少しみじかく切った父のズボンにこれも父の上衣を仕立直した上衣を着込み払い下げの腰の高いリュックをかついでその日も岡山へ買出しに出かけました。昔風の細いズボンでは尻の丸い線がはつきり出て妙な恰好だったでしょうが、その頃は恰好などあまり構っている人は少なかったのです。それでも頭だけはパーマをかけていました。外地の高女は上級生でもオカッパでしたのに内地でも下級生でもお下げだったので妹などこちらの学校へ行くのになか／＼髪がのびず大弱りしていたものです。それはさておき、当時大阪でお米は一升百二十十円もするのに岡山県下では六七十円で買えました。半日並んでやっとキップを手に入れました。身動きも出来ないスシ詰のデッキで三四時間も立ん棒の上、農家では泣かんばかりに哀願の果、やっとお米を五六升とさつままいも二貫目を手に入れました。取締りにかかったとき少しでも助かる様にと防弾チョッキ風に縫った三つのフクロにお米を分散し二つを手に入れ一つをおいもと一緒にリュックに入れ一里以上もある田舎道を駅まで歩きました。帰りも勿論列車は超満員で乗ったときはやっどデッキに足がかかった程度でしたが、動き出すと徐々に中にはいる事が出来ました。背中

ツクが宙に浮いたり千斤の重みに感じたりする程もまれ、腰のあたりにびったり誰かの手が触れていてもちよっと身をもんでも大きな荷物をもっているため肩身がせまく周囲から非難の目で見られている様で気持の悪いのをじっと辛棒しなければなりません。やと洗面所の所まで押し込まれると中に買出しの常連らしい数人の若い男女が大声で「帰り船」など歌っていましたが、私の荷物を取って自分等の荷物の上に積んでくれました。彼等は三ノ宮で降りて行きましたが、ふと見ると私の米の包みも彼等にリレー式にはこぼれて行きます。「あのー、それあたしのですけど」とあわてて声をかけましたが聞こえないのか知らん顔です。彼等のこわい目付にもう一度声をかける勇気がありませんでした。おいもだけ残ったリックを背負って大阪駅で城東線に乗りかえようと暗い通路を通ったとき悲しくなって涙の出るのをじっとこらえました。

長い苦しい時期も、私が近所の方のお世話である証券会社につとめる事が出来て、ようやく過ぎたかに思えました。証券界は当時のインフレの波に乗って活況を呈し会社も好景気でお給料も公務員やほかの勤人のベースの三四倍も頂いていました。取引所で株の売買が行われるのは朝九時から十一時までと、午

後一時から二時半までで、私は背が高いので店頭で大きな黒板に刻々変る値段を書き入れるのが仕事でした。最初は銘柄をおぼえるのに苦労しましたが、慣れるにつれ電話を聞きながら市場の電話係の男の子と冗談を云い合っては課長さんにゲンコでぶたれるまねをされたり黒板の前で株価の上り下りに七面鳥の様に変わるお客様の顔色を見て一人でふき出したりしました。

お昼休はみんなでバレーを楽しみました。しかし、それも二年余りでドッジラインとか云う緊縮政策がしかれ出すと、株は下る一方になり中小企業である私の会社はもちこたえがきかず、間もなく営業不振で休業になりました。仕方なく私は少しの退職金を頂いてしばらくお家におりました。二、三の縁談がありました。結婚はもう少し先でよいと思っていました。家庭の事情がまだゆっくり私に結婚について考えさせてくれる余裕がなかったのです。幸い前の会社の重役さんのお世話で株の取引先だったS服飾店に勤める事が出来ました。お店は個人商店ながら繁華街の一角にありました。日に一度、本宅から顔を出す御主人と二十五六の息子さんと私をいれて三人の本店員です。忙しくても賑かでお友達も多く、ハリのあった前の会社に較べると淋しい気がしましたが、それでも就職難の時代にゼイタクは云えないと一生懸命働きまし

た。盛り場の朝はおそく九時過ぎにお店に行き二階でスカートをスラックスにはきがえ半時間程かかってタイル張りの床を水で洗い陳列のガラス棚の拭き掃除をします。このズボンは紺色の七分丈スラックスで掃除のとき衣服がよごれるのでお店から頂いたものですが上り尻の私はお尻だけが後へ突き出した様で最初は変にはずかしい気がしました。それがすむと息子の光夫さんが奥に陣取り三人が適当に売場に散ってお客様を待ちます。十日程たった朝、私がいつもの様にガラス棚に上半身を入れて中腰で拭き掃除をしていると、後に立った光夫さんが「お早う」と私のお尻をポンとたたきました。私もそのまま「お早うございます」と挨拶を返しました。翌朝、同じ様に後から中腰の私の尻をぶってから「どう、もう仕事に慣れた？」と話しかけながらツツミでもうつ様に平手で尻をポン／＼連打します。私はケースからやと上半身を抜いて「いや！」と睨みつけて手を払いますと、ニヤ／＼笑いながらやと向うへ行きました。それから殆んど毎日私が掃除中にそばへやって来てイタツラをされました。彼を避けていてもガラスケースの掃除は私の役目で最後には追いつめられ軽く三つ四つぶたれたりくすぐられました。ほかの女店員さんはただ笑ったり見ているばかりか、かえってそんな事をされるのを待っている様でお店が終っ

てよく彼と映画などに出かけました。私も光夫さんによく誘われましたが、何かなじめないものを感じていつも一人で帰りましたから彼やほかの人たちには私が高慢ちきな女に思われていた様です。

あるお店の休みの日、映画の帰り近くの百貨店の書籍部で婦人雑誌とスタイルブックを買おうとして、ああ、悪魔に見入られたとでもいうのでしょうか、ふとそのうちの一冊をスーツの上衣の下にすべらせ脇でしっかり押え残りの一冊の代金を払って早鐘のように打つ胸を押えながら階段の中程まで来たとき、「ちよっと」と後から呼び止められ振り向くと年配の男の人が私の肩をだく様にして「ちよっと来て下さい」と売場の奥まった事務所に連れて行かれました。「見つかった」と思うと不安と後悔で膝がガクガクふるえましたそんな私を椅子にすわらせ「困りますね、出して下さい」と差出された手に私はだまって脇の下から本を出しました。「見かけたところまだ若いし健康そうだし、別に食べるに困っている様にも見えないのに、どうせ出来心でしょうが」

と噂々ときとされ私は身の置き場もない様な心持でうなだれていましたが、そのうちこのまま許してもらえないかと思ひ希望がわいて来ました。しかしそれは私の一人よがりである事がわかりました。間もなく本署から目のするどい背広を着た若い刑事らしい人が来て私の右手に手錠をかけ、年配の人から書類を受取って連れ出されました。二人が歩いているのをほかの人が見ればアベックが手をつないでいるとしか見えなかったでしょう。手錠のかかった右手首は上衣の裾でかくれ捕縄の端は私服の方のズボンのポケットにはいつているからです。でもアベックと違うのは私の顔が蒼白である事です。何かの雑誌で女スリが刑事に連行される途中色仕掛け許される記事を読みました、今の私には口もきけない程おそろしさに打ちひしがれていました。はいったとたん冷たい感じのする本署の一番奥の畳敷の室に連れられました。ハイヒールをぬいで室の隅の低い机の前にストッキングのまま正坐しました。部屋の中にいた五、六人の人が一齊にこちらを見ました。こんな所へは滅多に若い女なんか来ないのかも知れませんが。私のほか二、三人の男の人が調べられていて、ものすごい剣幕の怒声でどなられたり後手錠のままズボンのバンドもせずに坐らされている人もいました。

私の係の刑事さんは細いカミソリのようなするどい目差で私を睨みつけ「初めてではないだろう」としつように問いつめました。私は額が机につく程うなだれながら自供調書を取られました。刑事さんは部屋の奥に座蒲団を何枚も重ねて坐っているデブプリ肥った人の所で何か話合っていました。やがて私の肩を掴んでつれ出されました。やがて署の建物の裏に別棟になっている留置場の前に出ました。「コンコン」と外からのノックでガチャと鍵をはずす音と共に重そうな入口のドアが開きます。刑事さんは「これを頼みます」と私の肩を押して中に入れ、たんざくのような紙片を中の制服巡査に手渡しました。ちらっと見たその紙片には「窃盗現行、日下絹子、二十二才」と書いてありました。建物をはいつたばかりの二坪程の一室で私は持物を差出し、裸になって婦人警官から身体検査を受けました。「こんな所へ来るの始めてなの？」ときかれて「はい」と答えると頭の髪の中まで手を入れて調べられヘヤーピンを抜かれました。「よろしい」と云われていそいで衣類をつけましたが、ガーターやストッキングなど紐状のものは取上げられたままでした。ガラシとした留置場の中に坐ってはじめて罪のおそろしさと心細さが一度に押し寄せ今まで出なかった涙が後から／＼止めどなく流れました。一睡もせず壁にもたれて夜をすごした私は、翌朝呼び出されてまたあのおそろしい部屋に連れて行かれました。しかしそこにお店の光夫さんが来ているのを見てホッとした気持と穴があればはいりたい程はずかしい思いとが交錯しました。きのうの

刑事さんは「お前ははじめての事だしSさんが責任をもって引取ると云つとられるから今度だけは許してやる。Sさんの云う事をよく聞いて真面目に仿かんといかんぞ」と私をスゴい目でにらみつけました。一時はどうなる事かと気が違いそうだった私も蘇生の思いで走り出したい様なうれしさでした。御主人が防犯協会の役員で私がS店につとめている事を自供しましたので警察から連絡があり、私が出来心だと云うのでSさんが身柄引受人となつて微罪処分というのにしてもらった事を帰り道光夫さんから聞きました。お店へ着くや二階に上りました。この二階は私達が着替えるに使う所で古くなった肱かけ椅子やソファ一が置いてあり押入れはロッカーがわりに店員が使っており隣りのもう一部屋は商品の物置に使われています。椅子に腰かけた道光夫さんの前にうなだれて立たされた私はさんざん嫌味を云われる事だろうと覚悟していましたが「こんな事で気を落さず、明日からまた元氣に来るんだよ」と慰められ「すみません」と心からあやまりました。幸い何も知らない母には「お店が忙しかったので」と一晩明けた事を取っくろつておきました。

翌朝は一番早くお店に行き、いつもの様にガラス棚のふき掃除をしていますと奥から出て来た道光夫さんが後に立ちました。昨日のお礼を云おうと上半身をケースから抜こうとする私を後から押す様に腰をささえ「どうや、元氣か」と云いながら私が強いて抵抗しないのいい事に二つ三つ尻をぶつてからプチッとつねって行つてしまいました。ほかの店員さんに知られていないかと心配していましたが、道光夫さん以外誰にも知られていないらしいのが唯一の私の救いでした。

お店のしまる頃になり、やれやれと思つて帰り仕度を始めると道光夫さんに「ちよつと」と二階に呼ばれ、また椅子の前に立たされました。私のアゴに手をかけて顔を上げさせてから「俺は君の事を思つてほかの者にはだまつていてやるんだが、俺は君を更生させる義務があるし、このままではほかの者にしめしがつかないからね、これからお前に罰を加えるぞ」と云い出しました。最初私は聞き違えたのかと思ひ、次に冗談だろうと思ひました。でもきのうまでの「日下さん」が「お前」に変わり、しかも彼のすつかり高圧的な語調を感じて、体がふるえるようなくやしさをおぼえました。もう彼にはさからえない弱みを持ったのを知りました。椅子の上に先に革の輪のついた乗馬鞭があるのを見ながらだまつて立っていますと立上つた彼は鞭を手に取り「女の尻と牛の尻は三日目にたたけと云うからな、二度とあんな事をしない様尻をたたいてやろう」と云います。「どうなさるの？」

気が遠くなりそうな屈辱感に耐えながらやつと口を開きました。きつと声がふるえていたに違いありません。

「向うをむいて、両手を上げて、早うせい」彼にせかさながら浅ましいポーズを取りました。毛糸の短いカーデイガンの下には切れそうな私のお尻がズボンを通してくつきり線を表していた事でしよう。お尻をぶたれるだけで彼の胸だけにすべてをしまつていくれるなら、と観念して彼の鞭を待ちました。「ビシッ」と鈍い音と共にズボンの布地を通して尻全体がしびれる様な痛みを感じました。手を下してさすりたいたのをこらえていると、続いて二つ三つとうたれとうとう耐え切れず「ああ」と悲鳴を上げて室の隅に逃げました。彼は目を光らせ、怒つた様な顔つきでだまつています。私は夢中でバッグを拾ひ彼の傍をすり抜けて階段をかけ下り売場の片すみで、ひそ／＼話をしていた二人の視線を感じながら着替えもせずお店を飛び出しました。

「お家に帰つても悲しさとかやしきで晩御飯は咽喉も通らず蒲団にもぐつて長い間泣きました。こんな恥しめを受けても私にはどうしようもない事を知りました。もうお店へも行きたくないのですが、私のお給料をアテにしている母や妹の事を考え、またこのままお店をやめれば後で道光夫さんが私の事を云いふらすか、警察へ訴えるかと思うとお店へ行くよ

り仕方がありませんでした。

翌朝、重い足を引きずって出勤すると幸い

光夫さんは朝早く問屋へ仕入れに行つて留守でした。しかし昼すぎにはもう帰つて来ました。私は彼とつとめて顔をあわさない様にし彼も荷ほどきや取引先との交渉で忙しそうにかけ廻り私など眼中にない様子でした。やつとお店が終り私は二階でスラックスを脱ぎストッキングをはいてスカートを取上げたとき後に人の気配がしてふり向くと光夫さんが立っていました。びっくりして声も出ない私に彼は「昨日で許してやろうと思つたが、お前が途中で逃げたりするからいけないんだ、早く許してもらつ方がいいだろう？」というのです。私は一刻も早くここを出たいのと売場にいるほかの二人に聞かれたくない気持からブルブルふるえながら目を閉じて彼に背を向け両手を上げてパンティだけのお尻を心持ち後へ突き出しました。やがて彼は後から上に上げた私の両手首をとつて後にねじり何時の間にか取り出した布紐をからみつかせました。

「あつ、いや！」びっくりした私は、反射的に彼の手を振りほどきましたが、彼は別にあわてた様子もなく「いやならいやでいいんだよ、お前の事はもうどうだろうと責任は持たんぞ」とおどしました。

くやしさに唇がふるえて何も云えず、どうせこの人には何もかも知られていると思うと強いて抵抗できず「どうしよう、どうしよう」と頭の中がぐる／＼廻る様でした。

「さあ、悪い事をしたら、罰を受けるのが、当り前だよ、本当なら今頃はクサイ飯を食つて缶かされてゐるんだぞ」といいながら部屋の隅にすくんでいる私に近寄り今度はゆっくり両手を背中に合せて縛り、うなだれている首に縄をかけ、グツと引きました。首にかかった縄の痛みと両手首をつられて抜ける様な二の腕の痛みに「いたい！ いたい！」と悲鳴を上げ、あごを出し上体を平になる程かがめて少しでも痛みから逃れ様と身をまがきました。彼は首にかけた縄を再び手首にまいて結び左手で縄尻を引き右手に昨日の鞭をもつて、もがき廻る私の尻を「ピシリ」とぶちました。「ああッ」パンティだけのお尻には頭の先までしびれる様な痛みが走り、絶望的な悲鳴を上げて彼を見上げましたが、彼は私の泣き声に頓着なく肩先を突いて「あゆめ、あゆめ」とせき立てます。縄のくい込むのを少しでもゆるめ様と両腕を出来るだけ背中に上げあごを出し上体を倒し、つま先立ちになつてお尻を必死に左右に振つて彼の鞭を逃れようとしたが、彼の鞭は私が一歩あゆむごとに正確に吸い着く様な音を立てて加えられました。

「はなして、はなして」悲鳴とも泣き声ともつかない叫び声を上げて頭をもたげると柱にかかった長細い鏡に一瞬私の泣き顔がかすめました。

ようやく引廻しがすんで床に坐つた私を彼は後で縄尻を握りながらいつまでも見下していました。「何をされるのだろう」と身を固くして首をねじつて後の気配をうかがつていと彼は自分のネクタイをはずし後から近づいてきました。

(未完)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く読者の皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えなし)

△編集部▽

東京租界

旭

森

薫

トーキョー租界。夜の東京の実態を良く識った社会部のブン屋などは、よくこんな言葉を使う。かつて上海は魔都と呼ばれ、そこには植民地に寄生する悪の花が租界を中心として咲き乱れた。それは植民地の典型的な形だった。だが現在の東京は、かつての上海と比較して決して優るとも劣らない状態にある。

いまや東京は不良外人達のこよなき巢窟であり、悪の温床であり天国でもある。東西兩陣営の真唯中にはさまれたこゝ東京には、日本人には全く気付かれないままに、双方のスパイが火花を散らし、暗黒街の王者達が巷に君臨する。夜を徹しての国際賭博が、ネオンの輝く豪華なナイトクラブに半ば公然と開帳される。そこには密輸品が山と積まれる。酒、宝石、貴金属、時計、そして阿片も白い女も陰謀が渦まき、暴力が横行し、殺人さえも稀でない。ときたま行われる警視庁の手入れなどは、これらの不良外人たちにとって何の痛

痒も感じない、その根を絶つどころか、ますます繁栄し横行するばかりである、マゾヒストやサチスト達の垂涎する「鞭の家」さえ、この広い東京の闇空の下に現実に存在するのだ。

東京は夜の都であり、シカゴに劣らぬ暗黒の街だ。

だが表面の東京は平和そのものである。こゝ銀座四丁目、尾張町の交差点では、服部時計店の大時計がやがて八時を示そうとしている。車道には洪水のような車がヘッドライトを輝かせて馳せ交い、初秋の宵を楽しむ若いアベック達、社用、公用族、はては遅刻したバーの女給たちまでが雑沓を造って歩道に溢れ、思い思いの方向に流れていく。屈託のない生気に満ちた顔が流れていく、そんな平和な風景だ。

午後八時

服部時計店の長針がきっちり十二の文字に

重るとき、今流行のマグネットラインの洋服に帽子、ダイヤ入りヤリングにスエードのハイヒール、帽子の天辺から靴の先まで、一寸の隙もない服装の女が四丁目の角を曲り、新橋方面へゆっくりゆっくり歩いて行く、流行の尖端を切ると自負する銀座人種が期せずして振返る、豪華な衣服に、美しい容貌や均整のとれた体がピツタリとマッチして振返る若い男女たちから思わず溜息が洩れそうだ。やがて右へ曲って大きな喫茶店へ、なんのためらいもなく消える。窓が一つもない四階建の途方もなく大きい建物で経営者が第三国人であるとの噂のある喫茶店だ。

午後八時三十分

四階の一番隅のテーブルで、空になったコーヒー茶碗を前にしばらく楽団の演奏する軽い音楽に耳を傾けていた彼女は、フト立上って隅にあるドアを押した。薄暗い照明の客の少いこの隅では誰も気がつくまい。またたえ気がついたとしてもトイレ位にしか思うまい。

彼女の開いたドアの裏側は、平常は誰も使わない屋内非常階段であった。淡い電灯が灯り掃除も行届かぬとみえて埃がたまっている、彼女は何の躊躇もなくまっすぐに階下へ降り、地下室へ、ドアにぶつかるとノックする、トントントン続けて二つ、間を置いてまた二つ、ドアの硝子窓に人影が映り、彼女を確認

すると開かれて中へ。そこは外の汚れた階段とは対照的に明るい螢光灯のもとに真赤な絨氈が敷き詰められて輝いている、廊下の突当りでまたドア、ノックが繰返され、小窓が開かれ確認が行われると開かれる、ためらいもなく端から三番目の入口の中へ消えた。

九時

彼女は華やかなナイトガウンに着替えて中央の寝台に腰かけている、五坪ほどもある洋間の中央にダブルベッド、彼女の腰掛けているけれど、部屋の隅にはソファが一つ、それと対称の隅に鏡台が置かれ、はめこみの洋服ダンスが隣にある、そしてもう一隅にはバスとトイレの扉がある。どこのホテルの部屋にもありそうな家具類だ。しかしこゝには奇妙にも体操に使う鞍馬が一台置かれている。窓のないこの地下室の白い壁に鞭が二本掛っているのが人目を惹く。よくみると鞍馬の四本の脚には鉄の輪がはめこまれている。そればかりでなくベッドにも鎖のついた手錠、足かせが羽根布団の下に隠されているのだ。

やがて彼女は、行儀悪く両脚をベッドの鉄枠に載せ、ガウンのポケットから煙草とマッチを取出して火をつけ、口に啜えろとしばしの物想いにふけり始めた。……

……たった二ヶ月ほど前までは、彼女は本当に幸福だったのだ、それが運命の女神の一寸した気紛れで、悪魔に魅入られ、今日まで

の二ヶ月の間、毎日毎日泣き暮して来た自分の悲しい運命を呪わずにはいられなかった。そしてそのことを思うたびに流して益のないこととは知りながら、やはり涙を流さない訳にはいられなかった。二ヶ月前には今のようには洋服も、宝石も、金もなかった、けれど商社のうちでは比較的大きな会社の有能な英文タイピストとして楽しい日々の連続だったしそこには青春の夢と希望があった。現在の彼女は金も、美しい着物も宝石も、そして豪華な生活もあるけれど、かつての清純な体は汚され、整った白い体には鞭の跡が残り、体の内部は毎日毎日麻薬に冒されむしばまれていたのだ。毎日同じような思い出にふけるのだけれど、思い出しても仕方のないことなのだが、つい思い出さずにはいられないのだ。……

……それは丁度、二カ月前の未だ暑さが厳しい夏の宵だった。チャホヤするだけの男友達なら何人もいるが本当に恋人として信頼するに足る若者の未だいなかった彼女は、唯一人H劇場で映画をみての帰り途だった。今終った映画の甘いロマンチズムの夢を駅の雑沓の中で潰してしまうことがいかにも勿体ないような気がして、ワザと遠廻りしてT駅へと暗いビルの谷間を歩いていった。昼間と違って人影は殆んど見当らなかったが、田舎ならしいが知らずこの東京の下真中でまさかそのような運命が待受けていようとは、彼女なら

ずとも考えることが出来なかった。しかし悪魔は長い時間をかけて周到な網を廻らしていたのだ。

暗い中世風な赤煉瓦の建物の陰から来た自動車のヘッドライトを彼女は背後に感じた。「ギギ」とブレーキの音とともに運転台から半身を乗出した外人が片言で何か話しかけた。英会語に自身のある彼女は道でも尋ねられたのだろうと気軽に運転台に歩み寄ったがその後から来たもう一台の車から二人の男が背後に回っていることには全く気付かなかった。それはアッと叫ぶ間もないほど一瞬の出来事だった。三人の男たちに車に引ずり込まれ、奇妙な嗅のする麻酔薬をかがされて、そのまゝ意識を失ってしまった。真に恐怖に満ちた瞬間ではあった。……

……彼女が気がついた時には、現在座っているのと全く同じ構造の部屋に閉じ込められていた。ドアは固く締められていた。彼女の必死の努力も全く空しいものであることが一時間もたないうちにはっきり判った。何故閉じ込められたか、何故連れられて来たのか、すべてが彼女にとって謎だった。しかし閉じ込められたことは紛れのない事実だった。そのことが急に涙を誘い、ベッドに倚ってサメザメと泣いた。

天井にある光線とりの透明な窓の光が、電気から日光に変わり、そして又電気になってし

ばらく経った頃、医者 of 服装をした大柄の外人が入って来た。彼女はそれを押除けて必死の脱出を図ったが苦もなく押倒され、何やら腕に注射され再び意識を失った。……

……懶い幻想と淡い現実の織りなす快い世界にしばしの遊歩を楽しんだ彼女は、意識が次第に明瞭になってくるにつれて、自分が鞍馬の上に跨っており、自分の臀部に鞭が加えられていることに気がつき始めた、まだ完全に意識が回復せず、懶い幻想の世界から抜け切らぬ身には尻の痛みが陶醉と混和して、しばらくは一種の快感にさえ感じられた。しかし醒めるに従って耳につく「ビュー」と鞭の空を切る鋭い響に、動物的な本能から避けようと試みたが、鞍馬の足に固くはめ込まれた鉄の輪は、彼女の四肢にしっかりと喰込んで、空しく尻を左に右にくねらせるに過ぎなかった、彼女を鞭打っていたのは乗馬靴に乗馬ズボン、モーニングにシルクハットまで揃えた完全なサーカスの猛獣使の服装に身を固めた三十がらみの女だった。その日本人ばなれした筋の通った高い鼻がいかにも残忍そうな性格を表現していた。……

……日夜一人になると彼女は自分の悲しい運命に泣いた。しかし彼女の悲しみや涙と関係なく注射と鞭打の日課は続けられた。やがて彼女は鞭打の女が二世であり、鞭打はこゝへ集る客に前座として観覧させるもので光線



りの窓から覗いていることだとか、その際にはわざと尻をくねらせるように鞭の使い方を工夫していることだとか、注射の薬は麻薬であることだとか、男はこゝのマネージャーであることだとか、いろいろな事を知ることが出来た。それを知って又悲しんだが、悲しんだとて仕方のないことだった。……

……こんな日が半月も続いたろうが。やがて日々の注射が待ち遠しくなるようになった。正確に十時になるとマネージャーは現れ

て注射をするのだが、その三十分ほど前になると不思議に体に震えがき、呼吸が苦しくなってくるのだ。禁断症状だ。鞭の痛みさえもたまらなく恋しくなってくるのである。不思議な麻薬の力だった。……

……こんな状態のある日、彼女は始めて客をとらされた。鞍馬の上で陶醉から醒め、鞭の痛みがいつもと違うことに気づいた時、それはいつもの二世女でなくて見知らぬ男であることに気がついた。しかし彼女は男に何の

抵抗もしなかった。凡ては諦めが支配していた。ただ大人しく鞭打たれ、ベッドで男の要求を満たしてやった。その男が帰ったあとでは憎しみを感じたが、それも二、三日同じことを続けるうちに憎しみは諦めにとって代っていた。

毎日異った客がやって来た。ある男は鞭打つことだけが目的のように鞭を使った。またある男はまるで赤ん坊でもあやすように鞭を使った。……

……半月ほど前、突然思いがけもなく解放された。全く思いがけなく。洋服と金と、アパートの鍵を与えられて、彼女の周りには、外界の光を遮る固い壁はもうなかった。彼女は自由になったようにみえる、しかし悪魔たちはみすみすこの金の卵を産む美しい人魚を再び海へ放すようなことをする筈はなかった。壁はもうなかったけれど、目に見えない紐が十重、二十重にからみついて、夜になるとたぐり寄せる仕組になっていたのだ。麻薬という紐が、

解放されると同時にまず警察に飛込もうと思ったりした。けれどももう完全に麻薬のとりことなっている身には、警察へ訴えることは麻薬との絶縁を意味し、それは死よりも苦しい拷問に等しかった。また失われた純潔が帰って来るといってもなかつた。

アパートには何時の間にか彼女の荷物が運

び込まれていたし、以前の会社には保証人の名で退社願も提出されてあった。彼女さえ黙っていればこの東京で誰も怪しむものはないのだ。一CCの麻薬のほかに一日十弗が与えられることになっていた。十弗といえば重役級の収入であり豪華な生活も衣服も一応は保証されるのだ。「黙って九時半にこゝへ来れば良い。」マネージャーの片言の日本語が痛いように耳に残った。

そして一CCの麻薬と十弗のために現在まで毎日こゝへ引寄せられているのだ。……こゝまで回想すると、にわかに体に震えがやって来た。そろそろ麻薬の切れる時間だ。

九時三十分

マネージャーが入って来る、禁断症状の来た彼女は苦しげにベッドの上をのた打ち廻っている。手をしっかり押えて注射。やがて静かに混酔に入る。ガウンを脱がせ布団をかけて出て行く。

十時二十分

一人の客が入って来る。今晚は全く珍らしく女の客だ、長身の体に乗馬ズボンと乗馬靴が良く似合う。二世の女と違う外人の女だ。混酔状態の彼女を軽々と抱き上げると鞍馬にうつ向けに跨らせて、両手足を鉄輪にはめ込む。

十時三十分

鞍馬上の彼女の意識が回復し始める。部屋

の隅へツカツカと歩いていった外人の女は、長い方の鞭を手にとると「ヒュー」と二振り三振り、素振りをくれてその歪み度合をためす。彼女の意識は大分醒めてきた様子だ。女は背後に廻って足場をはかると、大きく振かぶって豊満な臀部へ力一杯振おろす。盛り上った肉が鈍い音をたて、喰込んだ鞭はくつきりと赤い跡を残し尻全体がピクピクと軽い痙攣を起す。と同時に鋭い悲鳴が彼女の口から洩れる、しかし彼女は冷静に無慈悲に赤い鞭跡を狙って、二度三度振りおろす。鋭い切れするような悲鳴が続く、だが悲鳴はかえって女を興奮させる効果があったのだろうか。鞭の使い方がにはかに激しく早くなっていく。ピシピシという鞭の肉に喰込む音。興奮した女の発する奇妙なかけ声。そして鋭い悲鳴。これらが入混って狭い部屋の中には異様な雰囲気が高まっていく。

十一時

部屋にはもう女の姿はない。彼女は疲れ切った体を仰向けにベッドに横たえる、傍に女の子がクリームを赤く腫れあがった彼女の肌にすり込んでマッサージを繰返している。

午前〇時三十分

銀座通りにはもう人影もまばらだ。時たま酔客が大声を張り上げて通るくらいだ。タクシーを待つ彼女の姿も遅い女給の帰りかと怪しむものもない。

今宵も銀座は平和に暮れたようだ。



(私のイメージ)

麻 醉 切 腹

青 葉 楨 一

これを、何だと、おっしゃるんですか？

この、アルコール漬はね、人間の腸なんです。もつとも、全部ではありません。大腸の約半分なんです。——。よかったら、もつと近くでござらんさい。

これ、誰の腸だと思います？ 実はね。私のなんです。ハハ、そうお驚きになるには及びません。

ええ。いいですとも。お話ししましょう。もともと、そのつもりで、貴方に来ていたんだんです。まア、コーヒーでも入れながら、ゆっくり始めることにしようじやありませんか——。

私が、熱烈な切腹願望の持主であるのは、貴方も既に御存知でした。それなら、話もしやすいというものです。

腸に向けられた、燃えるような、ナルチシ

シズムと自虐が、何んな事をしてでも、自分の腸を露出させ、この眼で見、この手で触れないでは、いらなくなっただけですねえ。と。いって、本当に切腹したのでは、実際問題として、苦病が大き過ぎるために、肝腎な悦虐を損われる虞れがあるんです。苦痛と悦虐の大きさは、正比例するように考える人も多いと思いますが、現実には、さア、何うでしょうかね。必ずしも、そうでない場合だって、あるんじゃないでしょうか。そうや、自虐も含めて、マゾでは、苦痛即快感ですからね。苦痛が無いんじゃないやア意味はありません。

ところがですよ、私の切腹は、ただ腸を握みだすだけは、駐目なんです。つまり、腸を愛撫する時間が要るんですね。だから、苦痛が余り大き過ぎては、無理なんです。何とかして、疼痛を或る程度迄、緩和する必要があります。で、思いついたのが、中学時代の

友人で、今は外科を開業している、水野でした。ええ、そう。水野外科の院長ですよ。

切腹の補助と、後の処理。それに、大腸の切除とを依頼したとき、勿論、彼も一度は拒絶しましたがね、とうとう、しまいにば拝み倒しました。

いよいよ入院という日。私は、六尺褌を確く締め、和服に袴を着けて出掛けました。切腹にふさわしい恰好を選んだわけですが、私は教員ですからね、何時でも、和服のときは袴を穿きます。何も、特別に変わった扮装を穿えただけでもないんです。

何しろ、事が事でしよう。秘密裡に行うように、看護婦の手は使わず、一切を、水野一人でやってくれることになりました。

深夜の手術室へ案内されたときは、さすがに緊張しました。私は。そこでもう、すぐにも切腹が出来るつもりで、用意して来

た短刀を取出したんですが、仲々そうはいかないんです。水野のの命令で、私は先ず裸にさせられました。裸も脱れと云うから、その通りにしました。

さて、私は、手術室の一隅を、ビニールのカーテンで仕切った小部屋へ、連れていかれました。そこには、恰で巨大な俎のような、木の寝台がありましたよ。云われるままに、私がその上に寝ますとね、もうすぐ側に、イリリガートルが運ばれて来ているんです。そのとき、私は、フツと妙なことを思出したんです。中学時代の水野は、非常な秀才でした。家庭もいいし、容貌や体格も、人並優れている。私は、友達でありながら、彼の前へ出ると、何うしても、コンプレックスを抱いちやうんですね。手術着を着た水野は、昔のように、冷笑を浮べた眼付で私の顔を見ながら、ゆっくりと尿管を挿込んでいます。私は不意に、激しい羞恥に襲われて、身が慄むようでした。催下浣腸が済んで、便をとり、次は、腸洗滌です。やつのことでそれも済みましたが、未だ切腹は許されません。

水野は、今度は剃刀を手にとったんです。ナニ、考えてみれば、手術の前に毛を除くのは、至極当り前の事です。貴方は、手術経の験が無いでしょうが、私の知ってる男で、彼はマゾなんだか、盲腸の手術をしましてね。看護婦に毛を剃られたとき、昂奮して困った

って云ってましたよ。私も、浣腸に続いて剃毛され、被虐感が、微醺のように五官をまわって、陶然となっていました。

やがて、マネキン人形のボディのように、スベスベになった私の身体は、水野に、ホースの水で充分に洗われ、そこで初めて、手術台へのせて貰えたんです。

局部麻酔の注射が、何本か、腸へうたれると、私は、狭い手術台の上にキチンと坐り、無影灯の光の中で、呼吸を調べ、作法通り短刀をあてがいました。昂奮に顫える手を励しながら、下腹部に力を入れ、腹筋を張って、グツと押すと、案外楽にプスリと刺さりまし

た。麻酔がしてあるとはいっても、完全でないで、激しい痛みこそありませんが、圧しつけられるような鈍痛が、ズンと響いてきます。私は息を止め、激情に委せて、ギリギリと切裂いていきました。全身からは、油汗が噴出してきます。私はもう夢中で、啜泣くような呻きをあげながら、裂目に手をつっこみ生暖い腸管を、掴みだしました。鮮月をはねかえし、はねかえし、誘われるように、後から後からと、押出されてくる腸を、私は両手に抱えとり、握っては離し、握っては離しして、ヌメヌメした感触と、快い弾力を悦びました。

するうちに、私は自分でも気付かないでしたが、苦しさの余り、倒れかかったようでした。

た。水野が手を借して、仰向けに寝かしてくれましたが、私は、それでも腸を離さないで胸の上迄も手繰り上げ、唇をつけたたり、頬に当てたりして、愛撫を止めようとはしなかったんです。

でも、やがて、私は、失禁したかと思うとそのまま、スツと意識を失ってしまいました。

私が退院したのは、それから二ヶ月目でした。この、アルコール漬の壺を、大切に抱えて帰って来たんですよ。

オヤ、お顔の色が、よくありませんね。

少し窓を開けましょうか？

いいんですか——？

じゃア、コーヒーを入れかえましょう。今度は、もっと濃くして……。

え？ 大腸を半分もとってしまつて、大丈夫

夫かつて、おっしやんですか？

ホラ、何とかいう流行歌手も、癌で、大腸を半分切りとつたって云うじゃアありませんか。それでも、昔に変わらぬ美声で歌ってますよ。ソウ、ソウ、今度は丁度、ラジオへ出る筈ですよ。スイッチを入れてみましょう。

(おわり)

遊女八重路の責め

本 田 由 郎

(1)

本所割下水の先の、亀戸村、この亀戸村には名所の五百羅漢寺が有り、日中はそれでも信心氣の多い男女の数組の参詣人の姿が見られるが、日の暮れ近くなると鐘一つ売れぬことなしと今を盛りの江戸でも、人の子一人通らぬ野原に交つてしまふのだが、日も西に落ちて夜の幕の垂れ始めた野原の一本道を珍らしく一組の男女が歩いてゐる。

男は当時流行の博多紺地に白の一本独結、素足に雪駄ばき、日にやけたその顔は浅黒く苦み走った好男子と云ったところ、年は二十六、七、ただ眼が時々剣を含む。連れの女を見ると、男と反して、着物の色はあせ、どう見ても田舎者の丸出しで、只田舎出には珍しく爪実顔で三日月の眉、涼しげな黒い瞳、すうと伸びた高い鼻、江戸の水でみがき上げた

ら江戸府中でも名の通った美人と成ることだろう。

男が静かにささやきかけた。今にどうなるのか自分の運命をしらぬ女は、男に答えて微笑さえ送っている。この男は只のネズミではなく、割下水に住んでいるその附近を縄ばりとする清吉と云う色事師で清吉の手にかかつて、幾人の清い乙女が不幸な思いをしていることか。この女の美しさに上玉と眼をつけ、小当りに当りをつけた。田舎出の女は清吉の身なりや言葉つきから、そんな恐い男とは露しらず市川の在からきた高と女は名前を名づけた。清吉はしめたと内心思った。十六、七の田舎娘になんの手管がいろ。おなにかゝったうさぎ同様、生かすも殺すも思ひのまゝだ。清吉は親切げに言葉をつづけた。「お高さん、お前さんこれからどこへ行きなさるんだい」

「はい、私は市川在で百姓をしておりましたが、いやでいやで逃げてまいりました。」

お高は家出をしてきたものゝ、大金を持って逃げ出した訳ではなし、江戸に親類が有るでもなかった。その上、野原の一本道で思ひあぐんでいる時、清吉に親切に言葉をかけられたのだから、大海で一本のわらを見つけた様な心持であるにちがいない。

「お高さん、どうしてまたそんな無鉄ぼうなことをしなすったんだ」

「ただなんとなく江戸へでも出てみたらと……」

「それがまちがいの元なんだ。江戸の中と云ったって、本所の端、亀戸村は云ってみりや場末だ。月の無い晩などたちの悪いきつねが人をばかすそうだぜ」

「その話本当ですか」恐ろしそうに身を清吉へ近づけていった。

「今のは冗談だよ、いくら場末だって江戸の中だ、きつねがえんりやすらあな」

笑って云った。お高も共に連れて清吉の軽口に微笑した。

「俺も江戸で生れて江戸で住した人間だ。この近くじゃ、ちよっとした顔だ。お高さんの一人ぐらい宿めて貰らえる家が有る、ほんの一丁場だ。そこで今晚一晩ゆっくり考えなさい」

「はい、有難う御座います。なんと云ってお

礼してよいのか、お礼の言葉も有りません」
清吉の親切にほだされて、眼には涙さえ浮べて感謝している。この人になら、私の総べてを相談してみようと、お高は心の奥でしっかりときめていた。お高の体を一べつして、清吉はその値ぶみをしていた。どうみても三十両とは下らない上玉だ。俺としちやとんだ福の神が転げ込んだというものだ。このごろしけつづきの清吉は笑がこみ上げるのを無理にかみ殺していた。

(2)

可愛そうに、お高はその晩、清吉の悪仲間の新介の家で、清い乙女の花を散らしてしまった。この人だけはと信じきっていた人に裏切れ、その上、肉体までも生きる屍と化してしまった清吉がこのお高をあやつった。右を向けと云えば、右を向き、左を向けと云えば左を向いた。

「お高、実はすまねえ話なんだが、二年ばかり、ある店に勤めてみねか」

清吉にそう云われると、そのきになって勤めてみよ

うかとお高は答えた。

「そりや、大きにすまねい」

馬鹿な女てめいが女郎に売られるに。清吉は腹の中でペロリと赤い舌を出した。数日後清吉との仲間を通して、お高は新宿の宿場女郎に売られてしまった。お高にとってはずっと多くの災難、昨日まで見もしらずの清吉と云う赤の他人の為に、自分の身体は三十両の金に変えられてしまったのだ。昨日に変わる今日

の自分に、おどろき、悲しみに泣いてくらし

た。
店の主人源三に脅迫半分の言葉でそそのかされて、八重路と名乗って店に出たものの、生来の美しさの上に年も若いのだが、わざと客あつかいを悪くして店の名前まで落してしまった。源三はお高の八重路に再三口で注意したのだが、八重路の行状はなおらず、前にも増して怠けた。源三は八重路の行状には腹をすえかね、又、店に仿く

他の女達への見せしめをもかねて八重路を折檻することにした。八重路は源三始め、やり手ばあさんや二人の下廻りの男により、拷問専用の仕置部屋につれこまれ、責めさいなまれた。

源三は手始めとして、八重路の臀部を伝馬町にある女牢で私刑につかっていると云われるキメ板で叩かせた。「思っきり叩いてやりな」源三の声で八重路の体にキメ板が名状しがたい音を立てた。十回二十回とキメ板は八重路の尻を目がけて、するどくふりおろされていった。三十回目のキメ



板が鳴ると、同時に、さすがの八重路も、くったりと俯伏に伸びてしまった。八重路の伸びた体に、水桶の水が全身を洗い流すほどに何杯となく掛けられた。滝つぼでいのる行者にもにて、着物をびっしりぬらした。

「ううー」とうめき、八重路が身をおこそうとすると、源三の足が八重路の体に飛んでいって、「ガッー」にぶい音と共に、ぼったりと再び八重路の体は、地面に俯伏になってしまふ。俯伏になったその体に数人がよってたかって、太縄で後手にしぼり上げた。乳に食いこむ縄が身に沁みる。フラッターとしてのめりそうになりながら、引立られ、クロロ仕掛の滑車の下につれてゆかれた。滑車からは、大い綱が通され、下にぶらさがっている。八重路の後手にしぼられた縄に、滑車からさがった太綱に連がれた。吊し責めが八重路に今加えられようとしている。滑車がギシギシと不気味な音を立て、動きだした。綱の先端には、八重路の生身の身体が繋がれている。滑車のきしむ音のたびに、八重路の身体は、一寸きざみに地上から離れて行った。

「店の女達全部を連れてこい。この女の苦しむ様子を見せてやるんだ」

源三は大声をあげた。店の女は全部が、この拷問部屋の前にあつめられた。部屋の中では八重路の身体は完全に吊し上げられ、足は地面から二尺近くも離れた所に止っている。

「どうだい、苦しいか」

源三は八重路の苦しんでいるのを、百も承知で問い掛ける。

「苦しいござんすよ、私だって生身ですから」八重路の乳房に縄が喰いこんで、息を吸うのがせい一パイで、源三へ答える言葉もどぎれがちだった。源三は八重路が十分に苦痛にあえいでいるのを知ると、部屋の前で女達に「部屋の中に入ってこい」と言葉をかけた。女達はそろそろと入ってきた。部屋で責められている姿を見て、その光景に目をおい、顔をかくす女もいたが、長年ここにいる女は、この様な光景を見なれた為か、平気な顔で見つめている者が多かった。女達が全部部屋の中に入ったのをしおに、源三の手に革で作られた先に輪のついたムチがにぎられた。

「どうだい、八重路、高い所からの江戸の町中をながめる気持は」

その言葉の云い終るか、終らぬうちに、八重路の身体にムチがふりおろされた。「ビシリ、ビシリ」ぬれぞうきんを叩く様な音をさせながら、八重路の身体の上でムチが鳴った。見ている女達の中には眼をおい、耳をふさいでいる者もあった。吊された八重路の身体はムチうたれるたびに、時計の振りみたいに空中で舞った。厳しく縛られた縄は胸乳に苦しく、疼痛を身体に加えてきた。眼の前が暗くなり、眼前でムチをふるっている源三

の姿さえ、ぼうと霞んで見えた。失神寸前、八重路の身体は下に落された。疲れきった八重路は床の上に、一リシの花が乱れ咲いたかと思われる様に崩れたおれた。この世に極楽が在るのなら、これが極楽だと八重路は思った。だがこの極楽も長くは続かなかった。八重路の落された訳は、着物のまゝで責めても面白くないから、裸体で責めると、源三が云ったからだ。八重路はそんな話が眼の前で相談されても、苦痛のために、なにを話されてもしることが出来なかった。縄が解かれたとき、これで助かったのかと思った。が、すぐそのあとから、そんな考えの甘かったことを十分にしらされた。

「八重路、もう一度高い所から、江戸見物させてやるのさ、着物を着ての江戸見物はだれでもやるさ。お前さんには、素裸で江戸見物をやってもらうさ。風流な話さ」見ているうちに、一枚一枚着物をはがされ、そのはがすたびに、芋ころ同様にごろごろ音がされていた。いくら体をこころがされても、八重路には、抵抗する氣力を無くしてしまっている。ついに着物ははがされ、下半身に赤い湯文字一枚身につけただけの裸にされ滑車の綱に繋がれた。「今責めたまゝで、すぐ責めなおすのも可愛そうだ、俺の情だ、一杯水を吞してやりな」滑車に繋がした不自由の身を、おこして八重路は無言のまゝ一氣に吞み干した。

「水も呑み終ったらしいな、ぼつ／＼責め始めるぞ、それ八重路を吊し上げる」源三の命令で半裸の八重路は吊し上って行く、引上げられるとき縄が上半身から乳房や手にじかに苦痛が加った。この苦痛は、いかにかりか。ただ歯を喰いしばって苦しさをこらえている。

滑車にしばられた後手が、滑車にとどくかと思ふ所まで高々と吊し上られ、八重路の体は止った。喰いしばった歯の間から、もれる苦痛の声、腹部は息をするたび波のように大きく動いて、赤い湯文字のすそから白い足が、両膝をのぞかしている。「八重路、裸体でしかも二ど目の江戸見物の様子は」にがにがしく言った「どうなんだい。江戸の様子はよ」答ようとしても、八重路にはのどが息苦しくて声が出ないのだ。声の出ないほど苦しんでいゝる八重路なのに、いじ悪く、なお問いつづけた。答ることができないと源三は見て「八重路、答えられないのか、答えられないなら、お前の体に聞く」革のムチはピーンと風を切って裸体の肌に飛んでいた。肌にムチが当たるとピーン、ピーンと前の時に増して裸体の肌に激しく鳴った。八重路は瞳みをカッと見開き、声にならない。悲痛なうめきをあげ湯文字のすそをばた／＼させてムチを逃げよう苦痛を弱めようとするのだが、空中に吊られていゝるかなしさ、むだな努力であった。只々足をばた／＼動かすことが八重路に、あた

えられた一つの自由なのだ。源三のムチは増々激しさが加わる一方であった。八重路に悪鬼のぎようそうでムチをあびせた。なまけようしやのないムチの嵐である、ムチの嵐の中で八重路の頭脳に帰去する物は死の影だ。私はこのまま責め殺されるにちがいないと思った。源三のムチは、もう苦痛の感かくを無くしがちな八重路の素肌に鳴りつづけ、ムチを腰部に数回打ったとき、赤い湯文字がほどこけて、足の下に、八重路の運命をあんじするかの様に枯葉にも似て落ちていた。見物させられている女達も、さすがに「あっ」と声をあげてしまった。下半身にまもっていた、湯文字も今は無く、身にまとう物一布なく、大理石柱の二本足。

おりしも夕焼が拷問部屋のうち暗い中にさしこんできた。夕焼の光りに八重路の全裸体が映じて、拷問部屋の中で美しくうかんで上った。一同声なく、源三もこの美しさにみいられてかムチを打つ手をわすれたように立ちつくしている。夕焼が美しくさを増して吊された八重路を、真赤に血で染れたと思われるほど赤々と映じていた。

(3)

その後二、三日間、拷問部屋から八重路の悲鳴が聞えていた。女達はその声を聞くと身の毛のよ立つ思いだ。その声もきこえなくな

った。八重路がとうとう責め殺されたことを感じとったが、八重路と同じ宿命にあうのをおそれて仕事にせいだして一人でも多く客をとった。八重路が死でしまったとした源三は自分が責め殺したのに、猫か犬かのように足げにして、どこかにすてしまえと言って拷問部屋から出てきた。八重路の死体は新宿の宿端に小さな土まん頭を作っただけの墓にほうむられた。墓にだれがあげたのか数本の線香が、八重路の死をかなしむか、吹く風にさびしくなびいていた。数日の間、だれか男が、墓に線香を上げていた。店の女がその男の後姿を見た。女は店の仲間とあの男は、この店に八重路（お高）を売った、清吉ではないかとうわさしあった。そんなことがあってから、一年たち二年たち、小さな土まん頭は、雨風に崩れて、お高の墓が在ることさえわすれられていった。

〔伝言板〕

○中村洋子さん、貴女から送って来られたデリラ・パットや浣腸の話は、そのまま誌上に発表出来ませんので残念ながら没にしました。○日下絹子さん、「ある女給」というのを「ある女給の体験」と直しました。続稿をお送り下さるようお待ちします。○鷹野めぐみさんへ、十二月号で読者通信のみ頂いたように書きましたが、その後すぐ、二回に亘って原稿を受取りました。

女性 の 褌 について

睦 門 長



最近、女性の中にふんどし愛用者の多くなつた事は嬉しい事です。女性は小さな物までも美しく装飾する能力をもち乍ら、大部分の女性が市販の、それも平凡な下着を用いて、特に関心を示さないのが実に不思議です。多くの若い女性が、ストリップの用いるバタフライ、それを貼バタ式からGストリング、ツンパ型、水泳ふんどし、六尺、相撲用等々をコレクションして、しかも日常に愛用したらどんなに素晴らしいでしょう。

奇クに発表してあるふんどし愛用の皆さんは、揃って緊帯感と露出面積の大きさに、併せて日常に用いてある事は嬉しい限りです。緊帯感特に女性に於ては、今更申す迄もな

い事と思われまふ。露出する事は、若い健康な女性ならば身を誇りたいので、自然だと思ひます。露出癖のない女性は私の対照ではありませぬ。(と云つても羞恥心の欠除の事ではない)露出癖のない女性は、女性としての魅力に欠けている者と云つて過言でないと思ひます。身を全体に柔く

美しい線をもち乍ら、たとえ海水着でも完ぺきなまで覆いかくす事は、物足りなく残念な事です。かくれた部分を巧みにして、効果的に露出しては如何?特に白昼の屋外の群衆の中で、それも偶然のいたずらでなく、特殊の衣服をつけて、大胆にしかも美的に露出する事に、露出症としての快感があるものと思ひます。したがってビキニ型水着は、もっと一般に普及していゝと思ひます。又、単に水着のみでなく、服と遊びの制服として、特種な露出を伴う衣服がもっと研究発表されてよいと思ひます。(全くのヌードよりも、私の云う遊びの制服が、より魅力的である事は理解して頂けると存じます)この点、池田ふみ子さんや若柳キヨコさん、それに松原三千代さん等のふんどしには、我意を得たり喜こんでいますが、只単にふんどしのみにとらわれずに、もっと広く対照を求めては如何でしよう。重要な位置をしめる乳房も当然等閑視されてはなりません。七月号だったかに門田奈子さんが発表して居られた様に、紅をさしてイヤリングを下げる事は素晴しくロマンチックな考案だと思ひます。又、ブラジャーの変りに塗料を用いてはどうでしようか。ラツカー、ペンキの類は発汗作用を抑制するので、水にとけないインキとして売出されているマジックインキを使えばいゝでしよう。ブラウ

スは薄いナイロンを用いる事を忘れてはなりません。夏の海水浴に之を利用して、事実上ふんどし一本になつては如何、遊びの制服が密室の道化服になつたのでは、露出欲の満足は得られません。したがって、如何にして部屋着から散歩服に、そして外出用に発展させるかは極めて重要な問題で、特に散歩服や外出用の場合は、事ある際は素早く平凡の服に仕上げる様に、考慮して置く必要があります。かといつて、いつも之を濫用したのではスリルがない。やはり適当な介添者がいるに越した事はない様です。

平凡なフレイヤーのスカートでもチョツとした所で思わぬエロチシズムを發散するものと思ひます。例えばチョツト工夫して、お尻の谷間に喰い込む様にしたり、十八世紀頃に見られるデコルテと云うのか、上半身からウイナスまでキツチリした胴衣に、下は大きく広がったスカート、あれをそのまま現代の服に仕立てて見ても如何。勿論、裸の線はそのまま出して、スカートの中でふんどし様につき合ひ合わせる。又、フレイヤーのスカートを、前後別に仕立てて、そのまゝ合せて用いる。こういった事柄は、大した努力を要せず早速用いられると思ひます。事実、街頭では随分大胆な女性を見受けますから。而して遊びの制服は、もっと大胆奇抜が要求されます。思ひつくまゝに、私のアイデアを二、三紹介して

見ましよう。七月号に門田奈子さんが紹介していられた、乳とお尻の露出するスラックスとブラウスのコンビ、これは面白い発案だと思ひます。ブラウスは部屋着として、スラックスには共布でスカートの後半分を作れば、そのまゝ散歩着になります。タイトのスカートを腰から上を切り取つて細ひもで吊す様に、上は別にフレイヤーのヒップまでの短いスカートをを作る。上半身も同様、乳房の下だけを胴衣に作り、別に肩に羽織る物を用いれば、思わぬ所でとんでもない露出を伴う事になる。極端なタイトで、ヤツト歩行出来る様な服を是非欲しいものです。下着類にも、色々工夫をこらせば面白い物が出来ます。がここでは皆さん方のふんどしについて、勝手に並べさせて頂きましょう。皆さん何れも六尺を第一等に掲げ乍ら、日常愛用にしゆん巡していられますが、前部に紐を通せる様に結グル／＼巻きにせず、全部一重にして後で結ぶ様にすれば、割合に嵩ばらずに、又、トイレで締め直しも簡単に出来ると思ひます。変わった方法として、端を一、二尺余して、前から横に一ト巻いて下腹部で固く結び、長い方の残布で股をくぐらせて後で横紐に通して、そのまゝ再び股間を通して下腹部で大きく蝶結びにし、前に垂してごらん下さい。水泳褌型もこの要領で後を縫付固定して、前は紐状でV型にして、両横紐をV型の中心で結んで、

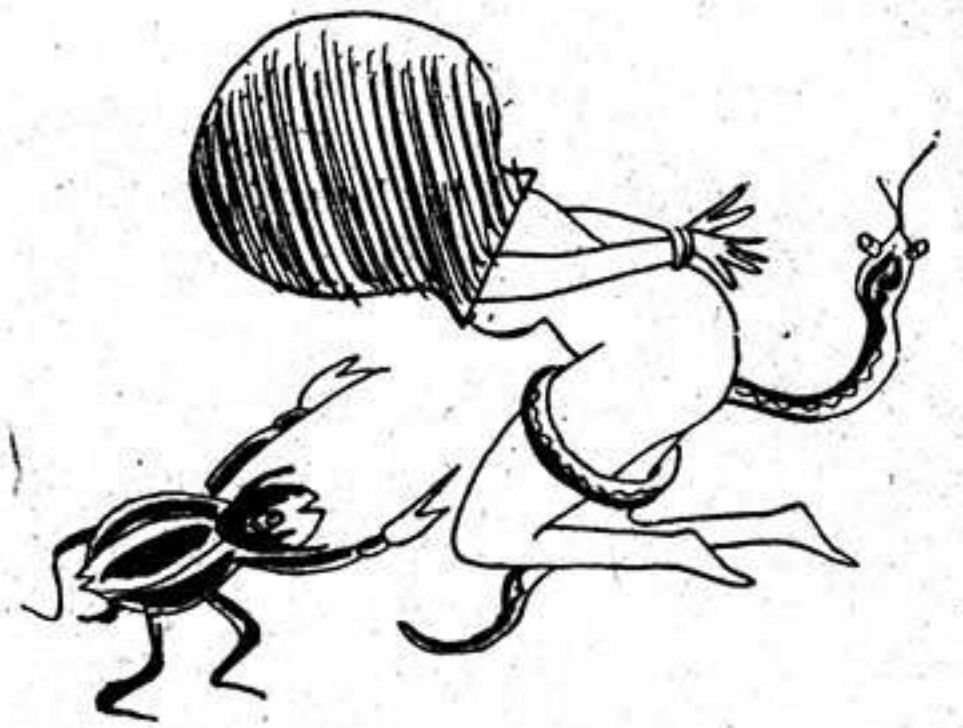
前をリボンで覆います。六尺を用いた場合はトイレが聊かめんどうかと思ひますが、水泳褌はその点いゝと思ひます。以上は、女性用らしいふんどしになると思ひます。又、綿ロップを用いて水泳褌型（前を三角型に編んで他の部分は二本合せて用いる）に作れば面白いと思ひます。ビニール紐を用いる事もいいでしょう。夏はフレイヤーのブカ／＼したスカートを多く用いる様ですが、あの下なら相撲用褌を締めつけていても、案外氣付かれないのかも知れないと思ひます。

私が海水パンツの下穿きとして用いているのを紹介して見ましよう。平凡な海水着だが三角型のヒダを寄せた所から後は切り取つてヒダから左右に五寸づつ位の横紐をつけています。この紐を駄の部分にグル／＼巻き付けて固定し、腰に廻す紐にはホックで止める様になっていきます。したがって股間の緊張感に求められませんが、前のふくらみが必要以上に誇張されて、此処を氣になさる御婦人方には氣の毒です。而して私自身、男子の褌に特別に興味をもちません。（勿論、日常にも用いませぬ）褌は女性の細いウエストと発達したお尻に固く喰い込ませてこそ、美しいものと思ひています。前のふくらみのないのは、どんなに狭くも可能と云う事を考えています。

特異な角度から (1)

折檻と拷問・その一

九 雅 節 夫



一 「麦うち唄」
嫌だと云ったら、
尻ぺた喰わせろ。

「麦うち唄」と題する歌曲である。欧米のものか、日本人の作詞作曲したものか、チラリとラジオで耳にはさんだきりなので、判らない。麦うちに、女や子供も皆手伝え嫌だと云ったら……の意味の詞だ。

これは、いさゝか、表題から外れているがいわば、序曲として第一に挙げた。

二、滝井孝作「トシコ」

妻はいうことを聞かぬトシコをおどすつもりで、買って来たお線香と艾を持ち出して、懲しめのため、一遍ほんとにお灸をトシコの

小さい指の上に据えた。トシコはあついのようと泣き、お線香消しよう泣き(以下略)昭和三年作の短篇。河出文庫「滝井孝作集」角川文庫「結婚まで」に収められている。

三、志賀直哉「未ッ子」

私は急に腹を立て、呼び戻し、持っている竹箒で背中を二、三度強く叩いてやった。K子は一寸涙ぐみ(以下略)

志賀直哉の近作、直哉老いたりの感ふかい愚作だが。最近、岩波書店で完結した全集第五巻所載。

四、川端康成「歌劇学校」

①舎監の先生にあやまっているとき、この石

のおかげでかあまり叱られずにすみましたのよ。あくる日、古賀さんとわたしとは罰に一時間立たされました。

②先生は、わたしの傍へいらっしやると、ものもおっしやらずに、ばちんといきなり頬をお打ちになりましたの。「あっ」私は息がとまったようでしたわ、こんなはづかしいことってあるでしょう。涙がぼろぼろこぼれましたわ。

川端康成が戦後「ひまわり」に連載した長篇少女小説。ポプラ社版。

五、谷崎潤一郎「痴人の愛」

夫人は一人でも足を間違えたものがあると忽ち、

「No!」と鋭く叱して傍へやって歩いて見せる。覚えが悪くてあまりたびたび間違える、と、

「No Good!」と叫びながら、鞭でびしりつと床を叩いたり、男女の容赦なく、その人の足を打ったりします。

ロシヤ女のダンス教師ぶり。各種文庫で版を重ねている。

(参照。谷崎潤一郎「春琴抄」岩波文庫版一五九頁以降)

六、ゴルバートフ「降伏なき民」

「ぶたれたかえ?」——と、小声で彼女は聞いた。

「ぶつことだけはしなかった!けどあとはなんだってされたわ——とアントニーナは答えた。

——生まれて初めてよつんばいにされたわ: ナチに苦しめられるソヴィエト市民生活である。青木文庫版。

(参照。フアジエーエフ「若き親衛隊」青木文庫)

七、宮本百合子「風知草」

一枚のアカハタのために、それを持って女がつかまれば、陰毛をやかれるような拷問をうけた。

角川文庫、新潮文庫に収められる。

八、小林多喜二「党生活者」

伊藤も二度ほど、警察でズロースまで脱ぎ

とられて真ッ裸にされ、竹刀のさきで、コズキ廻されたことがあったのだ。

各種文庫に入っている。

(参照。多喜二「一九二八・三・一五」、岩波文庫、青木文庫版全集)

九、趙樹理「結婚登記」

鋸の柄が、早くも股の上に飛んで来た。彼女は大切に育てられた娘でいままで、ついぞだれにもたふかれたことなぞなかった。大工の張は、こんどは髪の毛をひつつかんで寝台の上におさえつけ、ズボンをはひっぺがしてピシリピシリとつづけざまに何十遍となくたたいた。

有名な中共文学の代表作。岩波新書版。

十、雜誌「知性」三十二年八月号、五十五頁。左幸子の発言。

私なんか女でも、時局だというので、しよっちゅう殴られていましたもの。ずっと並べて殴られた方です。

十一、舟橋聖一「裾野」

はじめて、曜子はピシリと打った。泣きながら、いくたびでも、ピシリピシリとえい子を打った。すると又、えい子のスカートがまぐれたので、こんどは、うしろ向にして、お尻を叩いた。

三笠書房版。

十二、カツエトニツク「痛ましきダニエラ」

ラ

重々しい鐘が三つ、キャンブに鳴り響いた空がその響きを作業場の上に反射して伝えた女看守達は手に棍棒を持ち、それで囚人の頭を打ちながら、バラックから処刑場へと、囚人たちを追いたてた。囚人達は全部キャンブのどちら側からも、快樂区の「公開懲罰」に臨まなければならなかった。(中略)

快樂区の女看守が、二十名ばかりの少女を裸にして広場の中央へ連れ出した。彼女らはめいめいに別の腰掛に結びつけられた。(中略)

悲鳴は、腰掛から間歇的に吹き上り、天を貫いた。しかし、高い天は、ドイツ軍のこの命令を受け入れてでもいるかのように、従順に沈黙を守りつづけた。

河出書房刊。この本は、サド侯爵以上の著であり、重要な文献と思う。しかし、更に驚くべきは、この本はセミ・ドゥエメンタリであること云うことなのだ。諸兄にこの書の一読をおすすめる。しかし痛ましきダニエラに、哀悼と涙を、そして、フアツシズムとミリタリズムに憎しみを抱くのは、この書の読者の義務だと云えよう。

「附記」

一、本誌に、レスビアンの記事のないのを歎いておられた、読者通信のR・D子さんへ、

おすゝめしたい詩。ピエール・ルイス作の「ピリチスの歌」が、新潮文庫の一冊として更近刊行された。

戯れ

あの女の妾は玩具、手鞠よりも人形よりも楽しい玩具。長いこと、口もきかずにあの

女は、妾の肉体の隅々までを子供のようにつけて遊ぶ。

この一例は、ほんのわずかな紹介にすぎぬ是非御一読下さい。R・D子さんにだけなく、広く御紹介したいしやれた本です。

二、増刊の、サディズム特集号の延期を残念

がつていらっしやる諸兄に、御紹介したいのは、彰考書院から刊行中のサド選集全三巻です。内容については御紹介までもありますまい。又、講談社でも、サド選集全六巻を企画しているそうです。(以上)

三一・十・二十七

続々・乗馬ズボンの女腹切

藤山秀緒

その日は美智にとって最後の乗馬となる筈でした。彼女はクラシックの歌手として若く美しい声と姿で人気の的になっていました。しかし彼女は、軍国主義下の日本にとっては好ましい存在ではなかったのです。軍部からあらぬ疑いをかけられ、出頭を命ぜられた時はそれこそスパイ扱いでした。彼女は、思いもかけぬ濡衣に驚き、いきどおりしました。彼女は身の潔白を、死を以て証明しようと決心したのです。彼女は、日本女性として、最も日本的な手段で死のうと考えました。彼女は

女乍らも切腹して死んで行こうと心をきめ、覚悟をひとり心に秘めて、最後の思い出に一番好きだったスポーツ——乗馬——を通じて心ゆくまで名残りを惜しもうというのです。彼女は、電車を降りて、さり気ない様子で乗馬クラブの門をくぐりました。戦時中のことゝて、女性の乗馬は、武道として大切にされていましたから、女だてらに男装することも、乗馬にかぎり「勇ましい」とたゞえられたものでした。彼女は乗馬ズボンにはきかえ、シャツブラ

ウスに巾広のベルトをきりりと締め、長靴を取り上げます。片足ずつ、ぐっと力をこめて穿き、拍車をつけます。赤い柄の白いムチを手にして、心なしかM型の歩き方をしながら馬場の方へ出て行きます。

馬は「白浜」あぶみに乗馬靴をかけ、股を割って馬上の人となれば、午後の日ざしは静かに傾きかけるのでした。

彼女は乗馬ズボンを穿いた両肢を、ぐっとしめつけ、一三〇の障碍に向います。何度か輪乗りをかけ乍ら呼吸をはかり、腰を浮かせて見事に飛越しました。彼女は、しびれるような快感に思わずほっと息をつきます。

「あ、おねえさま！」

後に声がして、親友の千代子が、馬を寄せて来ました。千代子は遠乗りから帰ったところでしょう。はえぎわがしっとりと汗ばんでグレイの乗馬服のボタンをはずしてベルトで物造作に前を合わせ、カーキ色の乗馬ズボンに、白く砂ほこりをかぶった乗馬靴を穿いています。

「あゝ、千代子さんだったのね。一寸散歩しないこと？」

「えゝ、行きましょう。」

二人は轡をならべて歩きはじめます。

「千代子さん、あたし、しばらくどこか静かな処で暮したいの。それで当分こゝへも来られなくなるので、今日は、お別れのつもりで馬に乗りに来たの。あなたにもおしらせする筈でしたけれど、別にこれっきりというわけではないし、出来れば黙って居た方がいゝと思つたので、そのまゝにしておいたのよ。でも今日お目にかゝれたのは御縁があつたわけね。いろ／＼きいて頂きたい事もあるわ。」千代子は、穴のあくほど美智の顔を見つめていました、やがて

「うそよ！ 嘘。お姉様のうそつき。なぜ私にまでおかくしになるの。お姉様はスパイの嫌疑がかゝつて、こうしている間にだって刑事がつけているかもしれないお体じやないのお姉様は自殺なさるおつもりね。千代子におかくしになるなんて、あんまりだわ……」

美しいまつげに、いつしか涙が光っています。美智は、千代子の鋭い観察力に、ギョツとしたながらも、さりげなく体をかわして、馬腹を蹴ります。

「待って！ お姉様待って！」

千代子も、足をはやめて追いつこうとします。美智は、今宵にせまった自刃の覚悟を、

千代子にみだされるのを怖れています。馬は風を切つて武蔵野を走りつゞけます。汗ばむ乗馬ズボン、生暖いしめりを吸って、はち切れるばかりの腰のひだ、水をあびたように汗にぬれたシャツブラウス。彼女は、しばらくは吾を忘れて乗馬靴の両肢をかゝめて息を吐いています。

千代子は、美智を追抜くと、路上に立ちふさがつて馬をとめます。くぬぎ林に夕焼が映えて、美しい二人の乗馬姿をくつきりと浮出させています。

「お姉様！ 千代子、お話があるの、おりて下さらない？」

千代子は、峻しい語調で美智に云います。美智は、千代子の真剣なまなざしを見て取ると、もはやかくすべきではないように思えて来しました。

「えゝ……。でも千代子さん、どんなことがあつても、あなたは驚かないわね。いゝことそれがお約束できれば、お話するけれど……」

「はい。驚きません。私が伺いたいのは、いつ、どこで、どうして決行なさるのかについてだけです。」

「おりましょう。」

美智は、自分からすゝんで馬からおり、茂みへ乗馬ズボンの腰を、ふかぶかとおろしてジツと夕映えをみつめるのでした。

「千代子さん。仰言る通り私は死ぬわ。死ん

で見せるわ。あなたも日本人なら、一週間以内に誠の心を見せる機会には作れる筈だ。一週間の間に身のふり方を考えなさい。こう云われたわ。それまでに死ねば、名誉を保証するという意味ね。私は身に覚えのない事だけれど、そんな疑いをかけられただけでも、とても生きては居られないわ。私が死んでも、あなたは、どうぞ立派な花婿さんを見付けて、幸福にくらしして下さいませね。これが私の遺言よ。」

千代子は、決心したように

「やっぱりそうだったのね。ピストル？ それともお薬？」

「驚かないでね。切腹……」

「えゝ、切腹！」

「そう。私も大和撫子のはしくれ、あらぬ疑いをかけられた以上は、女乍らも切腹して、潔い最後を見せたいと思うの。今日にも、再び刑事に踏み込まれるようなことがあつたらその場を去らず自害しようと、こうして短刀も肌身はなさず持っているわ。書置きもこゝにあるのよ。」

美智は乗馬ズボンのかくしから封筒を二、三通とり出して見せます。一通は紛れもなく

「香川千代子様」

とかゝれていました。

「いや！ お姉様死んじやいや！ お姉が死んだら、誰が一体お姉様の無実を訴えること

ができるの！ほかに方法がきつとあるわ。死なういで、おねがい！」

「千代子さん！女乍も一旦覚悟した自決の志をあなたはふみにじろうとなさるのね。なぜ、立派に死ね！って云っては下さらないのあゝ私はお話するのではなかった。このまゝ馬場へ帰れば、あなたは人を呼んで私を死なせまいとなさるわね。いゝわ、私、こゝで死にます……」

「だめ、だめよ！そんな、そんな事ってないわ。こんな乗馬服着た姿で……」

「乗馬服望む処よ。苦しんでのたうち廻ったって裾が乱れるということもないし、勇ましい女の切腹に、こんなふさわしい服装はないわ、あゝ、私の大好きな乗馬ズボン！乗馬靴乗馬ズボン……乗馬ズボン……いまだわ！」

「い、いけない、あゝ、待って！」

「誰か来て！」

「千代子さん、ゆるして！」

云いながら、千代子の体を抱きすくめ、馬乗りになって、燃えるような口づけをしたかと思ふや、シャツブラウスの肌へ手をさし入れてブラジャーをグッと引き切り、千代子の

口へ押し込んで、ハンケチの猿ぐつわをかませ、革の手綱ははずして千代子をぎりぎりと立木へしばりつけてしまいました。

「む、むう……」

千代子は涙ぐんだ両眼を美智にむけて体をよじり、足を揉みあわせてもがきます。

美智は、いとしげに千代子の髪をなで、頬に口づけして、うっとり千代子の姿に見入っていました。やがて気を取り直したように、遺書を再び乗馬ズボンのポケットに入れ短刀を抜いて、用意の白布を巻き、切先二寸ほどのこしてしっかと結び、ゆっくり膝について正坐します。

美智は静かに瞑目したのち、千代子にむかひ。

「千代子さん、ごめんなさいね。どうか、私を心静かに死なせて下さい。あなたに御迷惑がかゝってはいけないから、私が、もう助からないと思うまで深傷を負ったら、この短刀で、ベルトを切つてさしあげます。そうしたら、あなたは、私にかまわず、何事もなかったようにしてお家へ帰って下さい。あなたに見守られながら、死んで行ける私は、幸福なのです。一寸の間、苦しくても我慢して下さいね。ではさようなら」

「む、むう……」

千代子の悲しげなうめき。美智は何度も何度も千代子に微笑みかけながら、自刃の座に

形を正し、短刀に両手をかけます。

「千代子さん！見て。女乍も武士の切腹は、こうして！」

息をつめた美智。短刀の切先が、夕やみに白くひらめいたと思うと、

ブス……

にぶい、切ない音。切先は左脇腹へ突立ち前かゝみに体をのめらせた美智。

「ううむ……」

低い呻き。切先は一寸五分ばかり腹中に没しシャツブラウスを突上げて燃える両の乳房が切なくふるえています。千代子は、身も世もあらぬ思いで、この華々しい自刃の光景に目を見張っています。

「ウウッ……」

美智は、カッと目を見開き、膝を立てながら前のめりの体を起し、キリキリと短刀を引廻しはじめます。刃は次第に深く切込んで白布は鮮血にまみれて行きます。切口からはなま／＼しい血汐が、じわじわと湧きはじめます。カーキ色の乗馬ズボンに鮮血がしたゝり喘ぎにつれて、がばがばと溢れるさまは異様な美しさをたゝえています。

「アア、うっ……」

臍のあたりまで来ると、流石の美智も、疲労の色をみせ、生えぎわには脂汗が浮かんで来ます。両眼は大空の一角をにらんで、歯をくいしばり、なほも引廻そうとあせります。

さぞ苦しいことでしょう。中腰の姿勢で、小きざみにふるえる両手を、短刀にしっかりと支えた美智。



「うゝむ…うゝむ」
あせり気味に体をよじって、ぐぐぐと刃に力をこめれば、ふくよかな美智の下腹は、

白い脂肪層が血にまみれて口をあき、

「ウウ…ウウッ！」

右脇まで切り完せた時には上下に一寸ほども傷口が露出していません。気丈な美智は「うっ……」

と、呻きながら短刀を抜取り千代子の前にすり寄っていきしめの革ベルトを短刀で切ろうとします。

「千、千代子さん——こ、これで、わ私は死ねます。や、約束通り…自由にしてあげる…」
深傷に悩み乍ら短刀をベルトにあてがい力をこめて引き切ります。

ブツリ！

革ベルトは音を立て、切れ、力あまって美智は、がばと俯伏せに倒れます。

千代子は手が自由になるや、手早く猿ぐつわを取り、美智の体にのしかゝるようにすがり付きます。「お姉様……お姉様……すみません。もうとめても意味ないわ。立派に、立派に死んで！私もあとから行きます！」

美智はハッとしたように体を起こします。

「いけない！ 千代子さん。あ、あなたは…何の関係もない！ わ、わたしと一緒に死ぬなんて……」

「いゝえ、お姉様に死なれて、何のたのしみがありました。お姉様を見届けたら私も切腹します！」

「千、千代子さん……」

「お姉様！ さあ、見事に！」

「あゝ、わ、わたしは、すまない……千代子さん……私の可愛い千代子さん……いい、一緒に……死ねる……あゝ……」

「う、うれしい！ お姉様」

互にはげしく抱き合つて美しい二人はいつまでもくく別れを惜しみます。

かくては果てじと美智は短刀を取り上げて「千代子さん！ 十、十文字腹の切り方はこうして！」

と云いざま、ぐわッとはかりに切先を両の乳房の谷間へ突込みます。

「ウーッ……」

ぐつと腰を浮かせ、上体をいごくようにふるわせ乍ら、下腹へと短刀を切り下す美智。

「ウウム……ウ、ム……千、千代子さん……み、見て居る……ま、まことの、武、武士のは、はら切りは……こ、こうして！」

体を硬直させて、泳えくた呻きと共にキリキリと腹を縦にたち割って行く美智。

「うゝむッ」

臍を真二ツに切つて乗馬ズボンのベルトに達した彼女は刃を引抜きます。そして両眼を飛び出すばかりに見開いたまゝ、彼女は、いきなり左の手を腹腔ふかくさし入れます。

「あゝむ、うゝゝッ……」

苦しみに顔を引きつらせ、脂汗にまみれながら、必死に取乱すまいとしています。

「千、千代子さん——わ、わたしは、切った——は、腹十文字にい——、いまこそ、や、大和撫子の——うゝむ——さ、さ、さいごの時——さ、さいごの——く、くるしみも、なんの、なんのいとおう——アア——は、はらわたを、はらわたを——この通り——見て、

見て。——ううむ、うゝむ、ううッ、うゝッううッ、ううッ、ううッ、ううッ、ううッ、ううッ——ウウーッ！」

グワッと血まみれの傷口が大きく開いたと思うと、彼女の左手が、小腸をつかんで引きずり出そうとしています。

乗馬ズボン姿なればこそそのあられもない姿態。ぬめぬめと宵やみにうごめく小腸。

「ア、ア……」

力つきてがばと美智はその場へ倒れます。

乗馬ズボンの両肢を揉み合わせ、断末魔の苦悶と戦う気丈の美智。

「お姉様、介錯します！」

千代子は血刀を美智の右手から引ったくろうとします。美智は、右手をかく握りしめて短刀を離そうとはせず、大きく首を左右に振ります。そして絶えぬの息の下で

「お、お願い！ ひ、ひとりで死なせて！」ハッとしたじろく千代子、その時、美智は逆

手に持った短刀を乳房の下へ発止とばかり突立てていました。

「むうッ……」

屹ッと眼を見開き、二、三度大きくけいれんします。息をつめて硬直した上体を最後の力で支えています。美しい顔にも断末魔の苦しみがまざまざと現れています。あゝ何という立派さ。呼吸がとまりました！

美智は、キリキリと歯ぎしりすると、そのまゝ棒のように右前に倒れ伏します。かすかにのこる四肢のけいれんが、華々しい女腹切りの終りをつげるのでした。

「お姉様！ 御立派でした！ 千代子も、千代子も参ります！」

千代子は、美智の心臓から、静かに短刀を引抜きます。千代子は美智の体を仰臥させ小腸を腹中におさめ、シヤツブラウスの前をあわせて両手を胸にくませてやります。くいしばった美智の口もとに接吻して、千代子は自刃の用意にかゝります。

乗馬服のベルトをはずし、下着の前をくつろげ、乗馬ズボンを押し下げて腰のあたりにベルトを固くしめ、美しい下腹を、そつと両手で揉みほぐします。そして彼女は、血みどろの短刀を取り上げると、宵やみにすかしてじつと見入っています。

「お父さま、お母様。おゆるし下さい。私は

お姉様なしでは生きて行かれないのです。お慕いして死んで行きます。身も、心も、美智子お姉さまに捧げる覚悟です。おゆるし下さい。さようなら……」

千代子は、ひとりつぶやいて、決心したように片ヒザを立て、短刀をかまえます。

「ウウッ」

あゝ、千代は、とうとうやった。親友美智子のあとを慕っての壮烈な自刃です。

唇を噛んでぐッと短刀を引廻せば、流石の千代子も脂汗をうかべて苦痛に堪えています。健気な千代子。

あわれ千代子も二十一歳の娘ざかりの腹を鮮血に染めて哀しく武蔵野の露と消えるのです。

「ううむ……」

悩ましい呻き。見事に腹一文字にかき切つて喘ぎつづける両の肩。

「あゝ、苦しい。……苦しい。お、お姉様。お姉様……」

美智の切った通りに引廻そうと思った千代子も、いまは力つきて、刃を抜き取ったまゝがつくり前へのめつてしまいました。

「あゝ、私には、これ以上は切れない。は早く死にたい！」

せめて臓腑なりとも掘み出して死にたい。彼女は、決心して、うつぶせのまゝ、左手を腹中へさし入れます。

「ウウ……ウウムッ」

草をかきむしりながら、右手は虚空をつかみ左手は血みどろの小腸を、美智と同じようにずるずると引出します。

乗馬ズボンは、ゆるんですり落ち傷口はがば／＼と血を噴いています。

千代子は、血走る眼を見開いて、よろよると立ち上ります。彼女は、短刀を胸に当てる、二米ばかりはなれた立木めがけて体をぶつけようとします。短刀に胸を貫いて死にたいのでありましょう。

歯をくいしばって一歩二歩。

「うつ」

編集余滴

○「流腸」のことを書いた記事を書かせてほしいとマニアの方はよく云ってくる。もっとも関心のない人から見れば、そんな記事は勿論ない方がいゝのだが、それは当然のこととして、この「流腸」というのが、その表現の仕方の方の巧拙もあるのだが、どうも忌避すべき事項に逢着することが多くて厄介だ。十二月号の高橋よしえさんの「糸姫の体験」も、便箋にべったり書かれてあったせいもあるが、婉曲に書き直すのに大分苦心したものだ。

○人間と人間との間で行われる最も惨虐な行

と片手に傷口を抑え、身をかぎめてしばし苦しみ悶えます。やがて気を取り直して、今度は一気に体をぶつけました。

「アア、ウ……ウウッ」

短刀は胸に喰入り、どきり、と烈しい物音と共に彼女は美智の死体の上にのしかゝるように倒れます。

焰に焼かれ、煙にむせ返りながら、祖国のために潔く死んで行った男装のジャンヌ・ダークを思わせる乗馬ズボンの女腹切。

若き二人は夜のしじまの中に体を寄せ合つて永遠の眠りについたのです。

為である戦争の記事や映画が大流行している昨今である。戦争の暴力こそは、そこらの暴力団などの生やさしい暴力の及ぶものではない。それなのに戦争謳歌に類した記事に対する排撃が行われないのはどうしてだろう。太陽族などと大騒ぎするが、これも元をたゞせば軍国主義の亡者たちが日本を無謀な戦争へ駆りたてゝ、結局国土を焦土と化し敗戦地獄へ追いやった為ではないか。然るに、戦争をおっ初めた者たちへの責任をやかましく云つたのを聞かない。サジズムの記事なんかは、戦争の惨虐に比較したら、まるで赤ン坊の遊戯でしかないのだが。

女性 素足 礼讃

—美しい女性の素足への憧れ—

高原 正 夫

素足 の 場 面

私は例えば電車の中で、美しい女性を見ると、その人の素足はどんなであろうかと先ず思う。足の恰好、皮膚の色、足指の形、爪の色等々。そして次にその手を見る。私の経験によると、手の美しい女性は、大体足も美しいようだ。手と足とは、密接な関係があるものらしい。私は経験によって、その女性の手を見ることがよって、大凡その足の形等も想像することが出来る様になったと思う。手の指のきやしやな女性は、足指も概してきやしやであり、手がふっくらしている女性は、足も概してふっくらしていると云うように、その他

爪の恰好など細いところまで、どこかに共通点があるのは不思議な位である。

街を歩いて居て、向うから素足の美人が来ると、私はすれ違いざまに足許を見る。チラッと瞥見する程度であるが、太凡その見当はつく。

女性の素足が一番見られるのは何処であろうか。夏の海辺が一番ふんだんに見られる筈であるが脚線美は別として、私などの様な足部ファンにとっては、砂にまみれてしまった案外鑑賞出来ない。割合に見られるのは、夕暮の買物時で、八百屋、魚屋、漬物屋等の店先で、彼女達が夕餉のお菜の品々をあれこれ選定に余念ないとき、こちらは短時間乍ら、

彼女達の肉体の一部である美しい芸術品を選定、鑑賞出来るわけである。

初夏の候によくデパートで浴衣祭りをやり素足の娘さんに踊らせることがあって、私も行ってみたが、格別印象に残ったものは無い。いつかの夏には、日本橋の白木屋で、殆んど全館女の売子に浴衣を着せて素足にし、草履をはかせて売場に立たせると云う素晴らしい試みをしたことがあり、この時は私も張り切って一人々々点検してみたが、顔や手は念入りに化粧して居るのに、足の方は案外おろそかにして居るので、これとは思ふものにつからず、落胆したことがあった。折角若く綺麗な売子さん達に浴衣を着せ普段は滅多に見せない恥しい「素足」までお客さんに見せてサービスする様にしたらには、もう一歩、彼女達の足先の手入れまで気を配ってもらいたかったものである。これは敢えて特殊の素足ファンだけの願ひではあるまい。

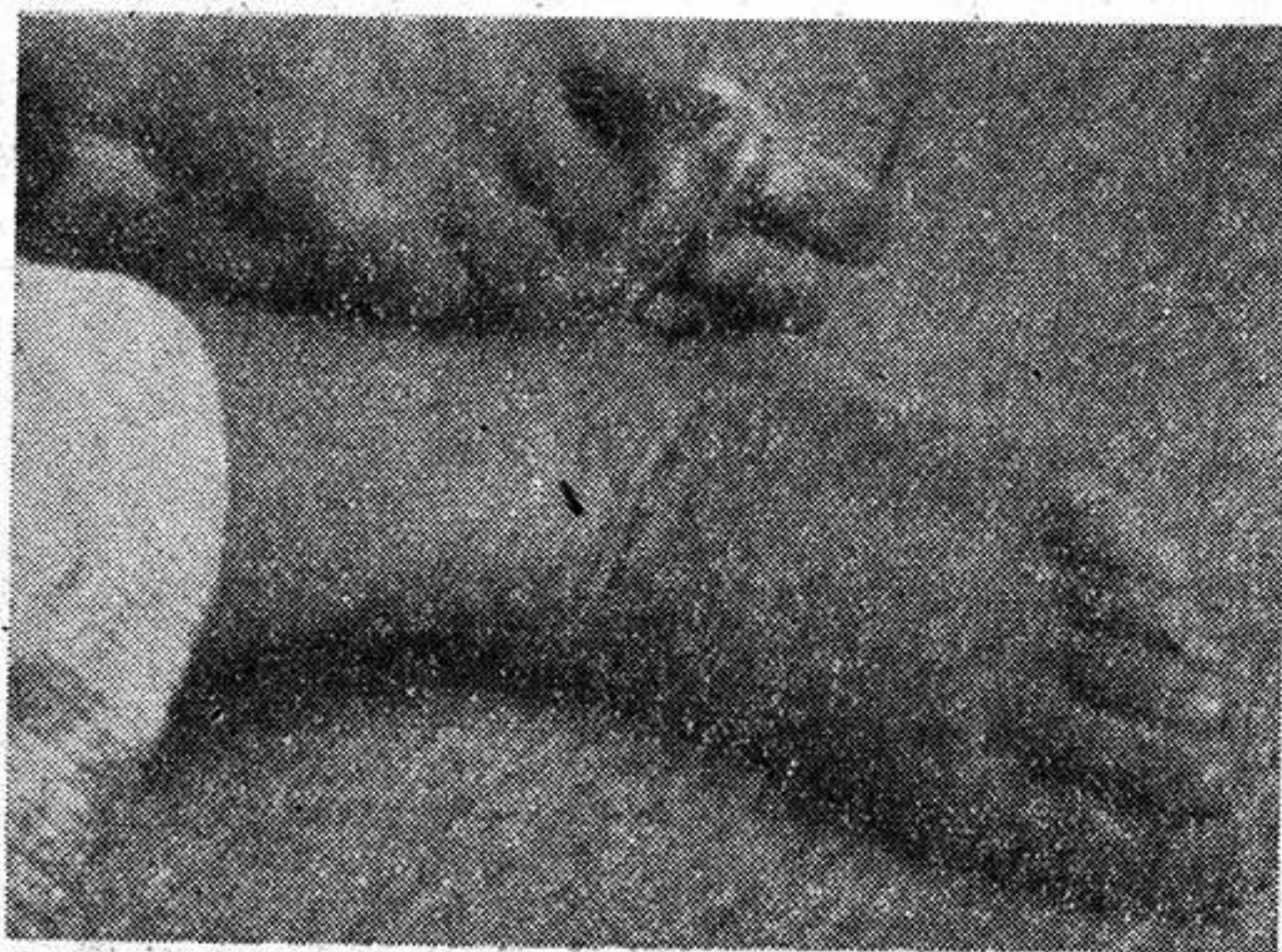
又或夏三越のブッシュ・ショールで、新人女優さんや柴田早苗等が素足をチラつかせて出て来たことがあったが、遠くからしか見られなかったのと、足の爪にベニキュアして居て、毒々しくて感心出来なかった。ストリップはどうであろうか。これは裸足で出て来る場面は勿論多かるうが、彼女達はハダシで踊り廻るから、足は荒れて居るうし、それに舞台上で跳ね廻るので、よく観察するわけに行

くまい。ストリッパーの足は、矢張り脚線美を鑑賞すべきで、足部については、素足の艶めかしさよりハダシの荒々しさが先に立つようである。この間上野の或るキヤバレーの新聞広告に、「ゆかたカーニバル、素足の美人もまた格別の情緒の味です」とあったが、願わくば前の白木屋の売りさん達の様にならないことを。

タバコ娘

私は前回に、美しい女性の素足を如何にして写真に収めることに成功したかを書いた。そして、それは技術と経験を要するとも書いたが、今茲にその体験を記してみよう。

私が此処迄達するのは一朝一夕で来たわけでは無い。それ相当の苦勞と楽しみがあったわけなので、その苦心談(?)を御披露しよう。と云うわけである。先ず最初に手がけたタバコ屋の娘さんについて見よう。彼女はタ



バコ屋であるから、大抵は綺麗な置物の様に行儀良く店先に座って居る。然し時々は立つて奥へ出入りする、生理的要求のこともある。うし、食事を摂ることもある。その機会は私がタバコを買いに訪れる中の、十通に一度も無いにしても、兎に角、その立ち上るチャンスを捉えて、私は彼女の足を観察した。それから或時は、恰度風呂度に行くところにつかった。私は好機逸すべからずと、彼女の

斜め後ろから一、二メートルの距離で、平行して歩き乍ら彼女の素足を観察した。これは動いて居るから正確には判らないが、大体は分る。又或時は、十一月三日の日、私はその日附まではつきり覚えて居るのであるが、もう可成り寒い日だった。それなのに、彼女は足袋も履かずに土間の椅子に腰掛けて、畳に座って居る両親と何か楽しそうに談じ合っている場面につかった。私はその前を二、三回行きつ戻りつし乍ら、同じ

く足を観察した。

此の様に、至って稀な機会を根気良く捉え乍ら、仔細に観察した結果、私は彼女の素足が稀に見る美しさを備えて居ることを確認してしまつたのである。それ迄には半年か一年位経つたであらうか。

それから実際に撮影に入つたことについては前回に書いた通りであるが、何しろ最初のことであり、秘蔵のローライ、コードのピン・ト・グラスの上に、憧れの素足を大きく捉えた時は、天にも登るとはこのことか、全く感奮驚喜した。御承知の様に、写真機のピント・グラスには、対象物が実に綺麗に映るものである。それが、実物も此の上なく美しい憧れの女性の素足であり、つややかな皮膚の色艶めかしい十本の足の指、桜貝の様な爪の色その爪の下の方には、白くくつきりと半月形が浮んで居る(私は彼女の様にはつきりとした半月形を見たことが無かった)。私は、はやる心を鎮め乍ら、親指の足の爪の端と、半月形にピントを合わせて行くのであるが、顔はカッカツて来るし、手もいささか顫えてくるのを覚えた。

二、三回目には奥の離れで彼女の足を撮った時は、余り熱中してしまつて、恐らく三時間位ぶっ続けだったのだろう。母親が心配して「K子」などと見に来たこともあった。

この娘さん、今はどうして居ることか。当

時既にさる大きな商家から、是非にと懇望されて居たとのことであるから、今ではきつと良い奥さんになって居るとして、その主人たる人は、折角の自分の奥さんの美しい足に勿体なくも興味無く——私にはそう思えるのだ——却って、その使用人か出入りの人に、彼女の素足の値打ちを発見した人が居て「御新造さんの素晴らしい素足」にひそやかな歎びと、秘密の心のときめきを覚えて居るのではあるまいか。

お菓子屋の娘

次ぎの菓子屋の娘さんについては、割合に簡単に観察することが出来た。菓子を買いに入ると、時々彼女が出て来ることもあり、而も下駄履きで出て来るからである。彼女が袋に菓子を入れる際、袋に入れた菓子が秤にかける際、私は彼女の素足を秘々と鑑賞することが出来た。

彼女の素足は、私が長年探し求めて来た「美女の素足」の理想に近い、類稀な美しさを持って居た。十本の足の指は仏様の足の様に形良く並んで居り、爪の形は幅の方が稍広く短かめで、子供々々して居り、爪の色はうすく紅をさした様にほんのりと桜色をして譬え様も無く美しい。私は造化の神がかくも美しい女性の足をつくったことを、又ゆくりなくも私にそれを鑑賞する機会を与えたことに、

感謝せずには居られない。

写真を撮り乍ら彼女に、日本女性の素足は世界的に美しいと云われて居ると話したら、「日本の女の人は座りダコがあつて汚いのではないのでしょうか。尤も私はお行儀が悪いので座りダコが出来ませんが」などと云つて居た。「今度は爪を切るところを」「手でですか」「勿論足の方を」「何時も切るのは爪切で切るのですが」「日本鉄の方がいいですね」そこで彼女は押入れの中を一生懸命探して鉄を持出して切ってくれた。そして「私は良く分りませんから、どんな恰好をしてよいか仰有つて下さい」とも云つて居た。実に素直な良い娘さんである。私は「何時も切る普通の恰好で切つて下さい」と云つたが前のタバコ娘が立膝をして切つて居たのに対して、この娘さんは、稍々横座りに近い形で切つて居た。女性が足の爪を切る場合、大抵は立膝かこれに近い恰好で切ると思うが、よく研究すると又いろいろな姿態があるのかも知れない。昔の浮世絵師などは可成り研究したと思われる。兎に角、若い女性が足の爪を切る姿は艶めかしく美しいものである。いつだったか戦争前の文芸春秋に「美女の足を見る」と云う長文があり、その中に、明治時代美人のほまれ高い某伯爵夫人が縁側で足の爪を切つて居るのを、通りがかった数人の大学生がアレアレと生垣から覗いて大騒ぎした話

しが出て居たが、さもあらんと思われる。

私は、プロマイドで女優の飯塚敏子、水戸光子がそれぞれ風呂上りに足の爪を切つて居るのを見たことがあるが何れも立膝であつた。私はある知合いの女性に、アグラをかゝせて足の爪を切らせ、写真に撮つてみたことがあつたが、これは余り美的でなく、寧ろ失敗作だつた。矢張りたゞ奇を狙つたり、或いはグロ的になつては失敗である。アブと云つても飽く迄、美と悦しさが無くてはいけない。

さて、この菓子屋の娘さんは、至つて清純素直な娘さんであり、私はこの娘さんについてドウコウの空想を試みたことは無いが、強いて云えば、彼女を横座りにさせて、両足首を赤い紐で縛り、後手に縛り上げて、観念の眼を閉じたところを撮影したら、きつと素晴らしい写真が出来ると思ふのだが、こんなことは勿論出来ないし、又するつもりも無い。

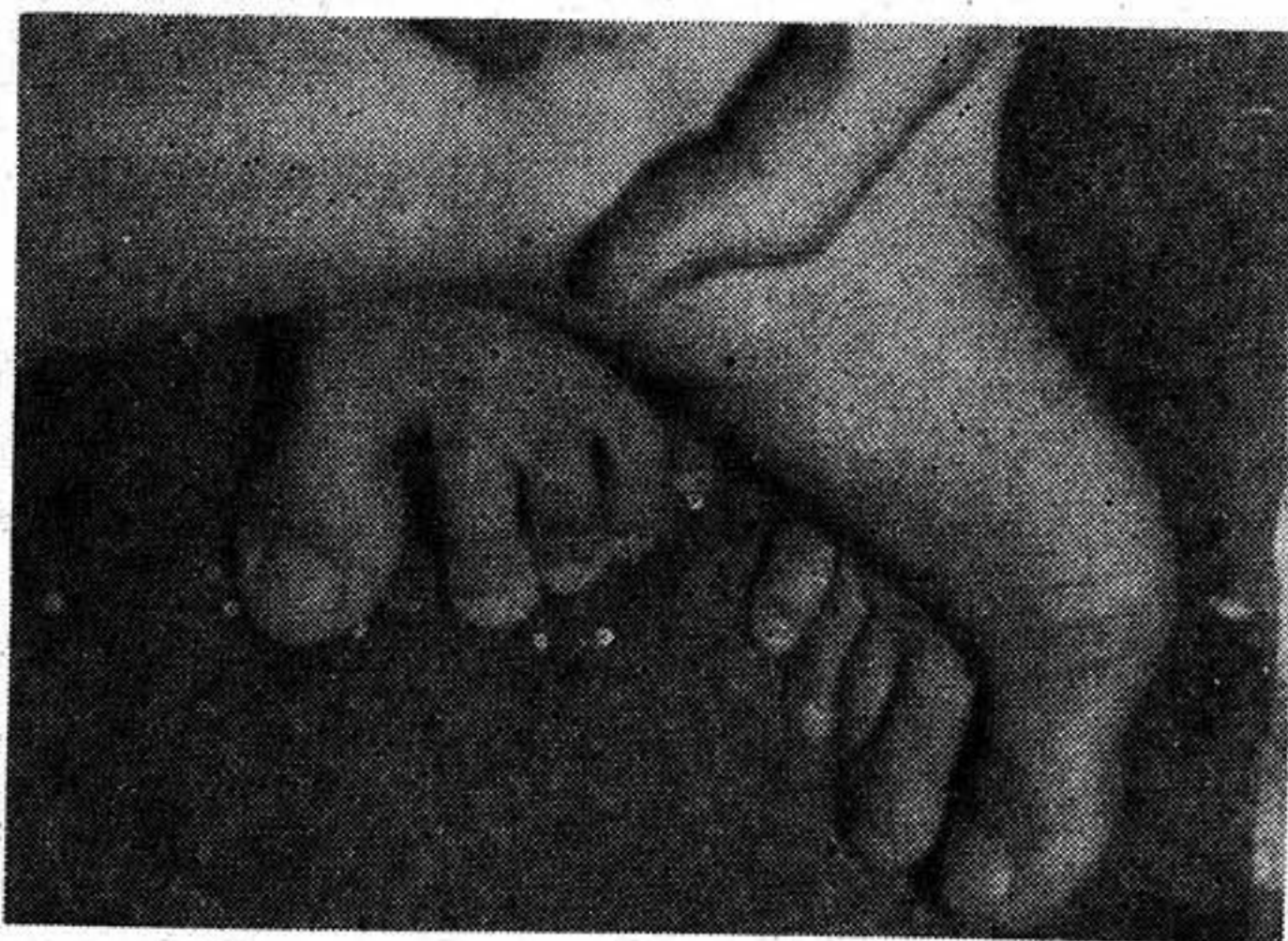
女事務員

第三番目に会社の女の子。この女には実は一番苦労した。前回にも書いた通り、年一回会社の慰勞で温泉に行く時位では、シミシミと彼女の足を観察する機会が無い、瞥見する程度である。然し最初はこのから出発することとは己むを得ない。次に、私は如何にして彼女の足を仔細に観察するか、千々に心を砕いた。喫茶店に誘う位は容易であるが、これで

は足は見られない、素足の候に、彼女の自宅を訪問すれば見られ様が、会社の手前そんな事も出来ない。私の家に呼ぶのも差し障りがある。それで私が考えたのは、何処かのお座敷風のところで食事を共にすることである。これならば、彼女も靴を脱いで上らざるを得ない。そこでその出入りに彼女の素足を観察してしまうと云う作戦である。これによって私は彼女の足の美しさを確認してしまったのである。

こゝで少し脱線させていたゞくと、彼女の足の恰好や顔の形は、恰度奇クが未だ大判時代の昭和二十七年三月号にあった緑氏の「怪異海老責縁起」の挿絵に海老責の拷問を受けて居る美女「おしの」にそっくりなのである。そこで私の空想は、氏の流麗な描写を辿ってこの私の美しい女事務員嬢が海老責に遇う場面までに発展する。可哀想な会社の女の子！「……彼女の美しい肉体を責めさいなんて苦痛にのたうち廻る肢態を想像すると最早じつとしておられなくなつた。早々に箸を置くとして役人はいそ／＼と流血の蔵を目指した。恐ろしい拷問が己れを待ち構えている忌わしい部屋に、やつれた彼女は引出されて来た。……「女の手錠を外せ」……吟味役が素早く彼女の手錠を外すと、二人の打役が彼女の両側から左右の手を後ろにねじ上げた。「裸にむくのじや」容赦もなく役人は眉一つ動かさず再

び命じた。いきなりぴりりと衣類が剥がされ忽ち湯文字一つの姿を曝す。盛り上った乳房が生物の様にブル／＼と大きく揺れる。恐ろしい死の予感がヒタ／＼と彼女の心を暗く包んでゆく。……絳々と両の手首に青細引が喰い込まれて行く。命じて役人は彼女にあぐらをかゝせ（彼女はどんな気持であぐらをかいたであろう？）、その両足首に広く幾重にも細引を巻きつけた。（何んと素晴らしい描写であろう。彼女の足の指は苦悶にピク／＼動いて居るようだ）「女の体をぐつと前に押えつけない」吟味役が両肩から力任せに彼女の体を前へ打伏せた。両股の内側から細引をかけて肩に廻す。白い顎に両足首が接触したと見るや、細引をたぐってぐつとしめ上げる。「ひーっ」と思わず洩れる悲鳴。両足と顎を密着させられてはものを云うはおろか息も出来ない。二つ折れになつた円形の肉体を前からどんと突かれて、ごろ



ツとそり返ると、湯文字が割れてバラツと前が開く。

「一刻程こうして捨ておくのじや。聴け皆の者、この度わしが考えた海老責と申す仕方よく覚えておけ。」役人は吟味役一同に申し渡した。みる／＼彼女の顔面は真赤に染って、冷汗がじと／＼と白い体を濡した。十本の足の指は苦しさの余り皆弓の様に反りかえっている！……『まことに凄愴な場面である。私が彼女についてこ

るのは、或いは私が彼女の肉体に引かれて居るからであろうか。

扱て、本筋に戻って、彼女の足が美しいことは分つた。今度は、その美しい足を何処でどう云う風にしてフィルムに収めるか？問題である。前の二人の様に、彼女達の自宅で撮れ／＼ば簡単であるが、この女はそうはゆかない。私はそのために、会社が退けてから、従つて大抵は土曜日の午後であるが、明治神宮

新宿御苑、上野公園、浜離宮などを独り散歩し乍ら、此処の芝生に寝そべらせたらよいだろうかと、この岩に腰かけさせたらどうだろうかと、この石に彼女の足をこう云う風に置かせたらよいだろうかなど、様々な空想を馳せた。或時は、逗子方面に迄足を伸して浪子不動からもっと先の方に仲々屈強な場所があり、たゞ、潮の関係を調べて置かないと折角連れて行っても満潮で撮影場所が無かったり、場所があつてもいゝ気持になつて撮影して居るうちに、潮が満ちて来て途中が引返せなくなつてしまったら大変、いやそれも却つて面白いかなど、つまらぬ空想に耽つたこともあつた。

斯う書いて来ると、読者は恐らく私が年がら年中、四六時中、寝ても醒めても、女の足に追いかけて居る亡者の様に思われるかも知れないが、實際は、それとは凡そ正反對で、会社に於ては有能で将来を囑望されて居



る若手課長の一人と云われ、朝は早くから夜になる迄人一倍仕事に情熱を打込んでやつて居り、会社の為にも社会の為にも必分の貢献をして居るつもりである。そして私は、この自己の素足愛好のため他人に迷惑をかけたことはたゞの一度も無いと思つて居る。写真は撮らせてもらつたが、その女性の足はおろか身体の中の部分にも一指だに触れたことも無いし、相手の嫌がるのを無理強ひしたことも無いし、相手に所謂嫌悪の情を起させたことも無いと確信して居る。これに附随の稍々サド的の空想も、一片の空想の遊戲に過ぎないのであつて、道学者諸兄はマユをひそめるかも知れないが、現実に誰に迷惑がかかるものでも無からう。要するに、この種の趣味は、内在するモヤ／＼の発散であり、一種のレクリエーションであり結果的にはより良き社会活動への一助となつて居る。このことは、私自身の為にも、又恐

らくは、広く同好の志、読者諸兄も同じことと思ふし、又そうでなくてはならないと思うので、茲に特に一言して置きたい。仮りに、もしそうでないとするならば、その人は社会的制裁を受けるか、或いはそこ迄行かなくても結局人生の落伍者になり、廢殘の道を辿るおそれが多分にある。

それは兎に角として、彼女の足を撮影する場所をあれこれ思案した結果、前稿にも書いた通り、何んのことは無い会社の屋上で簡単に撮ってしまったのは、聊か拍手拔けで、コロンブスの卵と云うか滑稽であつた。

貴婦人の素足と処刑

最後に、めつたに見ることの出来ない深窓の貴婦人の素足を写真に撮ってしまったことと、その処刑のお話しをして、本稿を終ることにしよう。

私の知り合いに一人の高貴な婦人が居ると思ひ召せ。その女性は、さる有名な実業家の一人娘で、年は二十を五つか六つ過ぎており色白の円顔で四肢はのび／＼とよく発達しており、近代的な頗る美人で、もしこういう良家の娘さんでなかったら、この頃流行のミス日本とかミス・ユニバースの候補に推薦されてたかも知れない、又推薦されてもおかしくない程の人で、伊東絹子や馬場祥江嬢に比べて何ら遜色なく、而もその物腰態度はしとや

かで少しも威張るようなところも無く感じがいいのであるが、たゞ彼女の家柄や環境が然らしめるのか、内心は極めて気位高く、寧ろ高慢なところもあって、謂わば典型的な貴婦人である。

私はかねてから、この貴婦人の素足を写真に収めてしまいたいと秘かに悲願を抱いていたものであるが、何しろ高嶺の花なので仲々機会に恵まれなかった。

ところで、或夏のこと、私は勇を鼓して秘蔵のローライを肩に、郊外の見晴しのいい高台にある豪壮な邸宅の門をくぐった。私の父と彼女の父とは仕事の関係があったので、私も父の用事を仰せ付かって二、三回その家を訪れたこともあり、目指す相手の素足の白さはちやんと調べてあるのである。いつだったか、矢張り夏のこと、こゝを訪れての帰り、日本着物の彼女が玄関から門まで送ってくれて別れの挨拶を交した時に、私の目は焼きつけるように彼女の素足の上に注がれた。日本の挨拶はその点都合がいゝ。頭を下げ乍ら、相手の素足を網膜に焼きつけることが出来るから。彼女の成熟したお蚕の様に青白く透き通った皮膚の色、盛り上った足の甲、その足指の果てるところに桜貝の様な足の爪がほのかに輝いて居るではないか。それらの足の指や爪の恰好は女優の高峰三枝子のそれによく似て居るが、高峰の足はどちらかと云うと幅

広く平べったいの反して、彼女の甲は盛り上り、キュッと引緊って居る感じで、全体として高峰三枝子の素足が前稿にも書いた通りエロティックなのに反し、彼女のは飽く迄高貴な感じがするのである。

扱て、訪れた私は久濶を叙してから単刀直入、「今日は写真を撮らせてくれませんか」と切り出したところ、案ずるより生むが易しとはこのことか、案外素直に、「はい」と云って廊下に出て来た。それで先ず廊下に腰かけたところをパチリ。これは下駄を突っかけて居るのでダメ。それから庭に出てしやがませてパチリ。これもスカートの蔭で暗いので大したこと無し。然し勿論それは分って居るので、これらは謂わばウォーミング・アップである。次に、いよゝ座敷に上って、「お座りになって、右の方に足をお出しになつて下さいませんか」と、青畳の上にガッシリ右横座りにさせてしまった。(牝鹿は遂に押えつけられた!)ところが、この美しい牝鹿は、自分の足先を気にして、しきりにスカートで隠そうとする。(これは大変!)私は厳やかに、「いやその儘で、自然のままの方がいいのですから……」と、更にしっかり押え付けて、手早くローライのピント・グラスに足先までを一杯に捉え、右の足指にピントを合わせ乍ら、パチリ。とやってみて、その次に、「今度は左の方に足をお出しにな

って……」と左に足を出させたが、もう観念してか、足先をスカートで隠そうとはしなかった。隣室に女中も居るし、さすがに足だけ撮るわけにも行かず、そのまゝ引き退がる。尤も、この気位の高い女性は、恐らく傍に人が居なくても、仲々足だけ撮らせる様なことはしなかったであろう。めったに見せない恥かしい素足を、スカートの外にしどけなく投げ出して撮らせてくれたのが、この貴婦人には精一杯のことだったろう。何時もは、座っても必らず足をちやんと隠して居るのである。但し、この横座り写真でも、足の部分だけ大きく引伸ばせば、指の配列や爪の恰好までよく分って、結構楽しめる。貴重なフィルムである。

次に、この至って高貴な彼女について、こんな妄想を試みてみよう。相手の気品が高ければ高い程、高慢な相手であればある程、反対にはげしく責め苛なみ、完膚無い迄に痛めつけてやろうとするのは、誰もが持つ人情の自然であろう。そこで、彼女について、私の空想は止めどなく拡がって行く。

彼女は捕えられて牢屋に收容される。牢屋の中では、独り淋しく足の爪を切ったり、足を洗ったりするところや、寝乱れ姿、その他こゝに書くのを憚るような姿態迄全部、備え付けの秘密機械でフィルムに収められて行く。

それから、彼女は毎晩牢屋から引出されて地下の密室に運ばれ、その美しい肉体には、人類が東西古今を通じて経験した凡ゆる種類の拷問——それは恐らく数十種類を超えるであろう——が行われ、殊にその美しい素足、足の指、手指、乳房等に対しては、特別に考案された新式の拷問が試行され、それらによって苦悶する姿態、特に足指が開いたり縮んだり、弓の様に反り返ったりする素足の表情は、入念に映画と写真に収められて行く。

一人の美しい女性の肉体に、東西古今を通ずるかくも凡ゆる種類の拷問が、次から次へと試行されて、而もそれらが悉く写真や映画に記録されて行くと言うことは、恐らく歴史にも何処にも無い空前にして絶後のことではあるまいか。そして、それだけではない。牢屋の中のつれづれに、これらのフィルムは折に触れて彼女の前で上映される。これは、彼女にとって、現実に責められる肉体上の拷問と、更にこれに加えて精神的の拷問と、二重の責苦である。

そして、この様にして、毎晩弄れおもちやにされつくした彼女の肉体と精神は、責め苛なまれた揚句、最後に刑場に引き出されて、死刑執行を受ける。処刑の方法は何がよからうか。銃殺、火刑、磔、斬首、絞首……高慢な彼女には絞首刑が相応しい。そこで絞首の方法であるが、普通には手足

を縛られて上から吊されると云うが、彼女の場合は、手足も何処も全然縛らず全く自由に置いて、たゞ首に鉄の枷を嵌め、この首枷が自立的に徐々に緊つて行つて絞首されると云う方法がとられる。手足を自由にする理由は、彼女に囚われてから片時も自由であつたことが無いので、せめて死の直前だけでも手足をほどこいて自由にさせてやろうと云う憐びんと、更に重要なことは、手足を自由にすることによって、恐らく思う存分暴れるので、苦悶にのた打ち廻る彼女の肉体が完全に鑑賞出来ると云う趣向からである。

次に、ヨーロッパの歴史で、女性が死刑に処せられるとき、わざ／＼素足にされることがある様だが、これには何かワケがあるのである。ジャンヌ・ダークは素足にされて火刑に処せられた。映画では、マゾ女優のイングリット・バークマンが、手錠を嵌められる



ところを態々ゆっくり大寫しにされ、恍惚として素足で処刑されて行く。又かつての映画「ノートルダム・ド・セムシ男」で、ヒロインが死刑の宣告を受ける時裁判官は「貴女は……素足にされて死刑に処せられる」と特に宣告する場面があり、字幕にも出て来るが、何か意味があるのかも知れない。

但し、今は、そのせんさくをする必要はない。いづれにしても、この貴婦人は、一糸も纏わぬ姿で絞首されることにするから、素足にするしなは問題で無い。

死刑の当日彼女は牢屋から引き出され、全裸の儘鉄の檻に入れられて引廻しの上、刑場に到着、こゝで檻から引出されて引き据えられ、嘗て地下の密室で行われた凡ゆる種類の拷問のうち、特に海老責をはじめとする代表的拷問が五六種類、衆人環視の公開裡に施行され、それ等が終つて、いよいよ死刑執行

の段取りになる。

、切て、彼女は此処で最後の儀式として足の爪切りが行われる。縁台の上で、しやがんだり、左右にそれ／＼横座りになったり、両足を並揃えて前の方に出したり、立膝をしたり或は縁台から降りて片足を縁台にかけたり、様々な姿態で足の爪を切られる。そして、切り終った爪にはほんのりと紅がさゝれる。死出の化粧である。それから愈々死刑執行である。先ず、右に足を投げ出して横座りにさせられた。然しもう何時か写真を撮られた時スカートで足を隠そうとした様に足を隠すことは出来ない。足はおろか、身体の中の部分も覆えるものは何物も無いのだ。彼女の首には魔物の様な鉄の枷が嵌められた。十秒、二十秒、満場水を打った様に静まり反り、固唾を飲むうちに、首枷は生き物の様に緊り出して来たらしい。段々きつく、彼女の首はグツグツと絞め上げられて行く。彼女は一瞬身体を沈め、次ぎに宙に浮く様に首を延し、次ぎに、首枷をゆるめ様と両手で必死に掻きむしるが、何んの効も無い。段々呼吸が苦しくなるらしい。死物狂いの抵抗。やがて、横座りからツト身を起し、空ろな目を見開き、首を押え乍ら、暫くその辺を駆け廻り始めたがしばらくすると力も尽きて、手は虚空を掴み目を閉じて口を開き、胸や腹を大きく波打たせて空しい呼吸を繰り返した。見よ、十

本の足の指は弓の様に反り返り、桜色の爪の色からは既に生気が失せかゝって来た。エロティックな断末魔！ 満場ハッと息をのむ。彼女は、苦しさの余り低い呻き声をあげ乍ら、手足を痙攣させて、やがて、ガククリと俯伏せになり、十五分間にして全く絶命。彼女の高貴な魂は、その美しかった肉体を永遠に離れた。而も、この美しくも哀れな情景は細大洩さず刻々と映画と写真に撮られて行ったのである。

あとがき

以上で私の空想は途絶えるのであるが、これは飽く迄も観念遊戯の世界であって、実際には、この間「処刑の部屋」と云う映画を観たが、最後のリンチの場面を見て居るうちに気持が悪くなって、席を立ってしまったことである。

そこで私は思うのであるが、観念の世界と実行とは別物であって一つでは無い。むしろ観念の世界に遊べる人は、実行に於ては案外謙虚なのではあるまいか。私は、子供の時から、空想の世界では、美女が誘拐されたり縛られたりする場面には胸をときめかせたことがあったが、実行の世界では残酷なことは嫌いで、よく悪童達がトンボのお尻を切つて麦わらを差し込んで飛ばせたり、ひどいものになると、蛙の皮をむいたりした者もあったが、

私はそう云うことも厭で、「止せよ」ととめる方だったのである。これは、私が観念の世界に遊ぶことによつて、気持を発散することが出来たため、却つて現実に謙虚になれたのかも知れない。

このことは、実は大切なことであつて、本誌の様な雑誌は、いわば空想の世界に私達を遊ばせるもので、それ自身に意味と値打ちがあるものであつて、これが直ちに何等実行に結び付くものではない。むしろ、よい安全弁になる場合さえあろう。それなのに、もしこれを軽々しく非難するものは、空想即実行と云う一つの誤った偏見に基くものと謂わなくてはなるまい。このことは、何れ又機会があれば、稿を新たに論じてみたい。(未完)

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組 千円(送共)

時代物

現代物

(一)女武者の最期

(五)女剣士の腹切

(二)腰元の自害

(六)女剣士の切腹

(三)遊女の自決

(七)オフィスガール

(四)武家の姉妹

(八)農家の娘

(詳細解説は本誌、九月号、並に十月号にあり)

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤプー

(第二回)

沼 正 三

前号の梗概

西独留学中の日本青年瀬部麟一郎は、婚約者クララと騎馬で山中に遠乗したが、偶々彼の方が裸で水泳中、空飛ぶ円盤が墜落し、二人はそこの中に美女を発見した。彼女は実は二千年後の宇宙帝国イースの人間である。名はポーリン。黄色い肌の人間家畜ヤプーが、或いは足台兼舌人形として、或いは獵犬として彼女に使役されている。獵犬タロは裸の麟一郎をヤプーと間違えて咬みつぎ、彼は全身麻痺の状態に陥ってしまった。ヤプーとは一体何だろう？ 麟一郎は果してヤプーなのだろうか？

第四章 天馬代謝蛔虫

一

「妾は侯爵嗣女ポーリン・ジャンセン。既婚よ。今本国星でシリウス地区検事長をしていますの……」

肉足台に載せた足の片方をもたげて、犬の舌が黠にも及ぶようにしてやりながら、ポーリンは自己紹介し、優雅な身のこなしで上半身をクララの方に向けた。

彼女は将来自分が嗣ぐことになるジャンセン侯爵家（正確には女侯爵であるが、女権制のイースでは特に女と断わる必要がない）の家名を矜持としていた。イースの歴史は、前史時代の末期、喜望峰から飛び立った宇宙船「ノアの箱舟」号が、人馬座α圏第四遊星「新地球」を征服し、熱ヴィルスの猛威に曝されて危険な地球から英国女王——既に南阿連邦に避難しておられた——をお迎えしてテラノヴァ女王国を建国した日に始まる。ジャンセン家の遠祖ウィリアムは連邦首相だった人の孫と伝えられるが、箱舟号の乗員で功により子爵に叙せられた。八代目がシリウス圏征服に大功を建て伯爵になり、十五代目が現にジャンセン家の領地であるアルタイル圏を征服して侯爵になった。女権革命後は、家督の名称も（女）侯爵に変わり、女系の女子が相続するようになったが、その初代は、今に「女王アン」と並ぶ黒奴酒の銘酒「女卿ジャンセン」に名の残る女

傑で、当時黒奴が一切の嗜好品を禁ぜられていたのを憐れみ、自家の黒奴に対しジャンセン一族の者の尿尿を処理した酒の飲用を許して喜ばれ、かくて黒奴に人生の慰安を与えると共に、その人間的尊厳を奪うことによりこれを精神的に馴致する黒奴制度の物質的基礎「黒奴酒」の醸造に先鞭を附けた人として知られている。彼女の母、現当主のアダライン卿は帝国副総理たると共に世襲のアルタイル圏総督を兼ね、男妾を何人も持つ私生活を非難する人はあるが、政治家としての能力は疑う者がなく、巨富と女王の寵とを背景とする権勢は当代屈指のものといわれ、その威厳ある美貌は国中に多くの崇愛者を持っている。その娘であるポーリーンは、名門の子女の常といきなり顕要の地位に就かされ、総督たる日に備えて修して行中の身であるが、母譲りの美貌は、若い頃からシリウス圏に著名で、ミス・ユニヴァースにも成ったことがある。誇らかに自己紹介した彼女は、密かに相手の態度の変ることを予期していたのだ。が特別の反応もないので、物足らぬ思いをしながら、彼女は言葉を続けた。

「……今度、この遊星に別荘を新築しましたので、三週間前から、妹や兄を連れて遊びに来ましたの。……今日は御親切にして戴きまして、本当にお礼の言葉もありませんわ。一度妾の別荘に御招きして感謝の意を表させて戴きたいと存じます。是非御出掛け下さいませね。どちらへ御連絡すればよろしいの？ 初めてお目に掛るようになっていますけど……」

本国星カルノの首都アルベルデン在住の貴族なら、殆んど全て遊び仲間として相識の仲になっている。今眼の前のこの令嬢、服装や物腰から見て身分のある女には違いないが、質素な服地と云い、自分を知らぬことと云い、どこかの植民星貴族に違いない。そう思つて、暗にそれをほめかしながら訊ねたのだった。

「申し遅れまして……妾はクララ・フォン・コーヴィッツ。未婚です。生れは独乙。父は革命前は伯爵でございました。妾は今学生で住所は……」

侯爵嗣女など妙な肩書を聞かされ、対抗上父の旧爵位を持ち出したりした点を除けば、クララの発言は極めて素直なものであったが事態を一変させる力を持っていた。

「独乙？ 伯爵？ 革命？……一体何のこと？ あッ」

ポーリーンは、真相に思い当って愕然とし、しかも尚信じ切れなといった面持ちで、「答えて頂戴！ 此処は何号球面なの？——いえ、此処は紀元何年なの？」

「今年は何号球面……」

「大変！」

丁度右足の四本趾を口に含んで吸おうとしていた愛犬タロの顔をポンと蹴り退けながら、慌ててサンダルを突掛け、操縦席に駆け寄った。

計器を調べ、故障と艇の現在位置とを確認して、ポーリーンは顔色を変えた。二十世紀に途中墜落してたのだ。ヤプーを連れこの女は前史時代の人だったのだ。とんでもない錯覚をしていたもの……念の為、艇外に出て破損を調べる。とても航時運行は続けられない。救援を求めなければならぬが、連絡が取れるだろうか？ 時間電話が墜落で破損されてなければ良いが……

操縦室に戻ってダイヤルを廻す。タロは忠実な護身犬らしく出入り入ったりする彼女にずっと付き纏って離れない。此方に目もくれず夢中になっているポーリーンをクララは唯呆れて見ている。一九五六年と聞いて何であゝ急に慌て出したのかしら……

ポーリーンの耳にブザーの音が聞えて来た。宇宙線を媒介として時間を異にする球面を継ぐ時間電話装置は機能を失っていなかった

のだ。有り難い。救かったわ……
 通話機の前の空間がパツと明るくなってクララを驚かした。
 別荘の電話番号黒奴の半身像が立体受像器に現れた。ポーリーンと

知って一礼して、
 「あ、若奥様で……」
 「ドリスを呼んでおくれ」



「畏りました……エー、唯今
 三角厩舎の方に行つてらつし
 やるそうでございますが……」
 「厩舎に廻して」
 「畏りました」

パツと黒奴の姿が消えた。
 人形のようなものが顕滅する
 ばかりか発言し動作し表情を
 変える不思議に、クララは、
 暫し恋人のことも忘れて、茫
 然として見とれた。消えた後
 に別な黒奴の上半身が出現し
 て、ポーリーンに一礼した。

「ドリスは？」
 「只今、ポロの練習でアヴァ
 ロン号にお騎りになり……」
 「呼んで見て」
 「畏りました」

黒奴が消えて、遠くに大き
 な鳥の飛ぶのが見えた。その
 背に美少年が跨っている……
 と見る間に、ぐんぐん近寄り
 拡大して来た。鳥と思つたの
 は巨大な鷲の翼を羽搏かす奇
 妙な四足獣だった。少年と思

ったのは、打球^{ボロキャップ}帽からはみ出す豊かな金髪から見て、男装の美少女だ、とクララは見て取った。これが天馬^{ペガサス}アヴァロン号に乗ったドリスである。

二

脱線^{ペガサス}のようだが、天馬^{ペガサス}について説明しておこう。前史時代の馬はイース^{エキウス}では旧馬と呼ばれ、今では動物園にしか居ない。馬^{ヒース}といえは畜人馬^{ヤブ・ヒース}のことだが、他に騎乗用の動物が二種あった。一つは母胎内で双生児^{ふたご}ヤブーに手術し、芝居の馬のように一方の肩と他方の腰とを接着させた上シヤム兄弟のような双体癒着により一体にして産れさせた人為^{セント・ア}の動物半人半馬で、もう一つが天馬^{ペガサス}だった。胴体は驢馬^{コンドル}ほどで背中に駱駝のような瘤があり、両脇から禿鷹の三倍ほどもある翼が生えている。轡や鞍の装着も、手綱と鞭と拍車による制馭と激励も、すべて旧馬^{エキウス}と同様で、地上を走る能力は少いが、人間一人を乗せて天空を悠々飛翔し得る。天馬^{ペガサス}の名にふさわしいこの飛行動物は、然し、人為^{セント・ア}の作物でなく、テラ・ノヴァ星の原住民だった有翼四足人を家畜化したものである。

地球人類に劣らぬ高い精神文明を誇り、今に懷古の客を喜ばす壮麗な三角塔を山上に築いて、大空を我物顔に飛び廻り、この遊星を支配していた彼等も、原子力文明に暗く、所詮原水爆を持つ人類の攻撃の敵ではなかった。生き残った全員は捕虜にされ、後に女王の愛馬ロック一世号として知られた彼等の王が、女王マーガレットの玉座の前に引き据えられた。地球を離れて以来馬に乗れなくなったのを淋しがっていた女王が、巨翼を畳み、四肢を折って畏まった王の姿に天馬^{ペガサス}を連想し、人間による騎乗の可能性を検討するよう命じた時、王に代表される有翼四足人達の運命が定まったのだった。

動物学者生理学者等が共同でこの動物の研究を始めた。研究の結果分つて来た重要点は、彼等が円形動物と共棲し奇妙な摂餌と排泄の体制を有する哺乳類であること、その文明の原動力として人間の手に相当する舌触手^{タング・テントクル}を持っていることなどであった。

彼等の腸内には一匹宛長大な有鉤蛔虫が棲んでおり、胃と腸の境にある幽門に首を突込み、鉤で固着し、尾部が肛門に達するまで、条虫^{さなぎし}のように腸内を延々と走っている。食事時になるとその尾部が肛門から突出して栄養液中に差込まれ、尾部末端の開孔部から液を吸上げて、中空の袋のような体内を一杯に満すのである。そして幽門の直下にある細裂孔から徐々にこの栄養液を吹き出して腸壁をうるおし、寄生主たる天馬に摂餌の労を省かせると共に、吸収し易い形でその腸に滋養分を与えるのである。然し蛔虫自体の栄養はその液から取られるのではない。液が腸内を下りつつ養分を失って廃液と化し、排泄せられる一步手前という段階に達すると蛔虫の下半身がそれを吸収して自家の栄養とする。そして蛔虫の全身は次第に廃液に満された袋に変わり、次の食事時に突き出された尾端開孔部はまずその廃液を吐き出す。(それから改めて栄養液を吸上げ、前と同様に繰り返される。)そこで天馬自体としては別に排泄という行為をする必要がない。……こういう生きたポンプのような虫を寄生させることによって摂餌排泄共に済ませてしまふ、誠に面白い共棲現象であった。

後のことであるが、畜人制度^{ヤブ・ヒース}の確立に際して、その物質的基礎をなしたのは、この天馬代謝蛔虫の変種を各ヤブの体内に寄生させヤブの摂餌排泄を人間のそれと全然異ならしめるに成功したことであつた。生体家具用の栄養循環装置(第二章を見よ)もこの段階を経過して後に初めて発明されたのである。土着ヤブー及び特に生体実験用(内服用の新薬の効能を試みる場合等)或は生体模型用(

腹部を切開いて胃の収縮運動の具合を見せるのに用いる場合等）として使うための人間同様の生活様式で飼育する生ヤブーを除き、総てのヤブーは生後直ちに飼養所の係員の手によりこの蛔虫——俗にポンプ虫と呼ばれるが——の卵を吞まされ、右のような共棲生活を営まされることになっている。が、これについては後に詳しく述べる機会があるであろう。今は天馬のことに戻ろう。

天馬も進化の初期においては口腔から摂食し、肛門から排泄したらしい。然しポンプ虫との共棲により、口腔が摂食の労を省かれると共に、二枚の舌が伸長発達し始め、結局蛇のような二本の触手にまで進化した。この触手によって彼等は器具を作り扱うことが可能となり、高等生物に進化し、かくて絢爛たるテラ・ノヴァ古文明の花を咲かせたのである。

そこで、女王の御下命に対する答申は簡単だった。騎る前に彼等の舌触手を切断してしまうことである。この手術——舌去勢——と云われている——によって、彼等の高次行動能力は消滅するが、知性及び乗用飛行畜としての肉体能力は少しも減じない。

こうしてテラ・ノヴァ原住民たる有翼四足人達は、一人の女性の気まぐれな思い付きから、人類の新家畜として生れ更らされ、舌去勢された上で嘗ての山上三角塔に代る三角厩舎の中で飼われる身となったのだった。以来二千年、累代の去勢により従順化しているが未だに、精神力において彼等に劣る騎手に対しては、往々にして発作的な抵抗を試みるがあるので、現在ではOQ（命令波指数）一〇〇に達せぬ輩即ち平民には天馬騎乗は禁止されている。乗馬一般が平民には縁の遠い娯楽だが、特に天馬は、読心家具と同じく貴族階級の専有物なのである。

三

左手に手綱、右手に打球杖を握り、打球戯上衣を着た美少女の姿がはつきりして来た。羽搏きも緩かになった。

イースの貴族階級の九〇%を占めるのはアングロ・サクソン族であるが、彼等は家畜作りと同様、新遊戯の発明にも古来優秀な能力を示した民族である。旧馬の代りに天馬を使う新形式ポロを案出したなかつたとすれば、むしろ不思議な位だ。ペガサス・ポロは、昔の平面競技場の上空百米に達する空間を競技場とし、内部に廻転体を包んで重力の作用を受けぬ球を、地上五十米の高さの標穴に叩き込む三次元の馬上打球戯である。各組特有の配色に翼を染め分けられた天馬が左右上下に飛び交い、その間を白球が縦横に動き廻る、実に壮快な競技だ。そしてドリスは、アベルデーン・ポロ・チームの正選手なのだった。

アヴァロン号が翼をおさめ、その四脚が地に着いた。ドリスが身軽に鞍から跳び下り、拍車が光った。厩舎からの合図で戻って来たのだろう。連絡の為に馳せ寄る黒奴の姿が受像器に小さく現れた。

像が消え、今度は美少女の上半身が大写で立体化した。ポロ正選手の服装だ。乗馬ズボンに長靴の下半身を見なくても、スラリとした身体つきに、鞭のような強靱な腕やかさを秘めていることが分る。まだ十八歳だが男妾の胤ということもあって、姉のように枢要な地位を予想するわけに行かぬため、政治に興味を持たず、ひたすらスポーツに励んで来て、若くして乗馬の名手と謳われている。

馬（勿論畜人馬のことである。どんなものかは後章で説明する。）の数は多くないが、粒選りの名馬を揃えた彼女の厩舎はいつも姉を羨ましがらせている。狩猟の腕前も姉より上だ。父親似で顔は少し姉よりいかついが、男女の役目が前史時代とは逆になっているイースでは、そういういかつさは女の顔にとって少しもマイナスになつ

てはいない。整った顔立だ。まだ熟れ切らぬ処女の肉体の清純が、若い顔、特にその汚れを知らぬ円らな眼によく調和している。

片手に打球杖を握って振り動かしながら、脹れ面で、

「どうしたの、姉さん、今練習中だったのよ」

「ドリス、妾、不時着——墜落しちゃったのよ」

「えッ、墜落、今どこ？」

「一九五六号球面、北緯五〇度一二分、東経八度二三分五〇秒。分った？ 円盤も破壊れちゃって……」

「分った。すぐ迎えに行くわ。誘導波出して置いて」

「うん。頼んだわよ。待ってる」

四

ホッとした顔で、ポーリンはクララを振り返り、

「失礼したわね、フォン・コトヴィッツ嬢。もう大丈夫、すぐ迎えが来るわ」操縦席を立て戻って来ながら話し続けた。「でも本当に驚いたわ。貴女をイトス(EES)の人とばかり思ってたものだから——そう云えば、貴女の服も、ヤプーに首輪させてないのも、変な気はしたんだけど、まさかと思って……」

「EESの人？」不思議な立体映像に圧倒されたような気持から立ち直れぬまま、クララは不可解な言葉を繰り返した。「EESって何です？」

「The Empire of Eight Suns (八太陽帝国) 又の名はThe British Universal Empire (大英宇宙帝国) ——と云っても、やはり分らないでしょうけど」クララのすぐ前にまで来たポーリンは並んで元の場所に坐ろうとせず、彼女と向い合ったまま話したため麟一郎の背中に横坐りに臀を下しながら、説明した。「これは昔の人に知らせてはいけないことになってるの。前史時代の球面の無許可着陸で

も縮小刑五級——ひどい処罰を受ける位なのよ。でも妾は墜落して貴女に救われたんだから、妾隠そうと思わない。驚いてはいけないことよ。今貴女の住んでいる時代から二千年余り先の世界、それがEESです。妾は八つの太陽圏の首都のある本国星から地球別荘に遊びに来たの。でも、今妾達のいるこの面球じゃなく、三九六〇号球面に、つまり地球紀元で三九六〇年の地球上に新築された別荘に來たわけなのよ」

語り続けるポーリンは尻の下にヤプーには全く無関心だった。アベルデーシの本宅では各室に肉椅子を置き、寝室には肉寝台を備えてつけていることとて、彼女はヤプーの肌で自分の身体を暖めることには慣れ切っていたから、今このヤプーの背に腰掛けたについても何の緊張も感じなかったのである。ケープが短くて尻の下に敷けず、臀の肉は薄物一枚を隔ててヤプーの背中に接し、下から暖められる。彼女は高々と脚を組んだ。

麟一郎の方は、腰掛けられると同時に、彼女の体重を四肢に重く感じたが、それ以上に精神的な屈辱感を新たに感じた。それを口に出せず堪えるので全身が熱ってくる。その背に女の臀が冷たかった。クララと接吻した以外女に関する経験がなく、勿論女の裸体など知らぬ麟一郎は女体のお臀の冷たさを初めて味わって驚いたが、もっと吃驚させられたのは女の話の内容である。唯聞けば狂人の痴言としか思えぬことだが、こういう特異な状況の下で聞かされると信じ外なかった。麟一郎は、空中を飛行し、人を犬にし、大きな都海の下底に変わるアラビアンナイトの魔法の為魔法で石に化せられてしまったような気持だった。女が脚を組んだ頃には初め感じていた臀の冷たさは消えて、却って暖かみさえ覚え出した。

クララは、恋人の背中を眼の前で腰掛け代りにされて不快に感じたが、余りの無造作さに却って気を吞まれ抗議もできぬまま

「どうして英語を御存じですか？」と流石に鋭い質問だったが、「英語？——ああ、世界語のことを昔そう呼んだのね。その英語が宇宙帝国全体の共通語になったのよ。勿論方言はあるし、平民は可成り崩して喋るようだけど……」

「この空飛ぶ円盤は？」

「ディスク」

「円盤のこと？これは航時快速艇よ。時間航行機といってね、四次

元宇宙船に使う次元推進器を時間次元に作動させたものがあるの」

何も知らない相手と分るとポーリーンの話も解説調にくだけた。

「その一番小型がこれで、一人乗りよ。……じゃあ、今度は妾からお訊ねするけど、貴女は何故このヤプーを裸にして連れてらっしゃったの。前史時代にはヤプー達は皆服を着てたって、妾は教わってたんだけど……。先刻は一つにはそれで感違いしちゃったのよ」

ポーリーンは、ほっそりと品の良い右手の人差指で、尻の下の一郎を指しながら、クララの方を見た。

麟一郎は気配で自分のことと察し、再び屈辱で血が燃えた。先刻女の前に裸を示すことを恥かしく思った時には、相手も彼の裸を正視できず困っているのだらうと考えて、男として女に対し遠慮したのだったが、今この様に女が平然と彼の裸を口にし、あろうことか彼の裸の背中に腰を下すなど、全く彼の裸に対して女としての当惑を感じていないのを見ると、一人前の男性としての自分を無視されたように感じられ、先刻とは違った屈辱感からの恥かしさに堪えられなかった。

第五章 ヤプー本質論——知性猿猴

「度々妾の麟——瀬部氏のことを、ヤプーなどと妙な名で称んで変な

ことをおっしゃいますけど、どうしたことなんでしょう」クララは、先刻から喉に詰っていたことを好機会を得て、憤懣と共にぶちまけた。「彼が全身麻痺で苦しんでいるのに、その背中に坐ったりして！妾は先刻から気になっていたのです。止めて下さい。そして早速に薬の注射をして下さい。妾は婚約者がこれ以上恥かしめられるのに堪えられません」

麟一郎はクララの抗議を嬉しく聞いたが、途端にポーリーンの臂にグイと推されて無抵抗に前にのめり、今迄両掌で支えていた上半身を、肘まで床に着けて低く支えるような姿勢になった。ポーリンが勢よく立ち上った反動で推されたのだ。彼女の臂のくも今度は背中が寒かった。

「何ですって？ このヤプーと婚約？ いくら野蛮な……」ポーリーンの声は尚も云い募ろうとして何に思い当たったのか俄に和いだ。「ああ、リングにして使うつもりだったことを婚約とおっしゃったのね。そうでしょう？」

ポーリーンはリングとの結婚式のことを連想したのだった。女権制確立後、男子貞操義務が強調され、習俗化すると共に花嫁の処女性問題にされず、逆に花婿の童貞が重大視されるようになり、元は処女を意味した *virgin* の語が童貞を意味する様になってから既に久しい。こういう男女観の下では、リングも童貞かどうかで随分値が違うのである。童貞リングには口唇締金具というチャック附のものと、チャックの代りに膜を附けたものとあるが、後者は高くて貴族富豪でなければ手が出せず、平民はせいぜい締具附の二級品が買える位のものである。それでもとにかく童貞物として喜ばれる。

玩具といっても、童貞が問題になる生人形だから、これに男性を感じる女も出て来る。現に平民の婦人の中には、本来素裸でおかし

くない筈のリングの頭部丈に袋覆面をかぶせ、リングパンツなど称
 んでいる者があると云うのも、リングを使い馴れぬ為、玩具視し切
 れず、その顔に被覆がないと恥か
 しく思うからだ。さすが上流婦人
 にはそんな不見識は見られないが
 童貞リングの初使用を、花婿の
 童貞を花嫁が破る結婚初夜に類比
 して、結婚式と戯言ける様になっ
 た裏には、やはりこのリング擬人
 化の心理があつたといえよう。

ともあれ、これはありふれた表
 現で、ポーリーン自身も、二三日
 前隣別荘のアグネスが遊びに來た
 時、お互気心の知れた気易さもあ
 つて、リングを話題にして
 「このリング、初めて見るわね。
 旅行用？ 買った？」

「うん、足台兼用のをね、旅に出
 る前に思いついて眺めたの。
 読心家具化してあるのよ」
 「新品ね。もう結婚した？」
 「うん、船の中で早速式を挙げた
 わ」

と云った対話をしたことだった
 彼女はそんなことから類推して、
 クララの云う婚約の意味を彼女な
 りに解釈しようとしたのだが……



「いいえ、リングなんてものは存じません」クララの声が凜として
 響いた。いつか立ち上って、ポーリーンに面と向い合っている。

「妾達二人は愛し合っているのです。彼が大学を卒業したら、彼の祖国に行つて、挙式するのです……」

「じゃ、本気で結婚を考えてるのね、何て恐ろしいこと、ヤプーとの結婚……」

「ヤプーなんてものは存じません！」

「それは旧ヤプーがヤプーと呼ばれてなかったからよ。人間扱いされてたからよ。たしかヤパン人とかジャンパン人とか云うんだったわね。でも名前なんかどうでも良いのよ。問題は貴女のいわゆる彼の祖国が実はヤプー諸島のヤプー共の群だということなのよ。貴女の婚約者はその……」

「奥様」クララはたまりかねて口を挿んだ。「私の将来の夫のことをとやかく云つて戴きたくありません。それに彼は貴女を失神から救つたので、貴女にとつても恩人の筈ですわ。（この時ポーリーンは肩をすくめた。）彼は貴女がヤプーとやらよばれる下賤な存在ではありません。妾、先程は貴女が精神的衝撃から回復していらつしやらないのだと思つて、我慢をしていました。でも貴女が不思議な未来の国の人だとおつしやつて、事情が呑込めてからは、貴女の彼に対する態度が何かの偏見に基いていることが分つたのです。妾は貴女の為にそれを惜まずにはいられません。……」

故フオン・コトヴィッツ伯爵の令嬢たるに恥じぬ立派な辞令だった。

二

クララの熱弁に、その迷いのまだまだ深いことを見抜いたポーリーンは、相手の氣持を尊重して、もう麟一郎の暖い背中使わず長椅子に戻り、足台の凹みに両足先を休ませ、手真似で掛ける様勧めながら、

「フオン・コトヴィッツ嬢、貴女のお氣持は良く分つたわ。前史時代の旧ヤプーが人間として扱われていたということは理窟では知つてたけど、まさかこれほどとは思つてなかったから吃驚したのよ、考えてみると、そんな時代に住む貴女に妾と同じ感じをすぐ持つてというのは無理かも知れません。……でも、妾、黙つていられないの。貴女見たいに立派な人間の愛情がヤプーに向けられるなんて、考えるだけでも人間性の侮辱だわ。考え直して欲しいわ」

「何をおつしやるの」クララは呆れ返り、次いでいきり立った。

「侮辱にも程がありますわ」

「相手がヤプーですもの。いいこと、フオン・コトヴィッツ嬢、これは」彼はいとわず、これはと、物を指す代名詞を使いながら、麟一郎を指さして「ヤプーよ。貴女方の二十世紀がヤプーという呼名を御存じかどうかは問題じゃないの。問題は肌の色よ。黄色の肌が教えて呉れるわ、これはヤプーで、人間じゃないってことを。……」

「遠い未来の世界で白人が黄色人を奴隷にしているからといって、妾達の愛情に何の関係があるとおつしやるの？ かりにそうだとしたって妾は少しも結婚を躊躇しません」クララは眼を輝かせて、

「奴隷だって人間です」

「黄色い奴隷なんてものはありません。奴隷は黒色よ。そして黒奴は人間じゃなく半人間よ」ポーリーンは事もなげにいった。「肌が白くなければ人間とは云わないわ。形容詞をつけて白人なんて云う必要はないのよ（※）、妾達人間は」

（※註。このようにイースにおいては、白人という概念は存在しないのであるが、二十世紀人を讀者に持つ關係から、以下の説明において、白人の語を用いることあるを諒とされたい。）

「それは偏見です。奴隷は制度の産物で、制度で人間の本質を否定することはできません。妾達の世界はそれに氣附いて百年前に黒人

奴隷を解放しました。……」

「その解放が後にアメリカ——だったわね、たしか——を亡ぼすことになったのよ。解放する前にもっと考えるべきだったわね。……」

「そりや、奴隷は制度の産物よ。肉体的には黒奴も人間も同じ *homo sapiens* に属してることは勿論よ。けど知性人類だから人間だとい

うのは論理の飛躍ね。半人間もありうる筈よ。……でも、こんなことはヤプーとは関係のない話だわ」

「黄色人は黒人と違い……」

優秀な民族です、と続けようとしたクララの言葉をポーリーンは途中から引き取って、

「……ますとも。全然違います。比較するのがおかしい位だわ。黒奴は奴隷だけど、ヤプーは家畜なんだもの」ピシヤリと云い切った。

「ヤプーは類人猿よ。獣よ。いくら知性があっても、獣を奴隷とは云わないわ、家畜だわ。ヤプーは知性ある家畜なのよ」

「痴けたことを！何を根拠にそんな大嘘を……」クララは絶叫した。

「何を云うのよ。妾は単に事実を云ってるんだわ。貴女が知らない丈よ。——尤も貴女丈じやない、前史時代の人は誰も知らなかった。ヤプーが「知性ある類人猿」——学名は *simius sapiens* よ——だ

ということ、テラノヴァの人達が教える迄、誰一人気附かなかったのよ」ポーリーンも漸く昂奮して来て、白い頬が美しく紅潮した。

「旧ヤプーが『黄色い猿』と称ばれた時代もあったらしいの。眼のある人が全然無いじゃなかったのね。旧ヤプーが模倣能力——これは猿の特性だわね——に優れていることは見抜かれていたのよ。もう一押しだったと思うんだけど、当時は知性というものを人類の占有物見たいに思い込んでいたから、類人猿だって知性動物たりうる

そういう進化もありうるということに誰も考え及ばなかったのね。それがテラノヴァに渡って人類以外にも天馬の様な知性動物があるのを知って目から鱗が落ちて、その目で旧ヤプーを見直すと『黄色い猿』というのが唯の比喩でないことが分ったわけよ。それを学問的に証明したのがヒトラーでした。……」

三

元来、「ヤプーは類人猿の一種だ」という説は、初めてテラノヴァ軍の地球再占領当時、ヤプー処遇上、人権問題の口を塞ぐ便宜上から、大衆伝達機関に付された俗説で、政策的神話ともいうべきものだった。テラノヴァの本国では既に黒人は奴隷化していたから、黒奴の人間性を今更問題にする必要なく、新附の地球での政策としてはヤプー丈を対象として、その人権剝奪の理由を作り出せばよかったのだ。

然しヤプーの奴隷化、家畜化の推進に当り、その理由として繰り返されている中に、俗説は何時か人々の信念に根を下し始めた。そしてその信念からの逆作用で更に家畜化が拍車を掛けられた。天馬代謝細菌のヤプー寄生種の発明も、ヤプー人間観の下では不可能だったろう。生体解剖による医学の進歩の恩恵は余りに大きく、今更生体解剖を中止することはできなかった。「ヤプーは別扱でよい。」ヤプー類人猿説を俗説と見る人も、これ文は認めざるを得なかった。畸形者の交配から短脚長喙の畜人犬の原種が作出固定され、四這にして飼われ始めると、もうヤプー人間観では賄い切れぬ新情勢だった。

この時人々の期待に応え、その内心にまだしこついていた疑惑の雲を残りにく吹き飛ばしたのが、ヒトラーの大作『家畜の由来——

前史時代人の最大の錯覚について』の発表だった。第二の進化論といわれる、この業績の著者は前史時代末期の梟雄ヒトラーの血を引く大生物学者で、彼は従来 *homo sapiens* (知性人類) といわれて



来た中に異種の *simius sapiens* (知性猿猴) が入っていることを発見し、皮膚の白と黒は前者に、黄は後者に属すること、即ちヤプーは *simius sapiens* であることを論証するに *primates* (霊長類) 中の

homo (人類) と *simia* (猿猴) とが共に代表選手たる知性動物を進化させ、夫々右の兩者となつた、との豊富な例証に裏附けられた巧妙な理論を以てした。正に旱天の慈雨のような学説だった。

基礎哲学と応用技術とは平行する。ヒトラーの畜人論が学界の定説として受け容れられ、ヤプーの非人間化が良心の曇りを感じずに遂行し得られるようになる、ヤープ文化の三大発明 ディミニツシグマシン、テレパシー、クロモソイ 生体縮小機、読心装置、染色体手術が、次々に登場して来た。

これによって畜人制度は完成期に入ったといわれる。初めは愛玩動物だった矮人 ヒグミ——縮小畜人 ディミニツシグマシ の最小種——は「有魂機械」の部品として使用せられるに至り オートメーション 第三次機械自動化による第五次産業革命を招来する原動力となった。栄養循環装置の普及によ

リ、肉便器ストライその他の生体家具が各家庭の常備品となつて来た。新種のヤプーが續々作出され、皮革ヤプー、食用ヤプーが飼養され、生体処理工業が興り、更に血液媒剤コサンギニンと電気焼筆フランディンク・ペンによる生体彫画は第一番目の新芸術として認められるに至つた……（これら名称のみ記し事物の内容は後章で説明される。）

ヤプーは単なる家畜ではなく、器物でもあり、動力でもある。生体家具として生産されるものは生れながらにして器物性を帯びている。生体とはいつても本質は家具なのである。ヤプーの登場が家畜と家具との概念的区別を曖昧にしまつたのだ。又その精神能力が機械の一部に組入れられている時ヤプーの存在価値は新しい動力源たるに在るともいえる。今やこうして生活の隅々までヤプー利用の浸透した世界におけるヤプーの意義は恰も二十世紀世界における電気にも比せられよう。万能の召使たる電気なしに二十世紀人の生活が考えられないように、ヤプーというこれ又万能の召使なしにイース人の衣食住は考えられなくなっている。

かつて進化論が自由競争の自然法則視によつて資本制を合理化したように、畜人論はヤプーの非人間性の論証によつて畜人制度を合理化した。それは理論なるものの上部構造性を示す見事な一例ともいえたであろう。イース社会の人々にとってはヤプーの由来についてのヒトラー学説は常識であり、この人々に対してヤプーが人間であるといふことは、二十世紀人に対し雷公の絵を示して電気の本質はこれだと説くような印象を与えるだろう。ヤプーの非人間性は既に論議以前の科学的真理なのである。——生ヤプーの裸体は人間と酷似していること、地球のヤプン諸島には服を着たり物を食べたりして、知性ある類人猿がどれほど人間そっくりの衣食住や社会生活を営み得るかの好個の観察対象たる土着ヤプーのいること、彼等は

皮膚の色以外は殆んど人間と区別がつかず、むしろ皮膚から見ると白人と黒人の中間に位する人間かのように見えること、こういう事実はイース人の心を脅かさない。成程外見からいへばそうであろう。人間と黒奴丈が *Homo sapiens* でヤプーは別種だというのは外見に反することだ。然し外見は似ててもヤプーは類人猿に過ぎず、ひとり矮人決斗ビグミーデュエルに興じ、畜人焼肉に舌鼓打ち、精気吸引具ヤップ・ステッキを喫つて若返りすることが出来る……

一億の人間と十億の黒奴の下に百億のヤプーがイース社会の生産力の根底を支えている。ヤプー人間観になずみ易い前史時代の目には、この畜人制社会はヤプーを搾取する階級社会に見えるかも知れぬ。この見地に立てば、イースの社会組織こそ人類最高の空前の支配体制であろう。奴隷制の暴動、封建制の一撥、資本制の罷業、何時の世にも支配階級は脅やかされ、革命で取つて代られたが、イース社会をヤプーが脅かすことは絶対にないのだから。——だが、ヤプーを被支配階級と見ることは誤りである。彼等は階級というに値しない家畜なのだ。牛や豚は人間を脅かさず、只使役され消費される、それが家畜の宿命だが、ヤプーもそれと同じだ。いや家畜そのものとしては牛や豚よりも卑賤いやしいものとされている（牛や豚がヤプーより貴いことは後章に書く。）位なのである。只単なる家畜でなく、一方に器物であり動力であり、各種各様の使用形態のすべてがヤプー *Yappoo*（序でながら、これは単複同形である。）の名に総称されている。一度電気を使うことを知つた人間が二度と電気以前の状態に戻ることはないように、既にヤプー使用の便利を経験した生活体系にヤプーの肉体と精神を織り込んでしまつたイース社会がヤプーを使用しなくなることは考えられない。否、百億匹では既に不足するといわれ、帝国発展に伴うヤプー大増産は刻下の急務と叫ばれている位である。

かくてヤプーの将来には唯一つの道が続いている。これまでと同

じく今後永久に人間（白人）社会の維持と発展の為の材料や道具となること、これである。白人の樂園パラダイスイースの文明に榮華の花を咲かせるための肥料として増産され愛用されてゆくのが、今後のヤプーの運命なのである。——ヤプー人間観からすれば、この解放たすかることのないう永久的隷属、救済すくいのない永劫の地獄はやり切れないことだが、仕方がない。これを悲劇と見るのは誤ったヤプー人間観に立つからで正しいヤプー観に立つなら、少しも悲観に及ばない。種に属する個体数の増加と分化した変種の多様性とが生物の繁栄を示すものである限り、八つの太陽の下、現に *simius sapiens* ほど繁栄している種は他にないのであり、人類と共に発展してゆくこの知性ある家畜の将来は洋々たるものなのだ。

そして、その正しいヤプー観を教え、将来の発展を示唆するものこそ、ヒトラーの家畜論なのである。

四

ポーリオンも、ヒトラーの家畜論即ちヤプー家畜論は常識として頭に入れている。そう教えられそう信じて来た。ヤプーは人間であるなど考えられない——というより、ヤプーの本質について、彼女はそもそも懷疑したことがない。一度、家畜文化史の専門家である兄セシルから、五百年程前、「ヤプーは人間である」という説を唱えた学者の話聞いたことがある。もう名前も忘れたが、何でも畜人省の局長だった女の夫で、地球で土着ヤプーを研究した上、「家畜人解放論」という大著を刊行し、ヤプー人間観に立って、ヒトラー学説のイデオロギー性を衝き、ヤプー解放を説いた。然し誰にも相手にされず、妻からも離縁され、おまけに滑稽にも、読心能附肉テレパシク・スト・ウー便器が彼の内心の「人間を便器にして良いものか」という躊躇ためらを読

み取って口を開かない為、黒奴用真空便管の先端器を使わねばならなくなつた……」「それでどうしたの？」「笑い転げた後でポーリオンが訊いたら兄は答えた。「すっかり閉口して自説を撤回した。復縁は許されなかつたそうだ。お笑草だね」。ヤプーが人間であるなど、ヒトラー以後において、この馬鹿男の外に考えた人のあるのも知らない。だから今図らずも前史時代の人と逢つて、こういう明白なる実を知らないばかりでなく、容易に納得しそうにないのを見ると、無理もないとは思ひながら気の毒というより、もどかしさが先に立つ。——外見に反する、という理由で、地球が動いていることを信じようとしないう中世紀人に逢つた二十世紀人の心境を想像すれば、彼女の心中、思い半ばに過ぎるであらう。

ポーリオンは、ややもすれば自烈いづれたくなるのを抑えて、クララを説得するように努めながら、

「分つて？旧ヤプーの正体を知性ある類人猿と知って、これを家畜に飼ひ馴らしたのがヤプーなのよ。ヤプーは家畜だから、黒奴と違つて色々なことに使えるのよ。この犬」彼女は床に腹這っているネアンデルタール・ハウンドの方を顎でしやくつた。犬は両前脚を揃えて投出した上に長々と顎を載せ目を瞑っている。額に彫り付けられたジャンセン家の紋章に矜持を感じ自足しているような姿だ。「これだつて、元来はヤプーなのよ。ヤプーから作つた犬よ。貴女はこのタロの同類を婚約者……」「止めて！」クララは鞭を焦々と振つて止めさせようとしながら、金切声をあげた。「麟はこんな醜怪おほげではありません」

「そりや、土着ヤプー——いえ、旧ヤプーだからだわ。つまり生なまんだわ。使い易く加工する前の生ヤプーは、皮膚の色以外は、人間そっくりに見えるものよ。この足台だつて」と肉の凹みに踵をトン

トンさせながら、「一月前には、貴女のそのヤブーより遅しい大男で、容貌も気の利いた生ヤブーだったのよ。それを工場で加工させて、背中に足型を刳らせて、こういう足台にしたのよ。妾の舌人形に作らせたのよ」

「そんな、人間をわざと畸形化するなど……」

「違う！ 今云ったでしょう、ヤブーは人間じゃないんだって」

息詰るような二人の貴婦人のやりとりを、麟一郎は呪縛されたまゝ、全身を耳にして聞いていた。漸く先程からのポーリーンの態度が分って来た。そして今初めて正体を知った犬や足台に妙な親近感を覚えた。そうだったのか、成程肌の色は俺と同じだな。だから何と恐ろしいことだろう。知性ある家畜ヤブー、俺もその一匹と見られていたとは……何を糞！ と思っても、身動き一つできない身体なのだった。

クララは麟一郎に視線を向けた。何といわれようと、大切な恋人その土下座した哀れな姿を見ると、激情がこみあげて来て思わず進み寄り、跪いて彼の身体に手を掛けた。……凝^じつと動かない。今更のように全身麻痺の恐ろしさを感じ、先程からの自分の昂奮も緊張も皆この人の為なのに、彼の身体はこんな不具に……と思うと、たまらなくなつて、ぐずおれるように彼の動かぬ身体に縋^かつて口惜涙を出した。鞭を床に捨て、男の背に上半身を寄せつつ、両手で首を抱き、そつと自分の方に押し寄せさせると、

「麟！」

と唇を近づけたが、男の唇は死んだ様に動かない。不図先刻、円盤落下直後、水辺から駆けつけた彼と熱い抱擁接吻を交したことを思い出して、クララは、又涙した。麟一郎の目からも涙が滴った。

第六章 宇宙帝国への招待

ポーリーンは思わず目を瞑^{つぶ}った。人間とヤブーとの接吻、汚らしさに正気の沙汰とも思えず、見るに堪えなかったのだ。

ふと「ホワイト・ラブラム」のことを思い出した。古い記憶である。まだ母アデラインの膝下にいた未婚時代で、然しもうリンガの使い方は心得ていた頃だ。母にフアンレターを寄越していた青年の崇愛者が、母の使い古しのリンガを入手したと狂喜した便りをして来たことがあった。間もなく「貴女のリンガが羨ましい……」と註して一基の立体写真が送られて来た。それが何と、リンガを抱擁し接吻し合っている像なのである。一目見るなり「まあ汚らしい」と嘔氣を催し、慌てて肉反吐盆をさし招いた潔癖な彼女だったが、母は案外平気で「平民の中には時々こういう生れ損いが出るものだ」と笑っていた。後で聞いたのだが、その後間もなく、母はこの男の送って来ていた白紙身売状（※）にラブラムと記入し、寵愛の男妾の一人に、ラブラムとして贈ってしまったそうだ。接吻像からの皮肉な思い付きが、青年の純真な愛情を玩具にする嗜虐癖に結び付いて、珍らしい白色唇人形を作り出したわけで、当時ポーリーンは、犠牲となった青年に一面同情もし、人間をヤブー扱いする母の異常性に反撥を感じもしながら、結局「あんな変態男、それで当然よ」と母の処置そのものには表面賛成せざるを得なかったが、それというの、彼女は男の習俗を無視してリンガと接吻してる像に極端なおぞましさを感じていたからであった。

註 身売状は債務者が債権者に弁済しない時は指定した身分に貶されたもの、異議ないと認めて差入れる証文で、その指定欄を白紙にしたものが白紙身売状である。相手に生殺与奪の権限を与えるこ

とになる。イース社会ではこれが求愛の表現として愛用せられた。法的には有効でも慣習上単なる恋文ラブレターとしか見ないのが例である。それをアデライン卿は逆用して正式の身売状として利用し、有無を云わず男を処分してしまつたわけである。人間をラブラムにするなどは、たとえ貴族が平民に対する場合でもこういう身売状がなければ違法なことなのである。

今ヤプーと接吻する女を見て、ポーリーンの思い出したのはこの時のおぞましきである。リングよりは不潔さの少い生ヤプーではあるが、前のは平民の男だったのに、目の前にいるのは貴族の女で、ポーリーンにはその点ずっと身近く感じられ、それ丈に又前とは異なる不愉快さが避けられなかった。

然し、女の鳴咽が耳に響いて来ると、男を氣遣う情愛が、目にヤプーを見ない為か、次第にひしひしと胸に迫って、彼女の心を揺り動かした。……可哀そうな女ひと、こんな可愛い顔をしながら、ヤプーに惚れ込むなんて。……でも彼女の罪じやない、時代の罪なんだわ。この女は、ヤプーが人間として通用してる倒錯的な世界に住んでるんだから……あゝ、先刻ミスターセベと云われて何のことか分らなかったけど、ミスターは氏のミスターことね、セベ氏といったんだわ。旧ヤプーだから、名の外に苗字を持ってるんだわ。……ヤプーを人間の男と思って惚れ込んでいるこの愛情を何とか正しい方向に向け変えられないものか？ 自覚しない病人が治療を拒んでも医者には治療の義務があるんじゃないかしら？ この女は妾めかけを救けて呉れた。今度は妾がこの女を救けて上げる番だわ。ヤプーと接吻したりして不愉快だけど、それで見捨てず、積極的にこの人の病的愛情の矯正に努力してあげなければ……

ポーリーンが、そこまで考え進んだ時、
「奥様、一刻も早く緩解薬の注射をして下さい」

という激情を押殺した様な声が彼女の目を開かせた。クララが隣一郎の傍に跪き、彼の身体を抱えたまゝ、きつと首を上げて彼女の方を見ているのが目に入った。男の唇から今顔を離した所らしい。ほつれた栗色の髪と涙にうるんだ瞳の表情とをポーリーンは、同性ながら、美しいと思わないではいらなかった。

二

緩解薬のことをすっかり忘れていた——というのもヤプーを犬が咬んだことなど重視するに当らぬという気持が無意識に仿っていたからだ——ポーリーンは、眉をひそめた。先刻は原球面にいると思つて安心していたのだが、此処が二十世紀の球面では困ったことになった。

衝撃牙に咬まれた獲物の麻痺を緩解する必要は、獵場から帰る途中では生じないのが普通だし、又この薬が数種の薬品から合成され合成後短時間内に使用しないと薬効が減じる性質を持つてゐる為もあつて、緩解薬は、船や艇に備え付けられてゐるものではないのである。このヤプーに緩解薬を注射するには、原球面に連れ戻るか、向うで合成させてすぐ届けさせるか……。

フト思いついて、時間電話機に向い、別荘を呼び、「ドリスはもう出かけた？」

「はい、先程のお電話から五分程後で、皆様と御一緒に氷河号で御出発になりました。もう半時間程経っておりますから、間もなくそちらに……」

「そう、氷河号を出したの……」

氷河号は、古石器代人狩猟に氷河時代迄遡る時に使う大型の航時速船で、時速二〇〇〇年から出す。別荘にあるジャンセン家の持船でこれより速いのはないから、緩解薬を届けに別の船を今出させて

トンさせながら、「一月前には、貴女のそのヤブーより逞しい大男で、容貌も気の利いた生ヤブーだったのよ。それを工場で加工させて、背中に足型を彫らせて、こういう足台にしたのよ。妾の舌人形に作らせたのよ」

「そんな、人間をわざと畸形化するなど……」

「違う！ 今云ったでしょう、ヤブーは人間じゃないんだって」

息詰るような二人の貴婦人のやりとりを、麟一郎は呪縛されたまゝ、全身を耳にして聞いていた。漸く先程からのポーリーンの態度が分って来た。そして今初めて正体を知った犬や足台に妙な親近感を覚えた。そうだったのか、成程肌の色は俺と同じだな。だから何と恐ろしいことだろう。知性ある家畜ヤブー、俺もその一匹と見られていたとは……何を糞！ と思っても、身動き一つできない身体なのだった。

クララは麟一郎に視線を向けた。何といわれようと、大切な恋人その土下座した哀れな姿を見ると、激情がこみあげて来て思わず進み寄り、跪いて彼の身体に手を掛けた。……凝^じつと動かない。今更のように全身麻痺の恐ろしさを感じ、先程からの自分の昂奮も緊張も皆この人の為なのに、彼の身体はこんな不具に……と思うと、たまらなくなつて、ぐずおれるように彼の動かぬ身体に縋^{すが}つて口惜涙を出した。鞭を床に捨て、男の背に上半身を寄せつつ、両手で首を抱き、そつと自分の方に振り向けさせると、

「麟！」

と唇を近づけたが、男の唇は死んだ様に動かない。不図先刻、円盤落下直後、水辺から駆けつけた彼と熱い抱擁接吻を交したことを思い出して、クララは、又涙した。麟一郎の目からも涙が滴った。

ポーリーンは思わず目を瞑^{つぶ}つた。人間とヤブーとの接吻、汚らしさに正気の沙汰とも思えず、見るに堪えなかったのだ。

ふと「ホワイト・ラブラム」のことを思い出した。古い記憶である。まだ母アデラインの膝下にいた未婚時代で、然しもうリンガの使い方は心得ていた頃だ。母にフアンレターを寄越していた青年の崇愛者が、母の使い古しのリンガを入手したと狂喜した便りをして来たことがあった。間もなく「貴女のリンガが羨ましい……」と註して一基の立体写真が送られて来た。それが何と、リンガを抱擁し接吻し合っている像なのである。一目見るなり「まあ汚らしい」と嘔氣を催し、慌てて肉反吐盆をさし招いた潔癖な彼女だったが、母は案外平気で「平民の中には時々こういう生れ損いが出るものだ」と笑っていた。後で聞いたのだが、その後間もなく、母はこの男の送って来ていた白紙身売状（※）にラブラムと記入し、寵愛の男妾の一人に、ラブラムとして贈ってしまったそうだ。接吻像からの皮肉な思い付きが、青年の純真な愛情を玩具にする嗜虐癖に結び付いて、珍らしい白色唇人形を作り出したわけで、当時ポーリーンは、犠牲となった青年に一面同情もし、人間をヤブー扱いする母の異常性に反撥を感じもしながら、結局「あんな変態男、それで当然よ」と母の処置そのものには表面賛成せざるを得なかったが、それというのも、彼女は男の習俗を無視してリンガと接吻してる像に極端なおぞましさを感じていたからであった。

註 身売状は債務者が債権者に弁済しない時は指定した身分に貶されたもので異議ないと認めて差入れる証文で、その指定欄を白紙にしたものが白紙身売状である。相手に生殺与奪の権限を与えるこ

第六章 宇宙帝国への招待

とになる。イース社会ではこれが求愛の表現として愛用せられた。法的には有効でも慣習上単なる恋文ラブレターとしか見ないのが例である。それをアデライン卿は逆用して正式の身売状として利用し、有無を云わず男を処分してしまつたわけである。人間をラブラムにするなどは、たとえ貴族が平民に対する場合でもこういう身売状がなければ違法なことなのである。」

今ヤプーと接吻する女を見て、ポーリーンの思い出したのはこの時のおぞましきである。リングよりは不潔さの少い生ヤプーではあるが、前のは平民の男だったのに、目の前にいるのは貴族の女で、ポーリーンにはその点ずっと身近く感じられ、それ丈に又前とは異なる不愉快さが避けられなかった。

然し、女の鳴咽が耳に響いて来ると、男を氣遣う情愛が、目にヤプーを見ない為か、次第にひしひしと胸に迫って、彼女の心を揺り動かした。……可哀そうな女ひな、こんな可愛い顔をしながら、ヤプーに惚れ込むなんて。……でも彼女の罪じやない、時代の罪なんだわ。この女は、ヤプーが人間として通用してる倒錯的な世界に住んでるんだから……あゝ、先刻ミスターセベと云われて何のことか分らなかったけど、ミスターは氏のミスターことね、セベ氏といったんだわ。旧ヤプーだから、名の外に苗字を持ってるんだわ。……ヤプーを人間の男と思って惚れ込んでるこの愛情を何とか正しい方向に向け変えられないものか？ 自覚しない病人が治療を拒んでも医者には治療の義務があるんじゃないかしら？ この女は妾を救けて呉れた。今度は妾がこの女を救けて上げる番だわ。ヤプーと接吻したりして不愉快だけど、それで見捨てず、積極的にこの人の病的愛情の矯正に努力してあげなければ……

ポーリーンが、そこまで考え進んだ時、

「奥様、一刻も早く緩解薬の注射をして下さい」

という激情を押殺した様な声が彼女の目を開かせた。クララが隣一郎の傍に跪き、彼の身体を抱えたまゝ、きつと首を上げて彼女の方を見ているのが目に入った。男の唇から今顔を離した所らしい。ほつれた栗色の髪と涙にうるんだ瞳の表情とをポーリーンは、同性ながら、美しいと思わないではいらなかった。

二

緩解薬のことをすっかり忘れていた——というのもヤプーを犬が咬んだことなど重視するに当らぬという氣持が無意識に仿っていたからだ——ポーリーンは、眉をひそめた。先刻は原球面にいると思つて安心してゐたのだが、此処が二十世紀の球面では困ったことになった。

衝撃牙に咬まれた獲物の麻痺を緩解する必要は、獵場から帰る途中では生じないのが普通だし、又この薬が数種の薬品から合成され合成後短時間内に使用しないと薬効が減じる性質を持つてゐる為もあつて、緩解薬は、船や艇に備え付けられてゐるものではないのである。このヤプーに緩解薬を注射するには、原球面に連れ戻るか、向うで合成させてすぐ届けさせるか……

フト思いついて、時間電話機に向い、別荘を呼び、「ドリスはもう出かけた？」

「はい、先程のお電話から五分程後で、皆様と御一緒に氷河号で御出発になりました。もう半時間程経っておりますから、間もなくそちらに……」

「そう、氷河号を出したの……」

氷河号は、古石器代人狩獵に氷河時代迄遡る時に使う大型の航時速船で、時速二〇〇〇年から出す。別荘にあるジャンセン家の持船でこれより速いのはないから、緩解薬を届けに別の船を今出させて

も、氷河号に追付けず、無駄待ちせねばならぬ。それより、氷河号で連れ帰って、注射してから連れ戻した方が早い……

素早く計算して、クララに向い、

「困ったわね。薬はこの艇にはないし、迎えの円筒はもう出ちやったから、持たせられなかったし……こうしましょう。氷河号——迎えの円筒のことだけど——なら、この球面と原球面とを二時間余りで往復できるからこの貴女の愛玩動物やお預りして、戻って注射してからお返しすることにするわ」接吻の時クララに首を振じまげられたまゝの不自然な姿勢をそのまゝ凝然と取り続ける麟一郎、その身体を抱くようにして跪いたまゝ、ポーリーの方を見ているクララ、その美しい茶色の瞳が憂慮と疑心に満ちているのを気の毒そうに見やりながら、ポーリーは云い添えた。「緩解させれば異常は残らないんだから、ちっとも心配いらないのよ」

「妾の案じているのは、貴女の彼に対する偏見が……」



「とんでもない。貴女が前史時代人だからって、貴女の所有物を詐欺したりなんかしないわ。お預りする以上責任持つわよ」 「妾も彼について行きたいのです」

「さあ、それは困るわ。前史時代人を連れて帰るなんて聞いたこともない犯罪だわ。妾自身検察の職務に従事してて自分から法律を破るわけに行かないし……」

「貴女は先刻、救助のお礼だとおっしゃって、別荘に妾を招待して下さったわ」

クララは必死である。恋人を殲したこの麻痺毒が現代の医学で解毒できるかどうか疑問だ。先程から垣間見た丈でも、相手の文明の水準は現代とは比較にならぬほど高いらしいから、相手に解毒させなければ、到底現代人の相手には負えないように思える。然し黄色人を畜生扱いにみている女の手に委ねて、この無抵抗な状態の恋人をそんな黄色人の地獄見たいな所へ一人遣るなんて、できることではない……

暫らく沈黙のまゝ、時が流れた。クララは麟一郎のひん曲ったまゝの頭部を元の様に直した。どうやらこちらの手で扱う通りの姿勢になるようだから、こんな屈辱的な姿勢でなく、上半身を起して正坐した形に直してあげよう、そう思った時、ポーリーンの声がして彼女は再び問題に引き戻された。

「そうね。貴女に救われた以上お礼をしなければならなかったわ。

犬が咬んだのはこちらの責任だから緩解させる文では、お礼にならないものね。貴方へのお礼として」うまい理窟を考えたポーリーンはにっこりして云った。「異例ですけど、円筒にお乗せしましょう。貴女を妾の別荘に、そしてイースの首都アベルデーンにある本宅にも、御招待しますわ」

「有難うございます。けど、妾は瀬部氏の看護に行くのが目的ですから」落着きを取り戻したクララは、又麟一郎を正式に苗字で呼んで「注射の出来る一番近い所、多分その別荘の方にお招き戴く丈で充分ですわ」

「フォン・コトヴィッツ嬢。貴女を円筒にお乗せするのに、一つ条

件があるのよ」

「条件？　どんな……？」

「アベルデーンで、女王陛下に拝謁して戴きたいの。だから、本宅にも御招待したわけなのよ」

ポーリーンの考えた理窟というのはこんなことだった。今度のこの休暇旅行前、女王陛下に御挨拶した時、「地球から何か土産を頼むわ」と冗談交りに御下命があったのである。「畏りました」と申し上げたものの、正直彼女には何を見つくるおうか、良いあてがなかった。何しろ陛下は八つの太陽の圏下の幾十の遊星からありとある珍宝奇物を集め持っておられるのだから。ところでこの前史時代の美しい令嬢を連れ帰れば、これ立派な御土産ではあるまいか。

美少女好みで有名な女王陛下はきつとこの女を寵愛され、側近の侍従として官職にも任せられるに違いない。そうすればこの女は帝国の人になる。帝国の人なら妾が連れ帰ることは違法になるわけではないのだ。……勿論、この女がカルーに留まる気になるかどうかは分らない。留らないといえどそれっきりだが、それにしても陛下の御下命に應じる目的で連れ帰っても悪くはなからう。第一、こんな未開時代からカルーを訪れたら、帰りたいなんて云う筈がない。それに一九五六年って云えば、第三次大戦迄いくらもない。この球面に残ってれば爆弾か熱かどちらかで死んでしまふんだから……そうだ、それにこの女が留まる気になれば、先刻妾が、何とかこの女のヤプーへの歪んだ愛情を正道に引き戻してあげたいと思った目的も、うまく実現することになる。カルーで暫らく暮したら、ヤプーが何か、どう扱ったらいいか、すぐ納得が行くだろうから……とにかく、この女をカルーに連れて行って陛下に拝謁させることが先決問題だわ……

だから、ポーリーンとしては、ヤプーの解毒よりもクララの身柄

こそ大切なわけなのである。

クララは、事情を知らぬから、狐につままれた面持で

「なんで妾が女王陛下に拝謁しますの？」

「前史時代の人を連れ帰ることが異例だからよ」ポーリーンはごまかして「別に難しく考えなくても良いの。見物がたら本国星カルーに行けば良いのよ。貴方を失望させることは決してないって御約束できるわ。カルーはイース文明の中心地ですからね」

「その星迄は遠いんでしょう？」

「カルーはシリウス圏——連星太陽系よ——の第八遊星です。この地球から約九光年、四次元宇宙船なら地球時にして三日と数時間しかかからないわ」

三

「瀬部氏はどうなりますの」クララは短刀直入に訊いた。「妾のお返事はそれ次第ですわ」

「迎えの円筒で別荘に戻ったら、すぐ元通りの身体にしてお渡しするわ。それ以後はこれのことは妾としては無関心よ。旅行中貴方がこれを携行なさることは」まるで品物見たいに云った。「勿論構いません」

「ずっと一緒にいられますのね？」

「貴女が処分しない限りね。ヤプーの方で飼主を離れることはできないから、貴女さえその気なら、ずっと手許に置いておけるわ」

「誰も妾達二人の邪魔をしないと約束できます？」

「できるわ。ヤプーの処置は飼主の専権よ。——陛下は別だけど陛下はこんなヤプー、問題になさらないから——貴女が法律に従ってこのヤプーを飼養してる限り、誰も貴女を邪魔する権利は持っていないのよ」

「じゃ妾達は」まだ安心して切れず、クララは念を押した。「堂々と

結婚式をあげられますのね」

「勿論よ」「結婚式という言葉で咄嗟に舌人形との結婚式を連想したポーリーンは、問題を掘り替えて肯定したが、少々気が咎め、然し又ヤプーとの結婚なんて絶対できない、と返事しては元も子も失くしそうなので、瞬時に「けど、貴女の気持がどう変わるかわからないでしょ」

「隣に対する妾の愛情は」クララは宣言した。「永久不変ですわ、妾が死ぬまで変りませんわ」

「おやおや、随分先のことまで約束なさるのね」ポーリーンの眼には嘲けるような色があつた。「妾はそんな先のことまで要求しません。拝謁が済むまで待つて頂戴」それ迄にはヤプーのことが分つて気が変わるに違いない。ヤプーとの結婚なんて舌人形との結婚式のこゝと以外には考える余地のないことが呑み込めるだろう。……「その後で貴方が結婚式をあげたいとおっしゃるなら、妾は止めやしないわ」

「拝謁後の行動は……」とクララが云い掛けたのを、
「勿論自由よ」と引き取つて「きつと本国星が楽園のように思えるでしょうけど、万一お気に召さねば、すぐこの二十世紀の球面にお送りするわ。尤も熱のことを貴女は御存じないから……」
「ええ、それ丈を条件にしての御招待よ、いかが？」

「御招待を喜んでお受けしますわ。この恋人のために。」

クララは隣一郎を抱きながらそう答え「麻痺毒は……その、聴神経を害っていませんか？」と別のことを訊いた。

「五官の感覚は平生より鋭敏になる筈よ。毒の効果は自分で動けなくするだけ。けど、どうして？」

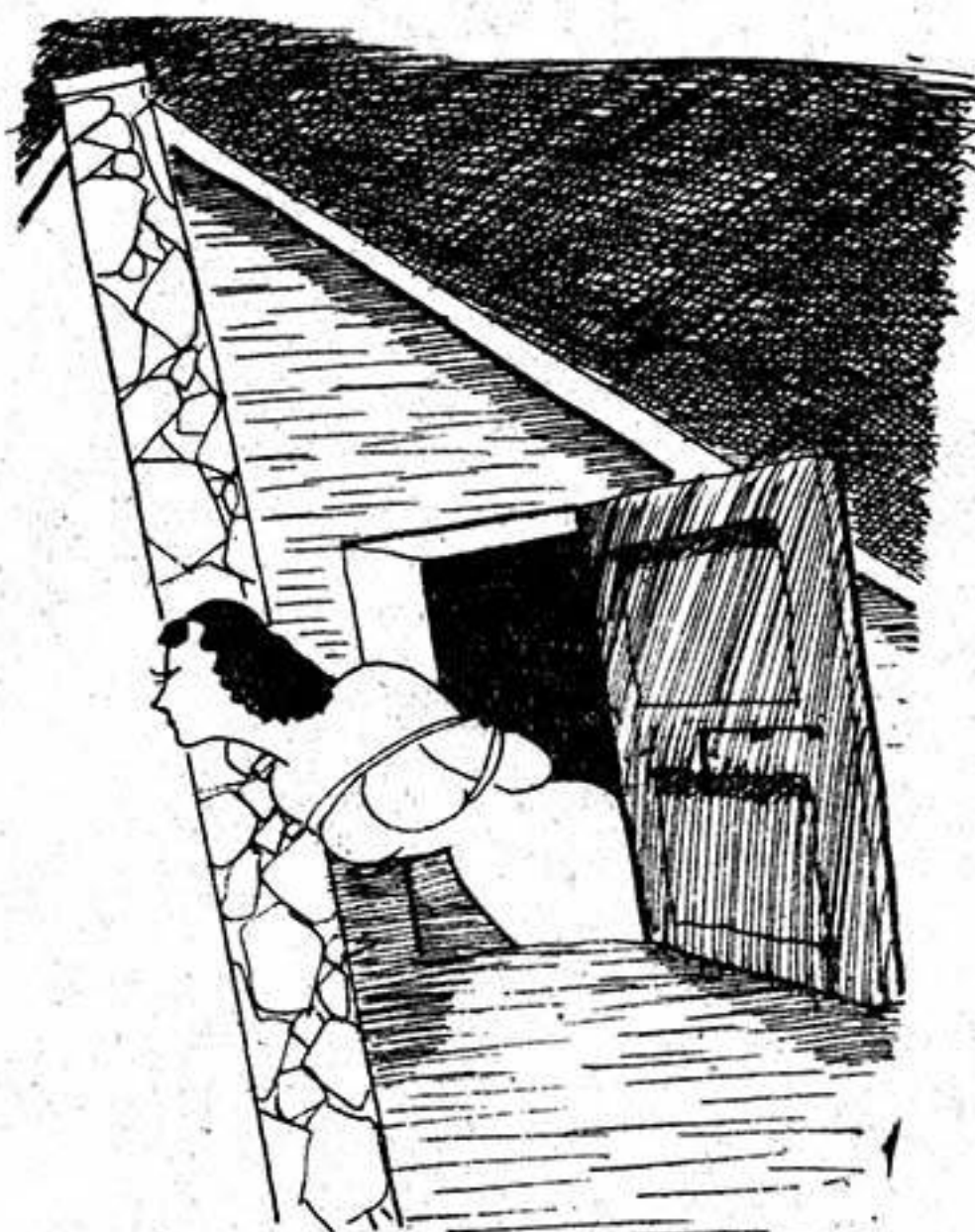
それには答えず、クララは隣一郎の耳許に口を寄せると、云いしかせる様に、低く囁いた。

(以下次号)

舞踊女師匠の責めの実演

女装して責められた

岸 本 青 柳



氣候温暖で、人情素朴なこの田舎にも、漸く秋が訪れました。櫛や紅葉や樹々の葉もソロ／＼淡く黄ばんで来ました。仲秋に入って今朝は初霜が降り、土地柄としては珍らしく寒い北風が吹きました。コンナ急激な寒さは、例年ならば初冬の頃だろうと、村人は異口同音に囁き合った訳でした。そして暖気に狎れた村人は、俄かに冬着を出して着るやら、老人達に火鉢を与えるやらで、震え上って仕舞いました。丁度この日は日曜日であつ

たので、私は終日書齋に閉じ籠って、色々の書物を乱読しました。一家五人が揃って晚餐を団欒の裡に済まして、近くの青木照江さんと云う舞踊師匠の家を訪れました。

照江さんは、元宝塚方面で芸者に出て居ましたが、今の主人幾造さんと結婚してから十幾年にもなり、小学校と幼稚園へ一人づゝの女の児を通わせ、幾造さんは近くの町の運送店へ運転手として、朝早くから晩遅くまで真面目に立ち働いてゐる。温順しい主人であり、その一家は一度も風波が立たず、至極家庭円満で、近隣の評判も頗る良く、照江さんもセッセと家事に励み、余暇には毛糸を編みその側ら、豪農や中流以上のサラリーマンのお嬢さん達に、昔取った杵柄の日本舞踊を教えております。照江さんも亦主人に劣らぬ優しい性質の持主であり、何呉れとなく、近隣の世話をしている、頼るの美形であります。背は人並よりも少し高く、少々肥り気味で、極めて快活な人を外らさぬ良い人柄であります。それで何でも、旧制の家政女学校を卒えたとか云われるだけに、文筆も達者です。「奥さん、今晚は。随分急に寒くなりましたなア」

と、近隣のことであり、お互いに昵懇の間柄であるので、アッサリ挨拶すると、「まアほんとうにお寒いこと、さア、火鉢がありますから、お上りなさい」

と愛嬌タップリに、ニコニコしながら、私を迎え入れて呉れました。座蒲団を出すやら、お茶を出すやら、そして茶箆筒の中から甘柿を出して、「お食べなさい」と勧められました。私は照江さんと、柿を食べながら、世間話に興じている内に、チンチン／＼と十時の柱時計が鳴りました。

「幾さんは、何時もコンナに遅いんですか？この寒いのに。」

と云って、私は帰ろうとすると、

「今晩は都合で、お店で泊って来ると、朝出掛けに云って居ました。まアよろしいではありませんか？」

と微笑を含んで応対すると同時に、スツと起って、綺麗に片付けている奥の方から一冊の写真帖を持って来て、私に見せて呉れました。大部分は芸者時代に撮影した娘道成寺、連獅子、松の緑など幾十枚の舞踊の姿をはじめ、結婚写真や幼児の写真が丁寧に貼り並べられ、殊に芸者時代の麗姿が忍ばれました。その中に、艶弥という芸者と一緒に写したのだという、「明烏」の写真が、私の眼を惹きました。照江さんは当時、艶香という芸名で「ひし家」という料亭から出ていましたが、照江さんは明烏の役で、紅い長襦袢に、黄色の扱帯で、荒縄で高手小手に後ろ手に縛り上げられ、髪と膝前を乱して、立木に縛られ、艶弥が遣り手で、竹箆を振り上げて、今にも

明烏を打ち据えんと、お尻を捲り上げての物凄く様相を現わしています、私は思わず、「奥さん、この写真は何時ごろ、何処で写したのですか？」

と聴きますと、照江さんは笑いながら、「私が十九歳のころ宝塚の家の庭で撮ったのよ、何故？」

「仲々よく実感が現われていますね。さぞ痛かったでしょう」

「そうねえ、あのころ何だか、コンナ風なところが好きだったの、で、妾からすゝんで縛られ役をかってでたんですのよ」

「今でも好きですか？」

「好き見たいな、満更嫌いでもないわ」

「なら、コンナ芝居や映画は好きですか」

「時折り、子供を連れて、町の映画を見に行く位ですけど」

「何でしたら、私の集めた本や画をお見せしましょうか」

「どうぞお見せ下さい」

斯様な問答を重ねている内に、十一時過ぎにもなりましたので、再度訪問を約して帰って来ました。が此の次に訪問した時には、あの色の白い、豊かな柔かそうな肉体を、細縄で後ろ手に縛って、責めの実験で愉悦に浸ろうと思ひ浮べて、独り寝に就きました。

それから約一ヶ月の後、幾造さんが、附近の村々の農産物を積んで京阪神地方へ、五日

間ほど出張すると聞いたので、今度は土曜日の夜の八時ごろ、照江さんのお宅を訪ずれました。それまでも、二、三回訪問したのですが、機会が得られませんでしたので、主人の出張と聞かされて訪問しました、勿論私の手には、責めに關係の多い書物や絵画を持って行きました。懐中には麻縄を用意してありました。私の訪問に照江さんは相変らず、愛嬌振りを発揮しつつ、お茶やお菓子を出して呉れました。二人の女の児は二階でもう寝ています。照江さんは異様な眼差しで、縛られた女の色彩画を見詰めていました。「書物だけ暫らくお貸し下さい」と云いながら、写真や画からやっと眼を離しました。この間は一時間ぐらいい経ったでしようが、私も別の雑誌を読みながら、凝々と照江さんの動静に就いて注視を怠りませんでした。

「奥さん、どうです。お氣に入るものがありましたか？」

「ハイ、妾あんたを見直したワ」

「どう見直した？」

「コンナ写真を見ると、あの芸者に出ていたころを思い出して来たワ」

「では、今晚演って見ない？」

「あんたも随分物好きね？」

「これで私は十幾年も研究や実演をしてきて居ます、極くコッソリね、さあ、実演しまし

よう」

と私は起ち上ると、照江さんは少し頭を垂れて考えているようでありましたが、「さア」と私は後から抱き上げるようにすると、照江さんも仕方がないと諦めたのですか、或いは縛って欲しいのか、どちらかは私にはハッキリ解りませんでした。好機逸すべからずと勇気を鼓舞して、責めを実験するという決意を固めました。

「奥さん、では先に私を縛ってくださいませんか」と云って、彼女の普通着を貸して呉れるように頼みました。すると奥の簞笥から、荒い淡紫と白筋の入った交縞の袷の着物と広帯や紅地に朝顔の色抜きの縮緬の長縹絆、モスの紅い腰巻、水色の扱帯など衣類を出して、私に着せて呉れました。私も鏡の前で、照江さんから淡く顔に白粉、口紅を付けて貰って、頭に手拭を姉さん冠りにして、懐手から麻縄を出して強く縛って呉れと頼みました。

「まア麻縄まで持って来たの、妾を縛ろうとするのに。」

と笑いながら、衣裳を付けて、完全に女装した私の姿を、ジッと見詰めていましたが、「まア、好いお嬢さんが出来たワ」と云うかと思うと、私に座って呉れと云いながら、自分の敷いていた火鉢の側の分厚い緋縮緬の座蒲団を奥の八畳の間の床の前に敷いて呉れました。私はその上へ静かに座るの

と間髪を入れずに、私の両手を後ろ手に相当強く縛って、その縄尻を持って立ち上りました。

「ハイ、お嬢さんの仰言る通りに縛って上げました。それからどうするの？」

と問いますので、私は棒や箒で叩くなり、床の間の違い棚の柱に縛るなり、転がすなり何なりと、奥さんの思う存分に虐めて呉れと云いますと、照江さんは炊事場から火吹竹を持って来て、私の両肩、背中、お尻を無茶苦茶に打ち据えました。その度毎に私は、立膝をしたり、片足を投げ出したり、いろ／＼と苦痛の姿態をして見せました。彼女は「痛くない？」

と云いつゝ、前帯と縄目との間へ火吹竹を突ッ込んで、グツと後ろへ引いたので、私は仰向に床柱に、強かに後頭部を打ちました。「あッ痛いッ」

と思わず、大声を出しますと、彼女は漸く虐待の手を緩めました。その間僅かに二十分間ぐらいでしたが、照江さんも私もビッシヤリ冷汗をかいて居ました。ヤツと照江さんは私の縛った麻縄を解いて呉れました。

そして十五分間ばかり、お茶を啜みお菓子や二人とも相互に無言のまま食べました。「あんたのお嬢さん姿は逆も素敵ね、痛うなかった!!」

と照江さんは言いながら、私の両手頸に残

っていた、縄目の跡をつくづく眺めていました。

「奥さんの着物を着て女装して縛られ、虐待された気分は何とも言えませんね、二、三日この着物を貸して呉れませんか」

「エ、どうぞ着古して悪いけど!!」

と快よく承諾して呉れました。着物の袂は一尺五寸ぐらいで、若い時に用いたものでしやうが、私の女装には好い恰好なので、暫らく貸して貰って、普段のように自縄自縛の実験に役立たせることに致しました。

一寸少憩の後、今度は私が照江さんを責めることになりました。

照江さんは芸者時代に用いたものか、それとも日本舞踊に使うのか知りませんが、黄八丈の格子縞の淡青色の裏の付いた、黒縹子の襟のかゝった二尺の長袂の紅裏の粋な袷に、松に鶴を金糸で縫った黒縹子の広幅帯を締め、桃色の扱帯を右膝のあたりでダラリと下げ、桔梗を白抜いた燃えるような緋縮緬の長縹絆に、同じ緋縮緬の蹴出し。顔にコッテリと白粉、口紅を塗り、当世髪を左前額当りを少し乱して、喰い付き度いような仇な姿で、「これで好いでしょう」とニコ／＼顔で奥から出て来ました。

「さあ、どうなど、あんたのお好きなように縛って、責めて頂戴」

と責められる覚悟を決めています。

「奥さんはソナアで姿で旦那様を悩ましたのでしよう。アハ、ハ、ハ」

と私は戯談を飛ばすと、照江さんは

「まア!!」と笑いながら、私の側にキチンと膝を揃えて座りました。

中年女の脂粉の香と、最前の私を責めた時の冷汗との残りの体臭が、プンと何とも言えぬ匂いを放って、私を陶酔境に陥れずには置けませんでした。

照江さんは雪よりも白い両手をソロリと後に廻わしその身体を私の膝の上に倒れかかるように寄せて、微笑を含んで黒目勝な涼しい眼で私の顔をジッと見ていました。

「では、奥さんを思い切り責めようか」

「さっきの代りに私が責められます」

というので照江さんを俯向けにして、両手を帯の上まで高手小手に強く縛り上げ、剩った麻縄の端を強く上向きに後に引くと照江さんは少しづつ身体を起して座り直りました。この時既に白い膝頭が緋縮緬の蹴出しの間から、クッキリと見せていました。私は襟がみを掴んで強く引ッ張ったので、照江さんは膝を割ってドウと仰向けに倒れました。

「其儘座りなさい」と命令すると、顔をしかめながら少しづつ身体を起して、乱れた姿の儘で座り直しました。私は側に置いていた先刻の火吹竹で腕、肩、腰、膝、胸、胴などを

力任せに殴り据えました。彼女の身体はその度毎に、右に左に、前に後に、揺がせて苦悶の色を見せました。そして立膝や両脚、片脚の投げ出しなどの色々の変る責苦の姿を視詰めました。また立姿にならしたり、両足を同時に前へ引ッ張って後ろへ倒したり転がしたり、荷物のように真剣になつて取扱いました。この時間は約二十分間ぐらいでしたが、彼女は相当疲労を覚えて来たようでした。

最後に裏庭の泉水の辺りの松の樹に縛り付け、棒切れで所嫌わず、バタ／＼叩き付けました。照江さんは身体を始終動かしていませんでした。

「どう？、少し痛い」

「エ、随分痛いけど、この位だったら辛棒出来ないこともないわ、モット責めて頂戴」
「では吊し上げて火あぶりにするか、八百屋お七のように」

「エ、いゝワ、でも縄は緩んで来たワ」

と負けぬ氣を吐くので、改めて縄を一層強く後ろ手に縛り直して、その樹の側の檜の太枝に縄を振りかけ、吊り上げることにしました。が、体量が十七、八貫ぐらいもあるので容易に上がりませんので、物置の中から石油箱を持って来て、この上に照江さんを乗せて、樹にかけた縄を別の枝にかけ、その反動を利用して力任せに縄を引くと、彼女は痛さの余り踵を立てましたが、身体は容易に上がり

ません。止むなく梯子を樹の幹に立てかけ、下から三段目に照江さんの身体を登らせ、縄をウンと力を籠めて引き上げその端を幹に縛り付けて置いて、梯子を外すと彼女の身体は、自然宙吊りになりました。頭は真正面から見ると殆んど顔は見えません。横の方から眺めると、少し蒼ざめて来た白い顔は、折からの雲から顔を見せたお月様の光りに、クッキリと画き出されました。両手は帯の上に縛り上げられていますので、白魚のような指が握り締めていました。全身は少し前かゞみに、両脚をダラリとブラ下げていました。その吊り下げられた哀れな姿を四方に廻って眺めていました私は棒切れで、後ろから帯の上を強く右斜に二三回打ち続けますと、吊り下げられた彼女の身体は、左へ少しづつ廻転いたしました。

「両脚を上下、左右に動かして御覧」

と言いますと、彼女は私の言いなり放題に両脚を動かしました。更に身体の廻転するのに合わせて、また棒でお尻や胴や両脚を叩くと、一層吊り下げられた廻転が早くなってきました。

「どうだネ照江さん、痛いか、苦しい？」

「あゝ、痛い。苦しい、息が止まりそうになつて……」

と如何にも苦痛と苦悶の色を現わして来ました。この吊下げの責めは僅かに十分間足ら

ずでありましたが、照江さんの身体は相当重くもあり、はじめての実演ではありましたので、吊り下げる時に、帯の上から縄をかけずに、胸から両腕へと縄をかけ、直接両手に縄で縛って吊り上げましたのに、その苦痛は余程総身に浸み込み従って苦痛の度も強烈であり、虐待の度が少しく過ぎたのではあるまいかとも思われました。

「モウ許して……」

との微かな悶えの声を洩らしましたので、早速元の通り梯子をかけて、静かに身体を抱えて地面に下すと同時に、身に喰い入った縄を解くと、室内へ連れ込んで其儘置の上へ寝かせて遣りました。暫らくしてから、

「どうでした、吊下げの実演の感想は？」

「そうねえ、はじめは痛かったけど、だんだん辛抱出来るようになってきて、吊り下げられた時に、モツと責めてという気分が驅られました、でも胸に縄が締ってきた時は苦しかったですワ」

「では、私が責められた時は？」

「妾の着物を着せて後ろ手に縛って責めた時はほんとうに好い気持ちでしたワ」

「また責められたいと思う？」

「エ、モット存分に責められて見たいワ」

最近の日本映画から「縛り映画」や「吊下げ映画」を鑑賞してみよう。

こんな言葉を交わして、さて帰ろうと彼女の両手を見ると、紫色に縄目の跡が付き所々腫れているのに一寸驚きました。だが当の照江さんは余り痛痒を感じていないものゝようでありました。

その後、私は週に一、二回照江さんから借りた着物で、女装して自分で責めの実験を試みましたが、照江さんをモデルにして、責めの実演をしたようには余り実感が湧いて来ませんでした。ですから照江さんに先に貸して貰った衣裳類を一旦砂糖折を添えて返した上で、改めて照江さんをモデルにした際の衣類を借り受けて、責めの実験をして見ましたところ、照江さんの責折檻や吊り下げの実演の光景が髣髴として、一層責めの味を深めました。彼の苦悶の体臭が照江さんの着物や長繻絆に、今尚お其の余香が残っていたからでもあります。

この次の実演には昼間を選んで、彼女家の庭前で、照江さんや私が交代で演り、夫れを写真に撮影したいと思って居ます。照江さんも、自分の責めの実態を写真に撮影して欲しいと熱望して居ります。以上は変名を用いては居りますが、責めの実演は事実であります。唯だ「火あぶり」は夜分でもあり、火の

用心を考慮して中止いたしました。この次に演る時には、私は美しい照江さんが真に大粒の涙を流して、大声で悲鳴を挙げて身体をグタ／＼になるまでも、責めて責め抜いて遣ろうと思っています。その代り私も亦照江さんに宙吊りの責苦を受けるのを今から楽しんで期待しています。

普通の火あぶりには、松葉などの落葉を集めて樹から吊り下げられたモデルか私自身が実験するのですが、この場合には吊り下げられた脚元から約三尺位下の地上で薫べるのです。煙がドツと一度に舞い上ると、その煙が眼、鼻、口などへ一時に入るので逆も苦しいものですが、その瞬間の被虐感も亦筆舌に尽し難いものがあります。殊に女装してのこの火あぶりにされる気分は何に譬えようもない悦楽境を味うものであります。照江さんも、火あぶり責めを熱望して居ります。

(おわり)

△編集部註▽

岸本青柳氏から御自身が女装して後手に緊縛された写真を、本稿と一緒に送りました。念ながら掲載出来ませんでした。

八路佳子、宝塚映画にいた八汐路恵子が悪家老に殿様の意に従えと吊し責のゴウモンにあ

「吊下げ映画」の庄巻は、東映時代劇の「水戸黄門漫遊記、鳴門の妖鬼」で、遊女夕霧の

い井戸で吊し斬りにあう八本号の口絵参照V
これは巡礼お鶴やお弓の話に血屋数のお菊の折檻、高尾太夫の仙台侯の吊し斬りをカクテルにしたようなものに夕霧が太縄で三重に胸元を緊縛され「殿の意に従え」と吊責めにあ

う緊迫感が出ている。「いや」というので、ガラガラと井戸につけられる。そのドボンという効果も聞きのがせぬ。「引上げい」でズブ濡れになって引上げられる、髪も晴雨好みの濡髪になっている、また沈められ引上げられる、氣息エンエンとしてグッタリとした姿は雨に濡れたしゅうかいどう以上の風情、最後に斬り殺される、クローズアップもあり楽しめた。

東映映画に多いが、伏見扇太郎の「縁眼童子」でも、三笠博子のお姫様が捕えられ、庭先で松の木に吊下げられる、さきの「日輪太郎」の白衣の丘さとみの女の責め、煙責めの吊し責めよりは色気もあり、東映の可憐な縛られ女優である。「風雲黒潮丸」の南海の若武者で丘さとみの男装の小夜丸はまたまた悪人輩に捕えられ、断涯の絶壁で、シユズツナギ

最近の「縛り映画」から

嵯峨美也子

になり突落されようとする。これを「つるべ落とし」の責というが危うく助かるが、彼女もこのところ吊し責め専門の女優にされている。

東映作品では、大川橋蔵、美空ひばりコンビの「ふり袖捕物帳」でひばりのお七―実は妙姫が女目明しになり、かどわしの娘達を救いに行き、反って召捕えられる、ひばりの縛りはいつも余り緊縛されておらぬが、捕物帳らしくギリギリと縛りあげてほしいものだ。

他社の作品に目を転ずれば、松竹の「京洛五人男」で小山明子の桂小五郎の許嫁信乃が京へ出てきて、新撰組に捕えられる、壬生の屯所に連行され、市川小太夫の古高俊太郎のゴウモンされるのをオドオドしながら見ており、最後は広間の柱に縛りつけられているのを浅茅しのぶの密偵に縄をほどかれるが、帰ってきた近藤勇に見付かる、顧客はヒヤッと

するが裏から逃してやれと助けられる、市川小太夫のゴウモンが凄いい、小山明子があのようにゴウモンされたらと見ていたサジストもいたことだろう。

正月作品の高田浩吉の「りんどう鴉」で女芸人の高峰三枝子のお銀、雪代敬子のお玉が土蔵の中で縛られる。大映作品では「静と義経」で淡島千景の静御前が、吉野山で捕えられ、義経の行方をいえとゴウモンされる。二重巻きに太縄で縛り上げられ「身体をきびしく責めよ」とゴウモンされるとシナリオになっている。作品が楽しみである。

日活の「肉体の密輸」で、喜多川光子が屋根裏でシユミイズ一枚にされ、両手を縛られ吊し責にあう。彼女は神楽坂にいたとかで、東映へ入り、日活へ移ったのだが、阿部豊監督が気の毒がるのを「頑張ります」と吊し責を頑張ったそうだが、大いに気分を出していた。新東宝の肉体女優前田通子を「妖異宇都宮釣天井」で、全裸にして吊し責にしようとしてプロデューサーが考えたのを、不健全だと大蔵社長が止めさせたそうだが惜しいことをしたものだ、あの豊満な肉体をと期待していた人々もおったことだろう。

△註V 本月号の口絵参照下さい。



少年期

（一）と子の手紙（二）

山口 幸一

お母様

此の前は途中で手紙を打ち切りました。さぞ色々御心配の事と思います。とり急ぎ其後の様子をお知らせ致します。

恐る恐る親方の部屋に入りますと、其処には『芸の花』と云う私と同年の少年が座つて居りました。

親方は今度新にお客様のお好みによつて相撲の合間にレスリングを一つ二つ出して見ようと思つて居ると言われました。

レスリングは特に身体が柔軟で肢体が伸び伸びとして、而も美貌の少年でなければなら

ないので、私と『芸の花』の二人が見込まれてその実演者として選ばれたのでした。

明後日の御座敷で試に実演しようと思うから早速今から稽古させると云いました。

直ぐ私達二人は着物をぬぎました。身につけているのは普段用の晒の六尺褌一つだけです。私は初めて相手の少年の禪姿を美しいと思ひました。色白の女の子の様に伏目勝ちの美しい少年が真白い木綿の、ふんどしをきりと締め込んで、はずかしそうに顔をうつむけている姿は本当に何と云つてよいか、咲きかけた牡丹の花の様な風情がありました。

親方は少しも容赦なく、二人を組み合せました。

レスリングといつても、正式の試合の様に勝負を争うのが主目的ではないのですから、試合の方法も出来るだけ、各方向から禪美を觀賞出来る様にし何度も組合つたまま上になつたり下になつたり、又足を大きく広げて押え込んだり、海老固めや足固めの型を行つたりしました。初めての練習でしたし、二人の少年はただ夢中になつて相手を組み伏せたりお互に禪を引き合つたりして闘つたので、ぐつたり疲れてしまいました。

翌晩幸一達二人は、とうとう初めて御座敷レスリングを行う事になりました。お座敷にはリノリユームの敷物が八畳位の広さで敷かれてありました。

冷たそうなピカピカ光つたリノリユームの床は、それに素肌を触れるとピツタリ肌にひつつく様に思われ何か恐ろしい様な切ない様な氣持で一杯になります。

相撲の番組は終り、とうとう幸一達の出る少年レスリングの番が来また。

今日のお客様の芸者さん達の中には幸一と同年位の十五、六の半玉も混つて居り、こんな美しい異性の前で自分の裸を見せなければならぬ事は本当にはずかしくてたまりません。

しかし、親方は容赦なく中央に進み出て幸

一達二人の名前を呼び上げました。

もう仕方がありません。着ていた着物をぱつと脱ぐと下は新しい晒の六尺ふんどし一本の姿の二人は中央に進み出て、試合を行わなければなりませんでした。

組み合うと、直ぐもつれ合つてリノリュームの床に倒れました。相手は幸一の片足をかかえて、高く上げ背中を床に押しつけ様とします。

やっとはね返して、今度は幸一が相手の頭を足で締めつけ様とした所、又、仰向けにひっくり返されびったりと押えつけられてしまいました。

時間は段々たつて行きます。必死に両足をバタバタさせてはね返そうとしますが、幸一の背中ではリノリュームの床にびたりと押えつけられ相手は其の上に丁度海老固めのかっこうで押え込んでいるのですから少しも動かせません。しかも相手は顔で幸一の前襟を押えると同時に右手で幸一の後襟の結目をしつかりと握つてぐいぐいと締め上げますので、幸一の襟はすっかり股の間に喰い込み、その上新しい晒なので皮膚がむける程の痛さです。

そのうち、幸一の胸は相手の腹と両足でしっかりと締め上げられ相手の少年の襟がざらざらと幸一の顔をこすります。

幸一は身体はすっかり固定されて動けない

ので顔だけ右左に動かして辛うじて相手の押え込みを逃れて居りましたが、相手は段々腰を下へすべらせてフオールしようとかかってきました。幸一も右手で相手の後襟を取り必死に身体を起そうとしましたが遂に目の前に白い布が一杯に広がったかと思ひますと幸一の口はもう相手の前襟でびたりふさがれてしまいました。ざらざらした晒木綿は新しい布の香を発散させてさるぐつわの様にしつかりと幸一の口をおさえます。

必死にもがくけれど呼吸は出来ません。とうとう気が遠くなつて、そのまま失神してしまいました。気の付いた時は控室に静に寝かせられて居りました。

本当に死ぬかと思う様な苦しみで、こんな恐ろしい事はもうしたくないと思いました。其処へ相手の少年の『芸の花』が入ってきました。

「幸ちゃん、あんまり力むもんだから、すっかりまわしを汚してしまつて。親方今度から幸ちゃんに浣腸かけるって云つてたよ」

そう云えば、私の襟はどこかに片付けられてありません。私は氣を失つた時に思わずそうして脱糞してしまつたのです。

ましたら親方に呼ばれました。「今夜は大事なお客様だから昨日みたいに、そそうしてはならない。浣腸をかけるから其処にうつむきに寝なさい」と云いました。

親方は手にした二〇CCの浣腸器に石鹼水を一杯満たしてワセリンでギリギリ光ったのを持って早くとせき立てます。

幸一は仕方なく横向きになつて畳の上に寝ました。白い六尺襟が丁字型にきつくお尻に喰い込んで、むき立ての卵の様なお尻を真新しい木綿の布が深く喰い込んで結び目もふさふさとして縛つた姿は思はず見とれる様な光景だつた事でしよう。

親方は、幸一の襟を解かず少しずらしただけで浣腸器を取り上げました。

あーっという間も無く生温い石鹼水は直腸の奥深く入り込んで、何とも云えない妙な氣持に襲われました。

其の晩の試合では、浣腸のおかげで別にそうはしないで済みました。

少年相撲、少年レスリングは其後も各方面から引っぱりだこで毎日忙しい日が続いて居ります。

あるお客様の話では、昔のオリンピックというのは、主として少年達の競技を大人の人が観賞したのだそうで、中でも少年レスリングは最も人気があつたそうです。

ある時代には少年達は真裸で試合を行った

と云うことですが、やはり輝かサツポーターだけは付けて行ったのが正しいのではないかと云う事らしいです。

ギリシヤの美少年達が満場の観衆の歓呼を浴びて、サツポーター一本の姿で肉弾相打つ競技を演じたのが古代のオリンピッククなら、今幸一達が輝一本で相撲したり或はレスリングを行ったりするのも同じ事ですのに、どうして夜、お座敷なんかでだけしか行わないのでしょうか。広い体育館が何かで大勢の人に觀賞して貰った方が、いくら張合いがあるかも知れません。

お母様

これで手紙を止めたいと思いましたが、どうしても書かなければならないとも思い、何度かためらいました。

しかし、もう思い切って全部打ちあけて、罪深い幸一を許して頂きとう御座居ます。

私は前の手紙に天狗の面を見て驚いたという事を書きました。そして間もなくそれは、

「問」

三十一才の青年。昭和二十年に学徒兵として召集され南支に勤務中、大学の先輩で四才年長のSという教官と親しくなり、求められるまゝに同性愛のちぎりを生じました。

終戦後、二人とも郷里へ帰ってからしば

浣腸と同じ様に使われるのだと云う事を知りました。

そして、その事は昔の稚児灌頂の式を行う前にも、稚児に対して同じ様な訓練が行われる事を知りました。

幸一が今迄一方的にただ美しい或いは恐しいと思っていたお小姓、稚児、能楽、天狗、何ともする事の出来ない厳肅な切腹儀式、そんなものが一つ一つおぼろ気ながら関連を持って一つの画面に浮び上ってくる様に感じてきました。

昔の少年が出来た事を幸一が出来ない事はないと思う様になりました。少年の肉体は昔も今も変りないのですから。

昔の人は美しいものを美しいと尊び、嬉しい時には大いに酒を飲み悲しい時は声を挙げて泣いたそうです。

現代の人はどうでしょう。内心しめたと思ってもわざと怒った様な顔をし、酒を飲んで相手警戒して酔う事が出来ず、美しいも

らく便りも絶えていたのですが、先ごろ偶然に会ってから以前の関係をせまられて、Sのアパートや都内の旅館で二、三回会いました。

Sは僕の就職を心配してくれる一方、自分のアパートへ同棲しようすすめます二人とも独身ですから都合はよいようなも

のを眺めても、其を美しいと云いきれない。何と不自然な毎日の生活でしょう。何と風変わりな人達ばかりでしょう。

幸一が接するお客様には、そんな人はありません。何時も本当の話をし、本当の行動をとるのです。それが自然ではないでしょうか。幸一は思い切つて新生活へ入って行きたいと思ひます。初め苦痛に思つた事も度重なる訓練によつて、却つて不快には感じない様になりました。だから新生活に入った時、行われる行為も充分耐えてゆけると信じます。これ以上は手紙で書く事は出来ませんが御察し下さい。

美しいもの、真実のものを求めて、此れから門出をしようとする罪深い幸一をどうかお許し下さい。

×月×日

お母様へ

幸一より

の、Sがそのうち妻を迎えるようになればまた住居を探さねばならず、さりとて就職の心配をしてくれることを思えば、むげに断るのもどうかと思ひ迷っています。

Sは「一生妻はもたないから、永久に同棲してくれ」といふますSは非常に気が優しく、僕もまんざら捨てる気にもならな

いのです。

(東京・F生)

「答」同性愛は少年期少女期から青年に移る一時期に男女を問わず経験する愛情で、異性愛以前のものと考えられていきます。むかし私も師範学校の寄宿舎にいたころ、どこか中性的な感じのする上級生に、ほんのちよつとの期間、淡い恋愛感情に似たものを抱いたことがあります。それは外出もろくろく出来ない厳しい寄宿舎に、十七、八の娘ばかりが二、三百人も閉ぢ込められていたという特殊の環境が大いに手伝っていたと思うのです。

おそらくあなたがSとそういう関係に陥ったのも、軍隊、戦争、外地などという特殊の環境の上に明日をも知れぬ命という虚無的な気持もあってのこと、と思います。それにしても、十年後の今日三十一才と三十五才の男同士がいまだにそんな関係を断ちきれないでいるのはあまりに変態的過ぎます。

その上、あなたはそうした関係が自然に

(ローカル・レポート)

戦地での同性愛

東 一 郎 記

— 偶然再会して同せいの誘い —
(読売新聞十月二十九日付「人生案内」)

反した、人倫にもとる行為であることに気がつかないのか、ただSもそのうち妻を迎えるようになれば、自分も住居も探さなければならぬとか、就職の心配までしてくるから、むげに断れないとか、そんなあなたの考え方に、失礼ながら私はいやささと歯がゆさを覚えずにはいられません。

あなたも三十過ぎた一人前の立派な男ではありませんか。自分達が陥ってはならない邪道に陥っていることに早く気がつかれ一日も早くそんな不潔な関係は清算なさるよう、そんな関係を頼りに就職口を心配してもらわずとも男一匹自分で探してみせるという男らしい気概を持って強く生き健全な正常な生活に戻られることを祈ります。

(担当 小糸のぶ)

小糸のぶ氏の此の答は肝心の点がぼかされている。それは何故十年後の今日までその様な関係から抜けることが出来ないのかと云うことである。その行為そのものを批難することとは誰でも出来る。小糸のぶ氏自身の体験も余りにも浅過ぎる。

此の様な問題はやはり医者であり探偵小説家でもある木々高太郎氏あたりに解決を求めた方がよかった様だ、木々氏の今まで担当された回答には納得行くものがあった。

やはり此う云った特殊問題もあるからしつかりした責任ある回答者が答えて呉れないければ何にもならない。

此のF生も結局相談したかったのは、此の様な行為から何故抜けることが出来ないのだろうか——と云うことだと思われる。環境云々だけの問題ではなさそうだ。

×

×

×

×

×

×



映画シナリオ

“赤いネオンのきえる頃”

丘 與志夫

登場人物

加世子 (19才) 女給	潤子 (24才) 女給	一枝 (40才) マダム	静夫 (18才) ボーイ歌手	ジエーン妙子	酔った客	客A・B	老人の客	その他女給達等
--------------	-------------	--------------	----------------	--------	------	------	------	---------

(F・I)

①たそがれの街

雑多な繁華街――

喧騒と人の群れに、これから始まろうとする夜の世界へ醜いはらわたをみせて、何か雑然とした雰囲気。

その中を、一見、女給とわかる女達が、それ／＼の店に向う。

②キャバレー「路」

店の前の路上では、サンドウィッチマンが人形化された動きで、道ゆく人の目をひいている。

人の流れに押し出されるように、あてもなく歩く女……そのみすばらしい装が目立つ。加世子(十九才)である。

……加世子、ふと、店の前で足をとめる。病身らしい、おど／＼した眼が、店の一角に貼られた募集広告に、やきつく

ように見入る。

その貼紙――

「麗人募集! 近代的教養ある方。日給四〇〇円保証、寄宿設備完備! 只今入店のチャンス! 安心して仿ける淑女の店

キャバレー路 Michi」

③街

暗くなった空に、一つ、二つ……とネオンがまた／＼き始める。

それにWって、(タイトル)「赤いネオンのきえる頃」が流れてゆく。

そして、「路」の赤いネオンもつくと、

④キャバレー「路」の店内

中央のフロアでは、バンドの演奏に合わせてジエーン妙子が官能的な踊りをみせ

ている。酔っぱらい乍ら、ともに唄う男達。一隅に、加世子が借りもののドレスで、先輩女給の潤子とともにかしこまっている。潤子、店の中を見廻し、
潤子「あーあ、ヤンなっちゃうな。パッパッと金を費う客、来ないかな。年よりでもないや。」

ボーイの静夫が来る。

静夫（加世子に）「貴女、三番へ、ヘルプに行ってくれない？」

加世子（はじかれたように立上り）「ハイ！」

静夫「ふふ、大丈夫よ。あのお客さん、とてもいい人だから……。」

潤子「一寸、シイちゃん、あんた、口紅、少しくすいようね？」

静夫（恥し気に）「そお？」

潤子「つけてあげるわ。」

潤子、静夫を引きよせて、その唇に塗る。

静夫、自分の唇をなめてみて、あわてゝ吐き出す。

静夫「うわー、ひどい。何あに、これ？（な

おも唇を拭き）潤ちゃん、ひどい。これ

マーキユロじやないの？」

潤子、愉快そうに笑う。

静夫「おぼえてらっしゃい！」

潤子「さあさあ、私にも早く客とってよ。」

静夫「知らない！」

加世子、びっくりして二人をみている。酔った客が来て、やにわに加世子の腕をつかむと、

客「君は女子大？ それとも学習院？ い

ゝさ、く、そんな事。君は文学少女。

うん、ロマンチックだね。それでいい。

それでいい。あつはは……。」

むやみに嬉しそうに踊り出す。

⑤店の前

ラスト・ミュージックが流れて――

ネオンがすうっと消える。

もう街も大部暗い。

どや／＼と吐き出されてくる客。見送りに出てくる女達……抱きついたり、ふ

ざけあったりしている。加世子、疲れたように店の中に姿を消す。

⑥二階への階段

その下の事務室の中では静夫が化粧に余念ない。

疲れ切った体を、手すりにつかまりなが

らやっと昇ってゆく加世子。

……その足が、はっとして立ちすくむ。

おびえて、ふるえる足。

何処からか、押し潰されたような女の呻

き声が低く聞えてくるのだ。

⑦マダムの部屋の前

開いていた障子が、慌てゝピシヤリと閉められる。

……暫くして、戸がそっと開き、その陰から潤子が無言で加世子を呼ぶ。

⑧マダムの部屋

淡い水色のスタンド。敷き散らかされたなまめかしい夜具。

潤子、部屋の中央に立ちはだかっている。

加世子、おそろしく入って来て、あつと

驚き、思わず潤子を見つめる。

布団の上には、マダムの一枝が、長襦袢姿も色っぽく、その上から有り合せの腰

紐や伊達巻で、きっちりと後手に縛りあ

げられ、白くあらわな太ももには肉に喰

いこまんばかりに細引が巻きつけられて

転がされている。口には、かたくサルゲ

ツワがはめられ、たゞ加世子の出現に、

眼だけが哀願するように身悶えている。

潤子、ニヤリとして、一枝の腰を蹴る。

ウツとのけぞる一枝。

加世子「アッ！……。」

思わず、悲鳴をあげようとする加世子の

口が潤子の手で素早くふさがれる。

潤子「シイッ！……どう、驚いた？ そ

の顔……（一枝に）ママさん、見られ

ちやったら仕様がないわね。」

潤子、加世子の口から手を離すが、加世

子は驚きに言葉もない。

潤子「ふふふ……何だと思う？ リンチ？

まさかね、今時。（ひとり、機嫌よく喋

る。これ、アソビよ。私達のね。驚な
くたっていいわ。どう、貴女も？」

加世子「私が？」

潤子（加世子の驚きに愉快そうに笑い）「ふ

ふ、冗談。私だって、貴女と同じ、こ
の店、まだ新しいのよ。でもね、偶然

ママさんと趣味が一致しちゃったのよ。

私達の遊びがよ。そして、ママさんは私

の前じゃ、この通り、（と、又一枝の肩
のあたりを蹴る）皆、私の思う通りよ。

いゝ？ だから、貴女だって同じ。」

加世子「え？……（不安になり）ハイ……

……。」

潤子「そう……ママさん、きいた？ こ

の娘、給料上げてやってね。」

加世子「まあ……。」

潤子「加世子ちゃん、じゃ、暫くみてらっし

やい。声を出しちや駄目よ。」

加世子、部屋の隅に身をすくめる。

潤子は、傍らの物指しをとると、一枝のゆ
たかな尻のあたりにビュッとふり落す。

一枝「ヒエーッ！」

サルグツワがゆるんだのか、悲鳴が洩れ
る。

潤子（怒って）「うるさいわね！ 加世子

ちゃん、その電蓄かけて！」

加世子、その言葉に抗し切れず命ぜられ
るまゝに電蓄のスイッチをひねる。流れ

出す「五木の子守唄」その間に、潤子は
一枝の髪をぐいっとつかんで引きおこし
サルグツワをかたく結び直すと、その体
を、引きずって来て、柱に縛りつける。

潤子「ママさん、覚悟、いゝわね。」

加世子、遂に見るに耐えず

加世子「やめて！」

潤子、ふりむきもしない。

加世子「やめて！ もうやめて！」

加世子、潤子にしがみつくが……潤子

の手の物指しが加世子の頬をなぐる。

あわと倒れる加世子。恐ろしさに両手で

顔を覆い乍ら窓辺ににじりよる。

ビュッ、ビュッと無気味な鞭の音――

⑨ 夜の空

またゝくオリオンの星座。

「五木の子守唄」が吸い込まれるように
消えてゆく――。

（深くO・L）

⑩ 海岸

打ち寄せる波、くだけ散る。

⑪ 海岸近くのある部落（追憶）

貧しい家並が点在し、その果てに銀色に
光る海が音もなくうねり、子守唄のメロ

ディが、単調なひびきの中に、限りない

哀愁をこめて夜空に消えてゆく。

と、一軒の家の前。傾きかけた戸が開い
て、裸足のまゝの加世子がとび出して

る。思いつめたような表情――。

⑫ 海岸

加世子、夜空
に輝く海原を
みつめている
そして、何を
思ったか、着
物を一枚一枚
脱ぎ捨てると
ゆっくりと海
の中に入る。

（加世子の声）「私はた
まらなかった。古い習慣
の中に、汲々として生き
ている父や母。一生、貧
乏のまゝで……その姿は
衰れた。しかし私自身が
もっと衰れに達しない。」

「海、海……何のこだ
わりもなく悠々と生き
ている海。何物をも拒ま
ず、強く生きてゆく裸の
まゝの姿。私は自分が裸
でない事に限りない恥し
さと淋しさを覚えた。」

誰もいない夜の海……ひとり泳ぎまわ
る加世子、たゞつかれたように泳ぐ。

泳ぎ疲れた加世子、すつくと立ちあがる。
水滴に輝く白い裸身が暗黒の中に神々し
いほど美しい。

……と、その背後から漁師らしい男が
ひそかにしのびよって来る。

⑬ 崖の上

加世子と男とがもつれ合い乍ら落ちて来
る。加世子の激しい抵抗。息づまるパン
トマイム……。

……と、その背後から漁師らしい男が
ひそかにしのびよって来る。

……と、その背後から漁師らしい男が
ひそかにしのびよって来る。

⑭ 岩のかげ

加世子と男とがもつれ合い乍ら落ちて来
る。加世子の激しい抵抗。息づまるパン
トマイム……。

……と、その背後から漁師らしい男が
ひそかにしのびよって来る。

⑮ 断崖の上

放心したようによろめき立つ加世子
その顔が自嘲
の笑みを浮べ
醜くゆがむ。
足下にくだけ
散る波——
加世子、突然
身を躍すと、
海の中にとび
込む。

「私は何もかも厭になつた。窒息しそうな生活。男のけだものみたいな欲望……それなのに、それを憎み乍ら、どこかひそかにそれを待っている私の体。あゝ、呪しい女の肉体。私は信じない。何もかも……この私に残された肉体だって。」

(深くO・L)

⑩ マダムの部屋

窓際の金魚鉢に、金魚が無心に泳ぎまわっている。
加世子、追憶から覚め、部屋の中をみまわす。……すでに潤子の姿はなく……
……一枝が縛られたまゝ、布団の上でだらしなく睡りに陥ちている。
加世子、一枝の姿をじっとみつめている
が………そっと立上る。

⑪ 女給部屋

狭い室内に十ワットの電球がわびしくついで、疲れ切った女給達が目白押しに並んで寝ている。枕許には、かすかに口紅の色を残したラーメンの丼が散らかっている。それをまたいで、加世子入って来ると、自分の寝る場所をさがす。

すでに寝ていた潤子、眼を開き

潤子「加世子ちゃん、こゝよ。」

と、自分の隣りをあける。

加世子、一寸迷う。だが、潤子の視線に抗し切れず、ドレスを脱ぐと、そっと入りこむ。

潤子「ふふふ……加世子ちゃん、貴女、好き？ あんな事？」

加世子「私は……。」

潤子「嫌いじゃないわね？」

………加世子、身をかたくしたまゝ無言。

潤子「どう、やろうか？ これから、ね。」

加世子「え？ だって……。」

潤子「まあ、いゝわ。そのうちきつと好きになるわよ。仲好くしようね……。」
電燈がかすかにゆれている。

(F・O)

(F・I)

⑫ 山近い高原

峡谷にかゝる鉄橋
郊外電車が爽やかな音を残して通り過ぎ
て行く——

(O・L)

⑬ 山 道

秋も濃い、爽快な気分
「路」の女給達が一群になって登って行く。すっかり人が変わったように明るい一
枝を先頭に、ラ、ラ、ラン………楽しい

唄を口ずさみ乍ら。

潤子も加世子もいる。

一行は、やがて吊橋にかゝる。

(O・L)

⑭ 岐 れ 道

一行が行く。

潤子、そっと加世子の腕をつかんで立ちどまると、

潤子「加世子ちゃん、一寸待って……。」

加世子「え？ どうして？……。」

潤子「いゝのよ。」

一行は、どん／＼行ってしまう、二人は取り残される。潤子、かくれるように

潤子「ふふ、さ、行きましよう。」

と、別の道へ入ろうとする。

加世子「あら………(と迷う)。」

潤子「いゝんだったら、あんなうるさい連中なんかと。」

潤子、どん／＼行ってしまふので、加世子も仕方なくついて行く。

(O・L)

⑮ 小高い丘の上

二人、けわしい道を登ってくる。加世子は大部参ったのか、あえいでいる。

加世子「潤子さん、少し休んで。お願い。」

潤子「駄目！ さ、行くのよ。」

加世子「でも、もう駄目よ。」

加世子、丘の上に腰をおろしてしまふ。

潤子「仕様がないわね、じゃ、いゝわ。」
と並んで腰を下す。

眼下には、広々とした平野がひろがり、
夢のような美しい風景である。

加世子（惚れくとして）「いゝわア……」

潤子（いとしそうに加世子をみて）「貴女、
まだそんなセンチな気持でいられるの？
かわいゝなあ。好きよ、そんなの……」

加世子「あら、私は別に、そんな……」
潤子「いゝのよ。」

潤子、愉快そうに笑う。
加世子「あら、（と指さし）あんな処に海
が、海がみえるわ。何処かしら？」

潤子「ふふふ……思い出した？ 田舎を。」
加世子の顔、ふとくもる。

潤子「いゝものねえ……（一寸感傷的に
なるが、加世子をみて）どうしたのさ？
……あ、そうか。ごめんよ。」

加世子の淋しそうな横顔が無理に笑う。
加世子「うゝん、なんでもない。私に、田
舎なんてないもの。」

潤子「うん。（と、ごろりと草の上に寝転
ぶ）……加世ちゃん、雲がきれいよ。」
加世子、濃く澄んだ秋空を見上げ、同じ
ように寝転ぶ。

傍の木から、二人の上に、風があるのか
はら／＼と枯葉が散りかゝる。

しばし女らしい感慨に何か物淋しい。

加世子「もう秋もお終いね。」
潤子（チラと加世子をみて）「……ふん。

命短し、恋せよ乙女、か。駄目ねえ、も
う直ぐクリスマスだったのに、ドレス一
枚つくれやしないわ。」

加世子「クリスマス……東京のクリスマ
スって、凄いでしょね？」

潤子「あゝ、貴女、東京のクリスマスって
始めてなのね。」

加世子「えゝ、楽しみだわ。」
潤子「何云ってるの、そんな大平楽なんか
云って、……稼ぎ時よ、私達の。」

加世子「え？ ええ……」
潤子「そんな里心もってちやダメ。私達の
商売には、加世ちゃんみたいな純情なん
て、アクセサリー、売り物なのよ。」

加世子「（少しムツとして）わかってるわ。
体だって時には売り物じゃないの女なん
て、いやな体だわ。」

潤子「そう／＼、女だって事、利用するのよ
……あ、そうだ。私、忘れてたけど、
クリスマスには、皆で仮装パーティーやる
そうよ。じゃん／＼騒いでね。」

加世子「仮装パーティー？……」
潤子「うん。貴女、何の仮装にする？」

加世子「何が／＼かしら？」
潤子「そうね。加世ちゃんには何がいいか
な？……私が決めてあげるわね、まか
しといて。えゝと、そうね、ぐっと日本
的な可憐さで……そう／＼、お七、八
百屋お七よ。どういゝでしよう？」

加世子「私が？」
潤子「うん。歌舞伎十八番の内……違っ
たかな？ まあいゝや。決めたわよ。」

加世子「えゝ……それで、潤子さんは？
お七の恋人の。」

潤子「厭だよ。あんな女のくさったみたい
な寺坊主なんか……私はね、もっとい
ゝもの、決ってたんだ。」

加世子「何に？」
潤子「ふふふ、それはね、クリスマスまで
秘密。」

②果てしない野原（幻想）

春の野——美しい草花が咲き乱れ、可愛
らしい小鳥が楽し気に啼き誇る。

八百屋お七（加世子）……美しい野花
を手に、小走りに来る。その姿は、まる
で青春の幸福のシンボルだ。

彼女は、道々、野の花を摘み乍ら、ふと
ふりかえる。恋を求めるような、その瞳。

……遠く幻のようにあらわれる人影、お
七、待ち焦れるようにかけよる。

お七「おゝ、いとしい方。」
人影近づいてくる。

お七「あっ！ 貴方は？」

近づいて来た人影、それは野武士のような荒くれた男、手には、ピュッ／＼と音をたて乍ら、鞭をふり上げている。野武士は、お七を見つけて、豪快に笑う。お七、はっとして逃げようとするが、野武士はお七の優肩をぐい／＼つかんで、草の上に押し倒す。

ピュッ！ と、その上から振り下される鞭。

お七「あ、お許し下さいませ。」

と、見上げる……その野武士の顔は潤子である。

なおも襲いかゝる無情の鞭――

お七、逃げ迷い、必死に許しを乞う。

可憐な瞳に哀願の色をこめて……

(O・L)

②③「路」の女給部屋

大きな姿見……その前に八百屋お七の仮装を終った加世子、ぼんやりと自分の姿にみとれている。

他の女給達もそれ／＼化粧をしたり、仮装に一生懸命である。

土人もいる。クレオパトラもいる。

紳士やら、中世騎士、芸者等……

大きな風呂敷包みを持った静夫が入ってくる。

静夫「私にもやらしてね。」

女給A「おや、シイちゃん、何になるの？」

静夫、ウフと笑って風呂敷包みを開く。

②④クリスマス招待状

「今宵クリスマスの一夜、美女とゝもに楽しく過しましょう。居ながらにして世界各国の美女に侍しずかれるエキゾチックな夜。仮装パーティーに皆様のロマンスを！」

キャバレー「路」Michi

②⑤街（夜）

街をうろつく酔漢。浮かれるバンド、

流れるマンボ、狂うトランペット

華やかなクリスマスの飾りつけ、

サンタクロースも嬉しそうに漫歩している。点滅するネオン――

五六人の男達が「路」の中に入りこむ。

②⑥女給部屋

脱ぎ捨てられた女達の普段着や、化粧の跡で足の踏み場もない。

その中で静夫がひとり、仮装にとりかゝる。下着の上に赤い蹴出しをしめ、緋の長襦袢を羽織り、伊達／＼を腰にまきつけ、

かつらを冠ると……吾が姿に惚れ／＼として姿見の前に立ち、ニッコリ笑う。

そして、花模様の着物を着こむ。

②⑦「路」の店内

錯綜するミラーボールの中に、クラッカ―が打ちあげられ、仮装した女達を抱い

て男達が踊り狂う。

シエーン妙子のセンジュアルな歌が女心の悩やましさをさそう。

その狂騒する店内を見まわすと、人の群の中に、一際眼をひく八百屋お七の加世子。客とゝもにビールをのんでいる。

客A「八百屋お七とはいゝとこへ眼をつけたな。うん、君はなか／＼文学少女だよ。」

客B「うん、まさに恋の炎に身を焦すってわけだね。どう、僕のために火あぶりになってくれないかな、ねえ。」

と加世子にからみついてくる。

加世子「まあ、御冗談ばっかし……。」

客B「なあに、ほんとさ。よう……。」

客B、なおもしつこく加世子を抱く。

②⑧街

ます／＼にぎやかになってゆく街通り

ぶら／＼と歩く通行人の間から、突然、消防自動車のサイレンが鳴りわたる。何処か火事らしい。

人混みを縫ってサイレンが走って行く。

(O・L)

②⑨ある寺の門前（昼）

荒れ果てた寺、

何か、おびえるようなお七（加世子）が、あたりを気にしながらやって来て、そつ

と寺の方をうかがう。

野良犬がうさん臭そうにお七のまわりで

ほえたてる。

お七は慌て、門の中に逃げこむ。

③① 同じ寺の境内

お七、そっと入りこんでくる。

広い境内、生い茂る雑草の中にひとり佇むお七。寺の中から読経の音が、不気味に流れてくる……お七は、はっとし、何かを期待するように寺の中をのぞこうとする。と、その時

「お七！ 御用だ！」

と、一人の若い岡っ引きがとびこんでくる……（潤子である）

呆然と佇むお七……

「御用だ！ 御用だ！」その若い捕手の後から、多勢の捕り手の声が幻聴としてひびいてくる。

お七の白い手に捕縄がからむ。

忽ち彼女は高手小手に縛り上げられてしまふ。若い捕手（潤子）は勝誇ったようにお七の縄尻をつかんで引き立てる。読経の声がなおも虚無的につづく——

（O・L）

③② 「路」の店内

颯爽として、いなせな岡っ引き。潤子のきびくした男装である。

潤子「ねえ、だからお七はやっぱり縛られてなくちやねえ、完全じゃないわ。」

客A（手を叩いて）「そうだ、道ならぬ

恋のむくいだぜ。」

加世子「だって、そんな……」

潤子「うふふ……そら、ちゃんと用意してあるのよ。お七、神妙にしろ！」

と、作り物の十手と、細引縄をテーブルの上に投げ出す。

客B「ほう、用意周到だね、こいつはいや。」

潤子「何云ってるの、口ばかり開いてないで手伝ってよ。そらお七を押えつけてるのよ。」

客A「手下の八五郎親分ってわけだな。」

客二人、愉快そうに笑って加世子の両腕をつかむ。潤子、細引を手にする。

加世子「いや！ いやです！」

加世子、はげしく身悶えるが、酔っているのだから自由がきかない。

「今晚は！ 何をそんなに騒いでらっしゃるの？ 面白そうね」

と、ビールを持って来た女——美しい雪姫は静夫である。

客A「おっ！ こりや凄えや、ボーイさん、

本当の女だぜ、ええ？」

静夫、嬉しそうに微笑む。

客B「雪姫か。これも縛られた役じゃないか。」

潤子「シイちゃん、余計なところへ。」

客B「とんだ処へ北村大膳！……へっ！

この方がいじやねえか、ねえ潤子。いやさ、銭形の親分！」

潤子は、一寸、加世子の事が諦め切れないう。客は潤子の手から細引をとると、静夫を縛ろうとする。

静夫（驚いて）「何をするの？ いや、よして」

潤子（あきらめて、十手をひらめかし）「静かにしないとためにならないぞ。」

客A「そうだ。今度は松永大膳に早替りさ。」

他の客も気づき、面白そうに「やれく」とはやしたてる。

静夫「じゃ、そっと縛ってね。」

静夫、忽ち三人の手によって縛られてしまふ。

客A「さ、あれなる桜の木へ、きりく」と歩め。」

芝居もどきに引きずられてゆく静夫。加世子、ほっとしてビールをのむ。

（O・L）

③③ ある劇場の舞台

「祇園祭礼信仰記」

豪華な舞台装置（金閣寺の場）——優雅な雪姫がみるも痛々しく縛られ、桜の木につながれている。夢のような責場。可愛い女のがくような人形ぶり——

（O・L）

③③「路」の店内

中央の柱を桜の木に擬して、雪姫の静夫が縛りつけられている。

老人の客「かわいゝ子じやな。それ、のめよ。」

と、コップについだビールを無理に静夫の口に流しこむ。

ビールは口からもれ、化粧した顔が忽ちくずれる。泣きべそをかく雪姫。

どっと笑う客達。その周りで踊り狂っている。潤子も加世子も……。

二人踊り乍ら、すれ違うと、潤子、踊りをやめ、加世子の腕をつかむ。

③④二階への階段

ホールから狂奏するジャズが流れ、うす暗い階段を争い乍ら昇る二人の女。

加世子「痛い！ 離して、痛いわ！」

潤子、加世子の腕をしっかりとつかんで引きずり上げてくる。

③⑤マダムの部屋

電気がつく……敷き散らされた布団の上に加世子の体が叩きつけられる。

怒りにもえた潤子の両眼が異様に輝く。

潤子「畜生！ よくもお客さんの前で恥をかかせたわね！」

加世子「だって……（と、ふるえ乍ら）あんな事を。お客さんの前でゆわかれるなんて。」

潤子「お黙り！ 折角貴女の人気を上げて

やろうと思つてたんじやないの。それを」

その時「どうしたのよ、今頃？」と心持ち酔っている一枝が入って来る。

潤子「こいつ、人の好意を無にしやがったんだよ。親切にしてやれば甘えてさ。」

一枝、事情を察して戸を閉める。

潤子「加世子ちゃん、あんな事をするからには、覚悟、いいわね。」

加世子（必死に）「許して、潤子さん、許して！」

潤子（きゝ入ゝず）「ママさん、紐をとってよ。」

一枝、ある期待をもった表情で、簞笥を開け細引をとって潤子に渡す。

加世子、立上って逃げようとするが、潤子は素早く襲いかゝり、組伏せて馬乗り

にまたがり両腕をねじ上げる。

潤子「ママさん、足を押えてゝよ。」

加世子の両手首にからみついた縄は、みる／＼胸を、両腕をしめ上げてゆく。

はだけた太もも、両足も揃えて縛られ、完全に自由を奪われて転がされる。

潤子「ザマアみやがれ！」

潤子「まあ、ゆっくりさ。」

一枝、加世子の帯をとき始める。加世子

一枝の手を逃れるべく、必死に転げまわるが、やがて帯がとかれ、着物の前がは

だける。

③⑥店内（スタンド）

一枝が来て、ウイスキーを持ってゆく。

（O・L）

③⑦マダムの部屋

加世子はその白い肌を痛々しく細引でしめあげられ、赤い腰巻一枚も乱れて床柱

につながれている。口には、しつかとさるぐつわがかまされている。その前で、

潤子と一枝がウイスキーをのんでいる……潤子、グラスを手にしたまゝ立上り

はげしく加世子の頬を打つ。

潤子「いゝ気味だよ。いゝかい、私の気が晴れる迄はいつまでだってそのまゝにしておくからね。覚悟してな。ふん、いゝザ

マだよ、犬みたいに柱につながれてさ。」

潤子、愉快そうに笑って、グラスの液体を加世子の顔に投げかける。

（O・L）

③⑧店

内

騒ぎは静まり、ボックスのそちこちに酔いつぶれた客が寝転がっている。

嵐が過ぎたような乱雑さの店内――。

（O・L）

③⑨ マダムの部屋

すっかり酔い潰れた潤子と一枝が、いぎたなくのびている。

柱に縛られたまゝ、じっと考え込む加世子。

と、一枝が起き上りそっと近づいて、

一枝(低い声で)「可哀そうに、痛い？」

とってあげるわ。」

加世子、驚いて一枝をみつめる。

一枝「ごめんなさい。何もかもクリスマス

のせい。」

一枝、加世子の縄をほどく。

読者提供アイデア

貝塚、高井、安晴

表題「牝馬の一日」

△牝馬に心があれば、こんな気持を抱くだろうという意味の説明▽

(1) 見出し(おい、早く起きないか)

△こうして無惨な長靴の乱舞で私の一日が始まる。▽

〔図〕牝馬の姿はすべて後手錠(又は緊縛)

くつわ(嵌口具)手綱(口の両側からの革ひも)足ぐさり(三十糎位)身体各部に、革ひも、又は鎖の装具、この図は短い杭に手綱を結ばれ、庭にころがされている所、そばに長靴を穿いた足が蹴っている。

(2) 見出し(運動)

△さあ真直ぐ歩け、と鋭い鞭がとぶ▽

加世子、不安のまゝ立上らない。一枝はほどこいた縄をみつめ乍ら、

一枝「加世子ちゃん、その代りお願いがあるの。」

加世子(かしこまり)「何でしょう？」

一枝「縛って！ 貴女みたいにこの柱にしっかりと縛りつけて、ね、お願い……。」

一枝自ら両手を後に廻す……。

呆然となる加世子。

④⑩ 「路」の前

「キヤバレー路」その赤いネオンが消え

④⑪ 街

る。下から加世子が逃がれるように出てくると、街の中に走り出した……。

まだクリスマス、名残りを惜しむかのよう、酔った男達がうろつきまわり、タクシーが屯して客を引いている。

その中に加世子、ぼんやりと宙をみつめたまゝ蹠踏と歩む。あてもなく……。

ネオンが一つ、二つと消え、はや東の空は白んで来た。白々と……。

(F・O)

〔図〕車が溝にワタチを入れて傾き、主人が倒れた牝馬を憎くげに鞭うつ、通行人は笑って見物。

(5) 見出し(砂漠にて)

△御主人はパラソルの陰に楽しい午睡、私は炎天につながらて灼熱地獄、せめて陽が曇ってくれないかしら▽

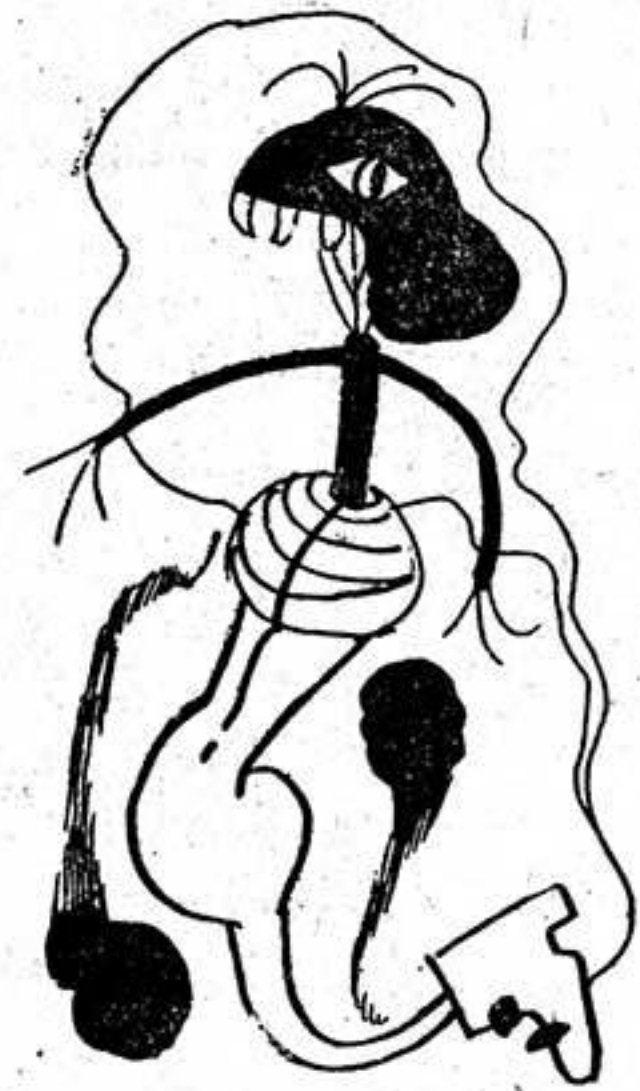
〔図〕ひざまづいた姿勢、手綱は短い杭にながれ、立つ事は出来ず、熱くなった砂に苦悶の形。主人達は向うでパラソルを拡げ、語り合ったり午睡したりしている。

(6) 見出し(さあ、早くお上り)

△口の使えるのは食べる間だけ。それなのに御主人は無情にも、くつわを持ったまゝせきたてる。▽

〔図〕ひざまづいて下に置かれた皿(地面より皿の方がよい)のものを食べようと首を伸ばした所、主人はくつわを持って側で立っている。

私は小学校でもずっとお転婆の名の通りで六年間を過しました。成績は温和な兄と共に優秀な方で、殊に五年生、六年生の時には副級長となり、兄、私、そして妹と共に勉強の方は、父母の自慢の種となっていました。只、兄は非のうち所がないのですが、私は今申上げたお転婆で家ではよく兄と取組みあい始めたものでした。隣家の明男君は、私と同級で故意か偶然か小学校一年生になった時は二人一組の机が一緒になって並んで勉強する事になったのでした。学校内でも私は明男君に対しては支配的で一度、明男君が自分の椅子と私の椅子に横になって、私を坐らせないとふざけた事があったのですが、私は何の躊躇もなく明男君の顔の上にペタリと腰をおろ



サジスチンの半生記 (二)

— 少女時代 —

鷹野 めぐみ

してしまいました。そしてわざとぎゆうぎゆうおしつけ、果は級友達の前に明男君の此のぶざまな姿を見せたものでした。不思議に私は小学校の六年間は、男生徒に苛められる事もなく、却って学芸会の劇などに主役として出されたりして、何と云いますか、羨望、崇拜と云った高嶺の花みたいな存在にされたのでした。明男君とは四年生で男女別になるため級が離れたのですが、家の方では何時も一緒に遊んでいたのです。

其の頃「探偵ごっこ」と云う遊びが男の子達の仲間に流行って、普通は泥棒は逃げ廻り探偵は追いかけて、つかまえば地面にロウセキで書いた牢屋へ入れ、鍵として空罐を置き、牢番の隙をみて、未だつかまらない泥棒

がその罐を蹴れば、牢屋へつかまっている泥棒は皆逃げてしまう。そして皆がつかまれば交替すると云ったのと、取っ組み合いをやって相手を馬乗り組敷いてしまうのとありました。私は女の子のくせに此の組みうちの方が好きで、男の子同志の上になり下になるのが取組みあいをよく見たものでした。さすがに男の子と組合う事は負けるのが嫌さにやらなかったのですが、兄か明男君を相手なら家の中でよくやったものでした。明男君には必ず勝てる自身があった事と、兄はわざと負けてくれたからです。始めに申し上げた、つかまえて牢屋へ入れる方の遊びは、私達女の子にも出来そうですし、私は足が速かったのでよく男の子達に混って追いかけてをしましたが、

私につかまった男の子達が、普通は手だけつないで連れて来て牢屋へ入れるのに、裏道の人通りのない処で私がわざと、逃げるに困るからと云って男の子の両手を後手にして、あたかも縛りあげた恰好で引き立てるのです。面白いのは、大ていの男の子がこれを好んで、しおらしく私に両手を後手にされたまゝ引き立てられて行ったものでした。

話が随分、前後しましたが私が五年生の時の事です。海水浴も終ってそろそろ秋風の立ちはじめの頃でした。その頃、私の家の女中として勤めていたオハナと云う五十才位の婆やが、自分の一人息子を田舎の親戚へ預けていたのですが、預っていた先で大黒柱が急死し、どうにもならず私の家で引き取る事にと云うより、オハナと一緒に暮せる様、狭い乍ら部屋を与えてやったのです。親子共に暮せるよるこびに泣いて礼を云い、その小学校六年生の子、勇一にも私達一家に対しては、それこそ忠誠を尽す様、朝に夕に云い聞かせていたのです。勇一は兄と同じ年でしたが、転校転校で私達の学校には六年生として入って来たのです。兄は都立の中学校へ合格して半ズボンから長ズボンとなり、余り私達小学校の子供とは遊ばなくなっていたので、私の性癖の相手は、此の勇一にむけられたのでした。

勇一は田舎で育った故か都会の派手な風習

になかなかとけこめならしく、それにオハナから、そのように舐められていたのか、何処となくオドオドした感じをした子で、お嬢さんお嬢さんと私達の前では膝も崩さず、廊下で逢うと恥かしそうに頭を下げたりするので家ではともかく学校でもそういう態度をとられるので、自他共に私達兄妹と勇一の場合は主従の関係となっていたのでした。処がその勇一が或の日、私が靴を磨いてよと云った時、先生が自分の事は自分でせよと教えた筈だと答えたのです。気まゝでカンの強い私は忽ち怒って勇一を三十センチのさしで頭を叩いたのですが、勇一は何時に似合わず「馬鹿」と大声を出すと、私の手からさしをもぎとり両手にもって膝小僧でポキツとねじ折ってしまい、それを私の足許へ叩きつけたのです。私はわざと大声をあげて泣き出すと、オハナが驚いて飛んで来ました。私の母も来ましたが、母は

「めぐみもいいかげんにしなさい。何です。勇一さんにそんな事を云いつける人がありませんか。」

と私を叱って、尚も足をばたつかせる私の頬ぺたをピシッと一つ打ちすえたのです。私は泣きじやくり乍ら二階の自分の部屋に駆けこみました。学校から帰ったばかりでしたから午後の三時頃だったと思います。すぐオハナが、やはり眼を赤くしてうなだれた勇一を

連れて、私の部屋に入ってきました。そして私に謝り乍ら、私の見ている前で、自分の腰紐だったと思いますが、それで勇一を縛りあげたのです。私は泣くのも忘れてオハナを見つめました。勇一はじっと正座したまゝ縛られていたのです。オハナはその縄尻を持つと「お嬢さま、勇一をせっかんしてやって下さい。もう二度とお嬢さまにさからわない様にするために、どうぞせっかんしてやって下さい。」

と云い出したのです。私はオハナが一番好きな存在でしたから、そして又オハナも私にはとてもよく目をかけてくれていたのです。何だか悪い気がしました。そして私は殊勝にも云いました。

「婆や、いいの、もういいの、婆や御免ね、勇一の縄をといてよ」

するとオハナは、

「まあ勿体ない、お嬢様」

と云うと泣き乍ら、とにかく勇一をこらしめるために此のまゝにしておいてくれと云って、勇一を縛ったまゝ下に降りて行ったのです。オハナが居なくなると、何だか私は怖い気がして、黙って縛られて坐っている勇一をみました。自分の母が居なくなると勇一はそっと顔を上げ

「お嬢さん、御免なさい、許して下さい。本当にオレをぶっついてもいいです」

と云うのです。その顔はもうすっかり私の云うなり、するなりに任せきっているのが、子供心にもよく判ったのでした。私は紐をといてやりました。勇一は突然私の前に両手をつくと平伏し、私の足にそっと唇をつけたのです。そして私を見上げてニコッと笑うと、今度は四ッ這いになって

「お嬢さん、オレは馬だ。お嬢さんの馬ですよ」

と云うのです。私も同時にすっかり気持がほぐれて、勇一の背中に跨りました。そしてお馬はいどうはいどうと、部屋の中をぐるぐる廻る勇一と一緒に遊んだのでした。

その後、勇一と私は、誰もいない部屋でお馬ごっこをしたり、オハナが縛った様に勇一を縛ってみたり、足で顔を踏んづけたり、顔の上にお尻をのせたりする様になりました。私がオハナの部屋へ行って、オハナの見ている前で勇一を仰向けにねかせ、その顔の上に馬乗りに跨って、イタズラツ氣を出す事もありました。それでもオハナは、ホムムと笑うだけで、お姫様には絶対服従の精神に生きていたみたいなのでした。

そんな事があって二ヶ月位経ってからの夜私は他所へ行ったので帰りが遅くなり、十時過ぎてからおふろへ入った事がありました。いつも最後はオハナと勇一か、別の女中が入るのですが、私はその日、一番最後に入った

のです。勇一は湯栓をぬくのが勤めでしたからそのためだったでしょうが、脱衣室に私の衣類があるのをみて急いで立ち去ろうとしました。それを私はすぐ呼んだのです。

「勇一？ そう、ちよっと来てよ、いいわよあけても、お湯に入っているんだから」と私は、ませた口をきいて勇一に云いました。

「すみせん、お湯に入っているのを知らなかつたものですから」

と弁解する勇一を、私は浴室の中へ入れたのです。少年と少女乍ら二人は一寸面映ゆい

瞬間でしたが、私はぎぶっと湯ぶねの中に立ちました。勇一は困った顔をして横を向きましたが、私はすかさず云ったのです。

「勇一、そこへ坐るのよ」

勇一はヘタヘタと服のまゝ濡れたタイルに坐ってしまいました。私は湯ぶねを跨いで勇一の前に立ちはたかり、私の差し出す足の指先に完全なドレイ接吻をさせたのでした。そしてその夜、私はかつて明男君にしたと同じことを、勇一にも強要したのでした。

(未完)

☆営業部だより☆

○以前は毎発行月の都度連絡申し上げていました方々にも今後は連絡申し上げますが毎月下旬発行でございませうから誌代はそれまでにお払込み願います。

○一カ月分宛お申込みの方々は送料八円の御加算を願います。三カ月分三冊以上予約の方々は送料は当方にて負担いたします。尚、半年分予約の方々は手札型三枚一組、一年分予約の方々は大中判

型三枚一組のフォートを贈呈申し上げます。

○代理部の分譲品は、従前通り取扱っておりますから、八円切手封入の上、総目録をお取り寄せ下さい。

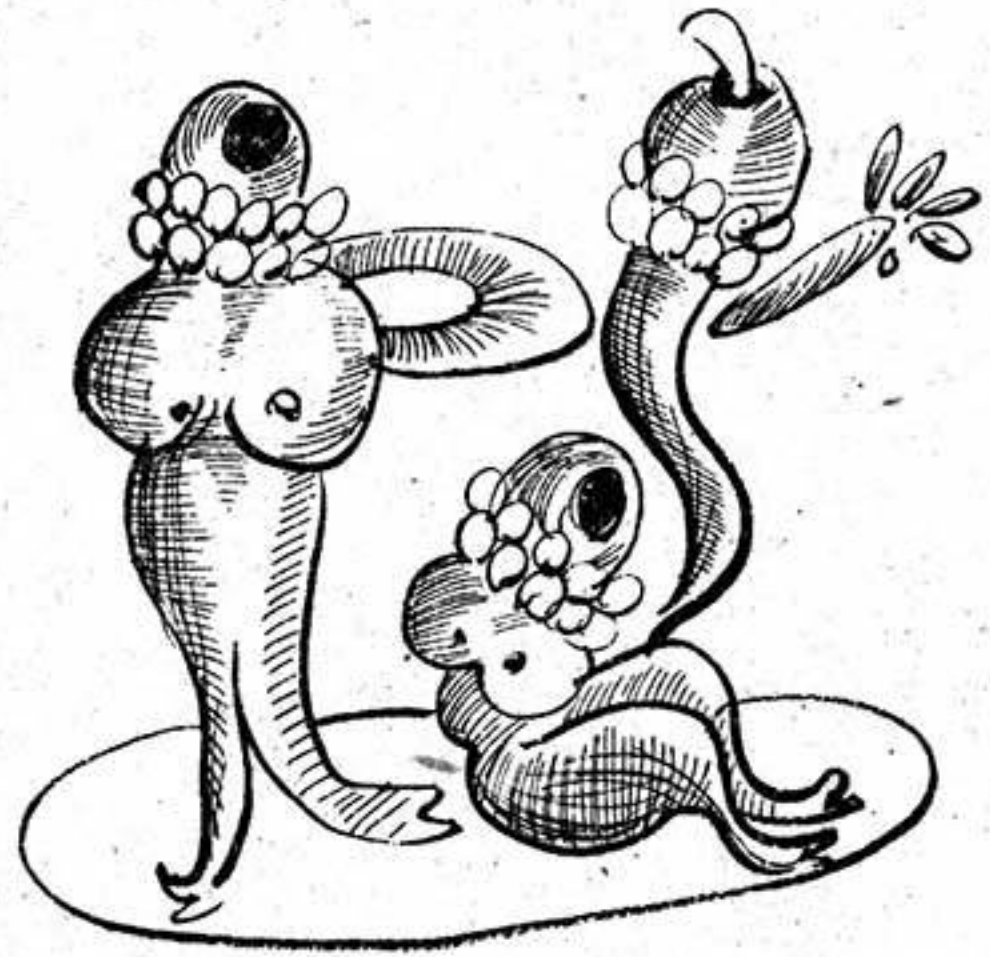
○本誌の復刊号のバックナンバーは目次裏に目次を掲載しております通り毎月号共在庫

しておりますから御入用の方々はお申込み下さい。休刊以前の旧号は30年8月号以降若干在庫しております。但し残部僅少ですから欠号補充の方々はお早くお申込み下さい。

○代理部で取扱っております「美人乱舞」「アリスの人生学校」は共に売切れです。

「時代物責絵巻」は未製本の分が若干残っておりますので御希望の方々に、説明付一揃い百五十円(送料八円)にてお分けいたします。

○アルバム「美しき縛しめ」第一集、数冊残っております。第二集は未製本の分、一揃三十二葉、三百円(送十六円)にて分譲します。売切後の再版は絶対に不可能です。



『魔海の業火』

弓 鬼

崇

——その夜の北海はかなり荒れていた。

浪は高く、波頭は吹き荒さぶ遡風に白く砕け散っていた。

天宝丸は星一つない暗冥の北海を、南南西に進んでいる。追風と追潮に恵まれて、ボロ船にも似ず船足は驚くほど早かった。

今、この時化を衝いて、本船から二海里程遅れて、航海灯（ナヴィゲート・ランプ）まで消した一隻の怪しい快速船が追っていた。

本船が今宵の闇を利用しての稚内（ワツカナイ）寄港を断念しなければならなかったのも、この怪船の為だった。天宝丸は四百噸そこくの密猟船だったのだ。

今、この非常時態の為の準備体制（スタン・バイ）が漸く解除（リング・オフ）になり、八時の当直（ワッチ）交代が九時に延びて船橋（ブリッジ）を降りて来た一番舵手（ヘッド・コーター・マスタ

）の三吉が、食堂の前を通りかゝった時だった。

——ピシリッ——

『ヒイッ——ナ、何ンてことをするンだッ！』

『コ、この野郎ッ、ふざけた野郎だッ！ テメエのナニしたモンが食えるかッ！』

——ピシッ——

と激しい音。と同時に、

『ヒイッ！ ソ、そんな酷エこと、しなくたっていゝだろッ。水夫長（ボースン）ッ。』

たしかに水夫長（ボースン）のダミ声。彼が誰かを口汚く罵り、あまつさえ咎を加えているらしい様子。

三吉が足早やに食堂を馳せ抜け、調理場（ギヤレー）の中程まで

来た時、前の通路（パッセージ）に立ちほだかり、答を振り冠った水夫長（ボースン）の姿を認めた。彼は素早くその傍へ駆け寄った。

『どうしたってエツです。水夫長（ボースン）？』

彼はそう云い乍らも眼は通路（パッセージ）の奥の物置（ストア）の扉の陰に蹲る料理人（コック）の平野を、怪訝そうに眺めた。

『おう三吉かッ。ナニね、この白布袋（シロボテ）の野郎、どうもこの間ッからおかしいおかしいと思つたら、案の上そうなんだ。明日は札幌へ入港するってエのに、情ねエ野郎だよ。ハッハッハ』

水夫長はテレ隠しに、笑い紛らし乍ら籐の笥を背後へソツと隠した。

船の横揺（ローリング）に連れて煽る物置（ストア）の扉を小盾に、通称白布袋（シロボテ）と呼ばれている料理人（コック）の平野が、白い料理用の上ッ張りは着ているが、その前は、腰から下は生っ白いぶよ／＼とした女のような太腿を露出して、床に蹲っている。脛毛と云うものの全くない、尾張大根のような気味悪い白い脛の下まで、紺羅紗ズボンがズリ下り、それに重って、ラクダ色の手編み毛糸のズボン下が、ムク犬のように丸まっていた。

は、ア、水夫長、この間の晩のことを根にもつて、その腹癒せだナ。——と、三吉の勘にピンときた。

水夫長が三吉を見て極り悪る氣に答を隠したのも、二日前の晩の出来事を三吉に見られている手前、江戸の仇を長崎でとると、腹を見透かされたくないと思つたからだ。その二日前の出来事と云うのは、次のような経緯であった。

——高木水夫長は不幸なことに立派な体格の持主でありながら、どうした事か異性に対して興味を持たなかった。

そこで新入の若い水夫達こそ災難だった。彼等は次から次へと彼の対象に選ばれ、大抵の者が閉口しなければならなかった。

一カ月程前。肺炎で急死した料理人（コック）の後釜として乗組

んだ白布袋の女のような肉付と、色白の餅肌にかく執心した高木が、粗暴な彼にも似ず、慎重な作戦を練つたのも無理からぬことだった。

水夫長は常ならば、料理人風情と奴隷の如く扱う白布袋だろうに、極力彼の歓心を買ひ、密かに機会の到来を待っていた。その時は遂に来た。予想外の臘虎（ラッコ）の豊猟に乗組一同氣を良くして、大狸祝の酒盛りが始まった。そして充分に食い、酔って皆が熟睡した二日前の深夜だった。

水夫長（ボースン）は、忍びやかに白布袋の寝台に近付いていた。勿論、彼の掌には狸虎脂が用意されていた。大部屋の他の水夫達は、陸揚の鮪宜しく、死んだように睡りこけている。

眼醒めばなの白ボテは、何にが何にやら訳が判らず、奇声をあげて通路（パッセージ）に飛び出した。そこへ運よく、用便に立った三吉が通り合せたのであった。——と、云う訳なのである。

三吉は、それにしても、一体何を水夫長が怒っているのであろうかと思ひ乍ら、

『おい白ボテ。この寒さに風邪を引くぞ、早くズボンを穿きなよッ……で、お前エ、一体、何をへマやらかしたんだ？』

『へへへ……どうも舵手（コーター・マスター）済んません……』
白ボテは極り悪そうに頭を掻き乍らピヨコンと三吉に叩頭をする
と、横眼でちら／＼水夫長の顔を睨み乍ら、窮屈そうにズボンをは
き出した。その彼の丸々と肉付の良い臀に二条三条、赤い答痕が鮮
かに泛き上っていた。

『ボースン。どうしたんですか？……』

剽軽な水夫、セイ六の宮城を始め、早くも四五人の者が集つて来た。

『こ、この野郎、この間、千島沖で捕った海豚（いるか）を食わせ
ねエのア妙だと思つたら、案の上、テメエの女房にしてやがった

ンだ。』

『ハッハッ。そいつア宜しうおまつ……』

皆がどっと笑った。

『ま、それもいいや、だが脚の無エ嫁さんを俺の戸棚（ロッカー）裏のこの物置（ストア）の中に隠しときやがったンだ。どうもこの間うちから変に青臭エ匂がする／＼と思つたよ。癪に障るからドズいたら、云い草が振ってやがるじやねえか。じや明日から卓（テーブル）へ出しましょうってエンだ。ハッハ。』

『ワッハッハッ。じや、そいつを俺等に喰わせようッテ訳ですね、酷エ野郎だよこ奴は……ハッハッハッハッ。』

又、皆がどっと囁した。

成程、風の吹廻わしで、扉の開放された物置から、椎若葉の香に似て腥い匂が鼻を掠める。三吉にはやっと全貌が呑み込めた。

『俺がタンク調べから戻って此処へ来かゝると、妙な呻り声があるじやねえか、耳を澄ますてエと震源地はこゝだ。早速合鍵（パス・キー）で開けて見るとどうだつ？……白ボテの野郎、俺の入つて来た事も気付きやがらねエンだ。ハッハッハッハッ。』

水夫長（ボースン）はいまいまし氣に笑つた。

『明日の暮までにや陸の白粉臭エのを抱けるじやねえか、何も好んで腥エ嫌を可愛がらなくともよオッ。ハッハッハッハッ。』

『そうともナ、俺もそれを云うンだ。しよの無エ野郎だよ。こ奴ア。……』

この時、やっと服装を整え終えた白ボテが、暫くもじ／＼と聴いていたが

『サ……そこでさ、皆さん。これには深い仔細があるンで……ま、冷えますから、お詫びの印にあしが仕込んできたブランデーでも振舞いやしよ。ひとつ云訳を聴いてやつておくンなせエ。皆さん』
『ほう。そいつア豪氣だ。一杯えよばれようか……』

海の荒くれ達は酒に眼が無かつた。

白ボテはブランデーを一瓶下げて、皆と大分遅れて一人で歩いて行く三吉に追付くと、小声で早口に先刻の礼を述べた。

皆が食堂に落着いた頃、入口の扉が静かに開いた。現れたのは本船の船長、片眼の狼と呼ばれる深見田源吾だつた。

『大分面白そうな話らしい。僕も聴かして貰おうかな。ン、三吉、僕の部屋のウイスキーを持って来い。ブランデー一本では足りなからう。聴き賃だよ。ハッハッハッ。』

船長を一枚加え、謂わば公認の形。塩漬の獵虎（らっこ）の肉を肴に一杯やり出した。

白ボテはにや／＼笑つて立上ると、

『まア皆さん。こゝらで、やり乍ら聴いておくンなせエ。——あしがナニも明日の入港を控えて、堪え性の無エ其為や、単なるモノ好きじやねえンです。誰にも癖があり病氣があるように、まア、こりやアあしの一種の病氣なンでして……』

少し風向が変つたものか、船の横揺（ローリング）が酷くなつてきた。

『あしは、秋田の八郎潟のある男鹿半嶋は北浦在の漁師の倅で、十六の年に漁師を嫌らつて家を飛出し、北浦の町のある食堂の見習料理人に住込みやした。それからまる四年、その食堂で地道に働き、どうやら一人前の料理人になり、久し振りで家へ帰エリやした。あしの因果漸と云うのは、この日の翌朝から始るンでムンす。皆さん、人間の運命の岐れ路なンでものは、ほんの一寸した弾みからでムンすねエ……』

白ボテは浪曲まがいに語つて、感慨深そうな顔をした。

この時、二番舵手の由三が惶しく
『せ、船長ッ。レ、例の怪しい船が、本船の左舷（ポート）一海里

程後方に現われやしたッ。』

『フン。そうかッ。全開（フル）だなッ？ じゃ、南西に進路を変えろッ。』

『宜う候（ようそろ）。旦那（サア）。』

由三が又、惶しく出て行くと、黒い眼帯の船長は独眼を光らせて云った。

『白ボテ、話の先きを続けろ。』

白ボテは眼顔で肯いて

『その翌朝のこと、あしが起き抜けに浜へ来てみると、まだ霽れやらぬ朝霧のたち罩める波打際に、どうやら人間らしいものが打揚げられてるじやありやせんか、傍へ馳け寄ってみると、チャブ／＼と波に洗われて海藻のようにそよいでいるのは、長い黒髪じやありやせんか、よく見ると好い女でさア……。あしは早速、抱上げて砂丘で囲まれた風の当らねエ所まで運びやした。軀は成程冷え切っちゃったが、こうふくらんだ乳房の辺りには、まだ幽かに温もりがあるように思われて、すぐに人工呼吸をやってみたが、やり方が拙い故為か効果がねエで、ジャン／＼焚火を燃してから、一生懸命に女の軀中を逆撫でに擦ってみたり曲げてみたり、百方手を尽したが、息どころか水も吐かねエ。あしは全く癪に障りやしたねエ。あしが何故、こうも熱心に介抱したかってエンでしょうか、女の土左公は例外なしに綺麗になるもんで、その女なンぞも、どう割引して見ても甘そこ／＼にしか見えねエ。色が抜けるほど白く、堪らねエ餅肌で、全く弁天様みてエに清々しくって色気があって、おまけに気品が高いときいてやがる。』

ところが、あしが少しポーっときて、蠟人形みてエな女の軀を眺めてるうちに、不図、女の丸い滑ッこい肩、その脊、臀、太股など割合に肉付のいい処に、何かコウ噛み痕みてエな傷があるのに気付きやした……。』

と、船長の独眼がギロツと熱を帯びて燎やき出した。その時、船体が俄かにブツと傾き、一同の体が左舷の方へ吸い寄せられた。天井の吊ランプも大きく傾いている。

『……は、ア、こいつア悪い魚にでもセ、られたナ。するてエと、大分潮に浸って居た勘定になる……こりやアとても蘇生（いきか）えるめエ。』と思うと、あしの心に裕りが出来たンでやしよう、思出した事があるンで。どうしても女の水難者が吹き返エさねエ時には——てエ事なンで。あしの浜の漁師達は誰でもそう信じていやす。まア十中六七分がとては息を吹き返エすと云うンですがね。今から考えてみると、あの時のあしは、女を助ける為よりは寧ろ、女の魅力に憑かれたと云った方が真実でやした。

すると、不思議じやムンせんか、女が、うーん……と呻いて薄眼を開けたンでやす。あしは吃驚して、女を裏返しにひっくり返えして、胸を持上げると、女は少々水を吐きやした。……

その女の名はお由紀でエンでやすが、二人で北浦の町で世帯を持ちやしたが、あしはどうしも普通——じや満足出来ねエンで、そこで考えやした。お由紀を素っ裸にして、ホースでチャン／＼水を浴せかけてやるンでやすが、これも直ぐ軀が熱テって駄目。で、水風呂へ入れてお由紀の軀の隅々まで冷やすンでやすが、少しの間じや効果がねえ、尠くとも十分は漬ける必要がありやす。それがお由紀にや嫌だったンでやしよう。あしが泣いて頼むのを振切って、大泊に居る妹とかを尋ねると、到々それなり訣れて了いやした……。

さア、それからが不可ねえ。冷え性の女と云って買ってみても、ちっとも面白くねエンで、冷ンやりと芯底から罩上げる深エ冷めたさがねえことには、とても満足がいかねえ人間になっちまいやした。そこで考えた末が、寺男に住込み、若い女と云わず、婆でねエ限りの女の新仏がある度にその墓を参りて、仏の冷ンやりとした底深エ冷めたさの肌触りを愉しみますにはいらなくなりやした。

阿漕（あこぎ）が浦に曳く網の喩に洩れず、和尚や壇家に感ずかれて、危（やば）くなり、知っての通り本船の御厄介になったような次第でやす。……へエ。あの海豚（いるか）の件にしてからが、その病癖の為なソで。まアざっとそんな訳合でして、皆さん。この因果なあしを可哀想と思召して、どうか御勘弁なすっておくンなせエヤー。」

流石に海の荒くれ共も、真夜、新仏の墓を発くという談に、聊か胆を抜かれたらしく、森として声も無かった。

『白ボテッ。お前エのその女が、浜に打揚げられたってエのは、何年前の話だナ？』

落着いて言葉は静かだが、隻眼を異様に燦やかして訊ねる船長の声音（こわね）には、どこか一種の凄気と云ったものが感じられた。

『へ、ヘイッ、今から……左様、四年、いや三年半くらい前でやした。それが……何ンぞ……？』

『ン、いや、何ンでもねエが、そのお由紀さんは、何ンで海に嵌ったんだナ？』

『ソ、それが何ンでさア、お由紀は、何ンでも相当な貿易商の奥さんで、亭主が虐待するのに耐えかね、その旅行中に若い情夫（いろ）を作り、店の大金を持出してその情夫と馳落ちをやらかしたのはいゝが、金が無くなると、男は薄情なもので、ともすれば他の女に心を移すのに心を乱し、今更、家にも戻れず、男の口車に乗せられて極来往生のモヒ心中をしたんだそうでヤンすが、幸か不幸かお由紀は生き返えり、傍を見ると、一緒に死んでいる筈の情夫（おとこ）の姿が見えねエ。その内やつと、お由紀は自分が騙された事に感付いたそうで、お由紀が云うには、自分は肉体的には前の亭主に惹かれていたが、生れて初めての恋の対手で、心から愛して、情夫の云う儘になつて来たがこの始末。到々この世に愛想が尽き、函館から新潟通いの船の上から、ドボンと身を投げたんだそうで……』

『ふム。成程ナ……で、ナニか、そのお前エと別れたのは、その情夫（いろ）に逢ったとか、その居所が知れたとか云う為じやねエのか？』

『さア、ねエ？ ドンなモンでやしよう……まア、あしの見たところじや、ソんなケ振りもなかったようでやしたよ……併し、惜しい女でやした……あしは眼を瞑ると、今でもお由紀の唇の端に黒子のある笑顔が泛んできやすよ……』

『フン。……唇の端に黒子のあるね……。で、何か、訣れたのはいつ頃だナ？』

『へエ……去年の春でやした。』

さり気無く問う船長の隻眼が、ギラリと光った。

惶しく一等運転士（チーフ・メート）の愛川が食堂へ入って来た。彼は通称女蕩しと呼ばれ、色白の眼元に愛嬌のある、頬のコケた唇の薄い男だった。

『あッ、船長ッ。此処でしたかい。実は今、一番船艙（ハッチ）の奥で、密航の若い女を捕えやしたが……』

愛川は息を弾ませ、頸筋を押さえ乍ら云った、その手の甲と額には猫に搔かれたような蚯蚓腫れの痕が二条三条赤く生々しい。

『ふム。密航の女をね……』

と、並居る水夫達の眸が俄かに燦やき、華かな私語が起った。それは次第に一種の喊声のようなどよめきに変っていった。

船長は臉を閉じて感慨深そうに、

『……世の中には随分慌て者があると見える。向岸に着きたいばかりに鰐鰯の脊を渡るか……牝兎の分際で……ハッハッハッ』

船長は刺すような眼光で、一等運転士（チーフ・メート）を瞋めた。その声の調子にも皮肉な刺を含んでいた。愛川は眩しそうに眸を外らした。

『連れて来いッ。因幡（いなば）の牝兎をだッ。』

はっ。と応えて、一等運転士（チーフ・メート）は出て行ったが、待つ間もなく、左右から水夫に腕を握られた密航の若い女を連れて戻って来た。

その女は色白丸顔の美人だった。女は入口で一瞬躊躇の気配を見せ、素早く食堂の中を見渡した。その視線が、ゆったりと椅子に腰を落した船長の顔に定まるや、瞭らかに声を呑んだ愕きの色が現われたが、それは瞬時にして消え去っていた。

併し、船長の表情には微塵の変化も起らなかった。寧ろ隻眼を半眼に閉じた様は、無感動、無関心そのものと云った表情だった。

『名前は？』

『ハ……はいッ……』

女の面に困惑と苦渋の色が現われた。

『ア、あたし、浮多珠枝と申します……』

女は項垂れて、蚊の啼くような声で応えた。一同は女の唇の端にある小豆大の黒子を見逃さなかった。女と、白ボテと船長の顔を夫々交互に見較べている。

『齡は？』

『廿九才になります……』

『本船を選んだ目的は何んだ？』

『えッ！ 目的、など別にありません。唯、旅費が無い為に……』

内地へ帰りたい一心で……コ、子供の顔が見たくて……』

『それでこの狼船を選んだって訳か……いや早、女も廿近くなると度胸が据るもんだ。いや、女は、可愛い男の為ならどんな危険でも犯すものだ。子供の顔が見たさにナ。ハッハッハッハッ。』

女には裏の意味が通じたものとみえ、耳朶を染めて身を細めた。だが、荒くれ共は笑うどころか、トロンと濁った眸をして誰かが睡そうな顔だった。その中で一等運転士（チーフ・メート）と白ボ

テだけが、眸に厳しい光りを宿して、この成行をみつめている。

『腹は空いてないだろうな？ 遠慮なく云いなよ。』

『……ハ、はい……』

女は消え入るような声で、依然として項垂れた儘で応えた。

『水夫長（ボースン）ッ。』

と呼ぶ船長の声にも水夫長（ボースン）は他の荒くれ共と同様、卓にガバと伏して、口から涎を流して睡りコケている。

『チッ！ 三吉ッ。』

船長の耳打ちに頷いた三吉が、船長の傍から離れ、食堂から出て行ったと思った瞬間、彼は飛鳥の迅さで身を翻えすと、矢庭に白ボテに躍りかゝっていった。

不意を衝かれ白ボテは瞬く間に三吉の膝下に組伏せられて了った。

『ナ、何をするッ！ ラ、乱暴なッ。チ、チーフ・メート、タ、助けて呉れッ！』

白布袋の声に一等運転士（チーフ・メート）の腰が浮いた。その瞬間、素速く延びた船長の腕が、彼の肩をグイと抑えた。

『早まるなッ愛川ッ！ 奴はスパイだッ。拳銃（パチンコ）を奪い取れッ！』

この時、組敷かれ乍ら取出した白ボテの拳銃が、船長の胸元に銃口を向けた。

戸惑っていた一等運転士（チーフ・メート）も、それを見るや猛然と白ボテに突進していった。だが、時は既に遅く、白ボテの拳銃の引鉄が引かれた。

——カチッ——と云う金属音。とその瞬間、『あッ！』と云う叫び声。

拳銃は白ボテの手を離れ、食堂の天井に勢よく当り、船長の足許へ転げ落ちた。一等運転士が素早く白ボテのその手を蹴上げたのだ

った。全てはほんの一瞬の出来事であった。

船長は顔色一つ変えずに、モーゼル十八連発大型拳銃を拾い揚げると、安全装置を外し乍ら、徐ろに云った。

『……安全装置（クラッチ）がかかったからいいようなもの、すんでのところで地獄行きよ。ハッ、ハッ、ハッ。』

彼はその儘、拳銃をポケットに納いこみ

『珠枝さんとか云ったナ。あんたを本船へ手引した者はコックの平野、こ奴だねッ？』

『いえッ、チ、違いますッ違いますッ！』

珠枝は首を振り激しく反対した。

『ほー！／＼すると誰だね？……真逆一等運転士の愛川だと云うンじやなからうなッ？ ハッハッハッハッ。』

一等運転士（チーフ・メート）の顔色が見る見る蒼白に変っていた。

『愛川、そう慌てるなッ。見っともねエ。僕は総てを知っている。

悪党はこ奴だッ。愛川ッ、この女を打てッ。泥を吐かせろッ！』

怒鳴る船長の手には、いつ拾ったか水夫長（ボースン）の簾の筈が握られていた。だが、一等運転士（チーフ・メート）は躊躇している。

『ワッハッハッハッ。女蕩しの貴様にや打てまいッ。いや、惚れた弱味かッ。愛川ッ。ハッハッハッ。よおしッ！』

急に荒々しい笑いに眸を妖しく光らせた船長は、白ボテをハタと睨み乍ら、

『こ奴等を素ッ裸にヒン剥いて、調理場（ギヤレー）のレールに吊し上げるッ！』

横揺（ローリング）の激しい船内で、忽ち、二人の衣服は剥ぎ取られ、後手に高手小手に縛り上げられて了った。

女は乱れかかる黒髪を咥え、羞恥と憤りに顫え小突かれ乍ら出て

行く。併し白ボテは自信あり気に落着いていた。

舞台は調理場（ギヤレー）に移った。天井のレールに吊上げられた二人は、緩くりと廻転している。

『おいッ。権に亀ッ。この阿魔（あま）の両足に綱を括って、壁の腕鉄（アーム）の孔に通し、滑車（シヤックル）で捲揚げろッ！』

ギリ／＼ッ、ギリ／＼ッと滑車（シヤックル）の軋みに連れ、珠

枝の両足は少し宛つ開られていった。ギリ／＼ッ、ギリ／＼ッと、冷酷な滑車（シヤックル）は彼女の意志や感情の外で動いていた。

堪り兼ねた白ボテが

『やいッ、ナ、何が証拠で、俺がスパイだとぬかすンだッ。キ、聴こうじやねえかッ。おい船長ッ、いやさ、片眼の海狼（シー・ウルフ）ッ！』

『ダ、黙れッ！ 張元通（チャン・ゲン・ツウ）！』

異口同音に愕きの声が迸った。

それも道理、麻薬、宝石、銃火器と云わずあらゆる密輸入者と海賊の上前までハネる掠奪者青竜（ハイシヤック・チン・ロン）の右腕と云われる張元通の名を知らぬ密輸者はなかったからだ。

『張（チャン）ッ！ 証拠はこれだッ！』

云いも終らず船長の筈が風を切った。

ピシッ！

珠枝の白い豊かな臀部に激しい音をたてた。と、脂の乗りきった肉の小山に、見る／＼ムク／＼と朱線が盛上った。

『ヒエーッ！』

魂消えるような悲鳴。珠枝は媚態を示すように身をくねらせた。

『どうだッ！ それッ、もう一つッ！』

——ピシッ！ ピシッ！——

『ううーッ……。ムうッーッ……。』

珠枝は唇を噛んで必死に堪える。身を縊りくねらせ、躍るように蛇のように、身悶える彼女の眸から次第に恐怖が薄れ、生々と妖しい燦やきを加えていった。

『ウわッハッハッハッ。キ、貴様ッ、う嬉しいかッ！よおしッ！』
船長の面にも喜色が溢れ、忽ちその眸は妖しい淫火に炎え出してきた。

——ヒュッ、ピシッ／ ヒュン、ピシッ／……ピシッ／ ピシリッ／……

『ヒイッ／ ムううッ／ ウうーッ／ ヒーッ、 あアーッ、ヒエーッ／……ううームッ……ダ、ダ、旦那様アッ……』

籐の細答は右から左から間断なく、息もつかせず珠枝の裸身を責めた。

生木を折るに似た厳しい答の音、笛のような嬌声のような珠枝の叫び。白い豊満な臀部は、忽ち緋桜をちらしたよう。と、キラリと燦めいて床に転げたものがあつた。

それは鶏卵より遙かに大きな光る卵だった。珠枝はその儘氣を失つて了つた。

『やい張ッ。貴様の情婦が産み落した卵を見ろッ！ この白金（プラチナ）の卵が何よりの証拠だッ！ 恐らく中味は金剛石（ダイヤモンド）に違いあるまいッ。張元通ッ。俺の絵解きを、よおく聴けッ！』

船長の眸から妖しい炎は消えたが、猶、爛々と独眼は燦やいてい

る。『張ッ。俺は貴様の話を聴いているうち、お由紀の唇の端にある黒子……』と云う貴様の言葉に、おやッと思つた。実際の由紀の顔には黒子は愚か汚点一つない。由紀こそ俺の恋女房だ。当時、俺は貿易商を装い、実は麻薬の密輸をやっていた。貴様は俺の留守に俺の

家を襲つたが、目的の果せぬ腹癪せに、由紀を掠奪したッ。いや、由紀はその時、既に自殺していたのだ。だが、その時、貴様是由紀の肉体の特殊構造を知ると同時に、ソコに隠してあつた白金の卵から、貴様の狙つた最初の目的の秘密宝庫の所在が知れた。貴様は喜び勇んで青竜の指揮を仰いで俺の宝庫を荒した。

貴様は、由紀の肉体の特殊構造に強く印象付けられた結果、由紀の左太股にある小豆大の黒子が、貴様の潜在意識となつて、話の中で、お由紀の口の端に黒子のある顔が忘れられない……と云つたのだ。そして、珠枝にある口の左端の黒子との混同が現われた訳だ。由紀が大泊へ行つたと云う事も、貴様等の北海の拠点が、大泊にあることを暗示している。

そして、由紀の肉体の魅力に惹かれた貴様は、由紀によく似た彼女の異母妹（いもうと）、珠枝に毒牙を延ばした。恐らく暴力と麻薬に依つて珠枝を自由にしたのだろう。その時、俺は既に密猟者になつて、片眼の船長海狼（シー・ウルフ）と変装して本船に乗つていた。また貴様は、その話の中で三年前と云い、去年の春とも云い乍ら、愚にも己の齡を忘れ、十九才などと云つた筈だ。俺は易々と貴様の本体を見破つたのだ。

貴様は貿易商藤村鎌造が密猟船の船長、片眼の狼と気付かず、俺が由紀の肉体の秘密を利用した如く、貴様も又、珠枝の身体にダイヤモンドを匿し、大泊から珠枝を本船で密航させた。懼らく珠枝もまた由紀同様の肉体の持主なのであろう。そこで料理人（コック）の貴様には飯の心配はいらぬが、若しかの時に備え、女蕩しの一等運転士（チーフ・メイト）に眼を付け、未亡人に仕立た珠枝を彼に近付けた。女蕩しは逆に蕩らされた形だが、そこはその方に抜目のない愛川だ、ところが、船に乗せ、今夜又ソロ珠枝を愉しもうとしたところが、どっこい今度はそうは行かぬ。案に相違して珠枝が抵抗した。それも道理、白金（プラチナ）の卵。大事な商品が匿され

ていたからだ。一等運転士(チーフ・メート)の咽喉と手の甲の蚯蚓腫れはその為だッ。ハッハッハ。」

『ソ、それが張(チャン)だと云う証拠か、いやさ、スパイだと云う証拠になるのかッ。』

『莫迦者ッ!』

船長の答が、あらゆる憎悪を罩めて白ボテの下半身に炸裂した。

『ヒエッ! うームッ……』

『卑劣漢ッ、犬畜生ッ!』

——ヒュッ、ピシリッ——

『ぎやッ! うアうアうーッあー!』

白ボテの顔は二タ目と見られぬ形相に歪み、身を苦茶々々に押し揉んで苦悶に軀の置き場さえなさそうな様子。

『ウワッハッハッハッハッハッ。由紀の呪いだッ。天罰だッ! アッハッハッハッハッハッ。』

洵、怨みを呑んで自決した由紀の怨霊の呪いとも云う可きかも知れない。船長は悪鬼ながらに笑い転げた。

『うーうーッ、ヨ、よくも、や、やりやがったなッ! ウーームッ、狼ッ! ショ、証拠があるかッ! ア、うーームッ……』

『未練者奴がッ! 悪党は往生際が大切だッ。何ンで貴様は俺に銃口を向けたッ! 何んで眠り薬を入れたブランドーを乾分等に吞ましたッ? 口の端に黒子のある、由紀によく似た珠枝を見て、本来

ならば驚く可き筈の貴様が、殊更、無感動無関心を装っていたのが既に怪しい。これこそ珠枝と貴様とが関係のある事を裏書するものだッ。張ッ! 貴様はまだ多くを俺に云わせる気かッ! も早、珠枝の軀に訊かずとも、彼女は全てを喋る筈だ。珠枝の気絶は責めの為ではなく、麻薬の切れた為だ。珠枝の皮膚の色、眼の隈はモヒ中毒者のものだッ。珠枝は麻薬欲しさに何ンでも喋るぞッ。いゝかッ、聴けッ! 珠枝は家に居た頃、俺が由紀を責めるところを覗いた事

もあろう。が、争えぬものは血だッ。先刻のあの眸色、あの叫びは彼女がマゾヒストとして成長した、喜悅の叫びだッ、悦唐の眸だッ、サジストである俺にはよく判る……。おいッ女を降せッ。』

船長の声に応じて、亀と権の二人の水夫が滑車(シヤックル)を回した。

「一等運転士(チーフ・メート)。白(ペイ)を一本打ってやって呉れッ。」

船長は衣囊から銀色のケースを出して、愛川に手渡した。一等運転士は珠枝が床に降されるのを待って、彼女の上膊にプスッと針を突き立てた。だがそこには赤く或いは紫に、栗粒程の注射痕が夥しく残っていた。

船長はチラッとそれに横眼を呉れると、又、張の方に向き直った。『ハッハッハッハ。そうか……。そこまで知られちゃ仕方がねエ。如何にも俺は青竜(チンロン)の一の乾分、台湾生れの張元通だッ。片眼ッ。そこまでは貴様の勝だ。だがどっこい喜ぶのはまだちと早エヤ。頼みの貴様の乾分共は、あとみっちり三時間がそこは正気にやア戻らねエ、そのうち、その間にア、俺の仲間が快速艇で追い付いて、片眼の狼ッ、貴様の残る眼の玉を抉り出して呉れるワッ。ウワッハッハッハッハッ……。』

張(チャン)は便々とした太鼓腹を揺って、さも心地よ気に笑い出した。

一同の顔から蠅ッと血の気が退いていった。稚内(ワッカナイ)近くから現われて、本船に近付きつゝあった怪しい快速船の本体は、実に海賊共さえ怖れ慄く青竜(チンロン)一味の掠奪船だったのだ。だが、片眼の海狼(シー・ウルフ)深見田源吾船長は流石に少しも騒ぐ様子がなかった。

『そいつア面黒エッ。ウワッハッハッハッハッハッ。』
船長も負けずに、腹の底から可笑しさが罩み上げてくるように大

声で喰い出した。

『張(チャン)ッ、貴様もよく焼が廻ったなッ。それを知らねエ海の狼と思うかッ。見ろッ、乾分共をッ!』

船長が答で示す方を見るまでもなく、海の荒くれ共が手に手に銃を執ってゾロ／＼と調理場(ギヤレー)へ現われた。

『噁乎(やゝッ)?』

『張(チャン)ッ、愕くにや当らねエ。痺れの眠り薬に備えて、解毒剤入りのウイスキーを吞ませておいたのはこの狼だッ。ハッハッハッハッ。貴様の仲間、海のダニ共は、貴様がいくら待っていても来やアしねエぞッ。貴様が船窓(ポールド)に縛り付けた仲間への標識、合図の懐中電灯は、俺がとつくに海の中へ叩き込んで置いてあらアなッ。ハッハッハッハッハッハッ。』

張(チャン)は眼を白黒させて瞬いた。

『……ン……そうだったかッ……』

彼は力なく項垂れて了った。

『三吉ッ、進路を修正しろッ。真南ッ。』

『宜う候(ようそろ)。士官(サー)』

直ぐ様三吉は船橋へ走った。と、入れ違いに二番舵手の由三が現われた。

『船長ッ。もう、怪船の姿はどこにも見えやせんッ。』

『そうだろうとも、海上警備隊へ無電連絡しておいたからなッ。奴等もそれ程、頓馬じやあるまいテ。フフハッハッハッ。』

『没法子(メーフアーズ)(仕方がない……)……』

張は絶え入るように云って、ぐんなりとなつて了った。

『水夫長(ボースン)ッ。白豚先生(シンサン)に氣付薬を与れッ。』

それッ、これよッ!』

船長は簾の笥を水夫長(ボースン)に投げた。彼はそれを宙で受止め、一寸、眉根にシワを寄せたが、忽ち了解したものにやと

笑った。

『宜う候。充分にやりやしよう。おーいッ、この白豚を床すれ／＼に降せッ。』

滑車(シヤックル)を鳴らして張(チャン)の軀が床に着いた。『よくもこの野郎ッ、挺変(テコヘン)オ酒を吞ましやがったなッ、どうだッ!』

——ピシリッ! ピシリッ!——

忽ち張の襦袢のような背中紅の十字を背負わされた。無念そうに歯を喰い締める張。

と、ペンリッ! と妙な音がした瞬間、簾の笥が二つに折れてケシ飛んだ。

『チエッ!……どうしやしよう?』

舌打ち乍ら水夫長(ボースン)が、残念そうに振返える。

『よしッ。皆ッ、よく聴けッ。こ奴は、吾々同業者の何十人かの命を、或は銃で、或は生理めに、或いは剣で突き殺し、虫ケラのようにこの北海の藻屑と沈めた。その上その妻子や娘を犯し、財を奪い屍までも辱めた悪党だッ。こ奴の便々とした太鼓蜘蛛のような生ッ白いドテッ腹を、右から左へと引裂いたら何が出て来るかッ、お慰みだッ。そうだッ。誰か先生(シンサン)の剃刀を持って来いッ!』

へいッと応えて、一人の水夫が調理台の小抽斗からソリンゲンの剃刀を出して来た。

『貴様達ッ。誰か白豚の布袋腹を裁ち割りてエ奴は無エかッ?——』

船長が再び叫んだ。

流石に海の荒くれも、人殺しは好まなかった。誰も速座に名乗り出る者が無い。

『誰もねエのかッ?——』

船長は怒りの形相もの凄く、三度、咆哮した。その時、水夫長がもし／＼し乍ら

『ア、あつしにやらせて呉ンなせえッ。』

『よしッ。水夫長（ボースン）ッやれッ。』

船長はにたりつと悪鬼のように笑った。

『合点でッ。』

独逸製の剃刃を受取った水夫長は、刃を起して二三度バリ／＼と掌の内で切味を見ていたが、にんやりと気味悪い笑いを洩らして、緩くりと張の傍へ歩み寄って行った。

水夫長（ボースン）は張（チャン）の腹を掌で撫で乍ら、淫靡な笑いを泛かべ、その感触を愉しんでいる。

『やい白ボテッ。痛いように裂ろうか、それとも痛くねえように裂ってやろうかッ？ テメエどっちがいいッ？ 直ぐくたばっちまったんじや面黒くねえ。初は薄皮に糸を入れ、それからチヨビッ、チヨビッと肉に裂れ目を付けてやらア。喰い肥ったテメエの腹だッ、どうせ豚の尻のようにギス／＼した脂が厚かろう。四五回に挽き裂って、テメエの糞袋を引摺り出し、テメエの頸に、葬式の花輪代りに飾ってやらア。ヘッヘッヘッヘッ。』

水夫長は喋り乍らも充分に張の肌目細かな腹の触感を味わっていた。

彼は左掌で張（チャン）の腹の皮を思いきり右へ引き釣らせた。

張の臍が右へ位置を変えた。水夫長は彼の左掌で引張った張の右脇腹へ、ソリゲン（ソリゲン）の薄い刃先をあてると、クツと力を入れた。

『ヒエーッ！ タ、助けて呉れーッ！』

支那饅頭のように生ッ白く膨れた張の腹に、絹糸を張ったように朱線が現われるや、プツッ、プツッと、血が玉になって噴出した。

『マ、待ってッ！ 待ってくださいッ！』

この時、注射によって生気を取戻した珠枝が金切声で必死に叫んだ。

『ト、留めてッ、旦那様ッ！ 張を殺しちゃ駄目ッ！ 張を殺せば姉さん、いえ、奥様の命がないッ！ 奥様は死んで了うんです。張（チャン）から居所を聞出し、早く助出してください。……それから張（チャン）も……助けてやって……』

水夫長（ボースン）がいま／＼し気に船長の顔を仰ぐ。

『待てッ！ 水夫長（ボースン）ッ、暫く待とう。』

大きく波打つ白ボテの腹は、二三寸程切れ血が泌み出ているが、傷は極めて浅かった。白ボテは意外さと小康を得た喜びとの入混った妙な表情で、珠枝の顔を睨めている。

『張（チャン）は悪人です。……けど、あたしにとっては、初めての、かけがえのない夫です。……ねエ、旦那様ッ、お願いです。皆さんも、どうか、張を殺すのだけは許してやってくださいましッ。……その為になら、あたし、皆様のお言葉通り、どんな償いでも致します。』

『珠枝ッ。由紀は生きて居るのかッ？』

船長の表情は複雑だった。

『はい。生きて居ります。でも、張（チャン）の為に、奥様は、手足を縛られて檻禁されているのです。張（チャン）の他は誰も知らない処なのです。張の留守には、天井から牛乳が一滴宛つ落ちて来る仕掛になっていますのだそうです。若しこの儘、張が死ねば、奥様は牛乳の補給の仕手がありませんから、飢え死してしまいます。タ、旦那様ッ、早く姉様、いえ、奥様を助け出してあげてくださいッ！……』

船長は腕を組み、天井の一角を凝つと睨んでいた。

『張（チャン）ッ！ 貴様の聴いた通りだッ。貴様に人間らしさの片鱗でもあるなら、珠枝の今の言葉を涙なしには聴けぬ筈だッ。見ろッ！ 貴様の女房珠枝は、身を顛わせて泣いているじやアねエカッ。由紀の隠し場所を喋っちまえッ！ 憎い貴様だが、由紀の命の……』

綱を握っているとすれば是非もねエ。由紀の命と取替つこた。云えッ。否、聴かして呉れッ。俺の方から頭を下げる。どうだ張元通ッ。」

『俺は知らねエ……』

命に別状がないと見てとると、狡い張(チャン)は不逞々しく嘯いた。

『そうか張(チャン)。よおしッ、もう頼まねエッ。貴様も云うなッ。俺も片目の海の狼だッ、俺には俺で、野獣の掟があるッ、手前エのそのぶよの軀にものを云わせてやるッ。』

急に変わった船長の風向きに、張は不安が募ってきたか、キョトと鼠のような眸になった。

『よおしッ、三公ッ。羽根箒を持って来いッ。』

突飛な船長の言葉に、一同は啞然として彼の顔をみつめた。船長はそれにお構いなく、

『一等運転士(チーフ・メート)、珠枝の綱を解いてやれッ。それからゼイ六ッ。毛布を着せてやれッ。』

珠枝は綱が解かれ、両手の自由を得るや、その手で前を蔽って踏みこんだ。その手首足首、上膊にまで、赫く縄目の痕が痛々しい。

間もなく剽軽な宮城が毛布を抱えて戻って来た。ゼイ六は珠枝の軀をチロ／＼覗きこみ乍ら、幾度も毛布でくるみ直している。

聴て、三吉が羽根箒を持って来た。

一同は何が始るか、固唾を呑んで船長の手許から眼を離さない。船長は三吉から受取った羽根箒を采配代りに振り乍ら命令した。

『おいッ、この白豚を大の字に吊れッ。』

忽ち張(チャン)の軀に四五人の水夫がたかった。縄尻を持った水夫達は、両壁のアームに綱を掛け渡し、レールに滑車(シヤックル)を掛け直したり、瞬く間に両手両足頸に綱を括られた張が、ギリギリッ、ギリ／＼と捲揚げる滑車の軌に連れて、呻めき声をあ

げ乍ら吊り揚げられていった。張の足が床から離れようとする時、『止れ(ストップ)ッ。』チヨイ、吊りを緩めろッ。よおしッ。そこで綱尻を括り留めろッ。』

珠枝は毛布から首だけ出して、何が始るか、はら／＼氣をもんでみつめている。

『張(チャン)ッ。貴様も青竜(チンロン)の跡目だッ。喋るなッ、これから手前エを極楽へ行けるように、充分、飽きる程笑わせて安楽往生させてやるぞッ。ハッハッハッハッ。』

と、船長は云い乍ら、羽根箒の先きを微妙に顫わせて、張(チャン)の腋毛のないスベ／＼した腋の下へ触れた。そのとたん

『ウヘヘヘッ、ヨ、止せッ、ヒヒヒヒッ、ッ、詰らぬ真似、エヘヘッ、ヨ、止せッ、ウヘッヘッヘッ、ヒッヒッ……』

張の奇妙な笑い顔から奇妙な笑声が湧き出した。

船長は羽根箒の先きを、或は強く、或は弱く又は軽く、腋の下と云わず、内股、腰骨、臍、足の裏と、巧みに場所と強さを加減しつつ、軽い刺激を与えてゆく……

『ク、苦しいッ、ウッフッフッ、イヒヒヒッ、ウエヘッヘッ、ヨ、ヨ、止せッ、フッフッフ、ウヒヒヒ、エヘッ、ヤ、やめろッ、オッホッホッ、ウヘッ、ヒッヒッ、イヒッ、ウフ』

一同は始めて船長の怖る可き意図を了解した。擦ぐられることの辛らさ苦しさは、痛い、痒い、煙たいの最後に位し、最も我慢の抛り処のないものなのだ。古来、擦ぐられて命を落した者の例は枚挙に暇がないくらいだ。

女角力のようなぶよ／＼した生ッ白い軀を、張は精一杯、うねり、くねらせて身悶える。堪えようにも堪え得られぬ擦ぐったさの苦しき切なさ、彼は涙を一杯溜め、せまる呼吸に太鼓腹を激しく波打たせている。

『ウエッヘッヘッ。ユ、云う、ヒヒヒ、云わせて呉れッ、イッヒ

ツヒッ、ヤ、止めるッ、ウヘッヘッ、ウフフッ、イヒヒヒッ……」
 『云うなッ、張(チャン)ノ、喋るなッ!』
 『云う、や、止めて呉れッ、タ、助け、ウヒヒッ、ウヘッ、イッヒッヒッヒッ、ク、苦しいワ、エッヘッヘッ、ク、苦しい……』
 『云うなよッ、張(チャン)ッ!』
 『ウヒッ、ヘッエヘッ、ユ、由紀はッ、ヒッヒッ、ウヘッヘッヘッ、由紀は、ヒヒヒ、大、エヘッ、大泊の、ウヒヒヒッ……』
 海面はうねりが高くなったのか、益々軸揺(ピッチング)が激しくなってきた。甲板(かんばん)を覆いつくした激浪が、屢々通風

孔(ベンチレーター)を通して飛沫となつて飛び込んでくる。
 『へへへッ、イッヒッヒッ、波止場の、ウヘッ、カ、鐘詰工場ッ、イヒヒヒッ、ウヘッ、倉庫ッ、エヘッ、ウフッ……』
 張(チャン)の苦悶の笑声は次第に衰えていった。
 浪の上に躍り出る推進器(スリリュウ)の空転音は、いよゝゝ激しくなつて来た。
 北海は依然として冥く、空には星一つ瞬かなかつた。天寶丸は諸々の業火を乗せて、何事もなきが如く、黙々としてこの魔海の時化を衝いて南進して航く……。

(新聞、雑誌通信)

児童雑誌にみた惨虐性

残虐の限りを尽す

——娘の生血を吸う老婆も登場——

東 一 郎 記

まず第一にあげられる「残虐性」の問題とみると、全誌全篇ことごとく残虐性」といってもよいほどで、例を挙げ出せばきりがない。(左にあげるのはあくまでも一例であつて、その雑誌だけにかぎらない)

春はまだ浅い江戸の夜。しとしとふる雨のなかから、おそろしいさけびが上がりました。わかい女がかさをなげすてて、くるしうにのけぞっています……あッ! せなかから前につらぬいているのは矢です! (「快人猫目男」の書き出し『痛快ブック』三月号)
 ……窓をこじあけると、すーっと、部屋の

なかにしのびこんだ。

しばらく、ふたりのねいきをうかがっていたが、やにわに、きらり、ナイフがひらめいたとみるや、ぐさり……少年と少女のねている毛布のうえから、ちからいっぱいきたたえた。ぐさり、ぐさり……つづけさまの一撃に、なんでたまろう、あわれや兄妹ふたりは、うめきのこえをたてるひまもなく、そのまま石のようにうごかなくなっていた。(「黒豹の爪」『野球少年』三月号)

ぬっと黒ふくめんがあらわれた。
 「おい小むすめ、ここは人間の生き血をすいとる、ひとだま御殿じゃ」……痛快太郎は、ここまできたとき、とつぜん猛犬にとびつかれた「ふふふ、あの小僧、猛犬にかみころさせてやるのだ」(「痛快太郎」『少年』三

「キヤーツ! 人殺し……」

月号)

——船牢にうつ

された一郎は、はだかにされると荒なわでしほりあげられて、その肌にくべつとりと蜂蜜をぬりつけられた。

その上に無数のアリがまかれた。アリはチクリチクリと一郎の肌をさす……メトロスネーク団の残酷きわまる迫害なのだ(「恐怖の暗黒街」II『痛快ブック』三月号)

——「うひひひ……まむしの生血のかわりにおまえの生血を吸うのじゃ、ひひひ……」

「おまえの血を吸うとわしの妖術にききめがでるよ、さあ、おいで」まむしの血がたりないおぼは体がよわっている。添付カット参照(「夜光鉄仮面」II『痛快ブック』三月号)

まだあるヒドイ例

このほか、快血鬼(ゴリラ的魔人)によって役人が土中に生き埋めされて殺されるところ(「白虎仮面」II『冒険王』三月号)獣人魔に刑事が首をしめられるところ(「獣人魔島」同)人間の皮を腰にまいてる西部の王



者毒仮面(「拳銃無敵」II『冒険王』三月号)自動ノコギリで人間を丸太のようにひききうとするところ(「怪魔団」II『太陽少年』三月号)駅のホームの天井に下っている時計の中に首をつっこまれて、中吊りにされて殺される悪漢(「ワンダーくん」II『おもしろブック』三月号)——といったぐあいで、人間が考えうる限りの残酷さを網羅している。

昭和三十年三月二十一日附

日本読書新聞「児童雑誌の実態」より

此れは児童雑誌の低俗化の問題から拾った話題である。残酷性の問題は文章よりも挿絵にある。

とにかく今日の児童雑誌の低俗化は何と云ってもグロテスクな挿絵にある。余りにも幼

稚な絵、全くひどい限りだ。戦前の十銭マンガよりも水準は落ちる様である。

添付したカットを見ても分る様に、実に下手糞でお話にならない。私達が戦前愛読した「少年クラブ」「新少年」「譚海」等の方が例え軍事物に関連性があったにせよ、未だしも本文、挿絵共に良かった様に思われる。

全くその俗悪化も、余りにも極端過ぎる傾向にあったことは確かであろう。

此の児童雑誌の低俗化問題は、一度「奇譚クラブ」が休刊する前後でもあり、一応書評専門紙「日本読書新聞」に大きな見出しで取り上げてあったので興味を引き再録した次第である。

◎伝言板◎

○鷹野めぐみ氏へ「サジスチンの半生記」(女学生時代は二月号へ発表しますから、続稿は三月号に間に合うよう早い目にお送り下さい。○宝塚二三夫氏へ、一回分は今までより少し長い目に原稿用紙で二十枚位の分量にお願い出来れば幸甚です。○高原正夫氏へ、御希望通り最新号へ掲載しました。続稿も是非お送り下されたく、尚洋行なされた暁は、その土地の珍聞についてのお便りも大いに期待しております。○阿川、甲斐、九雅の諸氏へ本月号掲載の続稿は出来るだけ早くお送り願いたいと思います。



玉稿落穂集

——誌上にのらなかつた

原稿のことども

編集部

先月号でお約束しました通り、本号ではサ
ディズムに関連した原稿の中から適当に選
出してみましょう。先ず第一に「我が幼なき
日の犯罪」と題した升岡金吉氏のもの。これ
は大分以前に送られてきたもので、発表出来
ないで保存されていたものです。勿論現在で
もそのままでは公開は出来ませんので、玉稿
落穂集で部分的に省略して御紹介することに
なつたものであります。投稿の中で、幼少年
時代から青年時代に至る間の懐古といったも
のは、比較的多いのですが、何の修飾もなく
ぶっつけに真正直に書いてあるものですか
残念ながら、今まで陽の目を見ることも少い
有様でした。先ず皮切りに、升岡氏からの一
文をごらん頂きましょう。

『私がこんなサド的な男になつたのは、小学

校二年の頃に見た時代劇映画の責場からでし
た。その日までノーマルだった少年の心にサ
ド的な血が湧き出たのは、私の宿命であつた
とも言えると、今にして思うのです。その頃
美しい女の人だと思つていた人気女優の、名
は忘れましたが、悪人に捕われて後手に縛ら
れ、叩かれて苦悶する姿の美しさ？ 否、あ
んなきれいな女の人がいじめられて可哀そう
だと思ふ気持ちが次第に昂じてきて、二度目に
は身体が燃える程わくわくしたのを忘れませ
ん。その日から女の縛られる映画を、どんな
に楽しみにしたことでしょう。小説の中の責
場にも妖しい魅力を感じて片っぱしから乱読
しました。レビエト団や芝居にも欠かさず行
って責場を眺めてうっとりしたものです。
このようにして女の責場の中に美しさを発

見した私は、長ずるにつれて悪い遊びを始め
たのです。幼年時代のオイシヤごっこが、泥
棒ごっこになり、縛りごっこに変わってゆきま
した。幼時から餓鬼大将だった私は近所の子
供達を集めては、そんな遊びに耽つたもので
す。最初の中は、遊び仲間でも美少年だった
KやTをいじめて征服欲を満足させたもので
す。「それスパイだ」「泥棒だ」と、他の子
供達に命令して荒縄で両手両足を縛って木に
括りつけておいて、「こら白状しろ」と棒で
こずいたり突いたり、頬を抓ったり、鼻をつ
まんだりして、勇者の気持に酔ったりしたも
のです。しまいに大人しいKやTも、「又
僕を縛るのかい」と、いつもいじめられ
るのが嫌になつたらしく尻込みをするよう
になりました。そこで私はKを呼んでジャン
ケンで負けた者を縛ることにするから紙を出
すように耳打ちして、他の者には鉄を出す様
に告げ、Kには「皆には石を出せと言ってあ
るからね」と安心させてKやTの負けるよう
に仕向けました。

「さあ、ジャンケンに負けたから大人しく悪
者になれ」と縄を手にして追い廻し「嫌だ、
嫌だ、ずるいずるい、嘘をついて」と泣きべ
そをかいって逃げまわるのを見て、私のサド的
な血は益々燃えさかってくるのでした。無理
矢理に寄つてたかつて彼を縛りあげて物置小
屋へ引き立ててきて「声を出すとひどいぞ」

とおどしつけておいて、その頃の少年としては一寸珍しいほどの「さるぐつわ」としてハンカチを口に押し込んで手拭で縛るというようなことを平気でやってから、自由のきかない美少年を皆でくすぐったり、今にして思えば「くすぐり責め」を地でゆく事を少年の身で行ったのでした」

と、ここまでの冒頭は、少年時代の何々ごっこという遊びで、誰でも経験したことのある中の一つであります。この次には、この升岡氏の異常と云われ性癖が発揮されて、いささかドギツイ責めを、他の少年たちが尻込みしている中ですすんで行われることを書いています。それというのも、あの映画で見た縛られた美しい女優の姿を再現してみたいという願いの然らしむるところなのです。そして、その結果は？。

『……………少年の猿ぐつわがゆるんで「わあーッ」と絶え切れない声、泣き叫ぶその声に少年達は青くなって逃げ出してしまい、さすがに私も、あわてて縛しめを解いて、「ごめんよごめんよ」と平グモのようになって詫びるのですが、余りの責苦に気も動揺した美少年のKは狂気のように自宅は駆け帰ってしまいました。何という悪童ぶりだった事でしよう。その日から以後、Kは二度と私の前には出て来なくなりました。「あんな子と遊ぶのじやない」の両親から言われたというし、又

Kの母親が私の母に「あんなヒドイ遊びをされたんじや死んでしまう」と怒鳴り込んで来たといつて、父からきつく叱られたことを覚えています。子供のことだからと、その場はそれなりに、どうにかおさまってしまいました。たが、私の頭を去来するのは、いつも、あの時の素晴らしい気持でした。

時が何も彼も流してくれて、私もその後少年らしい遊びで半年も過ぎた頃には、Kも仲間に入ってくるようになりました。しかし、いつも私の心の底を流れる血は、一向に消えることなく、一番可愛がっていたTという少年に向って燃えてゆきました。女性的な程弱々しく、服従的なこの美少年を自分のオヤツを分け与えたり本を見せたり、或は日曜日には映画へ連れていったりしてなつかせることに努力しました。或る日、私達は二人きりで二階にある私の勉強部屋で遊んでいた時、初めて縛らせてくれたと、哀願すると嫌々ながら縛らせてくれました。その中、嫌とは云わなくなり、「縛るよ」と云うと「うん」と素直に両手を背へ廻す程になりました。

雑誌などに載っていた美女の縛り面を見ながら、その通りに猿ぐつわや目隠しをしたり又、擦ったり抓ったり、そして、私の今一つの奇癖である鼻腔への魅力から（Tの鼻はいい形で腔も細いし美しい顔立の中に一きわ整っていました。）その鼻をつまんだり、陽の

当る場所で鼻の穴をのぞき込んだり、マッチの軸で鼻をほじくったり……………」

K少年で失敗した彼は、今度はTという美少年と仲良くなるのでした。そしてTとのプレイが、少年らしくない非凡な方法で、いろいろと行われてゆくのですが、この部分は残念ながら割愛させて頂きます。然しこのTとのプレイも余りにも度を過ぎた為に、母親の知れるところとなって、徒らに汚名だけを残して終末することになります。次には、近所の女の子を、ジャンケンで負けた者が縛られる役になるということと、縛ることを書いています。次には一人の妹の御機嫌をとって、縛り遊戯をすることについて次のように簡単に書いて終りとしています。

『……………妹も中々可愛い顔をしています。後手に縛ると、「きついよ、兄さん」と痛みを訴えるのを、なんとかなだめすかして、突っついたたり転がしたりします。柔かい肌に喰い入る縄、後手に縛られてもがく姿、妹の苦悶の表情を眺める、何という無情な兄だったでしょう。そのうち、私は妹にも嫌われてしまいました。……………』

次には、泉辰之助氏の「失われた週末」という小品ですが、これも、前記のものと同じく、ずっと以前に送られてきたものです。泉氏の作品は前に一、二度載せたことがあります。この小品を最後として、その後は送ら

て来られていないようです。

「自由学校」が朝日新聞紙上に連載されていた時の事だ。主人公の五百助がストリップ劇場だの、さかきくらげのマークの付いたホテルだのを案内された挙句、銭湯にゆっくり浸っている、其処へドヤドヤと女連中が入って来た。驚いた五百助が、俺は間違つて女湯に入つたのかと急に錯覚を起す場面がある。

あの風呂屋は一体どこだろうと、寄るとさわると穿鑿が始まつて、どうも上野近辺らしいという見当がついた。丁場、上野駅を仕事場に行っている友人がいるので、遊び旁々訪ねて行った。

「あれですか、大分評判ですね」

「上野なんでしょう」

「そうですよ」

「何処、ホラ、駅の横の、車坂通りを一寸入った、あそこですか？」

「いいや」

「でも、あそこは焼残っているし、外にあるんですか」

「あるんですよ、どうです。今度の土曜日、暇ですか。午後、そうですね、二時頃いらっしやい、御案内しましょう」

いやに勿体ぶっている。案内してくれるなら、今だっていいじゃないかと思うのだが、聞いて見ると、矢張り時間から云つて、二時

から晩くとも三時頃迄には行っていないければいけないらしい。その土曜日迄が待遠しかった。

其の頃は銭湯の設備が悪くて、かなり盗難のおそれがあったから、靴をはいたり、洋服を着たままで行かれない。友人の仕事場に財産一切を預けて、ズボンに下駄、アンダーシャツ一枚に手にタオルという軽装で出かけて、却つて心持がいい。駅前から下車坂の方へ電車道を歩いて行った。

大分歩いた。五六町行った処で都電の線路を横切つて右へ曲つた。丁度地下鉄の稲荷町車庫の裏に出た。

「神吉湯」と看板が出ている。仲々立派な新築だ。流しを取った。下足札より大きい木札を番台で受取る。戦前の下町の風呂屋風景が思い出されて、馬鹿になつてしまった。

「一体、その女連中が現われるのは、何時頃かい？」

「まあ、四時と見れば間違いないだろう」

兎に角、ゆっくり入っていないてはいけないうと、友人から道々入浴法をこんこんと教えられたのである。此から約二時間も湯槽から出たり入ったり、とにかく時間つぶすのは誠に御苦労の事である。が、もう退くに、退かれるハメになつてしまった。脱衣場でよく見ると、比較的洋服階級の人達で（自由学校）

の愛読者といった様に見受けられる。土曜の午後の事だから、気分ものんびりして、湯につかっていると、此れだけでも十分満足してくる。ここには所謂三助君が三人もいて、素晴らしい体格の、好男子揃いということだ。成程自分の背中を流してくれたのも、三助なぞさしておくのには、勿体ない程の美丈夫である。此れならさぞ御婦人連に騒がれる事だろう。然も五百助の処に現われた女連中には殊にそうであらうと想像をたくましくする。恐らく東京広しと云えども、本格的三助のあるのは、外にはないであらう。此れなら私だつて時に来て見たくなつた。

「まだかい？」

「そう急がないで下さいよ」

と、友人は安全カミソリを私の方へ差出した。髭でも剃つて奇麗になれというのか、暇つぶしをしるというのか分らなかった。

二

湯につかっていると、いろんな事を思い出す。塩原へ行った時の事である。塩の湯の方へ街道から入つてゆく処に塩湧橋というのがある。その橋下に共同湯があつて、あの辺りは塩原中での絶景だ。箒川の清流が岩にくだけて、その岸に、ポツンと湯小屋が建っている。私は独り山の景色を眺めながら、うっとりとなつそいた。すると一人の若い婦人が入ってきた。温泉などでの混浴は、大勢いる時

の方が却って自然で、何の邪念も起らないものだ。が、一人男のいる静かな、しかも外湯へ若い女が独り入ってきたのだから、私はどうするだろうと、湯槽に頭をもたせかけ乍ら興味深く彼女の動作を待っていた。婦人は最初、私のいる事に気がつかなかったのか、伊達巻をときかけたが、急に又元の様に締め直すと、湯槽のフチ迄来て踏み乍ら湯桶に一杯湯をとった。素足の裾をたくし、上げる様にして、手拭をしぼっている。其の横向きの浴衣姿が何とも云えない絵になっていた、私は最後まで、じっと動かずに、見ぬ様な、それでいて眺める様な態度であった。初めは絞った手拭で顔を拭いた。襟脚の方へも手を廻わした。サアと湯を素足の甲にあけると、又、湯槽のフチ迄近づいた。

こんどの一杯の湯も使ってしまった。もう出て行くなあと思っていると、帰る様でもない、却って私の方が早く出て行って欲しいのか、まだそのままだもじもじしている。私は一種サジステイックな心が湧いて、いつまでも上ろうともしないでいた。婦人は私の方をチラと見た様だ。私はこの時一寸会釈でもしてやればよかったのかも知れない。然し、私はまだ微笑だもしなかったのだ。婦人ははたと立上った。いよいよ出て行ってしまふのか掌中の玉を逃がしてしまふ様な気持に捉れた。

婦人は向うむきになると、伊達巻をとき出した。そして浴衣をするりとすべり落すと、棚の上にのせ、半ばかがむ様に走り寄ると、片足を湯の中に入れた、此が小説の書き出なら全く素晴らしいロマンとなるだろう。然しプロなどには見出せない、この婦人の羞恥が細そりした裸身に漂う情景は又と得難いものであった。

三

又こんな目にも会った。

私がまだ大学にいた頃だ、伊東、熱川、稲取、谷津と伊豆の東海岸をのんきに歩いた事があった。南伊豆は到る処、温泉が湧き出ていて、道傍にも共同湯があるし、学生旅行には至極お誂え向きに出来ている。谷津は曾我兄弟で有名な河津三郎の領地に隣りしているが、海岸の河津に比べると、平凡な環境で、畑の中に小学校があるという、何処にも見られる風景だ。私がその共同湯に浸っていると相当年輩の男と一緒にになった。彼は何かと私に話しかけて来た。明日はあの小学校の運動会だから是非ここで泊って行った方がいいという。こんな処の小学校の運動会なんてわざわざ泊って迄見たいとは思わなかったが、合槌をうって話相手になってやると、その男はいろんな事を聞せてくれた。何んでも雑貨化粧品類の行商人らしい。

「ハイお先へ御免なすって」と云い乍ら上っ

て行った。

私は一人旅の気易さから別に急ぐ事もないので、その男から聞いて置いた、天城山麓の湯ヶ野に出ようか、下田迄行ってしまおうかと、まだ迷い乍ら、窓から学校の建物を眺めていた。

私の外には、入浴者もない昼間の事である。ゆっくり身体を拭いて猿又一つ、絞った手拭を棚の処に掛けて置いて、煙草を早速一本とった。

そこへ一人、若い豊満な肉付の女が入って来た。この辺には小料理屋もなし、といって素人でもない、色白な、いい身体付きだ。私の方も見ないで正面の棚に自分の着物をまると、ポイと放り込むようにして、アツという間もなく、私が今掛けて置いたばかりの手拭をとって、腰へ巻いてしまったではないか。全く私の方が呆氣にとられてじっと女の裸身を見詰めた。女は驚きもしない、笑いもしない、濡れた手拭が張り切った腰部に巻きついて、却って裸そのものより、すこぶる魅惑的だ。

銭湯の湯ぶねに浸りながら耽っている懐古も、いよいよこのあたりに来ると、最高潮に達してきます。又、それだけエロチックな場面でもあります。

『「おい、何、するんだッ」

女はするりと私の手からくぐり抜けると、

湯殿へ飛込んでしまった。その途端、ヌルリと流し場に足をとられたものか、すさまじい音を立てて、女は仰向けにひっくり返っていた。その恰好といったら、全く筆舌には形容が出来ないものであった。

私は矢庭に飛びつくと、女の頬をヒッパたた。其処が村の共同湯だという事も忘れて続けざまに尻をなぐりつけた。どのくらい殴ったか分らない、女は抵抗などもせずに、却って私に抱きついてきたのであった。

四

そうだ、私は今、何処にいたのであろう。そして何を待っているものであつたらう。上野の地下鉄車庫の裏にある風呂屋で、湯に浸り乍ら、奇怪なる女群の出現を待つ間に、若き日の温泉の思い出にふけていたのだ。

私がこうして、真昼の、しかも大都会の公衆浴場で、パーマをかけたり又はかつらをつけた女の首が浴槽に並んだり、鏡の前で女言葉を使い乍ら、入念にカミソリを当てている一群を待つという妄想にかられる心の中にはただ一般の好奇心からというよりも、私の幼い日に芽生えたものがありはしないのか、其れが生長して、変形したものに違いないと思われる。

日本橋の芳町は御承知の様に江戸時代の吉原があった処、又隠間茶屋のあった処、附近には大門通り、吉原の創始者庄司甚左エ門に

ちなんだ親父橋、思案橋などの名称も残っている程だ。あの近くで育った私は、人形町から日本橋に出る大通りに、有名な蓬萊屋という佃煮ぜいたく豆の老舗が今でも栄えているが、其の店のすぐ横に、横町というより露地と云った方が適當なくらいの狭い露地があつて、裏通りに抜けられもしたものだ。今はあの辺も露地などという下町風景は見られなくなってしまったが、其の中程に風呂屋があつた。何時だったか、其の露地を抜け、又近道をするつもりで、もう一つ曲つたら丁度その風呂屋の裏口を通る事になって、一層狭い処をすり抜けた。私の家には飼呂場があつたから、滅多に銭湯には行かなかつただけ、その裏口から覗いた風景は全く予想外に珍らしいものであった。即ち左右男女別になっている事は勿論であるが、女湯の方は境の戸が開いていて、鏡の前に立膝して真白い二の腕までみがき立てている女も、これから湯に入ろうとして湯槽をまたぎ片足入れかけたのも、湯から上ろうとして豊かな白い背から腰まで露わにつき出しているのも、パツと私の眼を射すしめてしまった。一瞬私はそこに釘付けにされたままであった。然し、いつ釜たきが帰って来るかも知れない。私は夢遊病者の様にその狭い露地からフラフラと迷い出した。

それからというもの、私はこの白昼夢に悩まされ続けた。夕方少し早や目の頃を見計らって、如何にも用事のある振りをして、その露地を通り抜ける。その折、人がいないとツト狭い裏口の通路に曲り込む。幸い裏口の戸が開いている事もある。裏口の戸は開いていても釜場と流しとの境の、肝心の境の戸がピツタリ閉っている事も多い。こんな時はもうガツカリしてしまった。然し心持は急ぎ乍らも足取りはゆっくり裏口の前を通り抜ける時は、たとえ戸口が閉つていても、一度見たすさまじい光景が臉の底にハッキリと浮び上つて来たものだ。遂に私の鋭い眼は丁度その眼の高さの処にホンの少しの羽目板の隙き間を発見してしまった。その僅かの隙間からスーと網膜に映る白い裸像を捉えた時の喜びと云つたらなかつた。其れはあらわに見る其れよりも幾層倍もの神秘と歓喜に包まれた天国であつたのだ。丁度司令官が軍艦のブリッジから水天相交わる一線に敵艦隊を発見した様な具合だ。

私は出来るだけゆっくり歩いた。然し無意識にピツタリとその隙間に暫し私の眼は吸い付けられてしまうのをどうする事も出来ない幾ヶ月かの後だ。私は時間にすれば、誠に一瞬にも等しい僅かの喜びにひたつていた時だ、矢庭にガラッと裏口の戸が開いてザブツと馬穴の水をぶっかけられた。私はその覗いていた隙間から箸の様な棒でも突き出されていたら、今頃は少くとも眼の片方は潰れてし

まっていた事であろうとヒヤツとする。私はパツと飛びのいて一散に逃げ出した。水でよかった。ビショ濡れになったままの恰好で家に帰って来て、だが、母に何と云って誤魔化したかは忘れてしまった。

中々期待していた女群は現われそうにもない。友人の方を見ると彼も面目なげに頭をかいている。もう此れ以上湯につかっている訳にはゆかない。残念だがこの風呂屋から出る事にした。

「場所が分ったでしようから、今度からは単独飛行ですね」

私は失われた週末を、どうして取り返えそうか、湯上りの、濡れた手拭をブラブラさせ乍ら、其の時、ビールのジョッキを思い浮かべていた」

この「失われた週末」というのは、途中一個所の省略した処以外、ありふれた話題に過ぎないのですが、とにかく原稿のまま紹介してみました。素材に比べて話題の運び方が割合うまいので読ませています。

次に、やはり幼少の頃の思い出、経験を書いた大山正夫氏の「私の性典」と題した一文です。氏は姫路の人で、懸賞の告白体験手記として寄せられたものです。幼少の頃から大分変った性的コースを辿ったと云われ、文中のまずい点や、題名は自由に訂正して頂いて

結構です。という但書がついていましたが、成程この題名は今にして思えば、キザのようでもあり、いささか時代おくれのようでもあります。然し、応募された当時は、性典物全盛で「平凡」あたりがジャンジャン載せていたし、映画でも性典物が次々と上映されていたわけです。文章もナマのところが多くて、まあまあというところですが、そのところは削除しながら抜書きしてみました。

『私は一寸風変わりなことを書いてみようと思う。それは、人々は誰でも、いろいろな意味で誰にも云えない、自分だけの秘密を必ず持っていると思うが、私はSEXに関する思い出を少し詳しく書いてみようと思う。それについて一言断っておくが、此の文は私が物心ついた幼い時分から、現在迄の記憶を綴ったもので、聊かも偽りや誇張を加えていない赤裸々な真実を公表している為、或は文中に少々エロ的と思われる箇所が出てくるかも知れないが、然し、幼時の事実は少し詳細に書かなければ、此の文の使命が果されなと思うたので、幾分大胆な描写の点が出てくるかも知れないが、御了承を願いたいのである。

一、生い立ち

私は大正十四年四月、H県の北海道と云われるくらい未開の、そして原始的な山林で覆われたS郡の山深い山村で生れた。特に私の部落など、最も交通の便の悪い処で、四方、

山で囲れた狭い盆地に散在する戸数僅か三十戸ばかりの淋しい部落だった。

従って私達は小学校へ行く迄は、ここ以外に村や町が在る事など考えて見た事もなかったものである。そして近所の友達と終日、炭焼きの真似をしたり、小川で魚を捕って遊んだり、花を摘み木の実を拾ったりして幼時を過したものだ。其の頃、私がまだ確か七才の頃だったと思うが、隣家に清子ちゃんという私より一つ年下の可愛い女の子がいたが、その子と私は何時も仲良く、まま事遊びやいろんなことをしてよく遊んだ。

或る日の事、家のすぐ近くにあるお地藏様の御堂の中で、まま事遊び中に……
 というような幼い頃の経験も、母親の見つかる所となつて、きつく叱られることになりました。

『……今でも母が私達の幼い頃の思い出話をする時は、それとなく話をそらす様にしてあの事には、ふれない様に気をつけている。そして母は、「誰にも言わぬが今後はこんな事はするな」と言う意味の事を言った。私も人に言われるのがこわい様で以後は絶対にやめたものである。それから清子とはなるべく遊ばず、近所の男友達と遊ぶ様になっていた。その中に慶一君といって、私より年上の腕白小僧がいた。その子が或る日の事、鶏を捕えて……』

という風に、近所の男の子供たちとの悪遊びが、小学校へ行くまでの間繰り返えされていきます。幼時の性体験記録としては面白いのですが、単なる興味本位と誤解されるのを恐れて、一切触れずにおきましょう。

二、少年期

私の部落では春から夏にかけて、家畜牛を牧場へ放つて牛の運動をさせていたが、私が尋常四年の頃だった。何時もの様に友達と牛を曳いて牧場へ行って遊んでいる中に、ふといたずらをし出したのである』

『……友達のア君にとうとう見つかったしまった。其の時も人に云われるのが、何より恥しかったので、彼にいろいろ頼んで置いたが、翌日他の少年にしゃべっていたので大勢にからかわれて、一時は学校へ行くのが嫌になった事もあった。……』

『又、こんな事もあった。秋になると近くの山に栗の実が沢山落ちるので、拾いにいっていると、近くの私と同級生の女の子が来ていたので、私は「この栗の実を全部やるから……」』

『……彼女は知らぬ顔をして逃げて行った。私は後悔し乍ら帰った事もあった。其の後、五年、六年の二ケ年間は厳格な先生の受持でスパルタ式の教育を受けた為、そうした悪い遊びを罪惡視するようになり、一生懸命勉強に励げみ、それ迄は級中でも中以下の成績で

あったが、此の二ケ年間は五十名ぐらいの級中、第三位まで漕ぎつけたものだった。

三、青年期

今静かに回顧してみるに、私は数え年十四才、即ち高等科一年生ごろから本格的な思春期に入りかけていた様に思う。……』

『……余期せぬ此の現象に驚いて、とぼとぼと帰る途中に、村の青年達が時々口にする謎のような言葉を思い出して、ふと思ひ当る処があった。其の後は……』

『……何時しか、これに対する罪惡感を覚える様になり、何とかして禁止するようになつて、近くの八幡様に願をかけた事もあったがしかし、十日もすると我慢が出来なくなり、ついに誘惑に負けてしまったのだ。そして其の後にはいつも後悔しては神に誓ったものだったが、結局はどうしても止められなかった。其の為か、学校の成績もぐっと落ちて中以下になったと思う。そうする中に其の年も暮れ、旧暦の正月を迎えていた。其の頃、私の地方では、正月三日以後は、近所の子供がお互いに一夜泊りで、お客に招待される習わしがあった。其の時も近くの子供が四、五人お客に来ていた。夕食後は、かるた取りやトランプなどの遊びをして同じ部屋で子供ばかり寝たが、私はいろいろな事を考えて中々ねむれなかった。そしてすぐ隣に寝ている幼な友達の清子の大分成熟した柔らかな足にそ

っと触れてみた。彼女は、もう寝ついたものが身動きもしなかった。私は更に……』

幼な友達である清子との関係が、ふとした機会から再びその繋りを見せることになりますが、やがて高等科を卒業することになりました。

『……私も愈々卒業して社会に乗出す時が来たので阪神間の某軍需工場へ勤める事になった。入社後も彼女から度々、年の割にませた文章を呉れたものだったが、彼女は家庭の事情で、二、三年後養子を取って早く結婚生活に入つた為、交際は絶えた。が、私は今でも当時の思い出は忘れていない。入社後は過去の一切を精算したつもりで、一生懸命勉強しながら技術の習得につとめたが……』

『……だんだん日が経つにつれて、入社当時の緊張感もいつしか弛み、又、肉体的な刺激を求める様になつていった。其の頃、職場の同僚や先輩達からドギツイ春画や枕草紙を見せて貰った事があった。早速借りて帰って深更迄床の中で読み乍ら、過ぎし思い出を回顧したものだった。そして遂にT市の遊カクへ行く様になつていった。あの頃は三円で一時間たつぷり遊べたものだったが、月給二十円ばかりの収入では、月一、二回くらいしか遊べなかった。或る日、K町に衛生博覧会があった。私は好奇心から見に行つたが、其の時、性病の如何に恐ろしく、又如何に感染するか

等の事が、いろいろな資料によって説明されているのを見て、徴兵検査の際に不覚をとらぬ様、以後は遊女買いは絶対に慎んだのである。

こうした禁欲生活の反動とでも言うか、何時からともなく一種の同性愛的の悪習にふける様になり出していった。即ち新しく入社してきたN君は、一見女性的な感じの美青年だった。此のNの……

或る過渡期の奔放な同性愛の営みが赤裸々に描かれています。しかし、それも所詮一ときの戯れとしての流れでしかありませんでした。そして、

『……当時、我が国は軍需生産に狂奔していた時代であった為、工場は拡張され、私達の幾人かは、大阪府下の分工場に転勤を命ぜられた。此の頃から人的資源の欠乏から、多くの婦女子が徴用されてきた。そして、私たちの職場にも、彼女らが配属されてきた。其の中の一人、愛子という娘と、いつしか親しくなっていた。勿論、私は心から好きというのではなかったが、唯……』

という風に、職業に於けるロマンスの花が咲きかけるのですが、それも又、永くは続きませんでした。敗戦という大きな変動が訪れたのです。

『……かくて、私達は半ば公然と愛欲生活を営んでいたが、間もなく終戦を迎えた。彼

女は郷里に帰り、私も退社して帰郷した。当分の間は蟬の脱ガラの様なうつろな淋しい日を送り迎えた……』

『……昨年の暮から私は故郷の近くの、といっても十里ばかり難れているH市へ仕事に来ているが、平凡で刺戟のない田舎の生活に比べて、華やかな都会の生活に触れ、久しく眠っていた私の本能に悩まされるようになっていた。或る夜、ネオン街をうろつき、夜の花に戯れているうちに、ついに誘惑に負け、女のとこに従って、とあるバラックの一室に入

映画速報欄

MGMシネマスコープ総天然色

「ボワニー分岐点」

この映画はインド半島に位置する某国の独立前夜の陣痛の苦しみの中で、咲いたロマンスを極めて活劇的に描いたベストセラ小説の映画である。エヴァ・ガードナー扮するヴィクトリア・ジョーンズという英印混血女性が革命暴動の渦中にはいつて様々の苦闘をするという物語だが、この映画のクライマックスに、エヴァ・ガードナーは暴動派に拉致されて、貨物列車の中に縛られ監禁される。共演者は「最後の銃撃」のステュアート・グレンジャー「若い河」のビル・トレヴァーである。監督が「スタア誕生」のジョージ・キューカーなので、

った。そして明るい電燈の下でよく見ると、不潔な夜具と女の汚れた下着に、なんだかがらわしい様に思われて、あわてて戸外へ飛び出していった。下宿へ帰ってから、長い間黙想して最前の出来事を深く反省し、以後は絶対に危険な遊びに近づかないよう固く誓いつつ寝ついた

現在の風潮から、少しく厳格に省略をしてしまいましたが、私の性典」としての肝腎のところは抜けてしまったことをお詫び致します。

映画自体期待してもよさそうである。五十七年早々に封切られる予定。ハ口絵参照

同性愛とセックス

MGM作品

『お茶と同情』 ニュー・イングランドの男子高等学校の寄宿舎が舞台。この少年トム（ジョン・カー扮する）は感受性に富んだ繊細な神経の持主。歩き型や身体つきなど、いわゆるW型である。彼はある男教師と共に海岸に寝ころんでいたことから同性愛の噂をたてられる……。この事件から一人で寄宿舎の舎監の妻ローラ（デボラ・カー扮する）が登場する。同性愛とセックスの問題を大胆に取りあげているために、製作上映に關して賛否両論がやかましかった。

（提供・藤木仙治）

ヴェールを脱いだ肢体美

△下着おしやれブームの秘密▽

〔週間サンケイ一〇月二二日号〕

畑 晃 一提供

『スカートの下は蜂の巣をつついた様な騒ぎを起しているという、元来女のスカートの下くらい複雑怪奇なものはない。』

『その様な胸のふくらみがナイロンの古靴下だったりするのはなまやさしい方だからともかくこの奇怪なものが目下はらん中、一体洪水の原因は何か、その実体は？』という次第でこれは殿方にも知って欲しい『女性下着の十二章』』

という、至って勿体ぶった、ブン屋一流のもってまわった大グサな書きぶりだが、フェチシストには特に関心の強い『女性の下着』についてトップ記事として取扱っているので一応御紹介してみることにする。

A、下着ブーム覗けば、B、八頭身の脇役C、下着戦線を行く、D、下着は誰のもの、の四項の中で、本誌読者に必要だと思うものは、(男性たちのために)という小見出しの

個所で、簡単な下着の図解が入っているが説明と絵の違っているところもあるから注意を要する。

『ところで、さきほどからニツパーとかショーツだとか、コルセットだとか、男の方の余り馴染みのない？ 言葉が出てくるが、ここで話をよりわかり易くするために、男性用の女性下着解説を簡単にしておこう。』

女性下着は、これを①フアンデーション②アンダー・ウェア③ランジェリーの三つに大別される。その材料は主として木綿、ナイロン、ペンベルグ、人絹、絹である。

◇フアンデーションは、いわゆる肌着で体の型を整えるもの、各個に紹介すると「ブラジャー」(A図)お乳押えで、フランス語ではブラシエール。お乳を押えるのが目的でなく形をととのえる。ポビュラー(ナチュラル)型、アップ・リフト型Ⅱ垂れ気味の乳房を持

ち上げる。ストラップレス型Ⅱ肩紐がない。キヤミソール型Ⅱ胃の出るのを押える。ハーファカップ型Ⅱお乳の上半分を見せる。などが代表的でやせた人にはブラカップ(スポンジのバット)がある

「ウエスト・ニツパー」(B図)ニールツクというシルエツトが一九四七年に現れてからウエストを極度に細めるため生れた。骨が六―八本入っていて後で紐をしめる。ニツパーとは「はさむもの」の意。

「コルセット」(C図)図でご覧のように下腹の形を良くし靴下どめがついている。この簡略化したものにガーターベルトというのがある。腹、尻をすつきりしめるに効果的。

「パンティ」(D図)一般にパンツと思われるが、この通り裾が開いている。ドレスの線を美しくする役目のもので、身を守るためのものではない。念のため。

「ショーツ」(E図)これが一番最後のもの。レースや刺しゅう飾りのついたものもある。

「ズロース」(F図)フランス語でドロワーズ。ズボン風のゆったりした下ばきで、十六世紀はじめイタリヤ貴婦人が乗馬用に用いたのが普及化した。

◇アンダー・ウェアは、保温と衛生が目的で女性着といわれる上下続きのシャツの類だが今日では冬に時折用いる程度で次第に簡略化

されている。

◇ランジェリー。ドレスを着やすくし、シルエットを仕上げるもので、レース飾りのついたものがほとんど。

「ペチコート」(G図) アンダースカートで一九四七年デイオールがフレアの入った長目のスカートを発表してから進出。パラシユート・スタイルには不可欠。フランス語ではジュポンという。

「スリツプ」(H図) すべる、という意味通り服を着易くするためのもの。フアンデーシヨンでととのえた体を、すらりと包んで仕上げる。今では、シュミーズを略して、スリツプで間に合わせるのが多い。

「シュミーズ」(I図) 欧米では一九三〇年前後まで婦人のすべてが使用していた。今日一部の田舎を除いてシュミーズを着ることはなく、パリ、ニューヨークの洋品店には殆んど売っていない。

次に注目すべきは、最後のデルタパット問答〃というところ、これは余り長くないので全文を次に引用しておこう。

デルタ・パット問答

そう言えば確かに、日本女性の体は魅力的になってきている。明治から比べると縁は平均六厘広がって平均八〇・九厘柳腰は影をひそめて幅二十厘、厚みは十五厘という堂々た

るものになつてきた。バスト九〇厘、ウエスト六〇厘、ヒップ九五厘というコントラバス・スタイルは珍らしくない。これが、男性の心を震わさせずにはおかぬ。それをさらに整える下着なのだから、魅力のほども察しられよう。

しかし、モノが女性下着だけにブームの異聞も多々あるというものだ。概ね男性用ではあるが、最近デルタ・パットが街の話題だ。二厘厚みのスポンジを木綿で包んだもの。もと水着やシヨウのためで、局部の割れ目をおくす用のもの。これを作ったメーカーでは「どこを高くしたら良いか」と笑い事ではなく頭をイタメた。これを扱った三越の某部長は「知る人ぞ知る。だから、小さくデルタ・パットと書いておいてケースに入れておく方がいいかも知れぬ」と、神経を使ったとか。これをシヨーツのあの部分にとり付けられるようポケットをデザインしてくれと頼まれたデザイナーは「さて、何処へつけたら効果的なのか」当分頭がモヤモヤしたという騒ぎ。神経を使わねばならぬことでは、デパトの売場にいる男性の係員で「十八歳以下の方には応待しないで、女店員に代ります。恥かしがつて声もかけられない年頃だからです。また応待途中、絶対に笑わないこと、こみ入った相談(たとえばサイズや色について)はこれも女店員に代って貰う。比較的応待し易いのは中

年すぎた婦人です」

と、あるデパートの係は汗をかきながら語っている。

よかれ、あしかれ、ブームならば、何処を歩いても下着の気配がするもの。そこで最後に、下着専門のデザイナーの言葉をきこう。内外編物の塘(つつみ)和夫氏(35)は「下着のデザインには材質の化学的研究をはじめ医学的、建築学的、心理学的総合研究が必要だ。着て楽しく、健康的で、同時に情緒的であること、それにはまだまだ多くの時間がかかると思う。現在、ジュニア向きの下着がないことは大きなミスだ。下着はオーダーメイドが当然でそういう点から今の女性の下着を採点すれば六十点以下」また半沢商店の半沢寛子さん(23)は、「下着は皮膚の一部です。日本では下着専門の生地が研究不足です」そして彼女の採点は、銀座八〇点、新宿六〇点。さて、この勢いで来年は、どんな下着が生れることやら、塘氏に来年の下着を予想して戴くと「スタイルとしてはエムパイヤー・シルエットになるでしょう。アメリカでは十七世紀に流行した。ランジェリーはコットン・ランジェリー、パチストといって綿モスリンの一種でエバグレースのように、凸凹のある生地を使う。これは欧米では目下大流行ですが湿土向きだしアイロンの必要がない、ナイロンの出現で天然の生地を忘却しているのが

情ないから是非やってみたい」という次第。
されば来年は、コットン・ランジュリーと

やらを、彼女にプレゼントする紳士も多数出
現することであろう。なぜなら女性に関する

ブームに男性が無関心でいられる事はありません
ないからである。』

(ローカル・レポート)

また国電でモモ切り

——けさ川崎駅で若い女事務員——

(夕刊読売、十月十八日付)

(川崎発) 十八日朝七時三十分ごろ東京都大田区蒲田一会社員稲本節子さん(22)は、国電蒲田駅から下り京浜東北線電車に乗り川崎駅で下車しようとした際、うしろからカミソリのようなもので右太モモと右デソ(臀)部の二カ所を切られ、同駅前太田病院に収容された。傷は深さ五ミリ、長さいづれも約十糎で全治二週間、川崎署で犯人を捜査している。

人は同駅で下車したものに間違いないとみて捜査している。

高校生風の少年

——この一カ月国電ですでに五件——

(川崎発) 赤羽発桜木町行電車は出勤時のため超満員で節子さんは四両目中央出入口のすぐそばに乗っていた。南武線に乗換えようと川崎駅で下車するさいも人波に押されながら出たといふ夢中だったのだなにもわからず五六米ホームを歩いてから太モモに重苦しい感じがして、はじめて切られたことに気付いたと語っている。川崎署では前後の事情から犯

同様手口によるモモ切りは先月二十六日夕方方のラッシュ時東京駅三番線ホームに京浜東北線大宮行電車から降りた東京都世田谷区経堂町一七八立大生桑原園枝さん(22)が十七八才、高校生風の少年に、安全カミソリの刃で右の太モモを切られ全治十日間の傷を負わされ続いて二十八日朝のラッシュ時品川駅で同線赤羽行電車から降りるさい大田区新井宿三の二三三四東京女学館中等部三年佐藤和子さん(14)と級友の同区山王二の一七八三山口富美子さん(14)の二人がスカートの上か

らカミソリのようなものでモモを切られ、いずれも全治一週間の傷を負った。
またきのう十七日午後五時三十分ごろ神田駅ホームで大宮行電車から降りた千代田区神田鍛冶町二の四夜間学生西川文恵さん(19)が右モモを切られたほか去る八日中央線吉祥寺駅で十四才の女生徒が高校生風の少年に右モモを切られているので、九月以来一ヶ月間に国電内のモモ切り事件は京浜東北線四件、中央線一件計五件に達した。

警視庁防犯部痴漢特別捜査本部では犯人は京浜東北線利用者の中にあるものとみて去る一日から東京公安室と協力、私服刑事三名が常時同線に乗車、捜査している。
都内での犯人は同本部の調べによると高校生風で、安全カミソリの刃を半分に折り、人差し指と中指の間にはさんで切りつけたものらしい。

(東一郎 提供)

× × × ×

〔ラジオ・テレビ通信〕

「ムチ打ち」と「緊縛」

間 島 真 一

アプに関する映画・雑誌・新聞通信は最近益々充実して来た様だが、残念ながらテレビ通信は無い。それもそのはず、テレビの場合には緊縛シーンがあっても、その場限りで二度と再現される事がなく見る事が出来ない。

又、映画と違いカットのタイミング上、緊縛方法なども、例えば後手縛りなどは被縛者自身が自分で後で縄を握ると云う安易な方法が多い。しかし中には素晴らしい緊縛シーンがあり、私一人の胸にしまっておくのは大変惜しくあいにテレビを見られなかった人にも是非お知らせしたく、あえてテレビ通信など云う変なタイトルをつけて筆をとった次第である。

「ムチ打ち」

(十月卅日、ラヂオ東京テレビ、「ゼリア・プレゼント・シヨウ」より)

このシヨウは毎週火曜日、夜九時十五分か

ら上演され、歌と踊りのミュージカル・シヨウだが、この夜は国際色を出そうと云うので築地容子、神楽坂浮子らの他、黒人の歌、中国人の奇術と踊り、オーストラリア人男女に依るアクロバティック・ダンスなど多彩な顔ぶれだった。

さて、この話のテーマは、この濠州人男女に依る曲技的なダンスについてである。男の踊り子は中年の少々肥り気味だが、ガッシリとしたタイプ、女の方は踊り子として実に理想的な身体をしており、美事に發育した長い脚線、グツと盛り上がった両の乳房、そしてその美貌と相まって、たくましく妖しい雰囲気をかもし出していた。男はタキシード姿に身を固め、その反対に女は露出症かと思わせる様な衣装で、二つのアクロ的なダンスを終り、愈々三つの目のダンス・ナンバーに入った。「ラ・クンパルシータ」の調べと共に女の登場、両乳房をわずかに覆い、背中

は短く露出、短いスカート、黒いパンツも半分ほどしか臀部を覆っていない。豊満だが引き締まった臀部から足にかけ、靴下の背後には二本、カウ・ボーイが使う様な根本の太い、そして先へ行くに従い細くなるムチが置いてある。やがて曲は一転、スペイン風の旋律に変わる。男、タキシード姿で登場、一本のムチを手にとり素振りしている。男、ムチを手にしたまま女と踊る。しかし女は男の意のままにならない様子。男は女が両手をあげて踊っている背後からムチをピシリッと振り下ろす二回、三回、四回……(私はハッとびつくりした。本当に女の身体へムチを当てているのです。)女は痛みをこらえながらも、ムチに対して何の防禦をする事なく踊り続ける。両手を上にあげた女のポーズは、両手を吊った女をムチ打っている様な錯覚を起す。ムチは、むき出しの背中から前へまわり、先端は乳房をうっている。ピシリッ、ピシリッ、と十数回、遂に女はくずれ倒れる。その倒れた体の上にもムチは雨の様に降る。

ここで踊りは終わったが実際私は驚いてしまった。踊りの筋は、そむいた女を無理に屈伏させると云う簡単なものであり、勝手な推測をするならば何かの動物を女体にみたて擬舞化した家畜飼育物語とも云えるが、実際に音たててムチ打つのは始めてみた。今迄公開の

映画や舞台では絶対に見られなかったと確言出来る。殊に臀部を打たず、背中から乳房を打っていたた、女性にとって乳房を打たれるのは非常な苦痛ではなからうか。又このダンス・ナンバーに限りタイトルが出なかったが何か意味があるのではないか。そして、この女の踊り手はマゾヒストであると云っては過言であろうか。この二人のダンサーの名前はシヨウの最初にしか名前が出なかったので書きもらしてしまったが御存知の方がいたら是非知らせて戴き度い。プロらしいから、いづれ日本のどこかで公演しているに違いない。このテレビ・シヨウを見のがした人でも、再見するチャンスがあるわけである。

最後に、このシヨウを見た方、是非感想を公開して下さい。

「誰れか見ている」

(JOKRテレビより)

宇宙物語「誰れか見ている」(JOKRテ

日活映画「肉体の密輸」

外国船に商品以外の密輸出として日本女性を運ぶ国際港横浜に暗躍する桂馬の角(二本柳寛)が自分の意にしたがわぬ女(美多川光子)をダルマ船に連れ込むのを角と同類の女将が光子をシュミーズ一枚にし、両手を縛り梁から吊し、バンドで打ち

レビ、毎週木曜放送)は十月廿五日で第十三回を数えたが、この話は少し旧聞(見?)に属し、九月六日・第六回の事。主役の少女(桂典子扮す)が悪漢の為に後手に縛られ、白布の猿ぐつわをされて洋服ダンスに閉じ込められている。そこへ新聞記者(沼田曜一扮す)が来て少女を助けると云うシーンから始まる。あらかじめ緊縛されていただけに、この美少女は袖無しブラウスから出た真白い両腕を背後に十字に組まされ、麻縄様のもの一旦両腕を三巻位締め更に両乳房のやや上方を二巻、胸を緊縛してあった。猿ぐつわもきつくかまされた事は白布の猿ぐつわの上から唇の形が見えた事でもわかる。沼田曜一があわてて猿ぐつわを解こうとするが結び目がほどけない。そこで猿ぐつわの結び目を解かないまま無理に猿ぐつわをはずしてしまふ。自然髪の毛などが引っぱられて桂典子は本当に痛そう。勿論その間、後手緊縛のまま。猿ぐつわがはずされると早速「早く手をほどい

たたき仰向いている頬をつねったりする。

松竹映画「京洛五人男」

恋人桂小五郎を慕って京都へきた志野(小山明子)は新選組に捕われる。太い縄で後手に柱へつながれるが、直に浅茅しのぶに救われる。

てえ。」躍一君、手をほどきにかかるがこれ又仲々解けない。そこでナイフで後手の縄をブツブツと切ってしまう。

この間、桂典子扮する少女が緊縛されて洋服ダンスよりころげ出て来て自由にされる迄約三十秒位のシーン、後手背面並びに前面を上半身アップの形でうつしてくれた。ナイフを用意しておいた事は本格的に緊縛した事を物語っている。次のカットで桂典子は腕をさすっていたが見ると手首には、はっきりと縄目のあとが残っていた。これなどは正にテレビならではのシーンであり、映画などでは絶対に見られない。桂典子が美少女であるだけに迫力のあるサジスチック・シーンであった。尚、KK愛読者の方でアップに関するテレビ通信があったら、是非発表して戴きたいものだ。

—終—

最近には実に緊縛映画が少なくて淋しくなりませんので、今月は大衆雑誌の挿絵についてお知らせ致します。

現在の日本には毎月二十九冊の大衆雑誌が発売されております。(別冊宝石は隔月なので除く)その内には素的な緊縛挿絵も

あるので、以下は最近号より玉石混合にひろってみます。

読切特選集十二月号

「双生児の呪」野口昂明
四一四頁白布の猿轡をはめた娘を横抱きにして舟から海にとび込もうとしている男。手は縛ってない。全身左横、二寸五分。

四三二頁、舟の中へ後手に縛られ、白布の猿轡で転がされている娘。全身右斜、二寸五分。

講談倶楽部十二月号「軍中膏墓の油」神保明世。
三二四頁。後手に縛られ、柱につながれている娘。全身左斜、二寸五分。

読切小説集十二月号「ねずみ悲願」生野明
三八四頁、板の間に後手に縛られ、転がされている娘。全身正面四寸。文中には口に喰い込む猿轡と書いてあるが、挿画には描いてない。

小説倶楽部、十二月号「伊三郎鴉」平野林作
三八五頁、後手、白布の猿轡で茶店の前の路傍に引すえられる女。上全身右横、一

寸五分。

小説倶楽部十二月号「身代り浅右衛門」堂昌一
三五〇頁、目隠しをされ、本縄をかけられ荒むしろの上にすわられ、斬首の刑にされようとしている女。全身右斜、二寸。

小説倶楽部、増刊号「珊瑚珠の唄」伊勢田邦彦。
五一頁、腰巻一枚の女が太縄で後手に縛られ、吊されている。全身右横、二寸五分

読切倶楽部十二月号「緋文字夜叉」土端一美
二八二頁、湯文字一枚で、しごきで後手に縛られて、夜具の上にすわらされている女。全身左斜。三寸五分。

オール読切、増刊号「女探偵東下り」富田千秋。
一一五頁、後手に縛られた腰元が奥方に弓の折れで折檻されている。全身正面、二寸

緊縛映画と雑誌の挿絵

千葉栄市

読切小説集、増刊号「喧嘩はまかせろ」今村恒美。

三四〇頁、柱に後手に縛りつけられ、口には手拭し猿轡をはめられ、うつむいている顔を顎に手をかけ、無理に仰向されようとしている娘。全身左斜後、三寸。

細引の後手縛りが見え、猿轡の顔も横向いて美しい。

読切傑作集一月号「花吹雪幡随院」横塚繁。

三一〇頁、駕籠の中に後手白布の猿轡つわで縛られた芸者姿。一寸五分。全身正面
読切小説読物一月号「小町嵐」木俣清史。

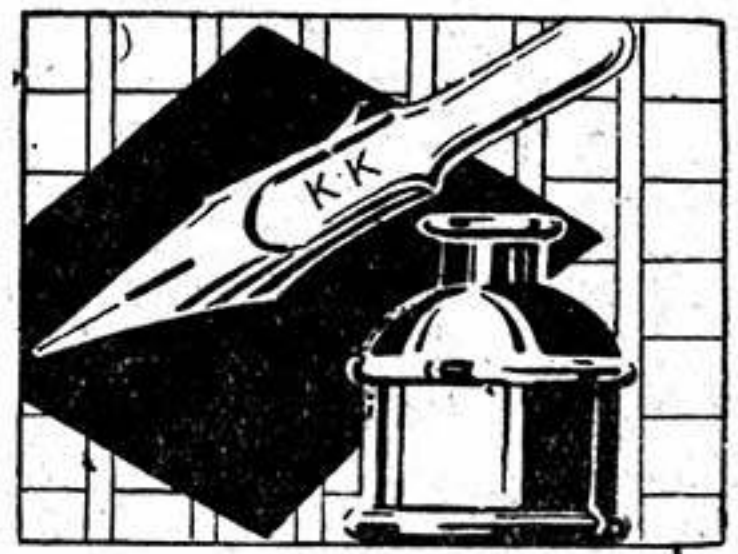
三〇一頁、柱に肌もあらわに後手に縛りつけられ、云う事を聞けと折檻される娘。

三寸、全身、右斜。

別冊読切傑作集二十五集「炎上幻絵図」加藤敏郎

一六九頁（お欣の鬚は根本からガックリ崩れ、唇を噛んでハッタと睨んだ形相は美人なだけにぞっとするほど凄艶だった）との文章で水車の軸に荒縄で後手に縛られた娘、全身正面、五寸五分。これは色彩口絵なので綺麗である。

（以上）



【続 者 通 信】

毎日御誌拝読致して居ります。小生、流腸の記事に興味を抱いて毎日楽しみにして居りますが、余りいゝのが出ないで残念です。五月号、矢崎龍一氏の「灰色のノート」は読みごたえがありました。又十月号のラブマン氏の「私の流腸プレイ」短文乍ら嬉しく拝見致し文通したいと思ひますが誌上で出来なければ本人へ直接連絡出来る様、御取計り下さいませんか。

(岡山市、江根間生)

○ 拝啓、先日は読者通信に僕の声を載せて下さいまして有難うございます。グラビヤ又は挿絵に縛り方、縄の掛け方の解説をして戴きたいと思ひます。こんなにして縛

られるのかと思うと、きつと楽しい思いにふけられると思ひます。それから三木恵子様、九月号十月号と読んでいる内に、どうしてもお呼びかけせずには居られない様になりました。出来れば十月号の小説「なめくじ」の様に戴きたいと思ひます。あなたのプレイの伴侶として、決して失望なさる事はないと信じます。御便り戴ければ幸いです。(大阪市住吉区南加賀屋町第一燃料内 山田生)

○ 奇ク十月号に私の「サジスチンの半生記」幼女時代を掲載下さいまして有難う御座いました。続けて少女時代、書いて居るのですが出来ましたら御送りしますから御願ひ致します。只正直に云つて現在、いわゆる予定しています「サジズムの女」篇の種が多くて、始めからそれを書けばよかったと思つており、折をみては現在の事も書いています。男性のマゾヒストも、私からみると多い様で余程でない限りマゾヒストだと云う事を云わず、第三者の事を話したりして居る様であり乍ら自分の事を発表して居るのですね。私とつきあっている人達もなかなかそれをいわず、思いきつて私が女だ

てらに馬乗りに跨つたり、顔の上なんかにはわざと跨つてお尻でぐいぐいこずいたりすると、君は魅力があるとか云つて、今後はそれをいつも望んで居る様です。断つておきますが、パンパンみたいな事は絶対にしません。早く云えばスツキガール程度で、私生活は至つてまじめですから念のため。でも、私は二、三年前かに出ていた「ラヴ・スレイヴ」の春美とか「痴人の愛」のナオミみたいにはなりたくないので。平常は女らしさは忘れず、夜の時間に於ける遊戯にのみサジズムを発揮してゆきたいのです。そういうプレイに同調してくれるフェミニストの男性が欲しいと思つています。お店での私のニツクネームは現代巴御前です。趣味が乗馬だからかしら………では又。

(東京 鷹野めぐみ)

○ 十月号は待望の沼正三氏の「手帖」及び「黒女皇」という実のいたった読物があり、最近の快心事でした。さすが沼氏だけあって造詣の深さは、いつものこと乍ら感服の至りです。何卒今後、本誌の文献誌としての權威のため、健筆を続けて振われる様御願ひ致します。

○ 次は十月号で嬉しく思つたのは、鷹野めぐみ女王様の御出現です。その半生記は興味深く続編が得られます。その上、鷹野女王様は私共の身近い所におられ、MSプレイを楽しんでおられる由、羨しく存じます。お察支えなくば、私共も加えて頂きたいと思ひます。最後に、読者通信欄でも三木恵子様といわれる女王様の御出現があり、私共マゾ男は随喜の涙が流れるようです。然し毎月多くのマゾ男性が、真心こめて女王様方に奴隷の奉仕をお願いしていますのに女王様方からの反応が割合に少ないのは残念でございます。女王様のおみ足の下に手をついて犬馬のおつとめをお待ち申上げて居りますマゾ男性は、決して女王様の尊厳を冒瀆することは絶対ありませんから御安心の上御使ひ下さい。

(東京中央郵便局私書函一三九一 号)

○ 十月号の読者通信の三木恵子様の便りを見て、小生は胸の高鳴を感じました。というのは、果して一生の中に一度でもサディストの女性にめぐり逢えるかと云う事すら疑問だからです。とに角、小生の葉が現実に一歩近づいて行くの

は事実の様です。では三木様に会える日の幸福を唯一の希望として……。(神戸市葺合区旭通二丁目一九ノ六 藤田 修)

初めてお便り致します。一昨年の十二月以来の愛読者ですが、非常な悪筆のため今日までペンをとることが出来ませんでした。自分は今年二十六歳になる浣腸、おむつ、下穿きマニヤですが、どうか女性の方で下穿きマニヤの方居られないでしょうか。又浣腸、おむつのプレイに興味ある男女の方と文通したいと思ひますので同好の方のお便りを待つて居ります。自分はサゾ、マゾ共、五分／＼程度であると思つて居ります。岐阜の荒井繁樹様、貴方のプレイ(アイデアではありませんが)をお知らせ下さる様お願い致します。最後に月岡映子様、復刊九月号誌上で「浣腸とおむつ」と云うのを書いて居られますが本当でしょうか。貴女が本当に誌上で書かれた通りの事を、貴女のアパートでして居られるのでしたら、自分も少々アイディアをお知らせしたいと思ひますので、ぜひお便り下さいませんか。貴女よりのお手紙を心からお待ちして居ります。(京都市下京区油

小路通五条上ル 西村幸雄方 藤原卓治)

創作「なめくじ」の大谷絢子様

貴女様は保のような男をお求めではございませんか。私は保とそっくりの男です。私は貴女様の前に一かけらの男らしさもなくて、貴女様の手にかゝって、ひどい目にあわされたいのです。女の様に受身になつて貴女様の手出しを待つています。こんな女性的な男を思うまゝにいじめて見てやろうというお気持ちはどういせんか。貴女様が美代子の様なお方なら、私はどんなに嬉しいことでしょう。大谷様、どうか私を保の様にいじめて下さいませ。せめてお便りでも戴ければ、私はどんなに嬉しいか、お察し下さいませ。三十六歳長身、やせ型の男です。保のメイジにびつたり男と自負して居ります。渋谷の鷹野めぐみ様、三木恵子様、貴女様方の愛の心を待ち致して居ります。どうぞお便り下さいませ。(埼玉県春日部市粕壁四四八六 関根正義)

初めてお便りいたします。私は先月ある古本屋で奇クを見出し、余りの面白さに一息に読み通して

しまいました。この様な興味深い雑誌が発行されていたことを知らなかったなんて私はなんて愚かなんでしよう。今まで発行された旧号の内容がとても気に入りまして。願わくば奇クのオールドファンよ私に旧号を恵みたまえ! と云つても、ゆづつて下さいとは申しません。一定期間貸して戴けないでしようか。出来れば創刊号から一週間に一冊ぐらいの割合で、見せて戴ければ幸いです。勿論、お借りした本は丁寧に取扱いますし、手数料、送料も必ず御支払致します。どうぞ私の願いをかなえて下さい。愛読者の皆様の友情を期待して居ります、では皆様のお便りをお待ちして居ります。(落合正人)

初めてお便り致します。私は浣腸と下着に興味がある一女性です。島直樹さん、東沼完一さん「看護学雑誌」の発行所名と住所、価格をお知らせ下さい。浣腸の記事が載っているのは一九五五年の三月号ですか? 一九五六年の三月号ですか? 又、奇ク五月号に灰色のノットを書かれた矢崎さん、グラマーの「モリエール器具」浣腸器提要」等の書につき、発行所名と住所、価格お知らせ下さい。何れも読者通信の頁に回答して下さいれば幸いです。是非お願い致します、最近浣腸の記事が少くなりました。残念でたまりません。花村さん、羽村さんの文を期待して居ります。他の方々も是非投稿して下さい。又、フォトも低調です。代理部の方々、ドシム浣腸フォトを製作して下さい。私は男性のフェチの様に汚れた物は好みません。白いパンティやブラジャー、コルセット等をつけて、下着のファッショソフオトを作して下さい。ポーズをつけずに正面に立った普通の姿が良いと思ひます。ただモデルは美人に限ります。本誌についてはニューモデルのプロフィールを佐賀嬢や花坂嬢、中塚嬢等にスポットを当て登場させて下さい。古くからのモデルの中富嬢、雲井嬢等の素顔紹介も行って下さい。最後に奇クが一日も早く以前の様な特大号が発売出来る様お祈りします。(AS子)

所、価格お知らせ下さい。何れも読者通信の頁に回答して下さいれば幸いです。是非お願い致します、最近浣腸の記事が少くなりました。残念でたまりません。花村さん、羽村さんの文を期待して居ります。他の方々も是非投稿して下さい。又、フォトも低調です。代理部の方々、ドシム浣腸フォトを製作して下さい。私は男性のフェチの様に汚れた物は好みません。白いパンティやブラジャー、コルセット等をつけて、下着のファッショソフオトを作して下さい。ポーズをつけずに正面に立った普通の姿が良いと思ひます。ただモデルは美人に限ります。本誌についてはニューモデルのプロフィールを佐賀嬢や花坂嬢、中塚嬢等にスポットを当て登場させて下さい。古くからのモデルの中富嬢、雲井嬢等の素顔紹介も行って下さい。最後に奇クが一日も早く以前の様な特大号が発売出来る様お祈りします。(AS子)

久しぶりの十月号、楽しみにしていましたが、期待外れの内容にいまゝがっかり。しかし代理部分譲品が充実すれば、状況下止むを得ないでしょう。この頃女斗美

の記事がないのは大変に残念です。八月号の京洛生様の「大奥裸女血斗」の企画を是非実現して下さい。代理部分譲品の中に加えられる事を望みます。ふんどし一つの奥女中が白刃を振って斬り結び、朱に染って倒れる時の構図は、私も以前から抱いていました。画が出来ないの切歯扼腕するのみでしたが、はからずも同好の士が居られたことを喜んでいます。女斗美愛好の皆様、大いに読者通信で呼びかけて下さい。特に京洛生様とは是非文通致したく思います。この「大奥女血斗」を是非、絵画化して下さい。

(大阪K、K生)

岩瀬祥一氏へ。十月号所載のKK通信の件、小生昭和二十九年八月号より最終刊まで蔵して居りますので一応御連絡申し上げます。門田奈子様へ。数次に渉る真摯な記録、大変興味深く拝見致しました。色々暗示を受けた事もありますので、近く禿筆を走らせたいと思っています。(東京練馬区南町三ノ六〇〇六 安藤方、須藤律夫)

月岡映子様。K誌九月号での手記、私はどんなに嬉しく拝見しま

した事か、私の念願の一部が叶えられた程の喜びでした。その後の手記も発表をして戴けたらどんなに嬉しい事でしょう。出来ましたら文通願えませんか。お互に腹藏なき意見の交換を致したいと存じます。アドレスは九月号の読者交歓室にて、(SA生)

三木恵子様、貴方が東京近辺の方でしたら、誌上でも結構です。御連絡下さい。今春、大学卒業したばかりのマゾヒスト

(芳野眉美)

三木恵子様、貴女様の読者通信十月号で拝見致しまして、身内に湧き上る感激を押えきれずペンにとりました。男性マゾヒストにとりましては嬉しく思います。貴女様のお尻の下にして戴くとは想像しただけでも胸が躍ります。毎日常空想しては楽しんで居ります。住所さえ解つておられますれば、今直ぐにでも貴女様のお尻の下に成りに行きますが、残念な事には住所がわかりません。三木恵子様の「おしおき」ならどんな事でも嬉んでありますから、この文が御目にとまりましたならば、何とぞ住所をお知らせ下さい。そして空想を

実現して下さい。様御願います

(阪口 昭)

三木恵子様、九月号及び十月号での貴女の読者通信拝見致しました。貴女は女性で男を組敷くのが御趣味との事、九月号で同僚の妙子さんを組敷きたいと云って居られました。望み通り妙子さんを組敷かれたとの事、小生、全く貴女の実行力に感心致しました。小生など女性の方と近づきたい、女性にいいめられたい等と思いはするものの、思うだけで実行に移すだけの度胸もなく、いつも一人で悶々としている有様です。貴女より強いかわかりませんが、男として余り強い方でもない様です。一度、小生を組敷いて見て下さい。小生は現在大学在学中です。二十一歳で勿論独身です、貴女のお便りあれば旅費に困らぬ限り必ず参ります。嬉しいお便り下さる様お願い申し上げます。(京都市上京区鳥丸通り今出川東入、同志社大学内、植田正雄)

始めて御挨拶いたします、小生はKK誌の昭和二十八年以来の愛読者です。マゾ、七〇%といったところでしょうか。先年の休刊に

は大変がっかりいたしました。再刊されてこんな嬉しいことはありません。今後は絶対に休刊せぬ様をお願い致します。読者の興味と公開の限界との調整については一方ならぬ御苦心のこととは思いますが、限界をあまりに考慮する結果、市販の娯楽雑誌と何ら変りないような型になってしまつては大変です。毎月何か特集のような型で編集を企画されては如何ですか。それから雑駁な駄文ですが原稿を同封いたしました。さきほどの公開の限界と興味とを考へて、まずこのあたりと見当をつけたのですが、適当でない部分については適宜削除、改訂して頂きたいと思ひます。何しろ一晩の作品ですから誤字、脱字も多いと思いますが、宜しくお願い致します。

(大阪 旭森 薫)

私は奇クを良き友として心の燈として生きて来ました。既に三年の間、奇クを手にするや一番に読者交歓室を見て、同志はいないかとそれ許りが楽しみとなつて居ります。美少年の秘密以来、六尺禪愛用者が沢山あるので意を強くして居ります。私も断然六尺禪愛用者です、又マゾでもあり緊縛され

る事を望んで居ります。奴隷として私を弄んで恥しい目に会わして下さる方を、終生の願として探して居ります。近く会合の出来る方は左記までお手紙下さい。(豊橋市船渡局止 比良沢)

○ サジスチン鷹野めぐみ様、十月号の貴文、興味深く拝見致しました。同じ東京の屋根の下、一度お会いして貴意を得たく存じます。当方二十七歳、中肉中背の青年です。(渋谷区上通二ノ六六 牧岡方山口文吾)

○ 私は女斗美ファンです。貴誌の永らくの読者ですが、最近余り私の好きな記事がないので淋しく思っております。勿論、人々の趣味は色々ですので編集部は御苦労の事と存じます。女斗美といっても、女相撲以外のものは余り興味がありません。女相撲は明治のはじめに禁止されて以来、本当の美しい裸体の斗いはなくなつて、私も生まれてからそんなものは見たことはありませんが、女相撲の記事を異常な熱意を以てあつめています。貴誌からのスクラップも随分たまりました。今後、もっと提供して戴きたいものです。読売

新聞が一―二年前、トップのリンクエスト写真及び北九州の女場所を出しましたが、あれは本当はランニングシャツを着てとるので、記者達が特に頼んで裸になつてもらった演出ときいております。それを又、本年冬のキングが、ルポルタージュで出しましたが、どうもショウ的要素の多いものは面白くありませんし、パンツだのランニングシャツだというのは閉口です。近くは大阪のOSミュージックで武智鉄二が「唐相撲」をモードに使つてやりましたが、これもいであちはツンパで面白くありませんでした。別に本物の輝を締めてもかまわないと思うのですが、三十年三月号の貴誌に畔亭氏の娘相撲の戯画がありましたが中々かわいらしいもので愛玩しています。読者通信をみますと相撲ファンは中々多い様ですが、実際写真などは中々とれません。私も若い頃、お恥かしい事ながらデッサンを習つていた事で、モデルさんが中々云うことをきいてくれない事、身にしみております。(普通の自然なポーズでも)まして輝をしめてとつ組むなどいうことは中々モデルさんには要求出来ませんし、二人要るわけで面倒です結局絵をかくし

☆編集だより☆

○先月号の編集だよりにて予告した分の中、原稿輻輳のため大分掲載出来なくなった事を御報告少々お詫びしておきます。

○其の他、原忠正氏の「マゾヒズム芸術時評」の原稿が到着しておりながら誌幅の都合で本号には掲載出来ませんでした。

○読者通信は最近ぼつぼつ増加してまいりました。極力掲載するようにつとめておりますが、住所氏名を発表してもいふと云う方の中

でも文面に不穏当な字句を含むものは残念ながら没としました。活字になるということと前提として通信をお書き下さるよう投稿者の方へお願いいたします。

○相変らず、自分の好みのものを多くしてほしい、という要求が絶えません。只今編集部の手元には、あらゆる傾向の原稿が準備されておりますので、狭い誌面ながらいろいろな種類のものを盛沢山にしてゆきたいと願っています。従

かないわけですが貴誌の画家でも又は読者の面心のある方でも、何か面白いものを描いて戴けませんか。娘相撲四十八手などはいかが

つて一方に片寄らないように努力しておりますため、お好みのものが少いという御苦情については何卒御辛抱願いたいものだと思います。

○口絵写真については、種々の制約のため、所期のとりの企画が出来かねていますが、分譲用として別に作成しておりますから、目錄によつて御承知の上、御申込下さる様に願います。今後の新作品は「特報」として御案内する予定になっております。

○緊縛フォトをはじめとする写真のアイデアに奇抜なものをお寄せ下さる方が多く、大変喜んでおります。美貌のモデル嬢の協力を得て、傑作をものしたいと考えています。アイデアの中、皆さまの御参考になるようなものは、誌上へ御紹介しましょう。

○フォトのモデル志望の女性の中には、一回かつきり報酬五万円というのがありました。如何に美貌でも、一寸手が出ませんね。

でしうか、そんな面帖でも出して下されば面白いのですけれども。一―二年前、或る小型誌の色彩口絵に女相撲四十八手が出ました

が、筆者IS氏はデッサンのしつかりした人であるにもかゝらず、画が余り小さくてダメでした。記事の方では土俵四股平氏は健在ですか。京都の方の様ですが、私も京都の近くに住んでいますので（滋賀県）なつかしく思っております。私の女相撲のスクラップの半分位は貴誌のものです。まだ面白いいものを提供して下さる事と楽しんでいきます。女プロレスは現実には見られますがあまり面白くないものです。どうもいであちが禪をきりつと締めこんだ姿でないとつまりません。相撲というものは男がとるより女がとった方が余程妥当なスポーツの様に思うのですが、そうではないでしょうか。終りに今後共、貴誌を拜見する者として、益々御活躍を祈ります。

（滋賀 N生）

十二月号巻頭の新着フォト紹介は良かったと思います。私は女尊男卑と云われている外国の（特にアメリカ）女の責め写真、縛り写真が好きで、その時、私のサディスティクの血はたぎるのです。それで外国文献分譲品を注文すべく目下貯金中ですが、東京の市ヶ谷生様御交際をお願いしたいと思いま

す。私も奴隷志望のマゾ女を求めているのです。そして読者通信を讀むたびにがっかりするので、貴方にマゾ女をみつけない方法でもありませんか、私については七月号の読者通信の奥田生とある一文を讀んで下さい。貴方と同じ号に通信が載ったのも何かの因縁ではないでしょうか。あなたは市ヶ谷にお住いですか、私は時々市ヶ谷を散歩するのです。ひとつ我々で奇巧の東京友の会をつくりませんか、京都の益田愛子さん、私があなたを責めてあげたいのですがいかがですか。京都と東京、一寸遠すぎますが無理でしょうか。でも私は貴女を縛りたいのです。せめて文通だけでもしたいと思えます。岸本青柳様の「和装女の縛り責め展覧会」いいですね。開催が実現することを切望します。

（東京 奥田生）

沼氏の「家畜人ヤプー」を讀んで非常に感激し、今から来月号の発展が期待されます。これに「黄色オラミの誕生」と、スケールの大きな作品が続々と出てきたことは、我々奇巧の行方に大きな信頼を寄せられるというものです。さて読者通信に依ると、男性マゾと

男性サドとの組合せに関心のある方が案外いられますので、マゾである私も、これに材を採り小説を書き初めました。いわゆる太陽族と呼ばれる十八歳より二十二、三歳位の青年の無軌道な社会をとりあげ、その中でもだえるマゾ青年の心理を描いてゆきたいと思っております。それから先月号で連絡先を発表致しましたが、番地が違っていました。（下山手通四ノ二六 錦薫）

毎月号の読者通信欄を発見しているのですが、男性のマゾヒストの真剣な心からの願いがあつたのに女王様方からは少しも奴隷にしていやるといわれないのは、どうしてでしょうか。三木恵子様、マゾヒストの夢を叶えて下さいます様、重ねて御願い致します。是非お手紙を下さい。（東京江戸川区東船堀町四七八 小龍惣太郎）

八月号の佐賀の淀川様、並びに十月号のF、A様。かねがね同好の士のお便りを待ちあぐんでいました。あなたが、あなたのような六尺ふんどし愛好者がいられることを知って、大変嬉しく思っています。唯ぼくはサドの方で、むしろ全裸や

六尺ふんどし一本の男を縛って、思う存分なぶりものにしたい欲望の方が多いのです。その点、貴兄とは丁度あいますね、ぼくはアパートに一人で住んでいます。勤めから帰るといつも六尺ふんどし一本です。風呂に行くにも晒の腹巻に六尺ふんどし一本で堂々と歩きます。あなたは六尺ふんどしの締め方はどういうふうにしますか、後の結びめがズボンの上にふくれますので、ぼくは上に腹巻をしてカバーします。くわしいことは又いたします。（六尺ふんどし愛用生）

サド趣味の御婦人から厳しい御命令を受け、使役されたいと願望する二十八歳の青年です。読者通信に同趣味の御婦人の方も少からず居られるので、文通期待致して居ります。（世田谷区太子堂町四二八、吉田屋方、飯島洋一）

その後いかがおすごしですか。又、御近況を御知らせ下さい。先日おたよりを出しましたが、戻ってきましたのです。（清果）

十二月号では「黄色オラミ」を楽しく読みました。今後の奇巧の

編集内容を出来れば二十九年一月号位の記事内容で編集して下さい。度々書く様ですが、小坂多美枝、沼田扶二世、両氏の作品の発表の日を心待ちに待っています。復刊以前の様に「告白と手記」「責の小説」の特集を出されてはどうですか。又、通巻第百号刊行記念特集のプランの予定がありますか。(大阪T・A生)

十二月号拝見しました。黒や紺のタイト、スカートの中年婦人が着物姿に変わったこの頃です。私の好きな冬がやって来ました。今月号は越野さんの告白文、嬉しく胸を高鳴せて読みました。私もやはり何か書こうと文をひねっています。あぶみ様の女の随筆お腰についてこんな文章が誌上に発表されたらと切望しています。北原純子さんの女性の下穿の研究、ぜひお風呂屋さんや、物干での結果を発表して下さい。貴女はフンドシに興味を持ってもらえるので、お腰には興味は余りないと思います。が、三十歳から四十五、歳位の女の方で、私達のアブノーマルを理解して下さい。人はいないかと、日夜、イメージを浮かべています。(兵庫 F・T生)

○ 山口幸一氏、青葉榎一氏の愛読者です、御住所御知せ頂ければ幸いです。十月号、F・A生様に連絡致します。「輝美」のフォト差上げますから御便り下さい。(宇都宮市旭町一ノ三五〇八福田忠夫)

○ 本日、仕事中の大宮にて十月号を入手致しました。私は特に貴社との直接購入の手段はとっていませんが、時々古本屋に注意し、発見次第購入しております。さて皆様の御努力に敬意を表し、併せて一筆、私は自分ではマゾヒストのつもりでおりますが、特にそのためのプレイを楽しく且つ又、羨望を感じつゝ愛読致しております。そこで一つのレジスタンス、というわけではありませんが、一つの作品を投稿してみようつもりです。これは他愛のない夢なのかもしれません。別便にてお送り致します。故、御笑読御批判下さいませ。その作品によって、私の夢のいささかなりと御判断下さい。作品の構想は映画シナリオにして、一つの話の大体三巻程度(上映時間三十分)にまとめ、一人の女を中心し、いくつかの話のオムニバム・シリーズにしようと思つて居ります。

す。ですから、一つの話はそれなりに完結はしていますが、作品としては、未完です。特にシナリオという型式をとったのは、私がある意味での映画関係の仕事に直接たずさわっている関係もあります。が他にシナリオの型式が一つのフアンタジア(視覚に訴える点等)であり、書いていても自ら充分楽しめる点にあります。それに旧号の何号でしたかに「体操倉庫」なるシナリオの一部が掲載された事がありますね。KK通信の全文を読んでいないのでよくわかりませんが、しかし、あれから推測される事は、作者には大変申し訳ありませんが決してシナリオは云い得ないものなのです。例えば内容的なものとは別として、型式としてシンナムパーが、十いくつにわけられていますが、あれは正式に書けば、シンナムパーは一つだけなのです。同じ倉庫の中をいくつのシーンにわけける事はシナリオ作法上あり得ない事なのです。そんな事からシナリオとは?と、ちよつと大それた気分もあり、私の夢を盛ったシナリオにしてみたいのです。特に三巻のシリーズにしたのは、応募規定の三十枚以内という点からです。映画の一卷は四〇

○ 字詰約十枚です。そんなわけでこれから自らの楽しみのためにも次々と書いてみるつもりです。そしてそのシナリオを実際に映画にしてみたら——などと夢はとんでいます。撮影の事に関しては職業上自信もありますし、現在流行のハミリの撮影機も持っていますので、同好の方がいらっしゃいましたら一緒にやってみたいと思つています。そのうち出来たら御送り致します。私のイメージ「同好和服マニア会」の逸名居士様のような集会上で試写会などやりましたら私の夢も最高潮に盛り上がる事でしょう。では近日中、別便にて原稿御送り致します。(丘与志夫)

○ 東京在住の方をはじめ地方の読者の方達からも、多くの御便りを御寄せ下さいましたことを御礼申し上げます。できるだけ御返事は差上げましたが、二、三洩れた御方に対しては、誌上で失礼を御詫び申し上げます。拙作に期待を持たれる方の意外にも多くあるのを知り、それに励まれて、近いうちに又本誌に掲載させて戴きたいと思つて居ります。また私のM研究に對して、種々の資料、実例等を提供して下さいました方々に対して

厚く御礼申し上げます。今後共、健全な楽しい方向にこの道を進んで行きたいと思ひます。(中野区駅前通り一四赤坂正三方鬼山絢策)

寒くなりました。街を行く女達は、さまざまなセーターを纏いコートや羽織る。色彩に飾られて美しくはなるけれど、肌が見れなくなつたのは淋しいことです。しかしそれだけに、衣裳を挽ぎとつた時の温みをもつ白さ、寒さに震えつゝ乳房の紅み等は又格別です。愚作「潰滅の前夜」を掲載して戴き、又、この欄でもいろいろと御批評を賜り、有難く感謝申し上げます。あれを書いたのは二年前の暑い真中で、私も鬱積していたサデイズムを発散させた最初のものです。東京のKH生氏に指摘されたように、伶子が雌としての機能を喜んで發揮させる。即ち、六太の最良の家畜になつて了う描写も、水洗という状も私のプロットの中心にあつたのですが、書き慣れぬ筆は冗文に走り、氣付いた時は枚数に達して居り、尻切れとんぼな纏りの無い結末にして了つた次第です。いずれ又、許されば続篇なり、別なストーリーで愚作を弄してみたい氣持です。ただ、私の好

みがどれだけ編集や読者の方々に許されるものかと懸念していたのですが同好の方々も多く居られ批判を頂き意を強した次第です。併し、同時掲載された高村民子氏の被縛症を読みまして、その文章のニューアンス、表現の研実さに到底及ばぬことを知りました。だが、やっぱり *so happy way* で進むのが、この道なのだと思ひを励まして居ります。(土路草一)

三木恵子様、九月号、十月号と読者通信を通じて、貴女様の息づまるような御体験に、私はもう宙にも昇る胸のときめきを感じて何度も拝読致しました。私は当年二十歳の青年で、現在は地方より東都の大学に通学している者です。私は案外派手なタイプにみられて居りますが、その反面は孤独で温しい性質です。幼少の頃より私は少し変つていて、現在において大分マゾヒストの傾向が現われて参りました。以前から私は、年上の女の方から思う存分な目にあわせて戴きたいと望んで居りました。私は貴女様の記事を拝見させて戴きましてから、もし貴女様が私のお姉さまか女王様になつて戴けたらどんなに嬉しいか知れません。

そして貴女様に身動きも出来ない程組敷かれて、お尻の下にして戴けたら……と何時も思つて居ります。私は貴女様のお尻の下にうごめく奴隷たる事を心から願つて居ります。どうか女王様に忠誠を誓ひ、忠実にお仕え致しますからお願い下る様御願ひ致します。貴女様にお願ひ出来る事を切に祈つて止みません。(Y・H生)

奇ク復刊を知り、大変意義深い資料として喜ぶと共に、再び中絶しない様に協力を惜しまない者です。十二月を見て特に復刊以前と比べて、内容的に随分時代の移り変りを知ることが出来ました。小生の最も興味を抱いた点は、フンドシ讚美論が急カーブで増えていること、しかも女性の方達のフンドシ愛用者が、その経験や感覚を卒直に發表されて「フンドシこそ下ばきとして絶好のもの」と呼びかけている事です。かつてブロースが忽ちのうちに全国にひろがり、続いてパンティ、ブリーフ、ショーツと、益々フンドシに近づいて居る現状をみると、フンドシ時代の到来もさほど遠くないように思ひます。今どこかの製造元で、色物のフンドシをデパートに

並べたら、忽ち飛ぶ売行きを示すのではないだろうか。小生も勿論フンドシを常時締めて居ます。赤い巾の狭い短いモッコフンドシを締めて居ますが、全く皆さんの云われる通り、身も心もキリツとひきしまります。写真ページに、フンドシの写真を見せて頂きたい。また、現在の下ばき(六尺フンドシから水泳フンドシまでの各種類腰巻など)の全種類を写真に見せて頂きたい。松原三千代さん池田ふみ子さん、若柳キミコさん貴重な御意見として今後も御健筆を期待します。(Z生)

東京を中心とする奇クの読者クラブを組織する有志の方はありませんか、同好の方は誌上に連絡して下さい。趣味の範囲は奇クを同じにしましょう。

(千葉 Y・I生)

門田奈子様、洋子へのおたよりほんとうに有難うございました。私たち異常の人生を歩んで居るのでしょうか。けれど、こういう異常心理は多少は誰でも持つて居るものと確信しますわ、フロイドの説にもこの事は肯定されているのですもの。お手紙いただいてから

洋子は奈子様の手記をあらためて拝見させていただきました。お姉様のお心持ほんとに解りますわ、中でも腹部への加虐が一番私の身近に感ぜられました。奈子様は私よりもヴアラエターに富んで居られるようです。いれずみ、着衣、A感覚等々、私など足下にも及びませんわ。私こそほんとに一つの事しか考えられないんです。ただウエストを人より細くしたい、これの一語で充分です。そしてそのための苦しさは甘受するというだけなんです。でもこのためなら、少々の苦痛は我慢出来る自信があります。四十五センチのバンドを一ヶ月肌にし通しにしたりするんです。五十センチのストラップスなら洋子はもう平気で人前に出られる様になりました。巾の広いバンドを力一ぱい締めておきます。だから、下のニッパと一緒になつて、それはそれはきつくしまるんです。お友達が「洋子さんのウエスト手がまわりそう」なんて云います。そうやって一日すぎで、入浴の時（五日に一回位）裸になつて自分のウエストがどのくらい細いかわかるのがとても楽しみなんです。ウエストのまわりにぐるりと赤いあとが巾広くついて五年も

たったんですもの、そこだけ肉がけずり取られた様な感じにくびれています。裸のままなら四十九センチです。きつと内臓がそこを境に上下にうまく別れているのかと思ひます。苦痛と快感は同時に成立するものね、奈子様もそうお感じの事と思います。私の場合も快感が先ですわ。ウエストを締める何とも云えない心持よさ、身がしまるようになるのです。この快感があまり大きいので反対に悪いことでもしているような罪悪感に以前は陥りましたが、奇巧を知つた今は何とも思いませんし、私のような女性には案外多いんじゃないかと思ひます。美容体操なんてまだるつくくてだめね。一番細くしめるのは巾のせまい皮バンドに穴をずつとあけて、ウエストを一たんきつく手でしめて、こんどは適当な所に棒を渡してそれにバンドの先をむすび、全身をつるしてウエストをしめるんです。これは奇巧で知つたのですが、すぐきつくしまります。手の指がまわるようになりす。穴までの長さをはかれば何センチかすぐわかつて面白いわ。私は、はじめは四十センチだったけど、今はウエストが三十五センチまでこの方法だと細く

なります。でも痛いので一時間位ですけれど、これなら蜂と同じようでもちぎれそうです。奈子様ためしてごらんなさいな。そうそう私がしたバンド、もしよろしかったらお送り致しますわ、平常は四十五センチのウエストです。これもやり始めは五十一センチぐらいしか出来ませんでした。今では平気。奈子様とお友達になれたらうれしいわ。勿論、奇巧の上で、その上、私と同じような事をしていただけたならなおうれしゆございますわ。では、奈子様、私の願いをおきき入れ下さいね。おたより下さい。（栃木 蜷間洋子）

増頁となつた読者通信には、揮愛好の方の発言の多くなつたのが目立つのにひきかえ、コルセットやバンドマニアの発言は非常に少く、われわれ愛好者には大変さびしく思ひます。これは、この種マニアが人一倍内気な人たちばかりだろうと思うのですが、全国には奇巧の愛読者でコルセットやメンスパンド、或はニッパなど、秘誰よりもそれを愛していると、秘かに自負している人達が多く居られると思うのです。いまや下着ブームといわれるときです。マニア

ならずとも並々ならぬ関心を持つようになつた以上、マニアたるものボツサリしてはおられません。どうか愛好者の方々、どしどしこの通信に名乗りを上げて、お互いの研究を発表しようではありませんか。こう申上げる以上、私もとりあえず切抜きの中から皆様に御紹介するように別稿を編集部宛送りました。御参考となれば、また続けて御紹介しようと思ひます。色々のコルセットを集めたり、ニッパでウエストを思い切り締めつけて貰いたい女性の方は、キツト沢山おいでになると思ひます。われわれは、貴女方の貴重な体験や御希望を凡て聞かせて頂くことを待ち望んでいます。又、少しで私どもでお役に立つことは、喜んでいたいと思ひます。一柳さん御姉妹や蜷間洋子さんのように、どうか御意見或はお便りを発表して戴き、御友達として色々御指導戴くことを願つてやみません。（阿川 準）

○ 女王森山美歌様にあこがれる二十八歳のマゾヒストです。一度でよいから女王様に心いくまで可愛がつて戴きたいと日夜願つていまズロース一枚にされ、人間馬や人

間犬としての調教を受けたり、荒縄で縛られて猿轡をされ、えび責股間縛り、逆さ吊り等、色々責めて戴きたい思います。(名古屋中局杉浦)

多過ぎる制約に耐えての刊行に心から敬意を表し、遙かに声援を送ります。小生にとって本号の珠玉的双璧と思われた作品は、壬生すみ子作「寄生虫」の(二)と東一郎氏の「探偵小説新考」でした。前者は処女の肉体を邪しまな実験のために生殖培養の器として使うという悪魔的な着想と「妾」のYに対する奇妙な母性愛を通じて示される哲三郎への変った思慕が、極めて冷却で緻密な筆致で迫って来ます。しかし結末が全員の死という破局であることは、それがアブノーマルの一般的通例であるにしても残念であると思います。せめて妾と一連のYの世代と呪いの家くらいは残して頂きたかったと思います。尤もこの方が余程残酷で小生の好みに合致するためかも知れませんが、後者は相当の頁数を得て余す処なく効果を挙げていきます。小生の如く人生も未だ日浅く読書も限られた方向の限られた数量の者からは、これだけのヴァラ

エティを持ち要領よく纏められたレポートは、どれ程の努力の結晶が想像が付きませんが、小生の好みのシーンを次々に示して下さった東氏の御労作に謝意を表します。今回で完了の模様ですが、機会を得て続篇を出されるよう希って止みません。其の他の記事では、藤木氏の「サジイズム・シーン詳察」がなかなか詳しい観察で敬服します。小生も見たいものがありました。が、最初の「魔の花嫁衣裳」だけは探して見に行きましよう。岩瀬氏のコンクール、小生は妾婦、準女王に職業婦人と投票致します。如何でしょうか。「捨犬」何とな青葉氏の夢に惹かれるようです。明らかに虚構ならば破局でないという纏めが夢として必要だと思えます。男性同志でも充分にサディスティックな雰囲気作品ですから、青葉氏のものも楽しく拝読しています。大谷氏「なめくじ」沼氏「黒女皇」も別の面白味がありました。藤山秀緒氏が秀雄氏と変ったのでしようか。がそれはとにかく、この作品を絵物語とするならば、かつての「女囚処刑之図」に匹敵する傑作が生まれることは必至だと思います。都築氏、瀧氏、北原氏などの麗筆を期待し

たいのですが如何でしょう。読者通信はいつもながら楽しいものです。難解なものや奇抜なものがありますが、何にしても真実の結晶ですから、読みごたえ(?)があります。一六四頁、東京S・K氏の御意見、全然同感です。一六五頁S・Y氏、三木恵子さん、一六九頁、大阪西成生氏、一七六頁、岐男氏には、事情さえ許せば意見の交換をお願いしたいと思えます。一七三頁、東京E氏の「腕」狂崇も興味深く拝読した一つですが、その後の「腕責め」の報告を発表して頂けませんか。腕責めのマゾの若く美しい女性、E氏の前に現われますよう祈っています。十月月号に就いての感想を記してみました。制約の上とはいえ巻頭口絵の淋しさは覆えません。勿論他の大衆誌には比較するも野暮な話ですが、昔日の倅無しと云っても過ぎ言とは云えないでしょう。グラビヤの米誌の緊縛は、アメリカ風の「海老縛り」を思わせますが「引廻し」は残念でした。囚われ人はもっと前屈みになり、顔だけをぐっと仰向けに引かれるようにして縛られなければならず、捕手の方は縄尻を故意に引き、かつ緩めながら手にした鞭か棒で打ちつゝ追

い立てるのでなければ殆んど意味がありません。一頁か二頁しか載らないフォートですから、許される限りの内容を持ったものを載せて頂きたいと思えます。諸氏の御健闘を祈ります。(東京 近藤一)

以前からサドに興味を持つものです。戦時中、高専時代は古い雑誌ですが、犯罪科学というのを手に入れた事もあります。貴誌十月号探偵小説新考の中「島原絵巻」など、すでに犯罪科学に載っているものでも、戦後では風俗科学誌にも載っていた様です。戦後では色々類似誌もあつた様ですが、皆消滅した様で専ら二十八年からKを集めて居ります。読者の中にも同好の士が多い様で心強く思っています。同好会など有志を語って作りたいもの、SK氏の同好会など共感を呼びます。又MI子氏の如きマゾ女性とも交りたいもの。分譲フォートも之と思うものは集めています。現在の取締り基準からいって無理と思うのですが、特に秘蔵版(P記号)など、惜しいものがあり、何等かの方法でカッとなしに出来る様考えて戴きたいものです。この点従前のものゝ中で迫力に於て勝るものゝある様

にみたのは、ひがめか。縛りマニ
アで、こう考えるのは私のみでな
いと存じます。十二月号を手にし
て、大分内容が充実して来た様に
思います。今後の発展を期待する
ものです。(兵庫 T・T生)

◎売切品について◎

本誌で取扱つておりました分
譲品や本誌の旧号の中、売切に
なりましたものについて、自分
だけなんとか探して送つてくれ
という御注文が多数参ります
売切品は、いくら代金を沢山頂
きましても、どうも都合がつか
かねます故どうかお許し願いま
す。

◎御照会について◎

回答を求められる御照会は必
ず返信料の御封入をお願いします。
雑誌の中へ返事を入れてくれと
の御要求は、郵便法によつて出
来かねます故、御承知下さい。

◎文通幹旋について◎

只今本誌では、文通の幹旋は
いたしておりません。但し連絡
場所を明記の通信は読者交歓室
欄へ掲載いたします。

初めてお便り致します。奇巧は
古本屋の店頭で並んでいれば、そ
の都度のがさず買うのですが、な
かなか手に入らないのは閉口し
ています。どの記事も面白く拝見
しています。ただ映画の話など
はつまらないと思います。三木恵
子様、貴女の九、十月号のお便り
拝見し、是非文通をお願いしたく
なりました。私は貴女のお尻の下
にあぐらことこそ私の本望です。
貴女は例のナイロンのパンティで
私の首の上に誇り、太股で私の顔
を絞めつけます。私の顔は幸福に
笑み崩れます。笑った顔の上に貴
女はウンとばかりお尻をのせます
。すると私は息苦しさにかきか
けら、熱い息を貴女に吐きかける
でしょう。是非そうされたいもの
です。私は二十二歳の会社員です。
お便りを下されば幸いです。もし
東京附近にいらつしやるなら、実
際にお目にもかゝれると思うので
すが、貴女のビデエより。(東京
品川大井森下局止鈴木信夫)

十二月号を拝見して、嬉しく楽
しく真に愉快の感に打たれたのは
瀧麗子さんの二頁続きの「瀧れい
子素描集」をはじめ藤見郁氏の「
文学に現われた責めの描写」の四

つの挿画、鳴山能平氏の「牢獄の
花嫁」の文と画などである。特に
拙作の「和装女の縛り責め展覧会
開催を提唱」の挿画に敬意と謝意
を表明致します。由来私は和服を
着た女の縛りに頗る趣味を持つて
居り、その研究と実験を数十年来
続けています。関係から、大いに関心
を寄せています。而して各方面か
ら種々の文献を蒐集して居ますの
で、毎月来る奇巧は一字も余す所
なく完全に読破しています。そし
て私の研究と実験の重要参考資料
としています。此点改めて寄稿家
諸兄に感謝と敬意を献げて居りま
す。責めの実験のシーズンは毎年
秋から明年の晩春ごろは、最も気
候的にも精神的にも肉体的にも適
合していると思われまますので、茲
暫くはウンと責めの実験に努めた
いと存じています。各位の御健康
を御祈り致します。

(和歌山 岸本青柳)

東京の谷津君へ。読者通信にて
貴君のお便りを拝見致しました。
小生の作品に興味をお持ちの事
由、なつかしく思います。小生も
少年時代貴君と全く同じ様な孤独
の悲しみを味わい続け、遂に取りか
えしのつかぬ少年時代を、遠い彼

方に置き去りにしてしまつたから
です。貴君は私の過去の生きた姿
の様に思います。懐しい少年時は
二度と来るものではありません。
私は貴君の気持を思い、私の少年
時代の生活を顧み、将来懐し
い思い出となる事を経験する事
をおすすめします。今後共奇巧を愛
読され、心の昇華を求められると
共に、小生にお便りを下さらん事
を希望します。その中お会い出来
る日を待つて居りますが、その時
は貴君と色々お話ししたいと思
います。(山口幸一)

最近誌上に於て、オシメ或はオ
シメカバの記事を屢々拝見致し
とても興味深く読ませていただ
いております。しかしその何れもが
男性ばかりで、女性の発言が皆無
といった状態なのを残念に思いま
す。女性の中に於て揮愛用の方が
ありますのに、オシメ愛用という
趣味があつても別に不思議はない
と存じます。オシメという幼児
専用の物、又何かし汚らしい
ものゝように考えられ勝ちですが
誰れでも一度はこれの御世話にな
つたのではないでしようか。幼い
頃、無理矢理にオシメを当てられ
たりしたものです。然しこゝでは

生理作用のみでなく、精神的な苦痛といったものが大きな比重を加えています。浴衣地の布を股間に当てがっている事は、決して快いものではないかもしれません。その事は幼時に於てさえ見られる現象です。オシメを取外された子供が如何に生気をとり戻すか？ オシメをつけていると思っただけでも羞恥を覚え、他人より劣っているという意識に支配されます。夜尿症とか小用が近い場合、万一の事を思つてオシメを当てるものです。オシメは昔と今と変化はないと思ひます。オシメカバーは種々あると思ひます。海水着の様なもので股の所がボタン或はチャックで開閉出来る様にしたもの、又最近「夜尿帯」と称される夜尿の男女の方にポリエチレン製のオシメが出来ていますが、排尿に依つて夜尿を濡す心配がありませんが、あまり風流なものではありません。色々つまらぬことを書いて来ましたが、読者の中にオシメに興味を有する女性の方、どしどし意見を發表して下さい。又わたしと同様、夜尿に悩まされる方（女性の方のみ）と文通致したいと存じます。この夢を叶えて下さる様期待致しております。（滋賀 森英美）

私はとうとう勤務先の会社で、三角クラブというグループをつくりました。女ばかり十八人のうち十人がメンバーになっていきます。全部三角フンドシ着用者で、毎月一回私の家集つて、新しいデザインや色彩の新製品をつけて、私たちだけのさうやかなフアッシュンショウをやり、研究や体験談を話し合うのです。はじめはほんの数人でしたが、この秋の会社の旅行で温泉へいったとき、私たちはこっそり相談して、この数人が揃いの青色の思い切り短い三角フンドシをしめて行き、温泉プールで一斉にフンドシ一本になって泳ぎました。驚きが感嘆の声に変わりプールから上つて揃いの白いフンドシにとりかえた時には、メンバーが十人になってグループが出来上つたのです。第一回の集りで、はじめにフンドシをしめた人達から一日中しめていると喰いこんで困ると声がありました。私は早速十二月号誌上の松原さまのデルタパット（私はマスクと名づけていました）を使用することをすゝめしました。私のパットは入浴用に売りに出されているスポンジを薄く小さく卵形に切つて、フンドシに簡

単に縫いとめておきます。たしかに松原さまのおつしやるとおり実用的で、どんな恰好をしても不体裁にならず、その上、女の魅力満点です。では最後に池田ふみ子さまよろしく御教示下さいませ。（岐阜 若柳キミコ）

○ 号一号と軌道にのつて参りました奇クも、十二月号は休刊以前の寄稿者の執筆と相まつて、パラエティに富んでおりました。久しぶりの龍れい子さんのデッサン、しかし往年の頃とは異り何か物足りないものはありました。淡美一郎氏の御活躍も目を見張るものがあります。新潟の芦田千枝子さんの実話は本文に劣らずはっと胸を打つものがあります。奇クの如き

特殊な分野の専門誌が、毎日刊行を続けてゆくことの出来るのも、一重に読者の人がしつかりしているからでしょう。私も当地の古本屋にて復刊第三号を知つたのです。が、近藤一氏の御提案には私も賛成致します。編集後記を拝見して感じたことは、本文三百頁の口絵に姿を現わす時もそう遠くはないだろうと書かれてありましたが、矢張無理をしてそれを早急に望むよりは現状でよいですから、内容の充実を図りしつかりとした文献中心誌として伸びてゆかれんことを望む次第です。（東一郎）

○ 早速、代理部分譲品目録お送り下さいまして有難うございました

北原純子 賣画傑作選
△ハートの的△女体洗滌室△
大中判印画紙焼付
二枚一組 三百円
△緊縛ヌード十六ポーズ△
大中判印画紙焼付
二枚一組 三百円
（以上、二組にて、五百円）
△女学生の羞恥責め△
大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円
外国文献 一分譲
本誌九月号並に十月号、又は代理部分譲品総目録（八円切手封入の上御申込下さればお送りします）に發表してあります。
「血紅」「凄惨」
女体切腹フォト
代理部分譲品総目録に發表してあります。

申込たいものは山程ありますが只今の所、懐ぐわいと相談して別記のように数点お申込いたしますから折返し御送品下さるようお願い申し上げます。私はとりたてゝ生活上には、どうということはないのですが、蒐集癖と申しますか、いろ／＼と変ったものを集めて、南向きの日当りのよい窓ぎわで、それらを眺めるといった状況が大好きなのです。今まで、大分いろ／＼と集めました、戦災で大部分なくしてしまひ、戦後集めたもので、今では石油箱で二箱ぐらいたまっています。以前は縛つたものであったり雑誌の挿絵の切り抜きでも何んでも集めたのです、只今では、専ら印画紙に焼付けたものばかりを手製のアルバムにビッシリ貼っています。私自身がモデルを使って撮影したのも相当あります。しかし、不思議なもので、自分で撮ったものは、それ

が如何に美しい女でうまく写っていても余り感興を催しません。数年前から金にあかして、いろ／＼の職業の女、といつても殆ど素人の人ばかりですが、モデルになつて貰つて、少い人では一枚、多い人では数十枚の写真を撮りました一度、私のコレクション、という程の立派なものではありませんがをお見せして、若し、御使用出来るものがありますれば、ネガは全部揃つておりますから、お貸ししてもよいと思つています。それから、今後、代理部の分譲品として新しく作成される際にお願ひしたいことは、肉づきのよい娘さんの肌に、ビツタリと身についた各種の下着を用いて、その下着の種類に応じた責め方法や縛り方をしてほしいことです。私も心掛けて少し下着類も準備したのですが、なしにしろ女性専用のものでずから置き場所にも困り、まだ十分出来上

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

ハ—潰滅の前夜—より

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円 (送共)

つていません。私の今までのものは大部分、ヌードのものばかりです。いろ／＼と自分勝手なことばかり申し上げましたが、今後ともよろしくお願いいたします。

(京都 三条生)

○ 小生、異性緊縛に強い執著を持つてゐるものです。次に奇抜なアイデアを思いつくまゝ書いてみます。若し誌上発表の場合は、悪いところは適当に削つて下さつて結構です。名前は大家生として、住所は発表せぬ様願ひします。尚、同好の女性があれば、その時に限り連絡願ひします。先ず第一の方法は(海水帽メンス縛り責め)と題するもので、裸体になつた女性を私流の緊縛方法で高手小手に縛り上げます。(この際、その女性の両手にはゴム性の氷囊八五指の自由を束縛するため、又は炊事用のゴム手袋か手術用の薄いゴム手袋をつけさせます。)三角布ゴムの露出したバンドを着用させ、口には猿ぐつわ(手拭を差込み、その上より縄又は紐にて程より縛り、更にバンドの掛替ゴムをその上に覆います。その時、掛替ゴムには三つづつの穴がありますから、その穴へ紐かゴム紐を通し編み上げる

如く後頭部にて結びます。)さて次にゴム製の婦人用海水帽(これはビニール製だとビツタリとした感じが出ないのでゴム製を指定します。)を頭部に被せ、黒髪を全部帽子の中へ隠します。目隠しにはやはり掛替ゴムを使用します。それには綿止めとして巾十糎か二十糎程のテープになつた部分がありますから、それと他の部分とを拡げる様にして持ち、テープの所が後へ他の広い部分が目に当る様にしてはめます。でなければ猿ぐつわの如く、穴の部分に紐を通し編み上げてする方法もあり、これで大体整いました。が、その後のこの緊縛女性への拷問は各人の好み次第です。(神戸、大家生)

○ 「奇ク」は休刊前から毎号と云わぬまでも折にふれて愛読して来ました。これ迄人の通信文を楽しみに読んできました。が、思いきつて今後お仲間入りをさせて頂きます。サディストといつてもまだ経験もないのですが、マゾの女性と交際いたしたく思っています。又、フンドシ、浣腸趣味の女性も歓迎します。宛先は「東京都長崎局内目白郵便局止」とし毎月十日から二十日迄に着く様願ひします。十二

◎次号の本誌は十二月下旬発売です

今後毎月下旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々へは出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、中旬頃までに誌代のお送りを願います。

月号の京都、益田愛子様、お便りを頂ければ幸いです。(佐藤守)

我が恋人の如き奇譚クラブの諸兄弟様、御機嫌如何ですか？ うちかつな事、今頃になって、当方よくやく奇クの復刊を知った世にも間抜けな、しかし熱烈なファンです。昨年五月号以来、奇クが巷の書店より姿を消してから、恋人を失ったように灰色にとざされていた胸が、去る十一月三日、文化の日、街頭の露店で奇クの九月号を発見したので。復刊号は、もとより以前の豪華な奇クに及びませんが、けれども僕は此のうすっぺらな奇クは昔の奇クにもまして可愛ゆく可憐でなりません。文化の日、求めた一冊の奇クは僕にとつては天然真珠のように光って目に映じました。でも、変り果てた奇クの姿に思わず涙がこぼれました。殊に、九月号の「応募作品短評」を拝見し、一層暗然としまし

た。こう書いてあったのですもの「締切日まで、到着した懸賞応募作品は左記の十七篇にすぎませんでした。発行部数が以前の何十分の一にも満たない現在ではありますが、嘗て、応募作品数が数百篇の多きに達した事を考え合せて、うたた感慨なきにしもあらずです。がそれにもまして、十七篇を通読しましたところでは、本誌の掲載に耐え得る程度のものが、二篇あるかないか……云々……」僕はこゝを讀んで思わず奇クを閉じて目をとじてしまったのです。恋人奇クよ、御身はさびしかろう、でもどうぞ姿を消してくれ、嵐に吹きとばされないのでくれ、たよりなげな姿！ よろめき乍ら嵐の前に立ちすくむ奇クの姿に、僕は泣けて仕方がありませんでした。僕は切に祈る。再び昔日の豪華なケランたる奇クになる日を。読者諸兄弟様よ、奇クは我等にとって恋人以上の存在です。この恋人

を大いに元気づけてやろうではありませんか。人間誰だって、一篇いゝえ、一篇どころではないんです。書き始めた僕のような明めくらにも、いくらでも書いてゆけます。もとより、思う半分も筆力は伴わないうらみはありますが、情熱と誠意とをもって書いてゆけば、どうにかものになるのではな

初冬を思わせる冷えが続いております。その後また、感胃にて失礼しました。御恵送の十二月号拝見いたしました。通信欄の桜恵之介氏の「前田曙山、女腹切」の挿絵に就いて、少年少女教育講談全集所収のものは「ヒロインが正坐して白装束の肌を寛げ三方の短刀を手にしたところ」であつたと思

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込
みのため、或はその他の用件で
直接発行所を御訪問下さる方が
ありますが、理由の如何を問わ
ず右は固くお断り申し上げます。
必ず郵便にて御申込下さるよ
うお願い致します。

お洩らしになるまいと存じます。
何とか連絡出来ればいいのですが、
以前と事情が変りました故、惜し
いことです。「女体切腹構成案図
譜」御恵送いただき早速拝見いた
しました。何れも時代考証まで申
分なき出来にて画家の御苦心の賜
物と存じ特異な風俗図絵を構成い
たしておられます。表情姿態に就て
は各人の好みもあることゆえ異論
もあるべく存じますが、それによ
く変化あり、まず十分と申す
べく今後同様の御企画ある場合は
史実又は稗史の人物を描出し(例
えば武田勝頼夫人、大島三十郎、
溝口与之、前田節子、喜遊等)以
て歴史的画帖となされば一層意義
深いものと存じます。田谷氏玉稿
の諸例、拙稿の日赤看護婦或は先

般掲載の慰安婦なども好き画題と
存じますが、現代物はやはり遠慮
すべきかと存じます。尙先ごろ
門田奈子氏の手記中に、切腹に就
ての記述がありましたがやゝ抽象
的で甚だ解しがたいものがありま
した。昨年の不破和子氏(いつか
の通信欄のN子氏と同一人か?)
の如き記録は価値があると思いま
す。では、益々御発展を祈りつゝ
取急ぎ一筆まで

△中康弘通△

十二月号の「マゾヒスト・クラ
ブの結成を望む」の記には真に同
感でいきなりこのような過激なも
のを作るには、實際上不可能故、
マゾ撮影会的なものを作つてサ
ド、マゾを取り入れ、次第に会員
相互の間を緊密にするとよいと思
いますが、それには或る程度資金
が必要ではないかと思われまゝ。
先ず読者通信欄からでも結びつき
を作り、奇巧編集部が中枢となつ
て適当な形に集められむ事を望
みます。福岡の池田ふみ子様、岐
阜の若柳キヨコ様、京都の益田愛
子様、お便り下さい。京都の北原
純子様、私は男性ですが、何時で
もモデルになります。因みに私は
学生、二十二歳、色白、中肉中背

なお奇巧社に於ても御入用ならば
お役に立ちたいと思ひます。その
うち私自身の写真真をお送りいた
しましょう。(東京都北区志茂町
三ノ四六九繁山方、園田伸礼)

東京の荒川猛雄様、岐阜の田中
様、東京のSS様、福岡のTO様
谷津様、下関の久野様、T市のA
K様の皆様、奇巧の読者通信でお
便り拝見しました。僕も男の体や
ふんどし姿に興味をもつものでこ
れからもよろしくお願いしたいと
思います。奇巧を読んで僕が一番
うれしいことは、十二月号にこん
なに沢山のソドミア、ふんどし愛
好者が顔をならべたことで、いま
でになかった盛大さです。これを
チャンスとしてぼくたち皆で「ふ
んどし会」を作ろうではありませ
んか、その方法は次のとおりにし
たいのですが、一、誰でも一人読
者通信に住所を発表していただく
二、希望者はみなそこへ通信し、
三、その人がまとめて名簿を作り
ノートに住所氏名をかき、各々、
ふんどしその他のことについて文
章をかき回らんとする。こうすれ
ば遠い地方の人でも、お話しあ
いでき、又写真交かんもできると思
います。如何でしょうか。
(六尺ふんどし愛用生)

復刊以来、毎月確実な発刊を続
けておられますことは私達ファン
にとって全く感謝にたえません。
以前、といつても二年以上も前に
なりますが、本誌が特大号の連続
発行で隆盛だった頃、座談会参加
者の申込を受付けておられ、私も
早速出席希望の旨の御通知し、私
からの問合せに対し、わざわざ御
丁寧にも近日開催するという御返
事を頂きましたが、それからすぐ
あの旋風さわぎで、いつとはなし
に中絶の恰好となつてしまいまこ
とに残念至極でした。最近雑誌
の方も毎月順調に出ていますこと
ですから、どうでしょうか、一つ
又以前のようにならば座談会を開催され
て、その速記録を誌上にのせるよ
うにされては如何ですか、私は仕
事の関係でテーブルコーダーを持
つておりますから速記のかわりに
役立ててもよいと思ひます。同好の
方々五、六人ぐらい集つて、会費
千円位で簡単にやれれば面白いと
思います。座談会のような記事も
新しい読者にはうけるのではない
かと思ひます。今後、座談会の開
催の企画がありましたら、是非私
を第一番にお招き下さるようお願
い致します。(大阪、森生)

○ 小生、婦人のふんどし着用姿、(特に六尺褌)及び婦人の刺青姿に非常に興味を持って居り、それらの写真や絵を数年来集めておりましたが、特殊なものだけに中々集まりません。読者の方々の中で右に關しての資料をお持ちの方々は是非、誌上に発表して下さいようお願いいたします。(京都、深草)

○ 十二月号、早速お送り下さって有難うございました。丁度風邪で伏っておりましたものですから一氣に読破してしまいました。十二月号の中では、高橋よしえさんの告白「糸姫の体験」に一番強くひかれました。素朴な書きぶりのなかに、糸姫の生活がにじみ出ているように感じのある文章でした。ずっと前に告白特集といったものがよく出されていましたが、十二月号の高橋さんのような真面目な告白を今後もつとめて載せてもらいたいものだと思います。全体の三分の一くらいは、本誌の最大の特徴である告白で埋められてもよいのではないのでしょうか。二十八年九月号にのっていたような告白集がいゝと思います。それから最近は責めでも快心の作が少いです

が、ずっと以前に本誌に掲載されていた傑作、(本誌がまだ大判時代の頃のものでも大変素晴らしい作品があったように記憶しております)を再録されるか、或は梗概やよい場面だけを抜書で掲載されれば、以前の雑誌を入手されなかつた人たちにも大いに参考になると思います。現在では古本屋の店頭でも大判時代のものは買うことは出来ないと思います。左記の写真集注文申し上げます故、厳重荷造りの上、個人名義にて発送下さるようお願いいたします。(東京、原義)

○ 東京の市ヶ谷様、通信拝見致しました。東京に貴兄のような方がおられるとは……。小生、貴兄の募集に応募させて頂きます。出頭日時及び場所お知らせ下さい。又野崎純様、新連絡先至急お知らせ下さい。(東京都豊島区目白町三ノ三六三〇、文虎社内稲岡保夫)

○ 大分寒さが身にしみる頃と相成りましたが皆様如何おすごしでしょうか。小生、奇くは休刊するまでは何時も読み又、小生の思いを奇くにより発散させて居りました。最近又々復刊されて、二号、七号、九号を書店で見ても非常に嬉

しく思っておりますが、休刊以前の様に男性責め又男性マードフオトがないのが非常に淋しく思っております。今度、代理部より揮美縛体、男性緊縛を送って貰って心のうさを慰めて居ります。何とか男性マードが誌面に載せられなにかと思っております。若し誌上に載せて下さるなら嬉しい野性的な男性モデルをお願いします。此の様な望みは私だけでしようか。兵庫Z Y生様、あなたは逞ましさと野性味の持主とあり、又責めの方も望みがあるとのこと嬉しく思っております。直接御交際願いたい

と存じますが連絡方法御知らせ下さい。小生は年に四、五回阪神方面に参ります。一度あなたにお逢いして思いきり責められたいと念願致して居ります。小生三十歳、十四貫五百の中男です。逞ましい男性の胸、肩の隆起、腕の隆々たる筋肉に憧れて居られる同好の同性よ名乗りを上げて下さい。(香川、Y・O生)

○ 奇く三十年十月号と最近号、本日頂戴致しました。有難うござます。三十年十月号「乗馬ズボンの女腹切」のさしえのすばらしさには息をのみました。かゞめた上体

と乗馬ズボン、長靴、拍車の下半身のバランスのとれた美しさ、苦悶のなやましさ。本当にさしえに比べて文章がまずいのでお恥しうございます。でも、それに比べると今度の女武者自刃のさしえは幻滅です。それに、たとえうそでも鎧下とか、小手脛当とかいうものは、もっとよくしらべて書いていただきたいのです。「燃ゆる男装」と「秀緒の告白」をお送り致します。そのうち、風変りな責めの体験などお送りしたいと思ひます。(東京 藤山秀緒)

○ 早や、冬將軍を訪れを思わせる寒い日が続いて居ります。貴誌十二月号、息をもつかずに読破致します。再び丹念に読み返しております。サディズム、フェチズムマゾヒズムを兼ね具えておられる越野義夫氏の告白文「責めとフェチの自画像」私と対照的な方として非常に興味深く拝見致しました。「責めの自画像」も前に拝見致しましたが、中々自分であれだけの告白文は書けないものなのに、良くあれだけの文を綴れたものだと敬服致しました。現在、私の知っている女で幼い頃継母に虐待されて傷痕を残しているのを見たこと

映画速報欄

正月映画の縛られ作品

嵯峨美也子

正月作品の中のサジスチックな「縛られ映画」の白眉は、東映作品の「新諸国物語、第五話七つの誓い」であろう。はじめのアクファ―総天然色というから、その効果はよけいにあがるだろう。

「世界の平和を希み愛のカラコシア王国を再建せんとして正邪入り乱れる冒険物語である。」

正邪入り乱れて、となると、善人は悪人のためにヒドイ目にあわされる。そして最後は勝つのだがそれまでのハラバンジヨウのいじめられ方が、観客の同情をよけいにひくのである。

錦之助は黒水仙党の若き党主

で桜子を助け、愛の王国再建に奮闘するが、沙漠の鬼オングのために奴隷にされたり色々苦労する。

「ぎやくたいされヒドイ目にあわされるのが千原しのぶの桜子で、彼女はカラコシア王位の継承者、いろ／＼の苦難を経て、最後の第三部では、捕えられ十字架にかけられ火あぶりにされようとする。

桜子の千原しのぶと、錦之助の父の加賀邦男のトハハンは東山刑場において、カラコシア国の反逆人として裸馬に乗せられてやってくる。桜子の首には姫の名を偽わる毒婦なりという札が掛けられている。そして火刑台上に鎖をもつてガンジガラメに縛られる。ジャ

ンヌタークの火刑シーンを思わす。

「地獄の賽の河原で、待っている」いわれ火をつけられる。火刑台の薪は紅蓮の炎をあげ、熱風を巻き起して桜姫に迫る。身もたえする桜姫——ところへ黒水仙党の連中が救助にくる。だが鉄砲隊で狙われる。あわやというとき五郎が斬り込む。メデ

タシメデタシまでにはまだ幾多の危難があつて桜姫は救われるこのシーンの前に同志の一人夕月丸の妹の三笠博子の楓が敵中にスパイとなつて入っているが、見付けられて縛られる。そして同志の前で鞭打たれる。

「皆様、兄上、私にかまわず、逃げて下さい。」と絶叫する楓は縛られ鞭うたれてヒイ／＼悲鳴をあげる。縛られ女優の三笠博子の可憐さが買われるシーンとなろう。

十字架に縛られるのが、嵐寛

寿郎、花井蘭子の「佐倉大騒動」

東映の、松浦築枝、片岡千恵蔵の

息子の植木基晴の十字架に縛られ

るシーンとつづいたが、松竹の正

月作品、近藤十四郎の主演映画「

まだら頭巾に剣を抜けば、乱れ白

菊」で、父の仇を討たんとする山

鳩の菊姫が近藤十四郎のまだら頭

巾をおびき出す人質として捕えら

れ、雄呂地谷の奥まった一角で十

字架の上に縛られる。恋敵の小原

真知子のお白粉お綱に助けられる

が、山鳩くるみの十字架の縛られ

姿がお楽しみである。

正月作品の「銭形平次捕物控、

まだら蛇」「伝七捕物帖、美女蝙

蝠」のシナリオに縛りシーンはな

いが、前の「銭形平次」のように

急に山本富士子の女目明しお品が

吊下げられるシーンに出てくるか

ら面白い。

(以上)

× × ×

代理部分讓品總目錄

新作発表！

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

がありますが、其の当時の模様を話にきゝましたので、告白文にして貴誌に投稿するよう、すゝめたのですが、小学校もろくろく行かせて貰えなかったから字が書けないからといって承諾してくれませぬ。私は「継子いじめ」を見たり聞いたりしていますので、非常に継子いじめに関心を持っております。継子いじめをされた人と文筆を望むと共に継子いじめの見聞記を貴誌に御掲載されんことを切に希望致します。其の内、「檻禁十年」昭和八年頃の大坂に起った、例の「雪ちゃん」事件を文にまとめてお送り致したく思っております。(昼行燈生)

○ 小生、美しい女性に女性の下着類をつけさせられ、亦、女装させられ、猿ぐつわをかまされ(女性のパンティ、ズロース等で猿ぐつわされるも可)縛られるか、或は若い女性に猿ぐつわをかませて縛り責めるのに関心を持つ、サジマゾ両方を兼ね備えた様な男です。

もし小生に縛り上げたい又は小生に縛られてみたい女性の方文通願いたいと思います。希望条件はサジストの女性の方は三十二、三歳位までの方(勿論若ければ尚よいが)マゾヒストの女性の方は二十三、四歳位までの方である事、三木恵子様、益田愛子様、お便り下さい。当方、二十一歳、五尺五寸五分、十五貫五百の独身、(好男子のつもりなり)連絡先は左記の通りです。(京都市上京区鳥丸通今出川、同志社大学内植田正雄)

○

編集部より

本誌十二月号の「編集だより」のモデル募集に依じて御書面を下された冬木富美子さん。連絡場所お知らせ下さい。詳細お返事致します。局内にて可。

本誌の読者の中で、モデルになつてみたいという御希望の方々は身長体重を記載の上、編集部宛御照会下さい。詳細についてお返事いたします。

編集後記

○本誌に口絵や挿画を描いて下さっている北原純子さんの、初めて物された「花と風」これは連載になっていて、本月号の第一回に引続いて数回に分載いたします。女性の書いた異色小説として、どうか御期待下さい。書かれた御本人は大変謙遜しておられますが、皆さまの読後感はどうでしょう。

○「電気責に関するノート」「フエチに関する切抜き」の二稿は、共に既刊図書雑誌新聞からの引用であります。いづれも同好同趣の人達にとっては大変参考になると思います。続稿の期待したいものであると同時に、更に広範囲からの取材提供が望まれてなりません。

○宝塚三三夫氏の「天は知っている」。これは以前に連載しました「ボクの責め方」の続篇のような形ですが、新しい登場人物の活躍によつて、以前の連載に見られぬ新鮮なものを感じさせてくれるようで楽しみです。例月通り、「文学に現れた責めの描写」(藤見郁)はその重厚の書きぶりから多くのファンに親しまれていますが、材料のある限り続けて貰いたいものです。

○珍しく映画シナリオを掲載しました。題して「赤いネオンのきえる頃」、たしかに筆者も通信で言つておられるようにこういう形式は、或るイメージをファンタジックに描く場合に適した一つの方法といえる文章です。(三一・十一・十七)

ましよう。シリーズとして更に続稿を送られてきていますが、今後どのような進展を示すのか、皆様方と一緒に見守りたいと思います。

○「魔海の業火」これは編集部責任に於て相当程度削除しました。社会的な影響力を考えますれば、意味の通じるぎりぎりの線まで自粛しても自粛しすぎることはないと考えます。

○久方ぶりに高原正夫氏から原稿を頂きました。「女性の素足礼讃」お送り下さった写真の中の一部を同時に掲載しました。女性の素足に関心を持たれる方は相当あるものと思われませんが、従来、高原氏、宝塚氏以外、はつきりとその線を出された方は余り見受けられなかつたようです。フットフエチとして、特異な文献として残るものと思ひます。

○九雅節夫氏の図書雑誌通信「特異な角度から」これは、沼正三氏の「手帖速報欄」にも比すべき文獻的香りの一入高きもの、重複をいとわず、あらゆる範囲からの紹介がほしいものです。この第一回は短くて、その全貌を知るすべもありませんが、相当大きな調査資料になる模様で期待されるものの一つです。

○日下絹子さんの「或る女給の体験」これも第一回分だけの御送稿がありませんでしたが、冒頭より波瀾を思わせる主人公の数奇な運命が描き出されて、次を読みたくな文章です。(三一・十一・十七)